

市道仏生山町8号線新設改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

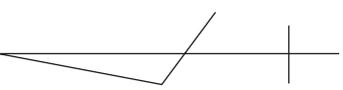
# 萩前・一本木遺跡Ⅱ

2018年3月

高松市教育委員会

# 巻頭図版 1

調査区全景 (オルン)





調査区全景（北から）



16- 竪穴1 カマド遺物出土状況（南から）



出土遺物



## 例 言

- 1 本書は、香川県高松市仏生山町甲に所在する萩前・一本木遺跡Ⅱの発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、市道仏生山町8号線新設改良事業に伴うものである。本書には、2011年度の成果を収録した。
- 3 調査は、高松市教育委員会が実施した。
- 4 調査期間と面積は以下のとおりである。  
第1次調査：2011年4月11日～2011年6月24日（約865㎡）（第1・2調査区）  
第2次調査：2011年11月17日～2012年3月30日（約2,000㎡）（第15～19調査区）
- 5 現地調査は高松市創造都市推進局文化財課（当時、高松市教育委員会文化財課）文化財専門員 船築 紀子、波多野 篤、同課非常勤嘱託職員 岡本 治代、磯崎 福子、森原 奈々が担当した。
- 6 本報告書の執筆・編集は、船築・森原が行った。
- 7 現地調査と整理作業にあたっては、下記の方々の御協力と御指導・助言を賜った。記して感謝する次第である。（順不同・敬称略）  
機関：香川県教育委員会  
個人：市来 真澄、大久保 徹也、中野 咲
- 8 以下の業務については、委託業務として行った。  
基準点打設業務委託：株式会社 イビソク、株式会社 四航コンサルタント  
空中写真測量業務委託：株式会社 イビソク、株式会社 四航コンサルタント  
掘削業務委託：株式会社 松内建設  
遺物写真撮影業務委託：西大寺フォト  
出土鉄器の保存処理及び実測：株式会社 文化財サービス
- 9 香川県農業試験場圃場内の第3～14・20～24・27～39・41～47調査区の成果については、2017年刊行の『萩前・一本木遺跡Ⅰ』に収録した。
- 10 地理的・歴史的環境については、『萩前・一本木遺跡Ⅰ』を参照されたい。

## 凡 例

- 1 本書で使用した座標系は平面直角座標系第IV系(世界測地系)、標高は東京湾平均海水面を基準とした。土層注記及び遺物観察表(土器・土製品)の色調表示は、『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人 日本色彩研究書 色票監修)によった。
- 2 遺構名の表記は、原則として以下の規則により、調査区名-遺構種別(竪穴・掘立・柵列・SD・SK・SX・SP) 個別番号の数字の組み合わせで統一した。個別番号に関しては、原則として調査当時に付した番号を踏襲している。
- 3 遺構種別については、付属施設を伴う竪穴(竪穴建物)、掘立(掘立柱建物等)、柵列(柵)は漢字表記、単体の遺構はSD(溝)、SK(土坑)、SX(性格不明遺構)、SP(ピット)といった遺構記号とする。  
ex). 第1調査区の竪穴建物1は「1-竪穴1」(1+竪穴+1)
- 4 竪穴建物・掘立柱建物内部の遺構については、それぞれ「カマド」や「周壁溝」、「支柱穴」、「土坑」などの名称を与えることとする。
- 5 出土遺物の実測図は、土器は1/4、鉄器は1/2、玉類は1/1、石器は1/2、1/4、1/6、遺構の縮尺については図面ごとに示している。また、写真図版における遺物の縮尺はすべて任意である。

# 本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第Ⅱ章 調査の成果	4
第1節 調査の方法	4
第2節 基本層序	4
第3節 遺構と遺物	4
第1調査区	4
(1) 竪穴建物	4
(2) 掘立柱建物	7
(3) 土坑	17
(4) 性格不明遺構・風倒木痕	18
第2調査区	25
(1) 竪穴建物	26
(2) 性格不明遺構	26
(3) 掘立柱建物	26
(4) 土坑	31
第15調査区	32
(1) 竪穴建物	32
(2) 性格不明遺構・ピット	39
(3) 掘立柱建物	39
(4) 柵列	44
(5) 土坑	44
(6) 溝	46
第16調査区	51
(1) 竪穴建物	51
(2) 掘立柱建物	66
(3) 柵列	68
(4) 土坑	68
(5) 溝	75
第17調査区	76
(1) 掘立柱建物	76
(2) 土坑	78
(3) 性格不明遺構	78
第18・19調査区	81
(1) 竪穴建物	81
(2) 柱穴群	83
(3) 土坑	86
(4) 性格不明遺構	89
(5) 溝	89
第Ⅲ章 まとめ	98
第1節 萩前・一本木遺跡の集落の変遷	98

## 挿 図 目 次

<p>図 1 調査区配置図 (S= 1/2000) . . . . . 3</p> <p>図 2 第 1 調査区 平面図 (S= 1/200) . . . . . 5</p> <p>図 3 1- 竪穴 1 平・断面図 . . . . . 6</p> <p>図 4 第 1 調査区 出土遺物実測図 . . . . . 7</p> <p>図 5 1- 竪穴 40 平・断面図 . . . . . 8</p> <p>図 6 1- 掘立 1 平・断面図 . . . . . 10</p> <p>図 7 1- 掘立 3 平・断面図 . . . . . 12</p> <p>図 8 1- 掘立 2 平・断面図 . . . . . 14</p> <p>図 9 1- 掘立 4 平・断面図 . . . . . 15</p> <p>図 10 1- 掘立 5・1- 柱穴群 平・断面図 . . . . . 16</p> <p>図 11 1-SK 4・10・30・50・78 平・断面図 . . . . . 19</p> <p>図 12 1-SK101・102・104・105・122 平・断面図 . . . . . 20</p> <p>図 13 1-SX115 平・断面図 . . . . . 21</p> <p>図 14 1-SX22・113 平・断面図 . . . . . 22</p> <p>図 15 1- 風倒木痕 1・3 平・断面図 . . . . . 23</p> <p>図 16 1- 風倒木痕 2 平・断面図 . . . . . 24</p> <p>図 17 第 2 調査区 平面図 (S=1/200) . . . . . 25</p> <p>図 18 2- 竪穴 51 平・断面図 . . . . . 26</p> <p>図 19 2-SX41 平・断面図 . . . . . 27</p> <p>図 20 2- 掘立 1 平・断面図 . . . . . 28</p> <p>図 21 2-SK14・15・23・32・54・56・57 平・断面図 . . . . . 29</p> <p>図 22 2-SK26・27・101 平・断面図 . . . . . 30</p> <p>図 23 第 2 調査区 出土遺物実測図 . . . . . 30</p> <p>図 24 第 15 調査区 平面図 (S=1/200) . . . . . 33</p> <p>図 25 15- 竪穴 10 平・断面図 . . . . . 34</p> <p>図 26 15- 竪穴 10 出土遺物実測図 . . . . . 35</p> <p>図 27 15- 竪穴 20 平・断面図 . . . . . 36</p> <p>図 28 15- 竪穴 20 出土遺物実測図 . . . . . 37</p> <p>図 29 15- 竪穴 40 平・断面図 . . . . . 38</p> <p>図 30 15- 竪穴 40・50 出土遺物実測図 . . . . . 39</p> <p>図 31 15- 竪穴 50 平・断面図 . . . . . 40</p> <p>図 32 15-SX60 平・断面図及び SP62 出土遺物実測図 . . . . . 41</p> <p>図 33 15- 掘立 2 平・断面図 . . . . . 42</p> <p>図 34 15- 掘立 1 平・断面図 . . . . . 43</p> <p>図 35 15- 掘立 1・2 出土遺物実測図 . . . . . 43</p> <p>図 36 15- 柵列 1・2 平・断面図及び出土遺物実測図 . . . . . 45</p> <p>図 37 15-SK30 出土遺物実測図 . . . . . 45</p> <p>図 38 15-SK25・26・30・32・33 平・断面図 . . . . . 46</p> <p>図 39 15-SD22・23 平・断面図 . . . . . 47</p> <p>図 40 15-SD24・29・56 平・断面図 . . . . . 48</p> <p>図 41 15-SD21 平・断面図 . . . . . 49</p> <p>図 42 15-SD 出土遺物実測図 . . . . . 49</p> <p>図 43 第 15 調査区 出土遺物実測図 . . . . . 50</p> <p>図 44 第 16 調査区 平面図① (S=1/200) . . . . . 52</p> <p>図 45 第 16・17 調査区 平面図② (S=1/200) . . . . . 53・54</p> <p>図 46 16- 竪穴 1 平・断面図 . . . . . 55</p>	<p>図 47 16- 竪穴 1 カマド 平・断面図 . . . . . 56</p> <p>図 48 16- 竪穴 1 出土遺物実測図 . . . . . 57</p> <p>図 49 16- 竪穴 3 平・断面図 . . . . . 58</p> <p>図 50 16- 竪穴 3 カマド 平・断面図 . . . . . 59</p> <p>図 51 16- 竪穴 4 平・断面図 . . . . . 60</p> <p>図 52 16- 竪穴 2 カマド 平・断面図 . . . . . 61</p> <p>図 53 16- 竪穴 2 平・断面図 . . . . . 63</p> <p>図 54 16- 竪穴 2 カマド 平・断面図及び SP5 遺物出土状況 . . . . . 64</p> <p>図 55 16- 竪穴 2・3・4 出土遺物実測図 . . . . . 65</p> <p>図 56 16- 掘立 1 平・断面図 . . . . . 67</p> <p>図 57 16- 柵列 1 平・断面図 . . . . . 69</p> <p>図 58 16-SK5・6・7・8・9・19 平・断面図 . . . . . 70</p> <p>図 59 16-SK10・21・27・95・88 平・断面図 . . . . . 72</p> <p>図 60 16-SK17・18・22・23・25・26・87 平・断面図 . . . . . 73</p> <p>図 61 16-SD11・12 平・断面図 . . . . . 74</p> <p>図 62 16・17-SK・SD・その他 出土遺物実測図 . . . . . 74</p> <p>図 63 17- 掘立 1 平・断面図 . . . . . 75</p> <p>図 64 17- 掘立 2 平・断面図 . . . . . 76</p> <p>図 65 17-SK 1・6・7・8・SX 5 平・断面図 . . . . . 77</p> <p>図 66 第 18・19 調査区 平面図 (S=1/200) . . . . . 79・80</p> <p>図 67 19- 竪穴 20 平・断面図 . . . . . 82</p> <p>図 68 19- 竪穴 20 平・断面図 . . . . . 83</p> <p>図 69 19- 竪穴 20 出土遺物実測図 . . . . . 84</p> <p>図 70 19- 竪穴 60 平・断面図 . . . . . 84</p> <p>図 71 19- 竪穴 40 平・断面図 . . . . . 85</p> <p>図 72 19- 竪穴 40 カマド 平・断面図 . . . . . 86</p> <p>図 73 19- ピット群 平・断面図 . . . . . 87</p> <p>図 74 18-SK 8・19-SK 8・9・10・43 平・断面図 . . . . . 88</p> <p>図 75 19-SX50 平・断面図 . . . . . 90</p> <p>図 76 19-SX50 出土遺物実測図 . . . . . 91</p> <p>図 77 18・19-SD44・45 平・断面図及び出土遺物実測図 . . . . . 93</p> <p>図 78 18・19-SD 5 平・断面図及び出土遺物実測図 . . . . . 94</p> <p>図 79 18・19-SD 1・7 平・断面図 . . . . . 95</p> <p>図 80 19-SD 1 出土遺物実測図 . . . . . 96</p> <p>図 81 18・19-SD 1・7 出土遺物実測図 . . . . . 97</p> <p>図 82 時代変遷図 (古墳時代中期) . . . . . 99</p> <p>図 83 時代変遷図 (古墳時代後期) . . . . . 100</p> <p>図 84 時代変遷図 (飛鳥～古代) . . . . . 101</p> <p>図 85 時代変遷図 (中世) . . . . . 102</p>
---	---

## 挿 表 目 次

表 1	調査工程表	1	表 10	土器観察表⑦	109
表 2	整理作業工程表	2	表 11	土器観察表⑧	110
表 3	遺構一覧表	102	表 12	土器観察表⑨	111
表 4	土器観察表①	103	表 13	土器観察表⑩	112
表 5	土器観察表②	104	表 14	土器観察表⑪	113
表 6	土器観察表③	105	表 15	土器観察表⑫	114
表 7	土器観察表④	106	表 16	石器観察表	115
表 8	土器観察表⑤	107	表 17	鉄器観察表	115
表 9	土器観察表⑥	108			

## 巻 頭 図 版 目 次

巻頭図版 1	調査区全景 (オルソ)
巻頭図版 2	調査区全景 (北から)
	16- 竪穴 1 カマド 遺物出土状況 (南から)
巻頭図版 3	出土遺物

## 図 版 目 次

- |       |   |       |  |
|-------|---|-------|--|
| 図版 1  | 調査区 全景 (北西から)<br>第 1 調査区 全景 (西から)   | 図版 12 | 18・19-SD 1 (東から)<br>18・19-SD 1 南壁断面 (北から)<br>19-SD 1 遺物出土状況 (東から)                                  |
| 図版 2  | 第 2 調査区 全景 (西から)<br>第 15 調査区 全景 (南西から)  | 図版 13 | 18・19-SD 5 (北東から)<br>19-SD 5 北壁断面 (南から)<br>18-SD 5 遺物出土状況 (北から)                                    |
| 図版 3  | 第 16 調査区 全景 (北西から)<br>第 16 調査区 全景 (南西から)  | 図版 14 | 19- 竪穴 40 (東から)<br>19- 竪穴 40 カマド (南から)<br>19- 竪穴 20 (南から)<br>19-SK42 遺物出土状況 (南から)<br>19-SK50 (北から) |
| 図版 4  | 第 17～19 調査区 全景 (東から)<br>第 17～19 調査区 全景 (西から)  | 図版 15 | 出土遺物①  |
| 図版 5  | 1- 竪穴 1 (東から)<br>1- 竪穴 40 (南から)<br>1- 掘立 1 (北西から)<br>1- 掘立 1 完掘状況 (西から)<br>1- 掘立 1 SP14 (南東から)<br>1- 掘立 1 SP13 (南東から)<br>1- 掘立 1 SP16 (南東から)<br>1-SX115 断面 (西から)          | 図版 16 | 出土遺物②  |
| 図版 6  | 2- 竪穴 51 (西から)<br>2- 掘立 1 完掘状況 (東から)<br>15- 竪穴 20 (南から)<br>15- 竪穴 20 SP31 遺物出土状況<br>15- 竪穴 50 (南東から)<br>15- 竪穴 50 遺物出土状況 (南東から)<br>15- 竪穴 50 カマド (東から)<br>15- 竪穴 10 (西から) | 図版 17 | 出土遺物③  |
| 図版 7  | 15- 掘立 1 検出状況 (南西から)<br>15-SK75 断面 (西から)<br>15-SD21 完掘状況 (東から)<br>15-SD21 西壁断面 (東から)  | 図版 18 | 出土遺物④  |
| 図版 8  | 16- 竪穴 1 (南から)<br>16- 竪穴 1 カマド遺物出土状況 (南から)<br>16- 竪穴 1 カマド完掘状況 (南から)<br>16- 竪穴 1 カマド東西断面 (南から)  | 図版 19 | 出土遺物⑤  |
| 図版 9  | 16- 竪穴 2 (南から)<br>16- 竪穴 3 (北西から)<br>16- 竪穴 4 (南西から)  | 図版 20 | 出土遺物⑥  |
| 図版 10 | 16- 竪穴 2 カマド完掘状況 (南から)<br>16- 竪穴 2 遺物出土状況 (西から)<br>16- 竪穴 2 遺物出土状況 (東から)<br>16- 竪穴 3 カマド完掘状況 (南から)<br>16- 竪穴 4 カマド完掘状況 (南から)  | 図版 21 | 出土遺物⑦  |
| 図版 11 | 16- 掘立 1 完掘状況 (南から)<br>16- 掘立 1 SP32 断面<br>16- 掘立 1 SP36 断面<br>16- 掘立 1 SP31 断面<br>16- 掘立 1 SP30 断面   | 図版 22 | 出土遺物⑧  |
|       |   | 図版 23 | 出土遺物⑨  |
|       |   | 図版 24 | 出土遺物⑩  |
|       |   | 図版 25 | 出土遺物⑪  |
|       |   | 図版 26 | 出土遺物⑫  |
|       |   | 図版 27 | 出土遺物⑬  |
|       |   | 図版 28 | 出土遺物⑭  |
|       |   | 図版 29 | 出土遺物⑮  |
|       |   | 図版 30 | 鉄製品・骨・石器   |

第 I 章 調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯

平成 20 年度に高松市仏生山町甲 808 番 1 号ほか（香川県農業試験場の圃場内）に、高松市民病院の建設が計画され、事業課（高松市病院局新病院整備課・道路課）から教育委員会（以下、市教委）に埋蔵文化財包蔵地の有無の照会があった。周辺での調査の蓄積がほとんど無い地域であり、埋蔵文化財包蔵地として認識されていなかったが、高松市新病院建設計画の事業面積が広大であることから、土地所有者である香川県の了解のもと、事前の試掘調査を実施した。試掘調査は平成 21 年 10 月 27 日～11 月 2 日の実働 5 日で実施した。その後追加で、平成 23 年 6 月 27 日～6 月 30 日の実働 4 日を実施した。事業対象面積は、約 14,500㎡で、現地に既存する圃場の区画に合わせて南北方向のトレンチを 8 本設定した。

試掘調査の結果、試掘調査の対象地全域で埋蔵文化財の包蔵が確認できたため、事業課に対して、当該地において保護層が確保できない掘削工事を行う場合は、事前に埋蔵文化財に対する保護措置が必要である旨を伝え、協議を実施した。

事業課から平成 23 年 4 月 8 日付けで文化財保護法第 9 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が市教委に提出された。その通知を香川県教育委員会に進達したところ、香川県教育委員会から 4 月 9 日付けで事前に発掘調査を行う旨の行政指導があったため、発掘調査を実施することとなった。

第 2 節 調査の経過

調査は、平成 23 年 4 月 11 日から 6 月 24 日に第 1・2 調査区を、11 月 17 日から 3 月 30 日に第 15～19 調査区の調査を行った。

整理作業は、平成 24 年度から 29 年度にかけて実施した。

萩前・一本木遺跡Ⅱ（市道仏生山町 8 号線）  
調査日誌抄録

- H23.4.11（月） 第 2 調査区 調査開始
- H23.4.14（木） 第 1 調査区 調査開始
- H23.6.15（水） 第 1・2 調査区 写真測量  
（株イビソク）
- H23.6.24（金） 第 1・2 調査区 調査終了
- H23.6.27（月） ～6.30（木）  
72.73.74.75.76.77.78.79 号地 試掘調査開始
- H23.7.4（月） 35 号地 試掘調査開始
- H23.8.17（水）～8.22（月）  
65.66.68.70.71.79.80.81 号地 試掘調査開始
- H23.11.17（木） 第 15 調査区 調査開始
- H23.11.24（木） 第 16 調査区 調査開始
- H23.12.26（月） 第 17 調査区 調査開始
- H24.1.18（水） 第 18 調査区 調査開始
- H24.1.24（火） 第 15・16 調査区 全景写真撮影  
（高所作業車）・写真測量（四航コンサルタント）
- H24.1.25（水） 第 19 調査区 調査開始
- H24.2.20（月） 第 15・16 調査区 調査終了
- H24.3.10（土） 第 17・18・19 調査区 全景写真  
撮影（高所作業車）
- H24.3.11（日） 第 17・18・19 調査区 写真測量  
（四航コンサルタント）
- H24.3.30（金） 第 17・18・19 調査区 調査終了

表 1 調査工程表

調査区	担当者	調査面積 (㎡)	平成23年度												
			4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
1	船築・森原・磯崎	418.0													
2	波多野・岡本	447.0													
15	船築・森原	460.0													
16	船築・森原	674.0													
17	船築・森原	230.0													
18	船築・森原	142.0													
19	船築・森原	494.0													

表2 整理作業工程表

		平成23年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
洗淨													
接合・復元													
実測													
遺構トレース													
遺物トレース													
写真撮影													
レイアウト													
執筆・編集													

		平成24年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
洗淨													
接合・復元													
実測													
遺構トレース													
遺物トレース													
写真撮影													
レイアウト													
執筆・編集													

		平成25年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
洗淨													
接合・復元													
実測													
遺構トレース													
遺物トレース													
写真撮影													
レイアウト													
執筆・編集													

		平成26年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
洗淨													
接合・復元													
実測													
遺構トレース													
遺物トレース													
写真撮影													
レイアウト													
執筆・編集													

		平成27年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
洗淨													
接合・復元													
実測													
遺構トレース													
遺物トレース													
写真撮影													
レイアウト													
執筆・編集													

		平成28年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
洗淨													
接合・復元													
実測													
遺構トレース													
遺物トレース													
写真撮影													
レイアウト													
執筆・編集													

		平成29年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
洗淨													
接合・復元													
実測													
遺構トレース													
遺物トレース													
写真撮影													
レイアウト													
執筆・編集													

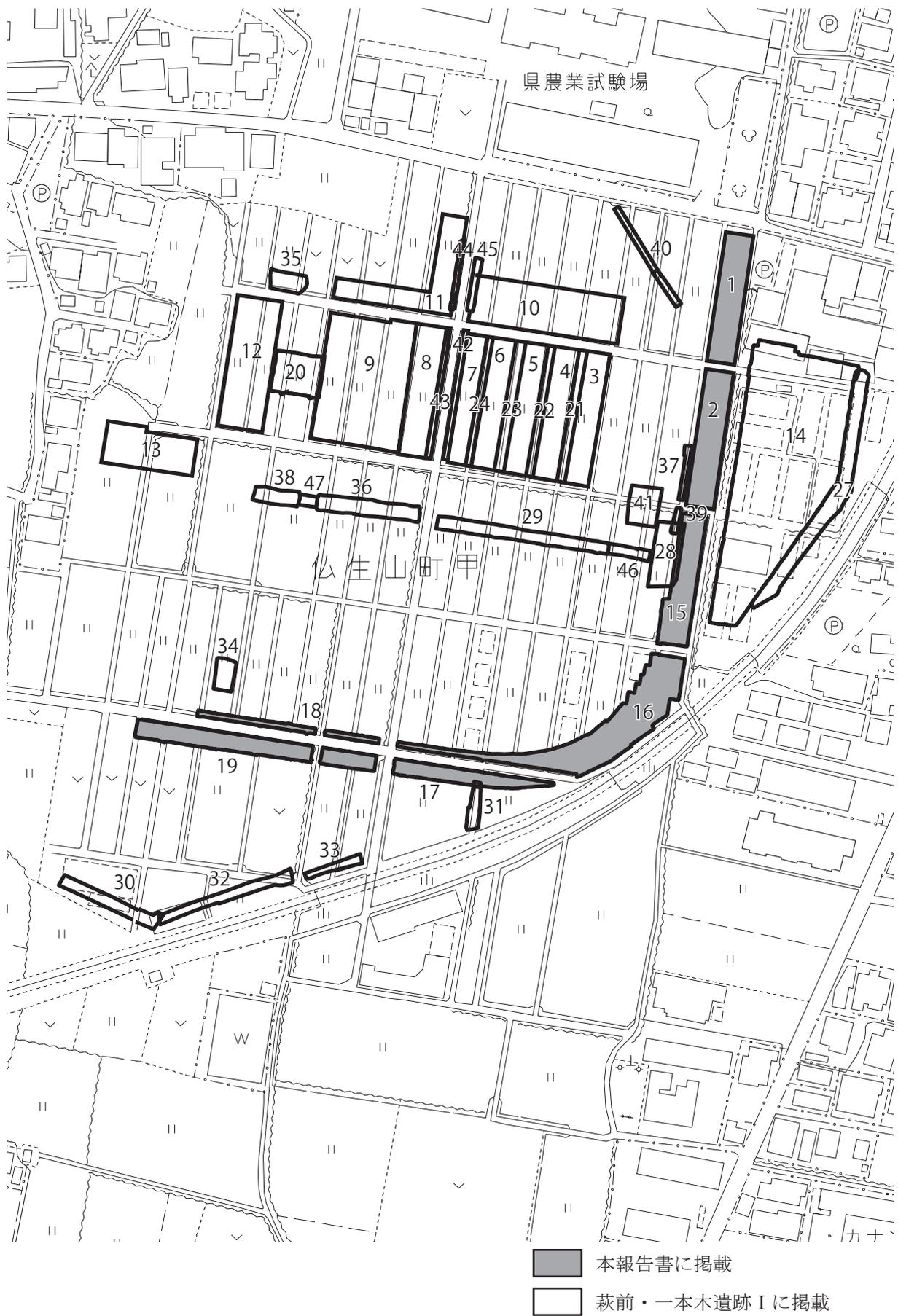


図 1 調査区配置図 (S=1/2000)

## 第Ⅱ章 調査の成果

### 第1節 調査の方法

#### a. 調査区の呼称と遺構番号、遺物の取上げ

調査区名は、香川県農業試験場跡地（圃場内）で発掘調査を実施した順に第1調査区から番号を与えた。このため、道路新設改良事業の事業用地である調査区は、第1・2・15～19調査区となった(図1)。

遺構には、遺構の種類に関係なく検出した順番で1から番号を与えた。遺構の種類は、現地での調査所見をもとに性格を判断し、遺構番号の上に遺構の略号を冠した。

遺物の取上げは、遺構単位で、かつ出土土層が明らかかな場合は、層位も記載して取上げた。

#### b. 記録作成

図化作業の際に使用する基準点と水準点は、第1・2調査区が(株)イビソク、第15～19調査区を(株)四航コンサルタントに委託し、世界測地系第IV系・4級基準点を用いた。平面図は第1・2調査区がラジコンヘリによる撮影、第15～19調査区はポール撮影による航空測量を行った。断面図は手測りで記録を作成した。

### 第2節 基本層序

調査区の基本層序は、第1・2調査区では①農業試験場圃場の耕作土と床土、②古墳時代の遺構面であり、また包含層でもある黒褐～暗褐細砂混じりシルト～粘土層、③褐灰シルト混じり粘土の地山面の順となる。第15～19調査区においては、耕作土と床土直下で地山面が確認できた。

### 第3節 遺構と遺物

#### 第1調査区（図2）

##### (1) 竪穴建物

##### 1-竪穴1（図3・4）

第1調査区南側で検出した竪穴建物である。平面形状はやや歪な隅丸方形で、攪乱に東側辺を切られる。主軸方位N-80°-W、検出面の標高は約35.5mである。規模は、長辺約5.2m、短辺5.0m以上、深さ約0.2mを測る。

検出段階で平面プランが歪であったことから、一段落しを実施し、堆積状況を確認した。この結果、一段落しの段階で貼床面となっていることが確認できた。貼床面で遺構の検出を行い、カマドと支柱穴(S P 26～29)、ピット(S P 79)、土坑(S K 30・78)を確認した。このうちS K 30・78については、後述する土坑の項で記述を行うものとする。

埋土は、黒褐細砂～シルトである。埋土から須恵器杯蓋(3・4)・甕(5)、土師器甑の把手(6)、その他図示できなかつたが須恵器杯蓋片・杯身片・高杯片・壘片・甕片・壺片・器台片、土師器高杯片・製塩土器片が出土した。

貼床は地山ブロックを多量に含む黒褐細砂～シルトである。

カマドは竪穴建物西側中央やや北寄り、焼土と炭化物を検出した。カマド内部の堆積と考えられる。カマド袖は削平により確認できなかった。カマド内部の堆積は、上層が炭化物を多量含む黒褐細砂～シルトで、にぶい黄褐シルトブロックを含む。カマドの機能面と考えられる。下層は炭化物と地山ブロック土を含む暗褐シルトである。

支柱穴は4基確認できた。S P 26は不整円形を呈し、長径約0.76m、短径約0.7m、深さ約0.5mを測る。断面形状は不整逆台形を呈し、西側の肩は二段落ちとなる。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が地山ブロック土を斑状に含む黒褐細砂～シルト、掘形が地山ブロック土を含む黒褐細砂～シルトである。遺物は須恵器杯蓋(1・2)が出土した。

S P 27は楕円形を呈し、長径約0.7m、短径約0.6m、深さ約0.46mを測る。断面形はラッパ型を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が地山ブロック土を斑状に含む黒褐細砂～シルト、掘形が垂角礫状地山ブロック土を含む黒褐細砂～シルトとほぼ地山ブロック土で構成する暗オリーブ褐細砂～シルトである。

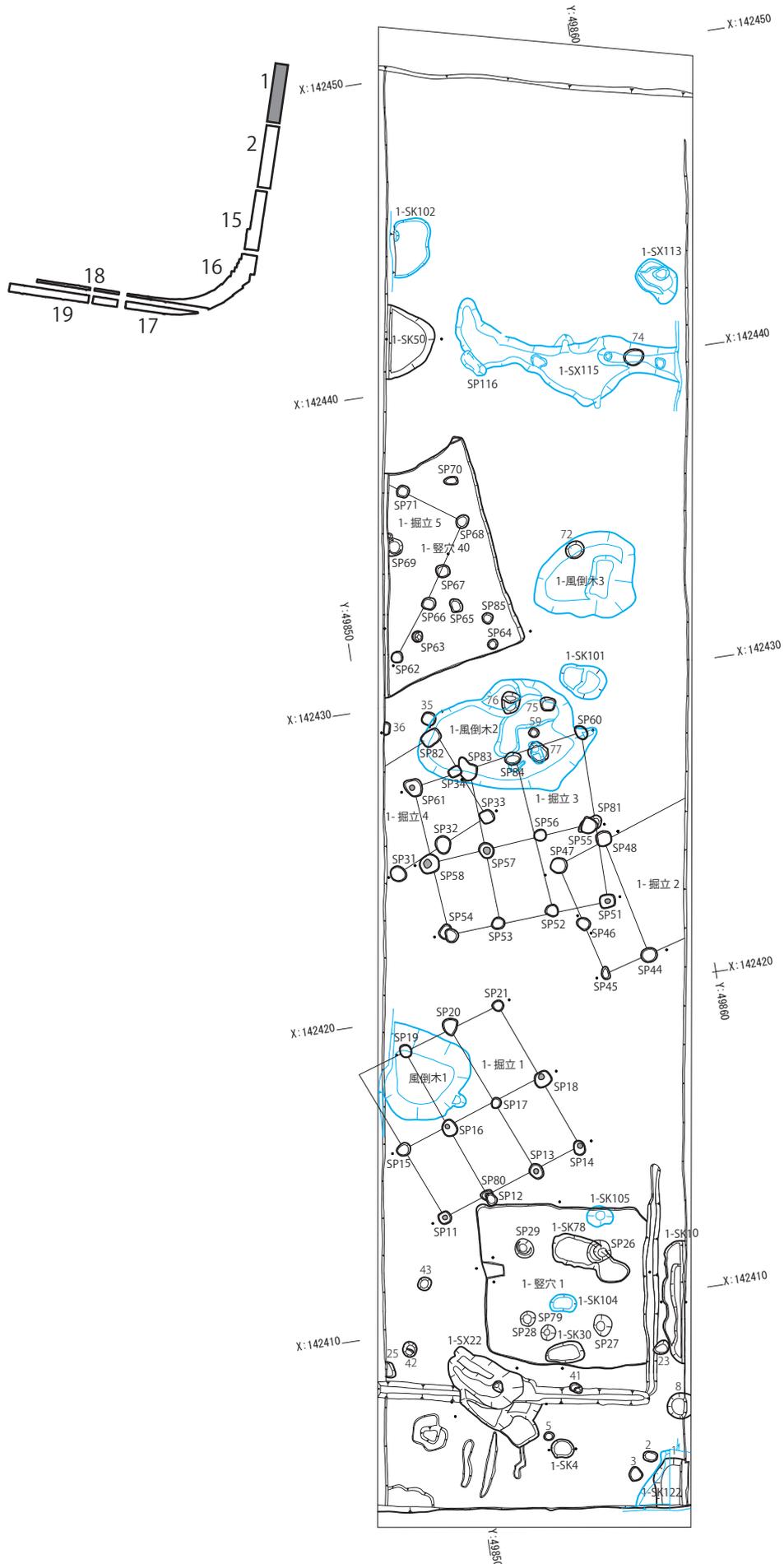


図2 第1調査区 平面図 (S=1/200)

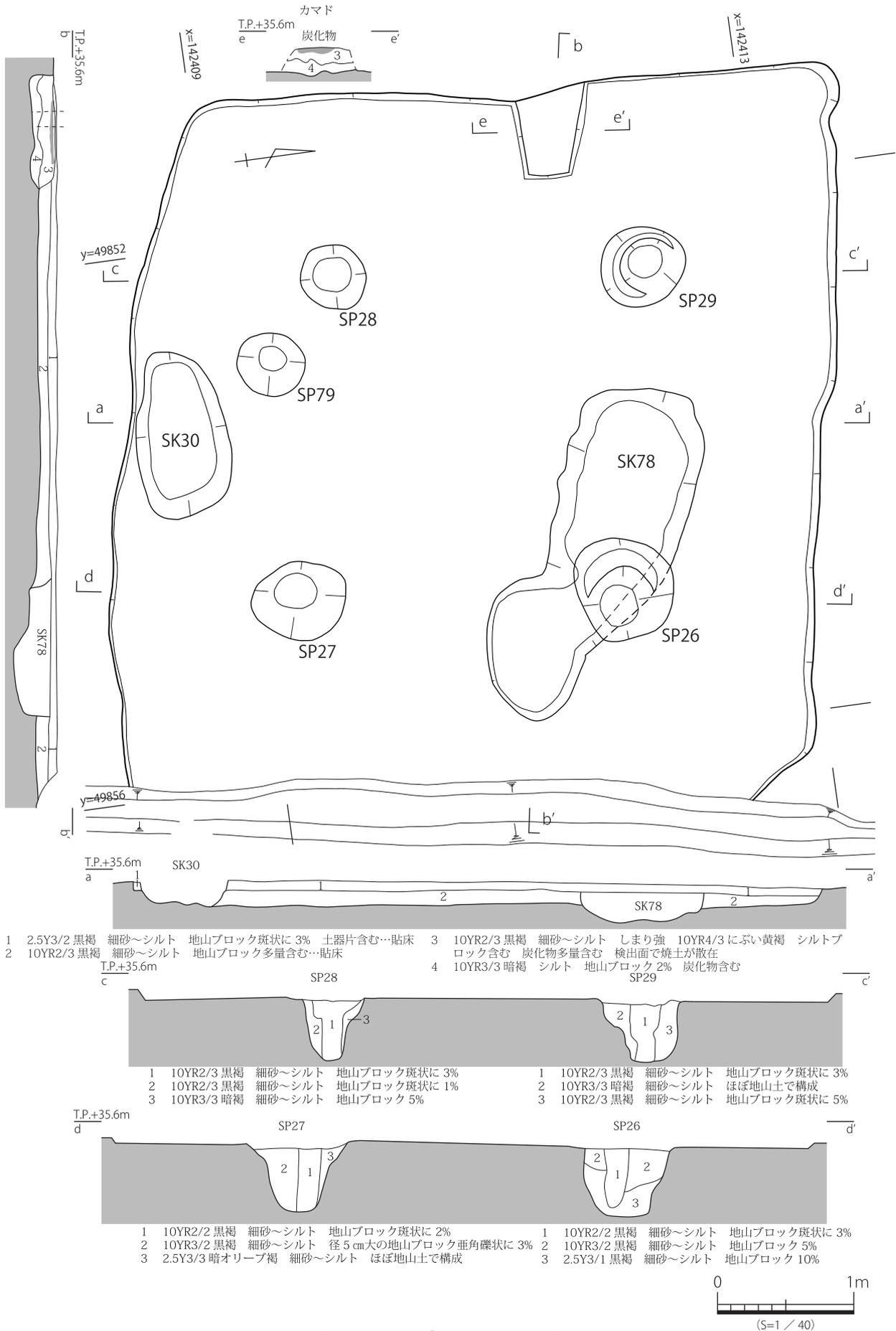


図3 1- 竪穴1 平・断面図

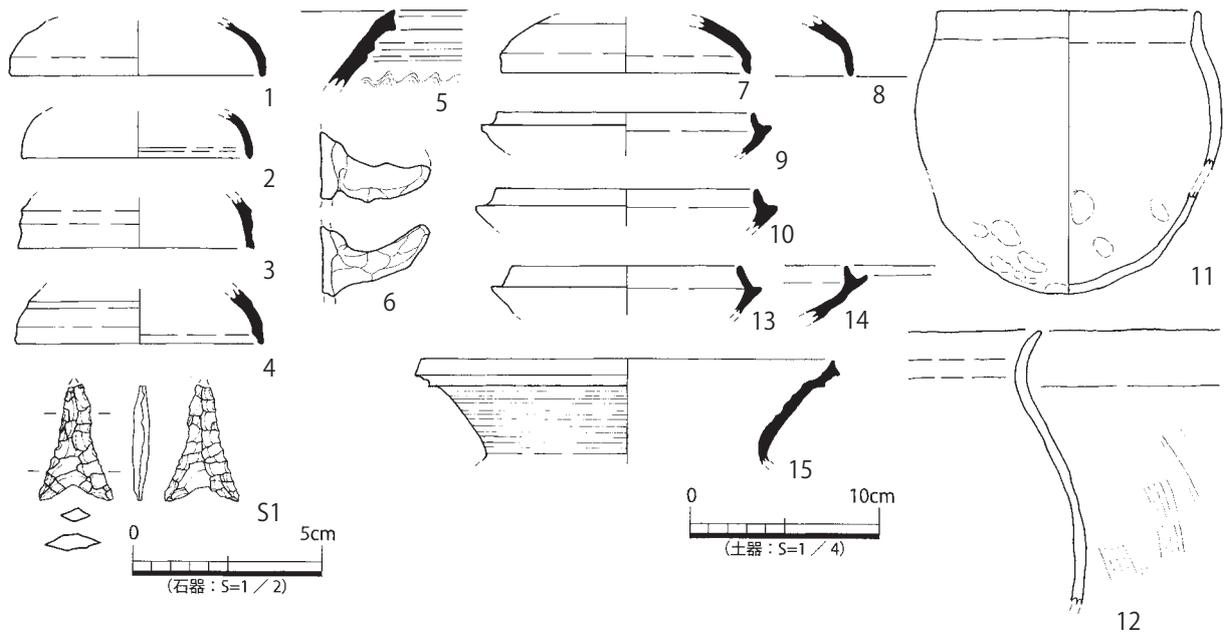


図4 第1調査区 出土遺物実測図

S P 28 は円形を呈し、長径約 0.48m、短径約 0.46m、深さ約 0.42m を測る。断面形はU字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が地山ブロック土を斑状に含む黒褐細砂～シルト、掘形が黒褐細砂～シルトと暗褐細砂～シルトである。

S P 29 は楕円形を呈し、長径約 0.74m、短径約 0.64m、深さ約 0.42m を測る。断面形状は筒型を呈し、南西肩は二段落ちとなる。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が地山ブロック斑状に含む黒褐細砂～シルト、掘形がほぼ地山ブロック土で構成する暗褐細砂～シルトと地山ブロック斑状に含む黒褐細砂～シルトである。

出土遺物の年代から、古墳時代後期末、T K 209 併行期と判断できる。

#### 1- 竪穴 40 (図4・5)

第1調査区北西側で検出した竪穴建物と考えられる遺構である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。検出面の標高は約 35.4m である。平面形状はやや歪な方形を呈する。主軸方位 N-6° -W、長辺約 6.75m、短辺約 4.8m 以上、深さ約 0.25m を測る。

埋土は上層が細礫と地山ブロック土を含む黒褐細砂～シルト、下層が地山ブロック土を含む黒褐細砂～シルトである。遺物は埋土から須恵器杯蓋(7・8)・杯身(9・10)、土師器甕(11)が出土した。また

図示できなかったが須恵器杯身片・高杯片・壺片、土師器高杯片・壺片、粘土塊、製塩土器片、砥石が出土した。

S P 69 は竪穴建物下層で検出したピットである。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。直径約 0.75 m、深さ約 0.17 m を測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は暗褐細砂～シルトである。

出土遺物の年代から古墳時代後期後半～飛鳥時代、T K 209～217 併行期と考えられる。

#### (2) 掘立柱建物

##### 1- 掘立 1 (図6)

調査区の中央南側で検出した掘立柱建物である。3×2間の総柱建物で、調査区外に延びるため全体の形状は不明である。S P 11～21・80で構成する。検出面の標高は約 35.4m である。梁行総長約 5.0m、桁行総長約 5.3m、床面積は約 26.5㎡を占める。主軸方位は N-19° -W。芯芯間距離は約 1.5～1.6 m、2.5～2.7m である。

S P 11 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.41 m、短辺約 0.39 m、深さ約 0.19 m を測る。断面形状は椀状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘形が黒シルトとにぶい黄褐シルトである。

S P 12 は楕円形を呈し、長径約 0.4 m、短径約 0.33 m、深さ約 0.23 m を測る。断面形状はU字

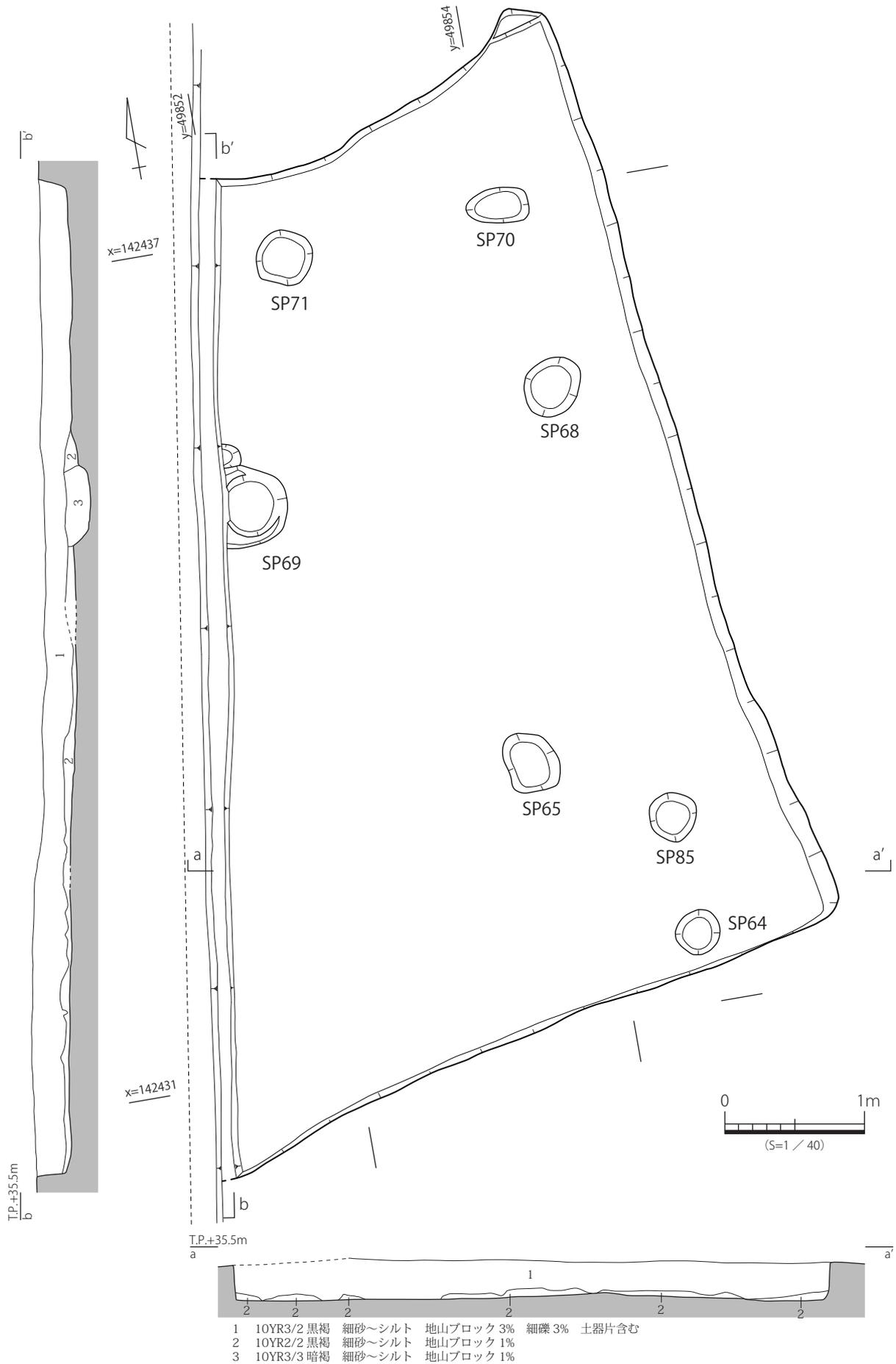


図5 1- 竪穴40 平・断面図

形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒シルトである。

S P 13 は楕円形を呈し長径約 0.52 m、短径約 0.42 m、深さ約 0.38 m を測る。断面形状は U 字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒シルトである。遺物は土師器片・製塩土器片が出土した。

S P 14 は楕円形を呈し、長径約 0.48 m、短径約 0.35 m、深さ約 0.23 m を測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトとにぶい黄褐シルトである。

S P 15 は円形を呈し、直径約 0.45m、深さ約 0.26 m を測る。断面形状は椀状に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は掘形が地山ブロックを含む黒褐シルト、柱痕が掘形よりも地山ブロック土を多く含む黒褐シルトである。

S P 16 は楕円形を呈し、長径約 0.54 m、短径約 0.47 m、深さ約 0.39 m を測る。断面形状は V 字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が暗褐シルトである。

S P 17 は円形を呈し、直径約 0.34m、深さ約 0.23 m を測る。断面形状は椀状に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が暗褐細砂～シルトと暗褐シルトである。

S P 18 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.55 m、短辺約 0.49m、深さ約 0.35m を測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトである。

S P 19 は楕円形を呈し、長径約 0.42 m、短径約 0.36 m、深さ約 0.14 m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は暗褐シルトである。

S P 20 はやや歪な楕円形を呈し、長径約 0.56 m、短径約 0.5m、深さ約 0.24 m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は上層が黒褐シルト、下層が黒褐細砂～シルトである。

S P 21 は円形を呈し、直径約 0.35m、深さ約 0.15 m を測る。断面形状は「へ」の字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトである。

S P 80 はやや歪な楕円形を呈する柱穴である。S P 12 に切られる。長径約 0.38m、短径約 0.3 m、深さ約 0.35 m を測る。断面形状は U 字形に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒シルト、

掘形が黒褐シルトである。

いずれのピットも出土遺物が細片であるため、時期は不明である。

#### 1－掘立3（図7）

第1調査区の中央で検出した掘立柱建物である。2×3間の総柱建物で、梁行総長約 4.9～5.5m、桁行総長約 5.2～5.6m、床面積は約 28.1㎡を占める。検出面の標高は約 35.25m である。S P 51～58・60・61・83・84 で構成する。主軸方位は N-85° -E。芯芯間距離は約 2.4～2.9、1.5～2.3m である。

S P 51 は隅丸方形を呈し、長辺 0.5 m、短辺約 0.43 m、深さ約 0.13 m を測る。断面形状は浅い皿状に弱い段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒細砂～シルトと黒褐シルトである。

S P 52 は円形を呈し、直径約 0.41m、深さ約 0.13 m、断面形状は浅い皿状に弱い段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒細砂～シルト、掘形が黒褐シルトとにぶい黄褐シルトである。

S P 53 は円形を呈し、直径約 0.42m、深さ約 0.21 m を測る。断面形状は椀状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトと暗褐シルトである。

S P 54 は不整形な形状で、長軸約 0.62 m、短軸約 0.47m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は浅い皿状に弱い段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトと黒褐シルトである。遺物は須恵器杯身片、土師器甑片が出土した。

S P 55 はやや歪な隅丸方形を呈し、長辺約 0.51 m、短辺約 0.42m、深さ約 0.24 m を測る。断面形状は椀状に段落ちである。埋土は単層で、暗褐細砂～シルトである。

S P 56 は円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.19 m を測る。断面形状は「へ」の字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘形が暗褐シルトである。

S P 57 はやや歪な楕円形を呈し、長径約 0.52 m、短径約 0.44m、深さ約 0.19m を測る。断面形状は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形が褐灰細砂～シルトと暗褐シルトである。

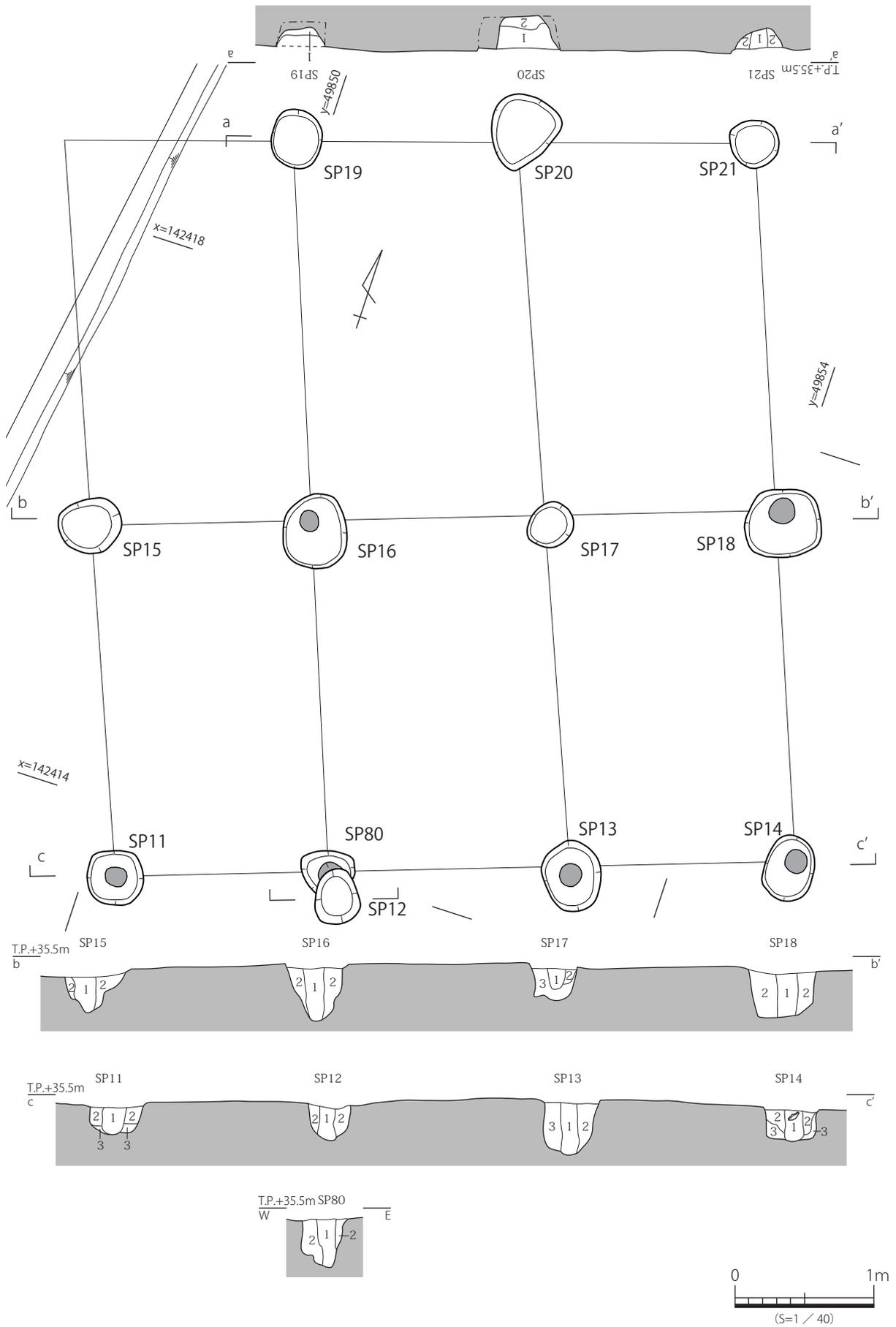


図6 1-掘立1 平・断面図

SP11

- 1 10YR3/1 黒褐 細砂～シルト 下部Fe沈着 地山ブロック斑状に3%
- 2 10YR2/1 黒 シルト 地山ブロック斑状に3%
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト ほぼ地山土で構成

SP12

- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 地山ブロック斑状に3%
- 2 10YR2/1 黒 シルト 地山ブロック斑状に2%

SP13

- 1 10YR3/2 黒褐 シルト 径1～2cm程度の地山ブロック斑状に含む 土器片含む
- 2 10YR2/1 黒 シルト 径1cm程度の地山ブロック多量含む
- 3 10YR2/1 黒 シルト 地山ブロック斑状に2%

SP14

- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 下部にFe沈着 径1～2cm程度の地山ブロック斑状に含む 土器片含む
- 2 10YR3/1 黒褐 細砂～シルト 地山ブロック斑状に2%
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト ほぼ地山土で構成

SP15

- 1 10YR3/2 黒褐 シルト 地山ブロック3%
- 2 10YR3/2 黒褐 シルト 地山ブロック2%

SP16

- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 地山ブロック3%
- 2 10YR3/3 暗褐 シルト 地山ブロック2%

SP17

- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 地山ブロック2%
- 2 10YR3/3 暗褐 細砂～シルト 地山ブロック2%
- 3 10YR3/3 暗褐 シルト

SP18

- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 地山ブロック3%
- 2 10YR3/1 黒褐 細砂～シルト 地山ブロック2%

SP19

- 1 10YR3/3 暗褐 シルト 地山ブロック3%

SP20

- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 地山ブロック3%
- 2 10YR3/1 黒褐 細砂～シルト 地山ブロック3%

SP21

- 1 10YR2/3 黒褐 シルト 地山ブロック1%
- 2 10YR2/2 黒褐 細砂～シルト 地山ブロック2%

SP80

- 1 7.5YR2/1 黒 シルト しまり強 径1cm程度の地山ブロック含む
- 2 10YR2/2 黒褐 シルト 地山ブロック斑状に3%

S P 58 は円形を呈し、直径約 0.63m、深さ約 0.34 m、断面形状は方形に弱い段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトである。

S P 60 は楕円形を呈し、長径約 0.5 m、短径約 0.33 m、深さ約 0.28 mを測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトと暗褐シルトである。

S P 61 は歪な隅丸方形を呈し、長辺約 0.56 m、短辺約 0.5 m、深さ約 0.29 mを測る。断面形状は椀状である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐灰シルト、掘形が灰黄褐極細粒砂～シルトと灰黄褐シルトである。

S P 83 は攪乱に切られるため全体の形状は不明であるが、不整形な形状を呈する。長径約 0.8 m、短径約 0.6 m、深さ約 0.29 mを測る。断面形状は椀状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘形が暗褐細砂～シルトとにぶい黄褐シルトである。

S P 84 は楕円形を呈し、長径約 0.52 m、短径約 0.41 m、深さ約 0.65 mを測る。断面形状は筒型を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が暗褐シルトである。

いずれのピットも出土遺物が細片のため、詳細な時期は不明である。

1－掘立2（図8）

第1調査区の中央東側で検出した掘立柱建物である。1×2間の側柱建物で、調査区外に延びる

ため全体の形状は不明である。梁行総長約 1.5m以上、桁行総長約 3.9m、床面積は約 5.9㎡以上を占める。S P 44～48で構成する。検出面の標高は約 35.3mである。主軸方位はN-14°-W。芯芯間距離は約 1.5～2.0mである。

S P 44 は円形を呈し、直径約 0.39 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は単層で、暗褐シルトである。

S P 45 は楕円形を呈し、長径約 0.42m、短径約 0.27 m、深さ約 0.07 mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は単層で、黒褐細砂～シルトである。

S P 46 は楕円形を呈し、長径約 0.44 m、短径約 0.37 m、深さ約 0.07mを測る。断面形状は浅い皿状で下部に段落ちが確認できる。埋土は単層で、暗褐細砂～シルトである。

S P 47 は円形を呈し、直径約 0.54m、深さ約 0.16 m、断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は上層が黒褐シルト、下層が地山ブロック土を多量に含む黒褐シルトである。

S P 48 は円形を呈し、直径約 0.5m、深さ約 0.33 mを測る。断面形状は椀状に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトとにぶい黄褐シルトである。

いずれのピットからも遺物が出土していないため、時期は不明である。

1－掘立4（図9）

第1調査区の中央西側で検出した掘立柱建物であ

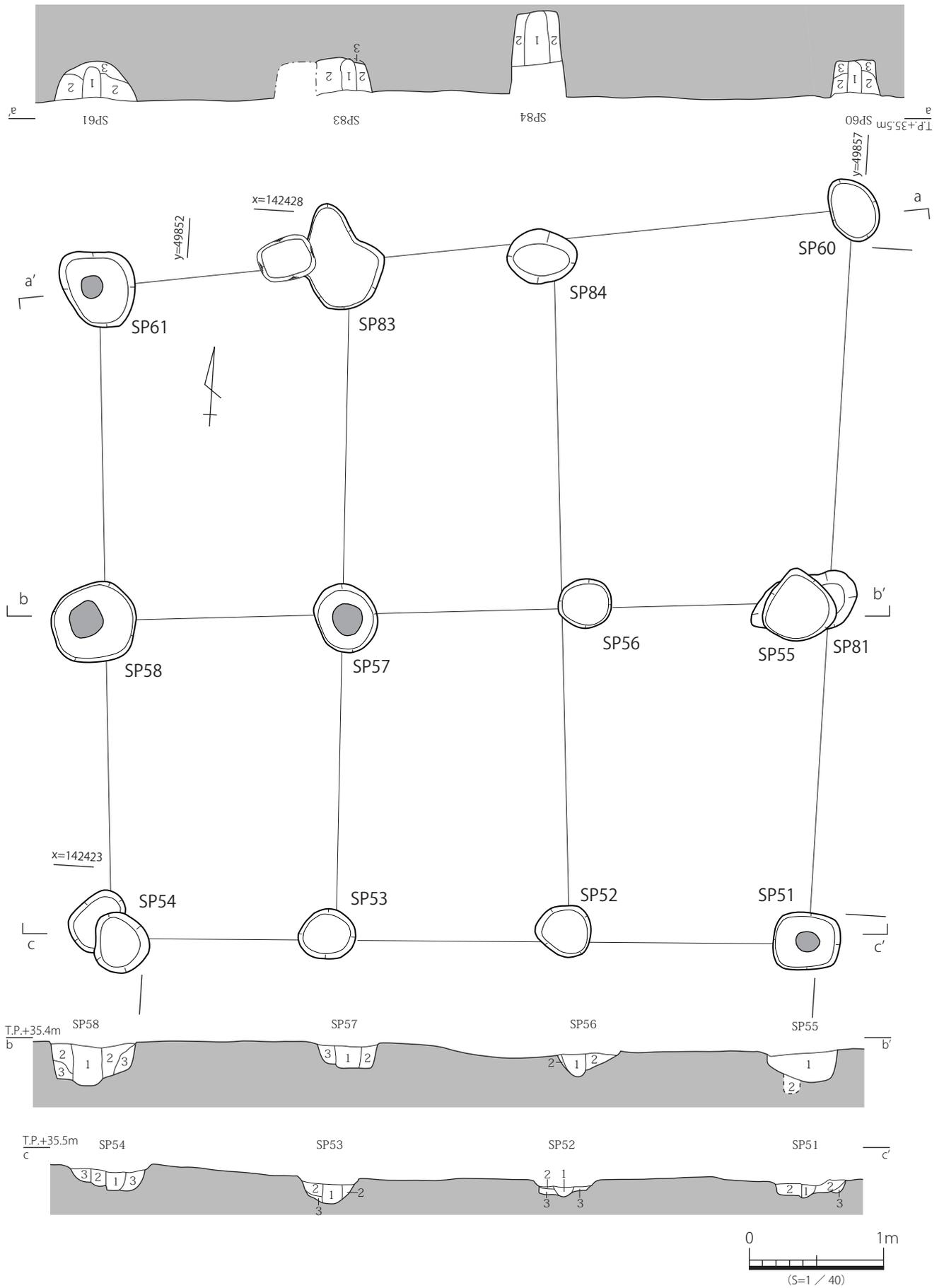


图7 1-掘立3 平・断面图

SP51

- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 地山ブロック 1%
- 2 10YR2/1 黒 細砂～シルト 地山ブロック 3%
- 3 10YR3/2 黒褐 シルト 地山ブロック 5%

SP52

- 1 10YR2/1 黒 細砂～シルト 径 1 cm程度の地山ブロック含む
- 2 10YR2/2 黒褐 シルト 地山ブロック 1%
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト ほぼ地山土で構成

SP53

- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 径 1 cm程度の地山ブロック含む
- 2 10YR2/2 黒褐 細砂～シルト 地山ブロック斑状に 2%
- 3 10YR3/3 暗褐 シルト 地山ブロック多量含む

SP54

- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 地山ブロック 5%
- 2 10YR2/1 黒 細砂～シルト 地山ブロック 1%
- 3 10YR2/2 黒褐 シルト 地山ブロック 2%

SP55

- 1 10YR3/3 暗褐 細砂～シルト 地山ブロック 3%
- 2 10YR3/4 暗褐 シルト 地山ブロック 3%

SP56

- 1 10YR3/2 黒褐 細砂 地山ブロック 1%
- 2 10YR3/3 暗褐 シルト 地山ブロック 1%

SP57

- 1 10YR3/3 暗褐 シルト 地山ブロック 3%
- 2 10YR4/1 褐灰 細砂
- 3 10YR3/4 暗褐 シルト ほぼ地山土で構成

SP58

- 1 10YR2/3 黒褐 シルト
- 2 10YR2/3 黒褐 細砂～シルト 土器片含む
- 3 2.5Y3/2 黒褐 細砂

SP60

- 1 10YR4/1 褐灰 シルト 細礫 5%
- 2 10YR4/2 灰黄褐 極細粒砂 地山ブロック 5%
- 3 10YR5/2 灰黄褐 シルト ほぼ地山土で構成 細礫 7%

SP61

- 1 10YR2/3 黒褐 シルト 地山ブロック 1%
- 2 10YR2/2 黒褐 細砂～シルト 地山ブロック 1%
- 3 10YR3/3 暗褐 シルト ほぼ地山土で構成

SP83

- 1 10YR2/3 黒褐 シルト 地山ブロック 2%
- 2 10YR3/3 暗褐 シルト 地山ブロック 3%

SP84

- 1 10YR3/1 黒褐 細砂～シルト 地山ブロック 3%
- 2 10YR3/3 暗褐 細砂～シルト 径 1 cm程度の地山ブロック多量含む
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト ほぼ地山土で構成

る。2 × 2 間以上の側柱建物で、調査区外に延びるため全体の形状は不明である。S P 31 ～ 34 ・ 82 で構成する。梁行総長約 3.2m、桁行総長約 3.4m 以上、床面積は約 10.9㎡以上を占める。検出面の標高は約 35.3m、主軸方位は N-66° -E。芯芯間距離は約 1.5 ～ 1.7m である。

S P 31 は円形を呈し、直径約 0.52m、深さ約 0.21 m を測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂～シルト、掘形が暗褐シルトと黒褐シルトである。

S P 32 は楕円形を呈し、長径約 0.58m、短径約 0.48m、深さ約 0.26 m を測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が暗褐細砂～シルトと暗褐シルト、黒褐細砂～シルトである。

S P 33 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.43 m、短辺 0.41 m、深さ約 0.17 m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は 2 層に分層でき、暗褐シルトと黒褐細砂～シルトである。

S P 34 は隅丸長方形を呈し、長辺約 0.41 m、短辺約 0.32 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は U 字形を呈する。埋土は単層で、黒褐細砂～シルトである。

S P 82 は隅丸長方形を呈し、長辺約 0.63 m、短辺約 0.47m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘形が柱痕よりも地山ブロック土を多く含む黒褐細砂～シルトとにぶい黄褐シルトで

ある。

遺物は S P 31 と S P 32 から須恵器片と土師器片が出土したが、出土遺物が細片のため、詳細な時期は不明である。

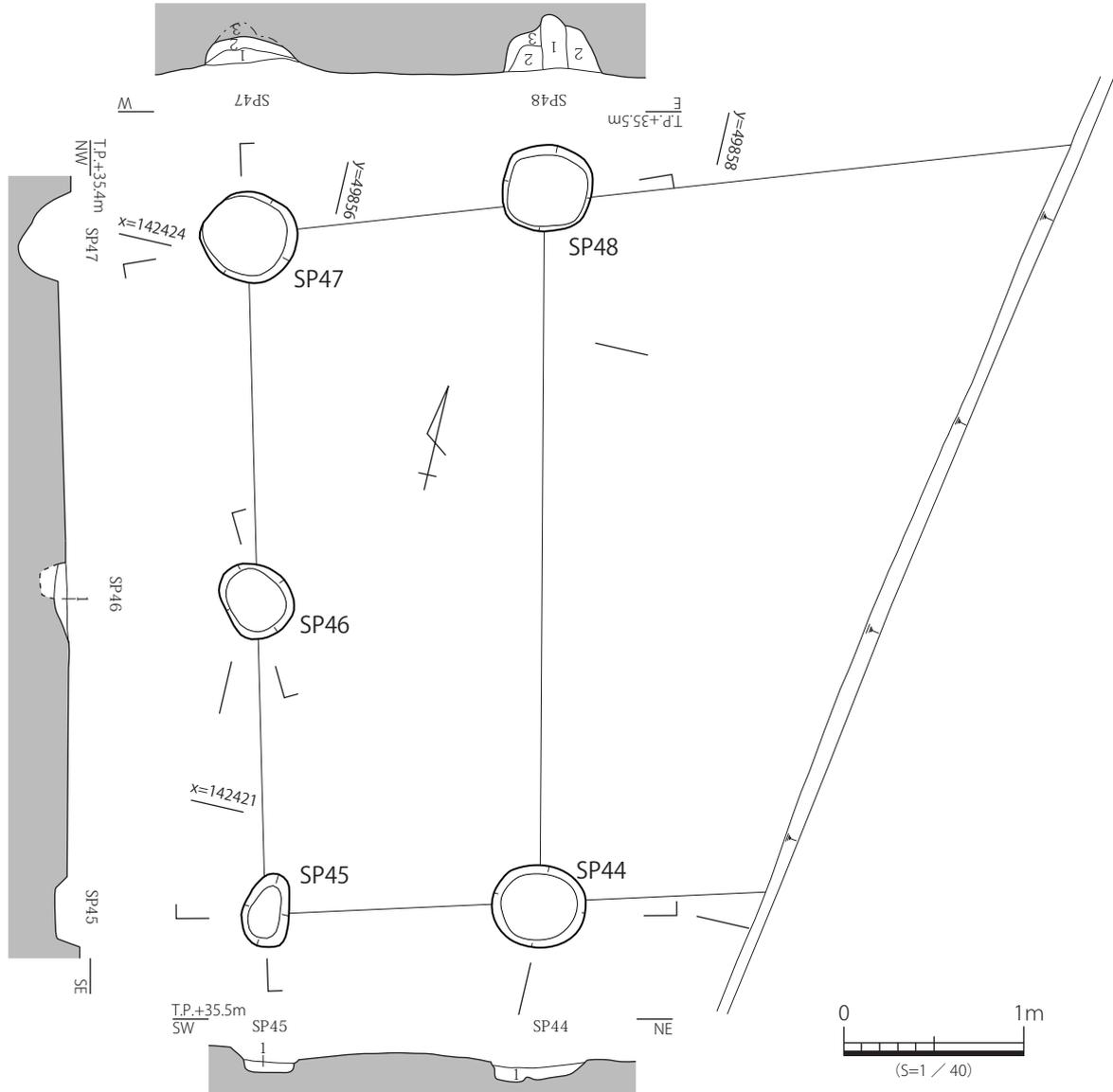
1－掘立 5（図 10）

調査区の中央西側で検出した掘立柱建物である。S P 62 ・ 66 ・ 68 ・ 71 で構成する。1 × 2 間以上の側柱建物で、調査区外に延びるため全体の形状は不明である。検出段階では柱穴を確認できず、竪穴建物 40 の埋土を掘削したのち、貼床面で掘立柱建物と柱穴群を検出した。本来は竪穴 40 を切っていたと考えられる。梁行総長約 2.1 m 以上、桁行総長約 4.8m 以上、床面積は約 10.0㎡以上を占める。検出面の標高は約 35.1 m、主軸方位は N-37° -E。芯芯間距離は約 2.0 ～ 2.8m である。

S P 62 は円形を呈し、直径約 0.37m、深さ約 0.13m、断面形状は椀状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘形が極暗褐シルトである。

S P 66 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.42m、短辺約 0.38m、深さ約 0.33m を測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘形が黒褐シルトである。

S P 68 は楕円形を呈し、長径約 0.44 m、短径約 0.36 m、深さ約 0.25 m を測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂～シルト、掘形が黒褐シルトである。



- |      |   |               |        |                     |
|------|---|---------------|--------|---------------------|
| SP44 | 1 | 10YR3/3 暗褐    | シルト    | 地山ブロック 3%           |
| SP45 | 1 | 10YR3/2 黒褐    | 細砂～シルト | 地山ブロック 3%           |
| SP46 | 1 | 10YR3/3 暗褐    | 細砂～シルト | 地山ブロック斑状に 5%        |
| SP47 | 1 | 10YR2/2 黒褐    | シルト    | 地山ブロック 3%           |
|      | 2 | 10YR3/1 黒褐    | シルト    | 径 2 cm程度の地山ブロック多量含む |
|      | 3 |               | ベース    | 土師器片含む              |
| SP48 | 1 | 10YR2/3 黒褐    | シルト    | 地山ブロック 1%           |
|      | 2 | 10YR2/2 黒褐    | 細砂～シルト | 径 2 cm程度の地山ブロック多量含む |
|      | 3 | 10YR4/3 に近い黄褐 | シルト    | ほぼ地山土で構成            |

図 8 1-掘立 2 平・断面図

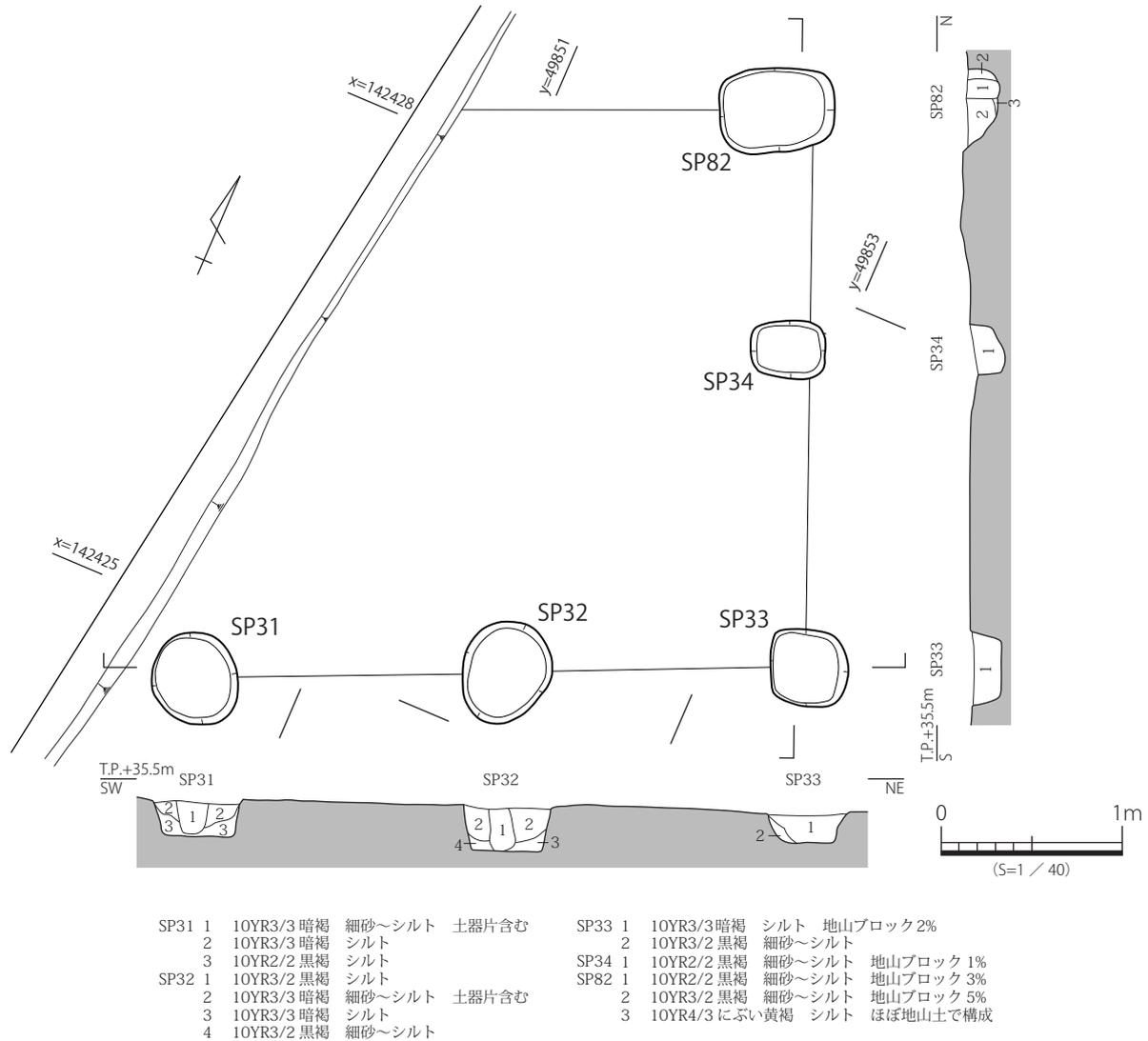


図9 1-掘立4 平・断面図

SP 71 は円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.31 m を測る。断面形状は U 字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘形が黒褐シルトと暗褐シルトである。

いずれのピットからも遺物が出土していないため、時期は不明である。

#### 1-柱穴群 (図 10)

掘立 5 と同様に、竪穴 40 貼床面で検出したピット群である。

SP 85 は円形を呈し、直径約 0.36 m、深さ約 0.27 m を測る。断面形状は U 字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂～シルト、掘形が黒褐シルトである。

SP 63 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.35 m、

短径約 0.33 m、深さ約 0.31 m を測る。断面形状は方形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が暗褐シルトである。

SP 64 は円形を呈し、直径約 0.32 m、深さ約 0.29 m を測る。断面形状は U 字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が暗褐細砂～シルトとにぶい黄褐細砂～シルト、黒褐細砂～シルトである。

SP 65 はやや歪な楕円形を呈し、長径約 0.44 m、短径約 0.36 m、深さ約 0.28 m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂～シルト、掘形が黒褐細砂～シルトである。

SP 67 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.44 m、短辺約 0.41 m、深さ約 0.12 m を測る。断面形状は

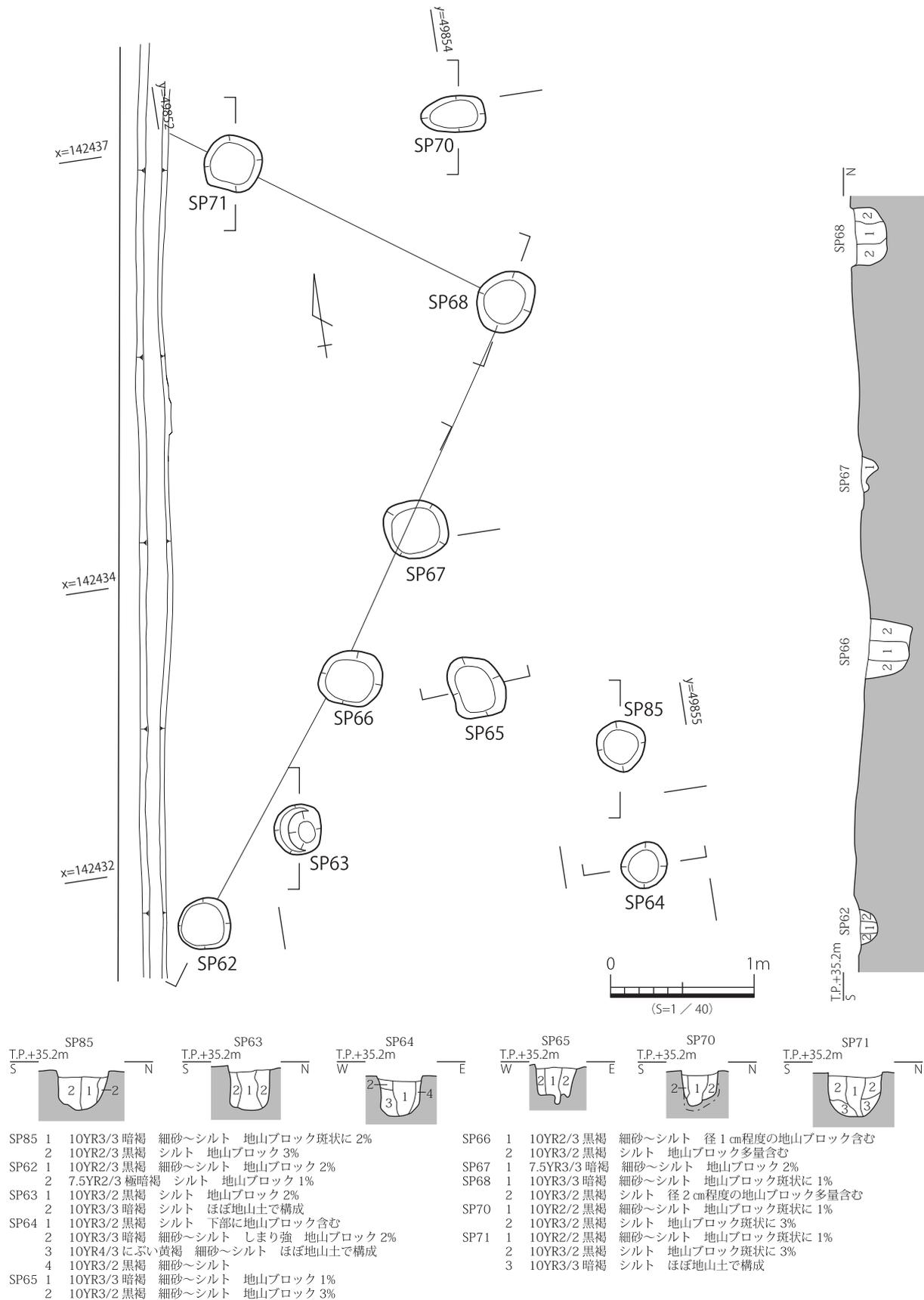


図 10 1-掘立 5・1-柱穴群 平・断面図

不整形である。埋土は単層で暗褐細砂～シルトである。

S P 70は楕円形を呈し、長径約0.44 m、短径約0.24 m、深さ約0.25 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘形が黒褐シルトである。

いずれの柱穴からも遺物が出土していないため、時期は不明である。

### (3) 土坑

#### 1-S K 4 (図 11)

第1調査区の南側で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位N-83°-W、検出面の標高は約35.5mである。長径約0.7m、短径約0.56m、深さ約0.25mを測る。断面形状は椀状を呈する。

埋土は2層に分層でき、上層が黒褐細砂～シルト、下層が地山ブロック土を多量に含む暗褐細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

#### 1-S K 10 (図 4・11)

第1調査区の南東隅で検出した土坑である。平面形状は不整形で、調査区外へと延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-7°-E、検出面の標高は約35.5mである。長軸約4.0m、短軸約0.6m以上、深さ約0.15mを測る。断面形状は起伏のある浅い皿状である。

埋土は単層で、褐灰シルトである。

遺物は土師器甕(12)が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代後期後半と考えられる。

#### 1-S K 30 (図 11)

第1調査区南側、竪穴1の上面で検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形である。主軸方位N-88°-W、検出面の標高は約35.5mである。長辺約1.23 m、短辺約0.69 m、深さ約0.19 mを測る。断面形状は起伏のある逆台形である。

遺物は土師器高杯片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

#### 1-S K 50 (図 11)

第1調査区の北西で検出した土坑である。調査区

外へ延びるため全体の形状は不明である。主軸方位N-8°-E、検出面の標高は約35.4mである。長軸約2.4m、短軸1.5m以上、深さ0.45mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は6層に分層でき、にぶい赤褐細砂～シルトと黒褐細砂～シルト、暗褐シルト、暗褐細砂～シルト、褐細砂～シルト黒褐細砂～シルトである。玉石が筋状に斜め縦方向に認められ、また堆積が不規則な状態であることから、風倒木痕の可能性が考えられる。

遺物は須恵器杯身片が出土したが、遺物が細片であるため、詳細な時期は不明である。

#### 1-S K 78 (図 11)

第1調査区の中央南側、竪穴建物1内で検出した土坑である。平面形状は不整形である。主軸方位N-57°-W、検出面の標高は約35.3mである。長軸約2.6m、短軸約0.9m、深さ0.32mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は2層に分層でき、上層が黒褐細砂～シルト、下層がほぼ地山土で構成する暗褐細砂～シルトとオリーブ褐シルトである。

遺物は須恵器杯蓋片・杯身片が出土したが、細片のため、詳細な時期は不明である。

#### 1-S K 101 (図 12)

第1調査区第2面の中央で検出した土坑である。平面形状はやや歪な楕円形である。主軸方位N-60°-W、検出面の標高は約35.0mである。長径約1.5m、短径約1.1m、深さ約0.2mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は2層に分層でき、上層が黒褐細砂～シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

#### 1-S K 102 (図 12)

第1調査区第2面の北西側で検出した土坑である。調査区外へと延びるため、全体の形状は不明であるが、不整形な形状を呈する。主軸方位N-0°-W、検出面の標高は約35.05mである。長軸約1.8m、短軸約1.2m以上、深さ約0.25mを測る。断面形状は浅い皿状で段落ちを有する。

埋土は2層に分層でき、上層がにぶい黄褐シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物は須恵器杯身片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

1-S K 104（図12）

第1調査区第2面の南側で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位N-80°-W、検出面の標高は約35.25mである。長径約0.8m、短径約0.5m、深さ約0.1mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、黒褐シルトである。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

1-S K 105（図12）

第1調査区第2面の南側で検出した土坑である。平面形状はやや歪な楕円形を呈する。主軸方位N-75°-W、検出面の標高は約35.2mである。長径約0.8m、短径約0.6m、深さ約0.4mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、黒褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

1-S K 122（図12）

第1調査区の南東側で検出した土坑である。調査区外へ延びるため、全体の形状は不明であるが、不整形な形状を呈する。主軸方位N-45°-E、検出面の標高は約35.3mである。長軸約2.1m以上、短軸約1.0m以上、深さ約0.15mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で、褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

（4）性格不明遺構・風倒木痕

1-S X 115（図13）

第1調査区第2面の北側で検出した落ち込み状の遺構である。調査区外に延びるため全体の形状は不明であるが、平面形状は不整形である。主軸方位N-75°-W、検出面の標高は約35.0mである。長軸約7.0m以上、短軸約2.1m、深さ約0.5mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は西側で2層、東側で3層に分層できる。西側では上層が灰黄褐シルト、下層がにぶい黄橙シルトである。東側では、上層が灰黄褐シルト、中層がにぶい黄橙シルト、下層がにぶい黄褐シルトであ

る。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

1-S X 22（図14）

第1調査区の南側で検出した風倒木痕と考えられる遺構である。平面形状は不整形で、検出面の標高は約35.5m、主軸方位N-28°-Wである。長軸約3.8m、短軸約0.9m、深さ約0.55mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は6層に分層でき、上層が黒褐シルト、中層が黒シルトと黒シルト～粘土、下層がオリーブ黒微細砂と黒褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

1-S K 113（図14）

第1調査区第2面の北側で検出した風倒木痕と考えられる土坑である。平面形状は楕円形を呈する。検出面の標高は約35.0m、主軸方位N-22°-Wである。長径約1.7m、短径約1.4m、深さ約0.65mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は5層に分層でき、上層が黒褐細砂～シルト、下層が暗褐シルトと灰黄褐シルト～粘土、ほぼ地山土で構成する黒褐シルトと暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

1-風倒木痕1（図15）

第1調査区第2面の南西側で検出した風倒木痕である。調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、平面形状は不整形を呈すると考えられる。検出面の標高は約35.3m、主軸方位N-28.5°-Eである。長軸約2.9m、短軸約2.8m以上、深さ約0.7mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は13層に分層でき、上層が灰黄褐シルトとにぶい黄極細砂、黄褐極細砂、黒褐シルト、オリーブ褐極細砂、灰黄褐極細砂～シルト、中層が黒シルトと灰黄褐極細砂、下層が黄褐シルト～粘土と黄褐シルト～中礫、黒シルト～粘土、暗オリーブ褐細砂である。

遺物は出土していない。

1-風倒木痕3（図15）

第1調査区第2面の中央で検出した風倒木痕である。平面形状は不整形である。検出面の標高は約35.0m、主軸方位N-90°-Wである。長軸約3.4m、

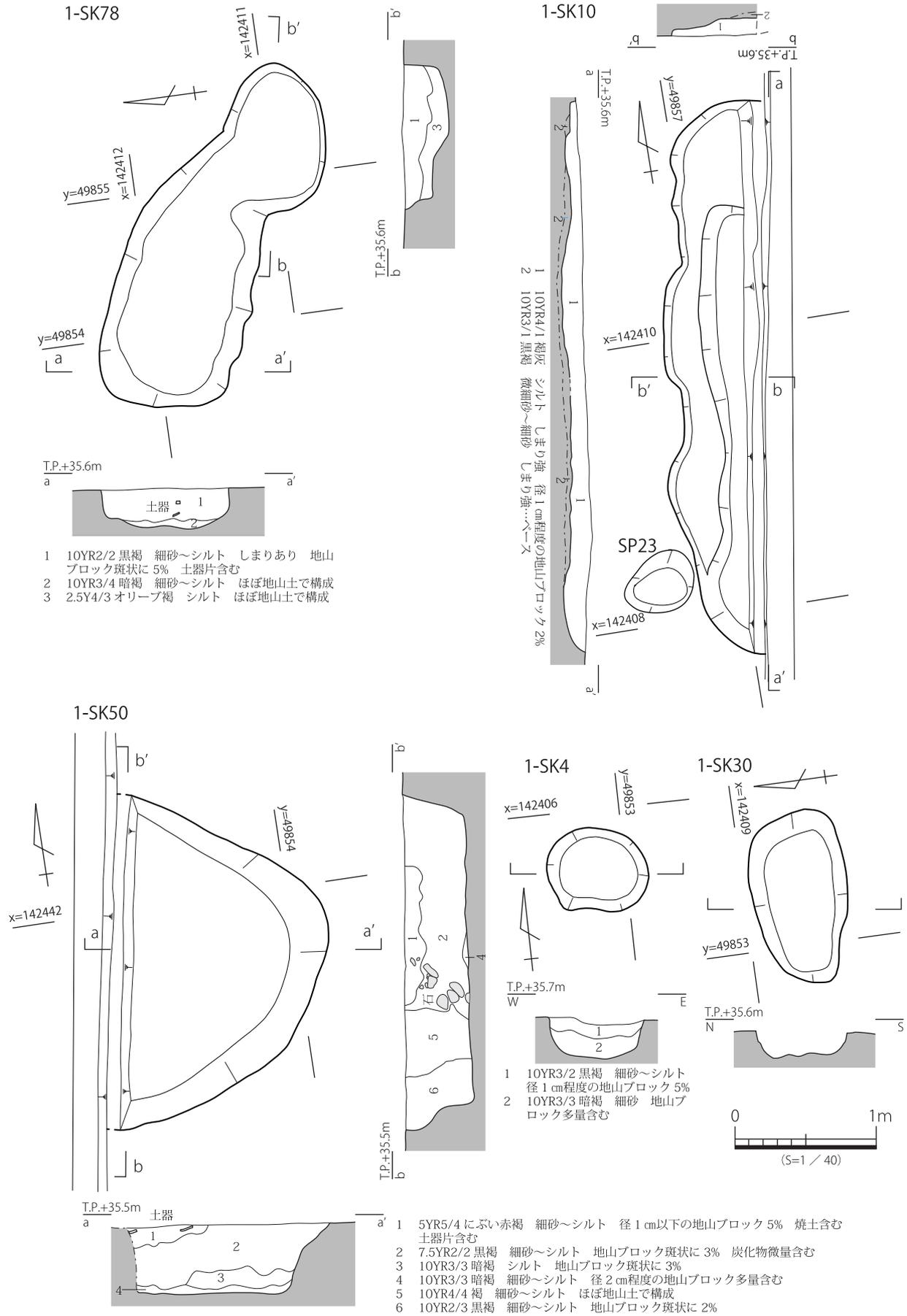


図 11 1-SK 4・10・30・50・78 平・断面図

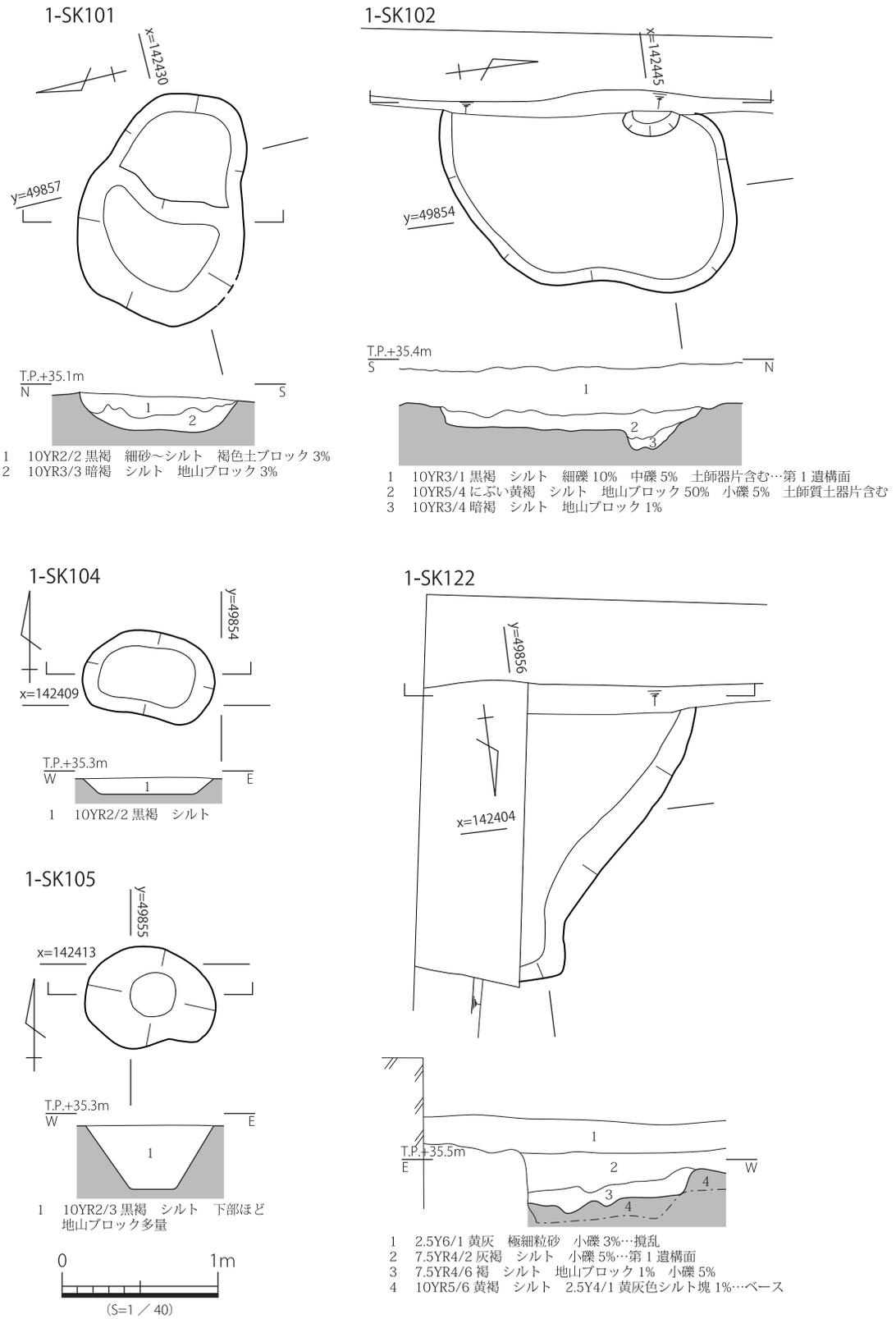


図 12 1-SK101・102・104・105・122 平・断面図

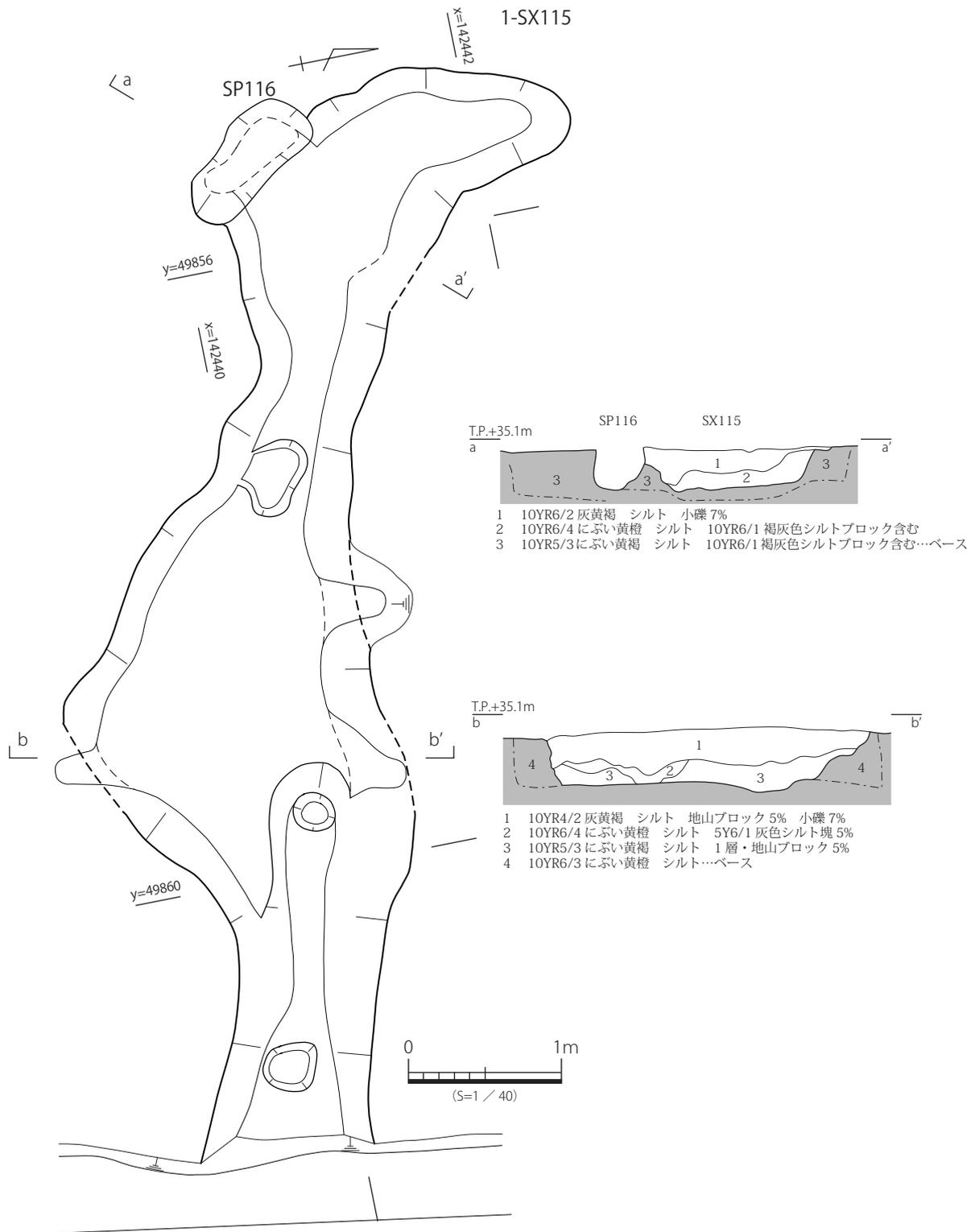


図 13 1-SX115 平・断面図

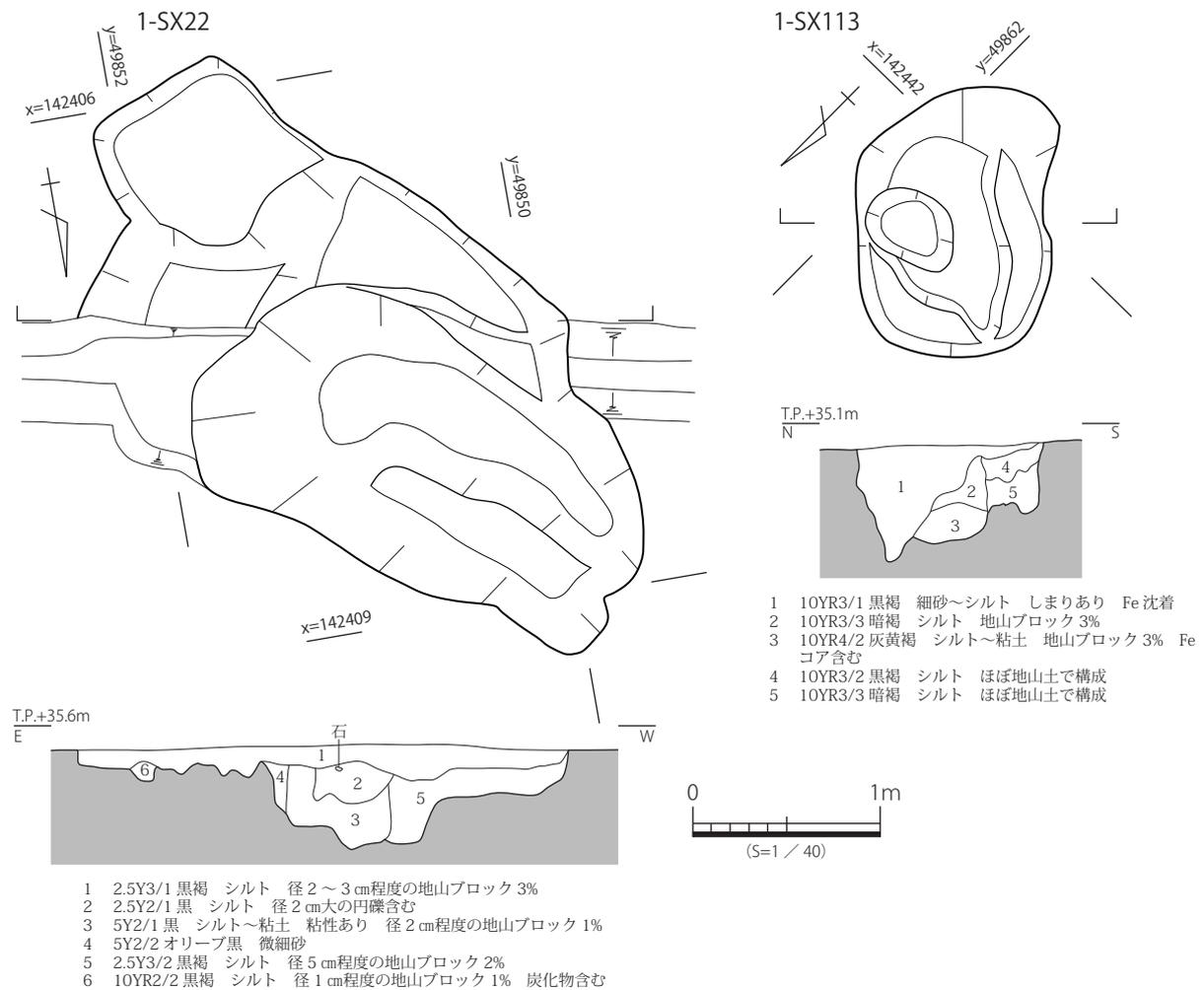


図14 1-SX22・113 平・断面図

短軸約2.8m、深さ約0.7mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は10層に分層でき、堆積状況から西側から東側へ堆積したと考えられる。最終埋没と考えられる東側の3層が褐灰極細砂～シルトと灰黄褐極細砂、黒褐極細砂～シルト。中央の3層がにぶい黄褐極細砂と褐灰シルト、黒褐極細砂である。西側の4層がにぶい黄褐シルトとにぶい黄褐シルト混じり細礫～中礫、灰黄褐極細砂、灰黄褐シルトである。

遺物は出土していない。

#### 1-風倒木痕2（図16）

第1調査区第2面の中央で検出した風倒木痕である。平面形状は不整形である。検出面の標高は約35.1m、主軸方位N-90°-Wである。長軸約5.7m、短軸約3.8m、深さ約0.7mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は14層に分層でき、堆積状況から南側から

北側へと堆積したと考えられる。最終埋没と考えられる南側が、黒褐シルトと黒褐極細砂、褐灰極細砂～シルト、灰黄褐極細砂、暗灰黄極細砂、褐灰極細砂～シルト、灰黄褐極細砂～シルトである。中央がにぶい黄褐極細砂と褐シルト、北側がにぶい黄褐シルト混じり小礫～中礫と褐シルト、灰黄褐極細砂である。

遺物は出土していない。

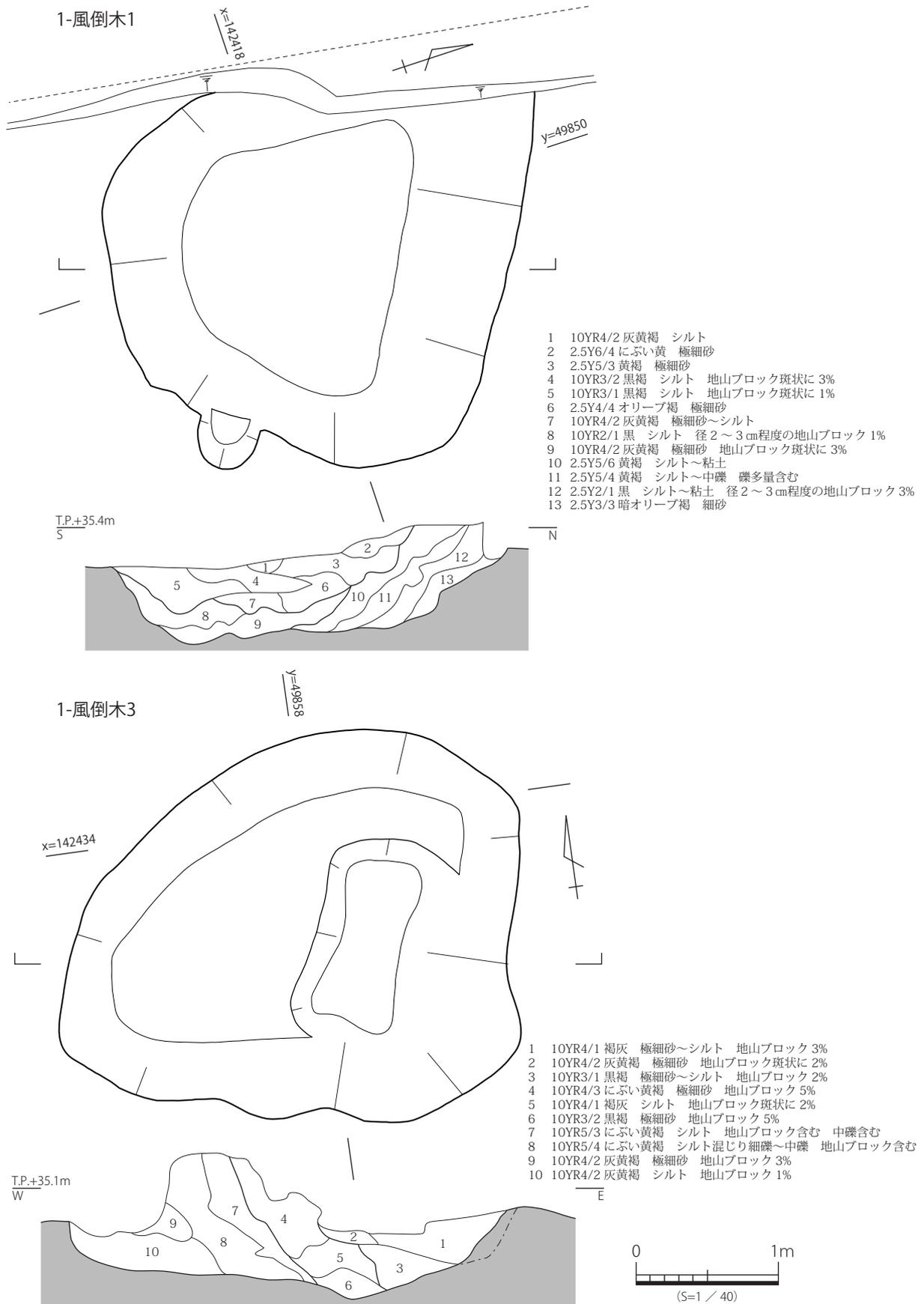


図 15 1-風倒木痕 1・3 平・断面図

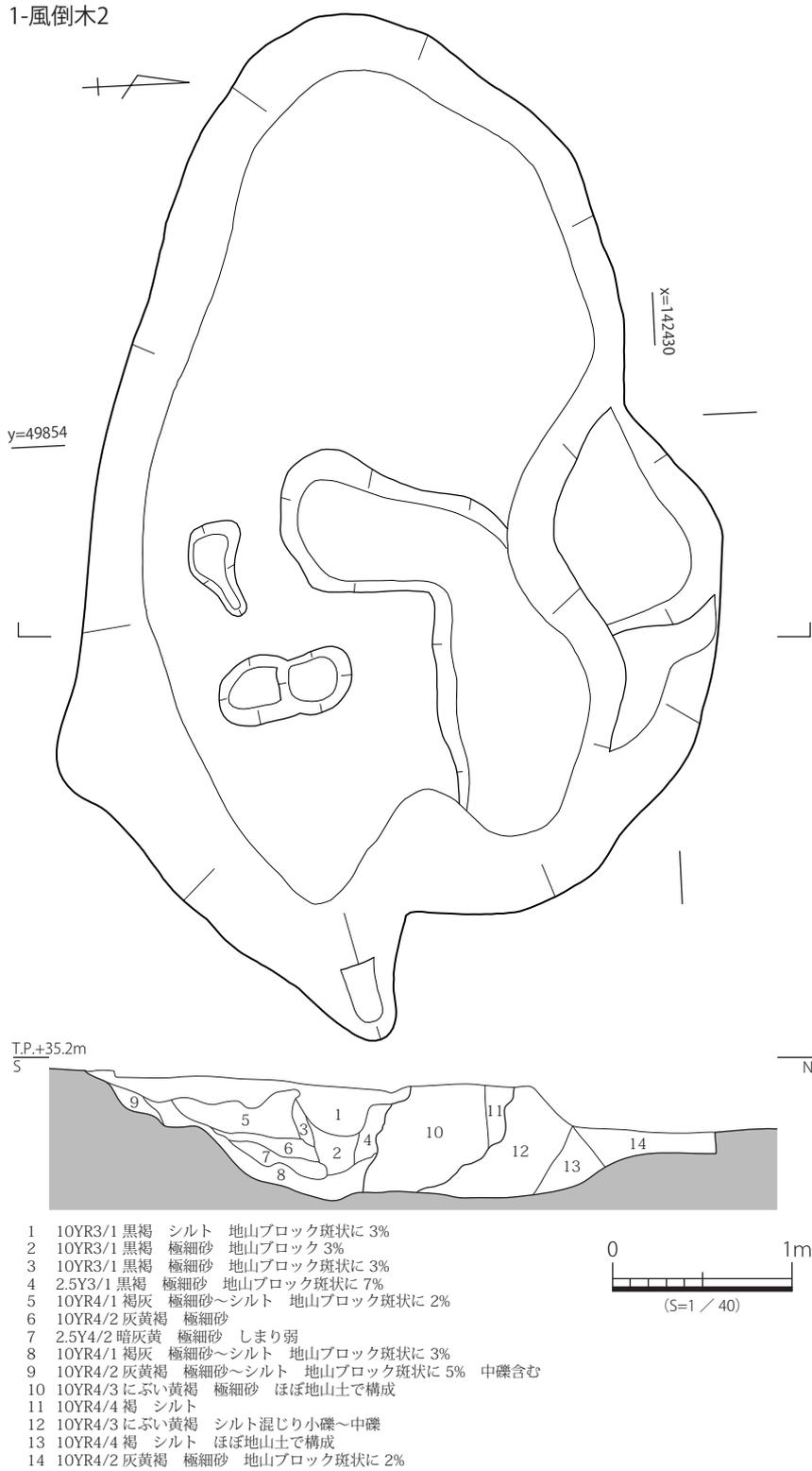


図 16 1- 風倒木痕 2 平・断面図

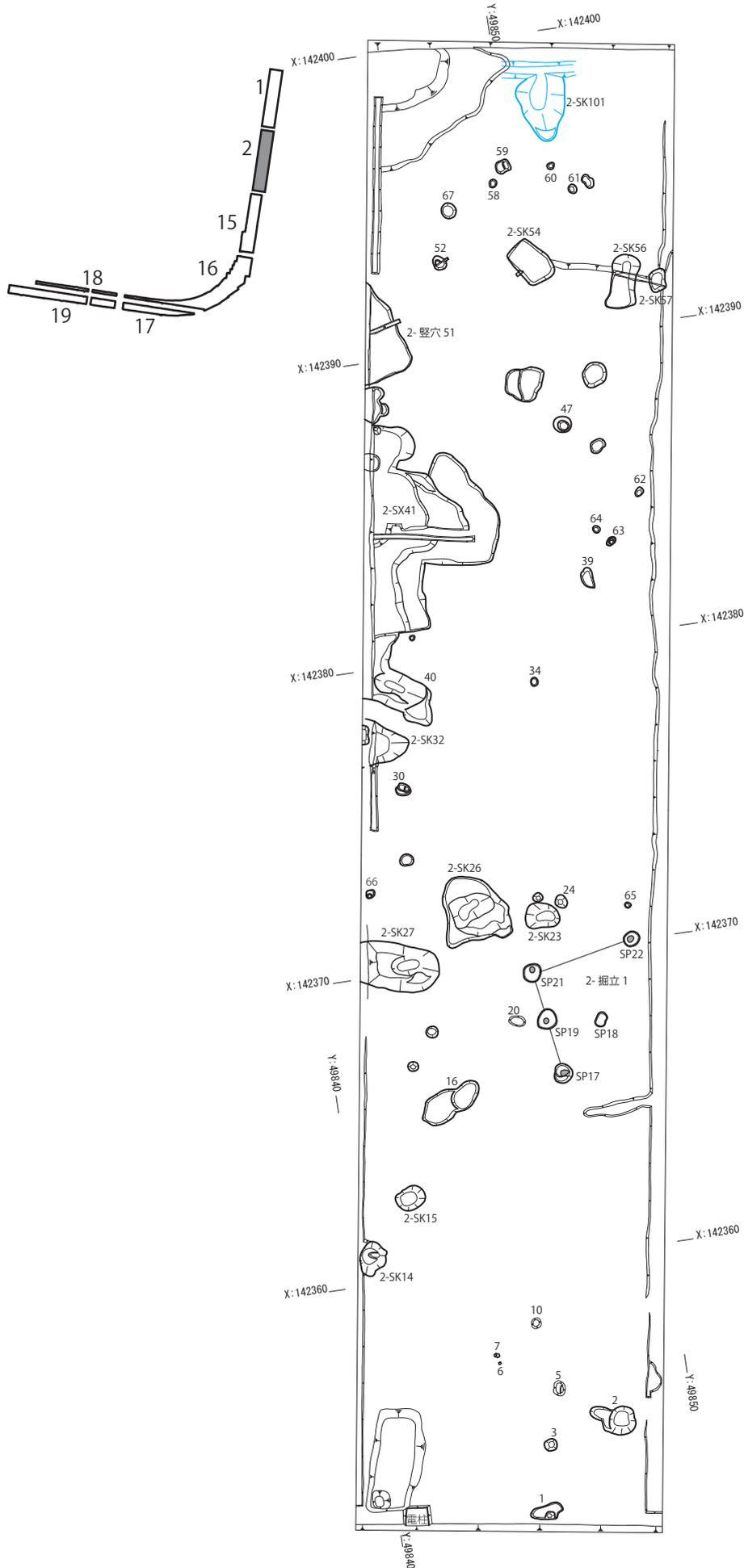


図 17 第2調査区 平面図 (S=1/200)

第2調査区（図17）

（1）竪穴建物

2-竪穴51（図18・23）

第2調査区北西側で検出した竪穴建物と考えられる遺構である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、平面形状は方形を呈すると想定できる。検出面の標高は約35.65m、主軸方位N-15°-Wである。規模は、長辺約2.7m以上、短辺約1.7m以上、深さ約0.3mを測る。

断面形状は、南側は急角度で掘り込まれるが、北側は緩やかな角度で落ちる。

埋土は黒褐細砂～シルトで、中央に焼土塊が確認できた。

遺物は土師器甕（16）、土師器高杯片が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代中期中葉と考えられる。

（2）性格不明遺構

2-SX41（図19）

第2調査区中央西側で検出した性格不明遺構である。掘削当初、竪穴建物の可能性を想定したが、平面プラン及び堆積状況から、竪穴建物の可能性を排除した。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。検出面の標高は約35.7m、主軸方位N-0°-Wである。平面形状は不整形である。規模は、長軸約6.9m以上、短軸約4.2m以上、深さ約

0.3mを測る。

埋土は単層で、褐灰極細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

（3）掘立柱建物

2-掘立1（図20）

第2調査区の中央で検出した掘立柱建物である。1×2間の側柱建物で、削平を受けている可能性が考えられる。SP17・19・21・22で構成する。SP18が総柱建物の中央の柱穴となる可能性も想定できる。梁行総長約3.4m以上、桁行総長約3.4m、床面積は約11.6㎡以上を占める。検出面の標高は約35.7m、主軸方位はN-9°-W。3である。芯芯間距離は約1.7～3.4mである。

SP17は円形を呈し、直径約0.63m、深さ約0.11mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐灰極細砂～シルト、掘形が暗灰黄極細砂～シルトである。

SP19は楕円形を呈し、長径約0.66m、短径約0.61m、深さ約0.07mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐灰極細砂～シルト、掘形が暗灰黄極細砂～シルトである。

SP21は円形を呈し、直径約0.64m、深さ約0.12mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐灰極細砂～シルト、

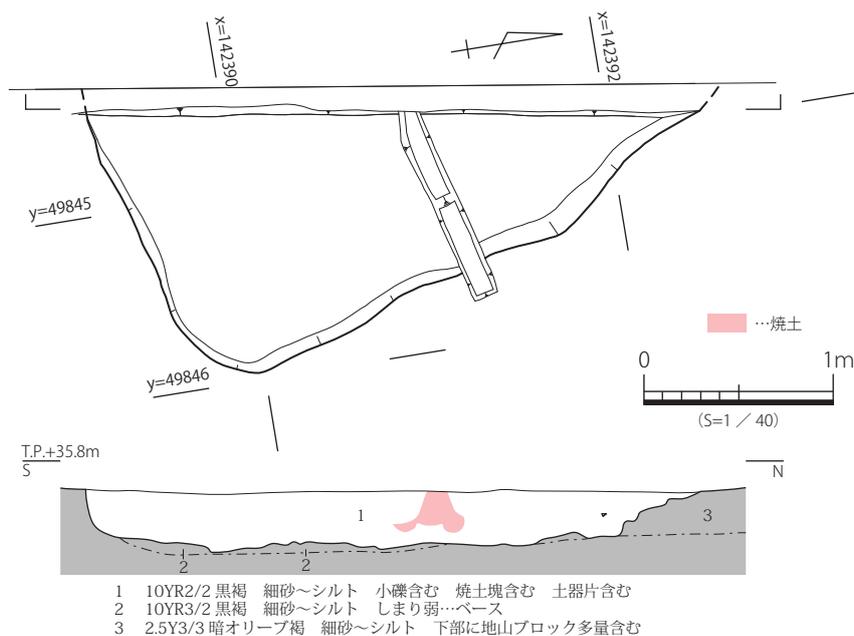


図18 2-竪穴51 平・断面図

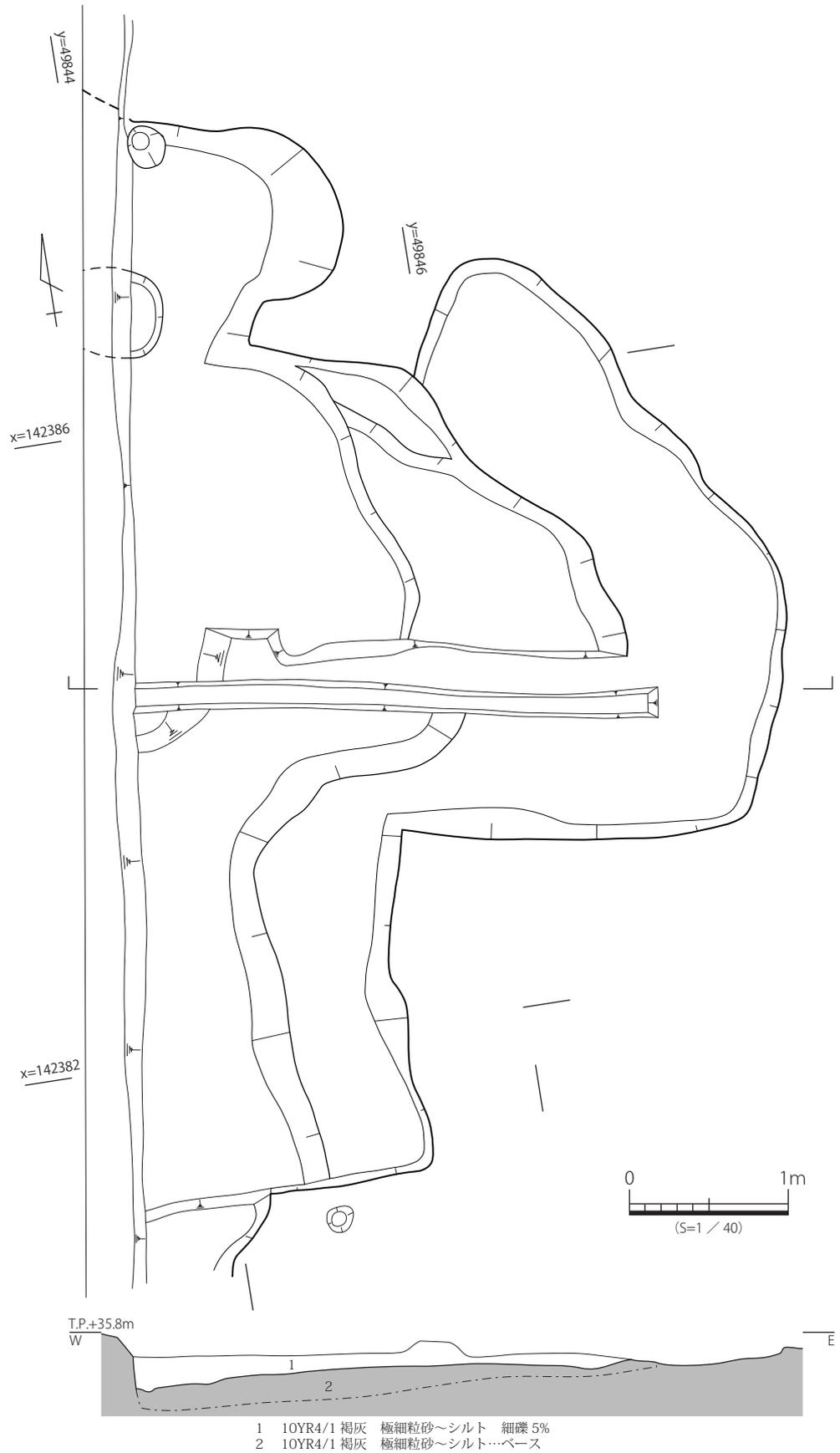


図 19 2-SX41 平・断面図

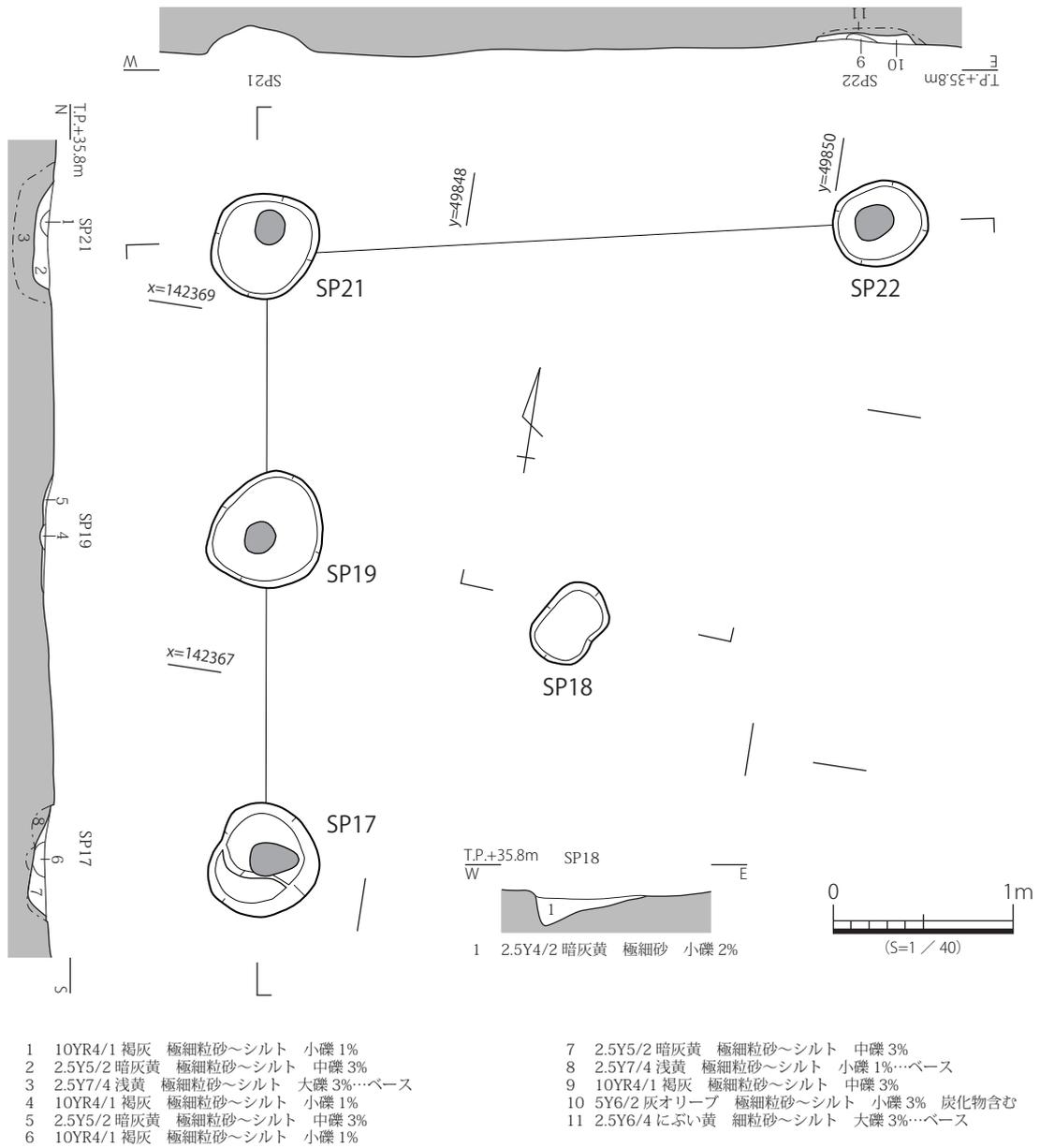


図 20 2- 掘立 1 平・断面図

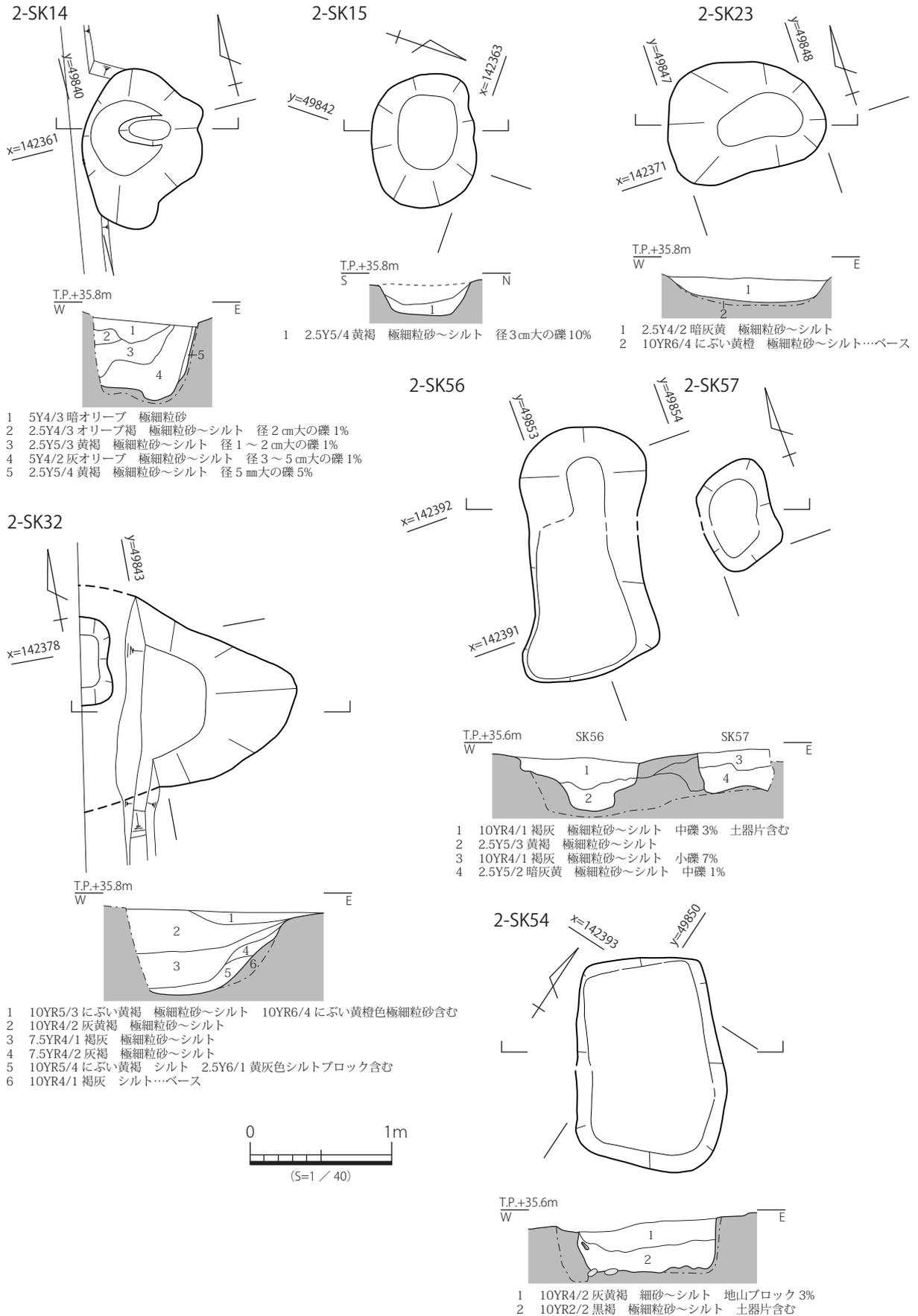


図 21 2-SK14・15・23・32・54・56・57 平・断面図

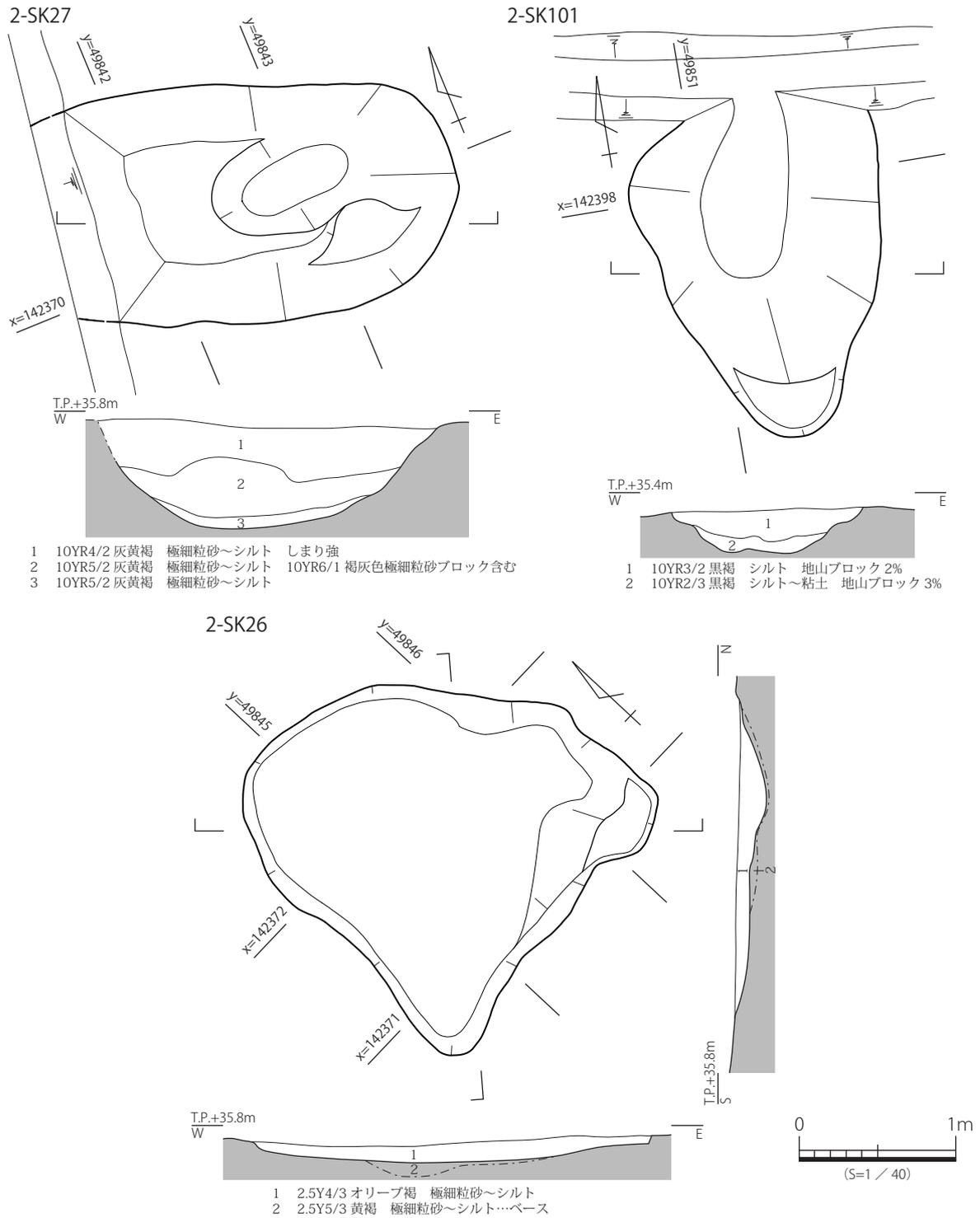


図 22 2-SK26・27・101 平・断面図

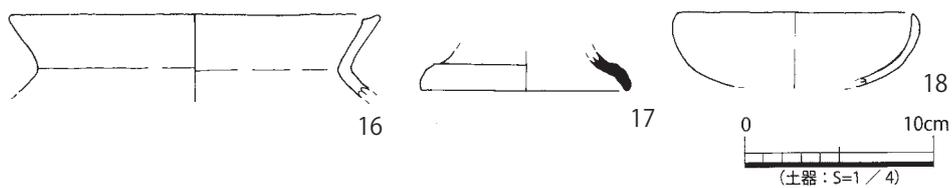


図 23 第 2 調査区 出土遺物実測図

掘形が暗灰黄極細砂～シルトである。

S P 22 は円形を呈し、直径約 0.53 m、深さ約 0.07 m を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐灰極細砂～シルト、掘形が灰オリーブ極細砂～シルトである。

S P 18 は楕円形を呈し、長径約 0.49 m、短径約 0.33 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は「へ」の字形を呈する。埋土は単層で暗灰黄極細砂～シルトである。

遺物は S P 17 から土師器片、S P 22 から須恵器片が出土したが、いずれも細片のため、詳細な時期は不明である。

#### (4) 土坑

##### 2 - S K 14 (図 21)

第 2 調査区の南側で検出した土坑である。平面形状は不整形である。主軸方位 N-16° -E、検出面の標高は約 35.65m である。長軸約 1.1m、短軸 0.8m、深さ 0.55m を測る。断面形状は逆台形で段落ちを有する。

埋土は 5 層に分層でき、上層が暗オリーブ極細砂～シルトとオリーブ褐極細砂～シルト、下層が黄褐極細砂～シルトと灰オリーブ極細砂～シルト、黄褐極細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

##### 2 - S K 15 (図 21)

第 2 調査区の南側で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、主軸方位 N-69° -E、検出面の標高は約 35.7m である。長径約 0.95m、短径約 0.7m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、黄褐極細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

##### 2 - S K 23 (図 21)

第 2 調査区の中央で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、主軸方位 N-71° -W、検出面の標高は約 35.65m である。長径約 1.1m、短径約 0.85m、深さ約 0.15m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、暗灰黄極細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

##### 2 - S K 32 (図 21)

第 2 調査区の中央西側で検出した土坑である。平面形状は不整形で、調査区外へと延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-81° -W、検出面の標高は約 35.7m である。長軸約 1.2m 以上、短軸約 1.4m、深さ約 0.6m を測る。断面形状は椀状である。

埋土は 5 層に分層でき、上層がにぶい黄褐極細砂～シルトと灰黄褐極細砂～シルト、中層が褐灰極細砂～シルトと灰褐極細砂～シルト、下層がにぶい黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

##### 2 - S K 54 (図 21・23)

第 2 調査区の北側で検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形を呈し、主軸方位 N-35° -W、検出面の標高は約 35.5m である。長辺約 1.5m、短辺約 1.0m、深さ約 0.3m を測る。断面形状は方形である。

埋土は 2 層に分層でき、上層が地山ブロック土を含む灰黄褐細砂、下層が黒褐極細砂～シルトである。

須恵器高杯 (17) が出土した。図示した遺物の他に、須恵器高杯片、土師器高杯片が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代後期後半～末、TK43～209 併行期と考えられる。

##### 2 - S K 56 (図 21)

第 2 調査区の北側で検出した土坑である。平面形状は不整形で、主軸方位 N-20° -E、検出面の標高は約 35.5m である。長軸約 1.8m、短軸約 0.8m、深さ約 0.4m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は 2 層に分層でき、上層が褐灰極細砂～シルト、下層が黄褐極細砂～シルトである。

遺物は土師器片が出土したが、細片であるため、時期は不明である。

##### 2 - S K 57 (図 21)

第 2 調査区の北側で検出した土坑である。平面形状は隅丸方形を呈し、主軸方位 N-1° -E、検出面の標高は約 35.55m である。長辺約 0.7m、短辺約 0.5m、深さ約 0.3m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は 2 層に分層でき、上層が褐灰極細砂～シルト、下層が暗灰黄極細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

#### 2-S K 27 (図 22)

第2調査区の中央西側で検出した土坑である。平面形状は楕円形で、調査区外へ延びる。主軸方位 N-73° -W、検出面の標高は約 35.7m である。長径約 2.3m 以上、短径約 1.5m、深さ約 0.65m を測る。断面形状は碗状を呈する。

埋土は3層に分層でき、上層が灰黄褐極細砂～シルト、中層が褐灰極細砂ブロックを含む灰黄褐極細砂～シルト、下層が灰黄褐極細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

#### 2-S K 26 (図 22)

第2調査区の中央で検出した浅い落込み状の遺構である。平面形状は不整形で、主軸方位 N-29° -W、検出面の標高は約 35.7m である。長軸約 2.3m、短軸約 2.3m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、オリーブ褐極細砂～シルトである。

遺物は製塩土器片、土師器片が出土したが、いずれも細片のため、時期は不明である。

#### 2-S K 101 (図 22)

第2調査区第2面、北側で検出した土坑である。平面形状は不整形で、調査区外へと延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-2° -E、検出面の標高は約 35.3m である。長軸約 2.2m 以上、短軸約 1.6m、深さ約 0.3m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は2層に分層でき、上層が黒褐シルト、下層が黒褐シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

#### 第15調査区(図 24)

##### (1) 竪穴建物

##### 15-竪穴 10 (図 25・26)

第15調査区北西側で検出した竪穴建物である。15-掘立2、28-竪穴3と攪乱に切られる。平面形状は方形を呈すると考えられる。主軸方位 N-90° -W、検出面の標高は約 36.6m である。長辺約 5.0m、短辺約 4.5m 以上、深さ約 0.4m を測る。

埋土の掘削後、貼床面で遺構の検出を行い、支柱穴（S P 4・6）、周壁溝の一部を検出した。

埋土は、炭化物を多量に含む黒褐シルトである。遺物は埋土から須恵器杯蓋（19）・有蓋高杯蓋（20）、土師器甕（23・24・25・26）・甑（27）・高杯（21・22）が出土した。弥生土器甕（28）・底部（29）は混入資料である。その他、図示できなかったが、須恵器杯蓋片・杯身片・高杯片、土師器甕片・甑片・高杯片、製塩土器片が出土した。

貼床はにぶい黄褐細砂～シルトと褐シルトで、遺物は貼床直上から土師器甕片が出土した。貼床から白玉（S2）、製塩土器片が出土した。

周壁溝は、北側の一部では貼床直上で検出し、掘削を行った。しかし竪穴建物の南側では断面で確認したのみである。幅約 0.16 m、深さ約 0.16 m を測る。埋土は灰黄褐細砂～シルトである。

支柱穴は2基確認できた。S P 4は隅丸方形を呈する。検出面の標高は約 36.4m、長辺約 0.62m、短辺約 0.35m、深さ約 0.12m を測る。断面形は方形に段落ちである。埋土はにぶい黄褐シルトである。

S P 6は隅丸方形を呈する。検出面の標高は約 36.42m、長辺約 0.5m、短辺約 0.36 m、深さ約 0.14 m を測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は上層が暗褐シルト、下層が褐細砂～シルトである。

出土遺物と遺構の切合い関係から、古墳時代中期中葉～後半と考えられる。

##### 15-竪穴 20 (図 27・28)

第15調査区中央東側で検出した竪穴建物である。攪乱に切れ、調査区外に延びるため全体の形状は不明であるが、やや歪な長方形を呈すると考えられる。主軸方位 N-22° -W、検出面の標高は約 36.6m である。長辺約 3.2m 以上、短辺約 3.0m、深さ約 0.4m を測る。

埋土の掘削後、貼床面で遺構の検出を行い、周壁溝と支柱穴3基（S P 1・2・80）、ピット（S P



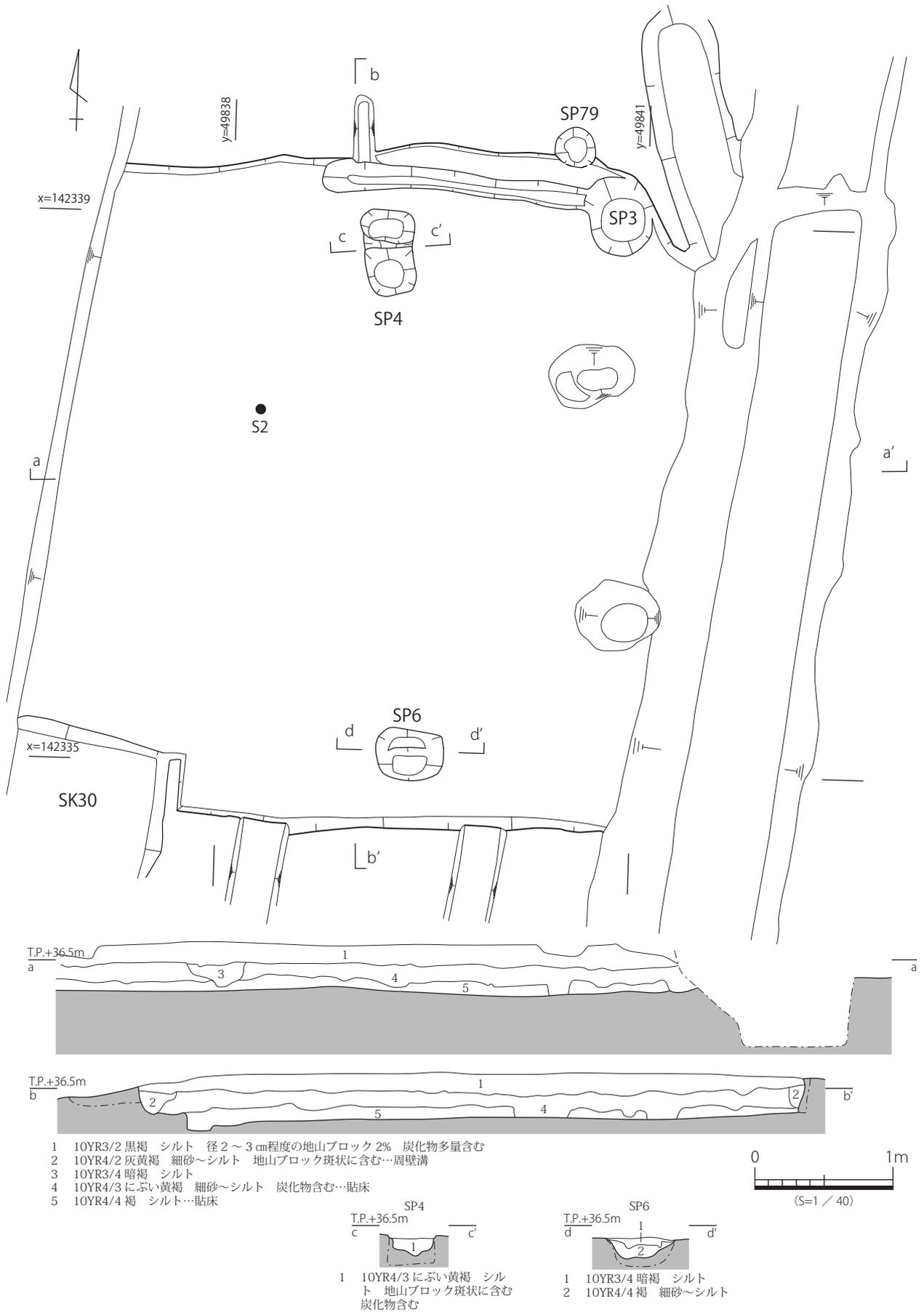


図 25 15- 竪穴 10 平・断面図

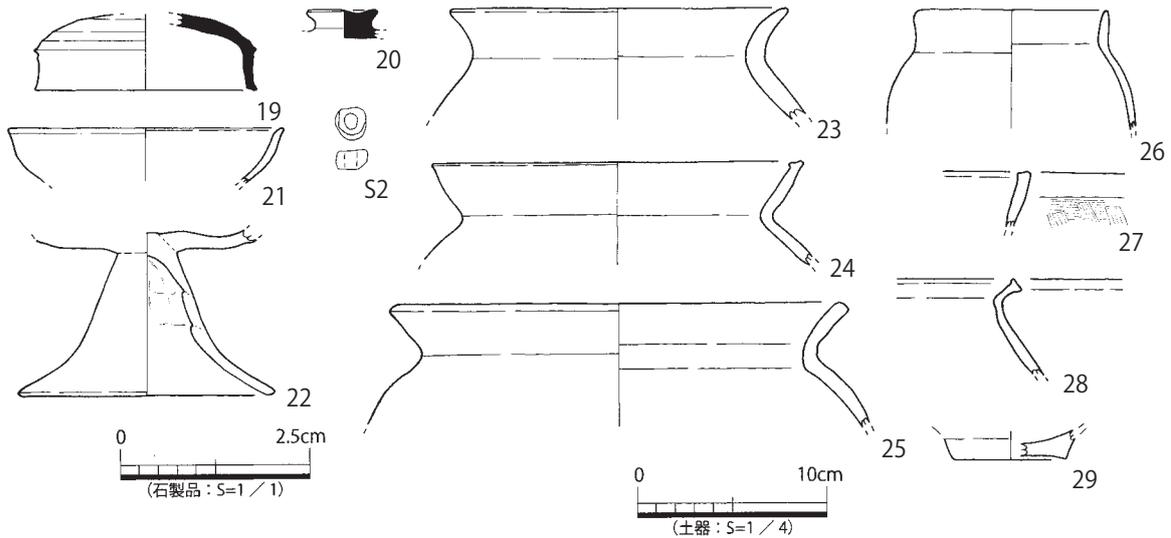


図 26 15- 竪穴 10 出土遺物実測図

31) を検出した。

埋土は褐細砂～シルトである。遺物は埋土から土師器高杯 (31)・壺 (41)、図示できなかったが須恵器杯蓋片、土師器甕片・高杯片・製塩土器片、サヌカイト剥片が出土した。

貼床は暗褐シルトで、貼床から土師器甕 (34・36・37・38)・甌 (40・42)・高杯 (32)・杯 (30) が出土した。

周壁溝は、一部で確認でき、幅約 0.2 m、深さ約 0.09 m を測る。埋土は暗褐シルトである。

支柱穴は 3 基確認できた。S P 1 は竪穴建物北西側で検出した円形の支柱穴である。検出面の標高は約 36.36m、長径約 0.36m、短径約 0.34m、深さ約 0.18m を測る。断面形は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐シルトと褐細砂～シルト、掘形が褐シルトと暗褐シルト、にぶい黄褐シルトである。

S P 2 は竪穴建物南西隅で検出した不整円形の支柱穴である。検出面の標高は約 36.32m、長径約 0.38m、短径約 0.36m、深さ約 0.18m を測る。断面形は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形がにぶい黄褐細砂～シルト、暗褐細砂～シルト、暗褐シルトである。

S P 80 は竪穴建物北東隅で検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約 36.42m、長径約 0.4m 以上、短径約 0.42m、深さ約 0.22 m を測る。断面形は方形を呈する。埋土は単層で暗褐シルトである。

S P 31 は竪穴建物中央南側で検出した不整円形

の柱穴である。検出面の標高は約 36.2m、長径約 0.62m、短径約 0.6m、深さ約 0.14m を測る。断面形は方形の段落ちである。埋土は上層が炭化物を多量に含む暗褐細砂～シルト、下層が褐細砂～シルトである。遺物は土師器甕 (33・39) が出土した。(39) は底部に穿孔があるので、甌転用甕と考えられる。

貼床掘削後、下層から炭化物と焼土層、S K 75 を検出した。埋土は炭化物を多量含む暗褐細砂～シルトと炭化物を少量含むにぶい黄褐細砂～シルトである。遺物の出土状況から、生活面が 2 面存在した可能性が考えられる。

S K 75 は 15- 竪穴 20 の下層で検出した土坑である。調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-3° -W、検出面の標高は約 36.2m である。長軸約 1.3m、短軸約 0.7m 以上、深さ 0.3m を測る。断面形状は逆台形で段落ちを有する。埋土は 4 層に分層でき、上層が黒褐シルト～粘土と黒褐シルト、中層が黒褐シルト～粘土、下層が暗褐シルト～粘土である。遺物は土師器甕 (35) が出土した。

出土遺物の年代から、古墳時代中期後半と考えられる。

15- 竪穴 40 (図 29・30)

第 15 調査区南側で検出した竪穴建物である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、方形を呈すると考えられる。主軸方位 N-5° -E、検出面の標高は約 36.65m である。長辺約 4.4m、短辺

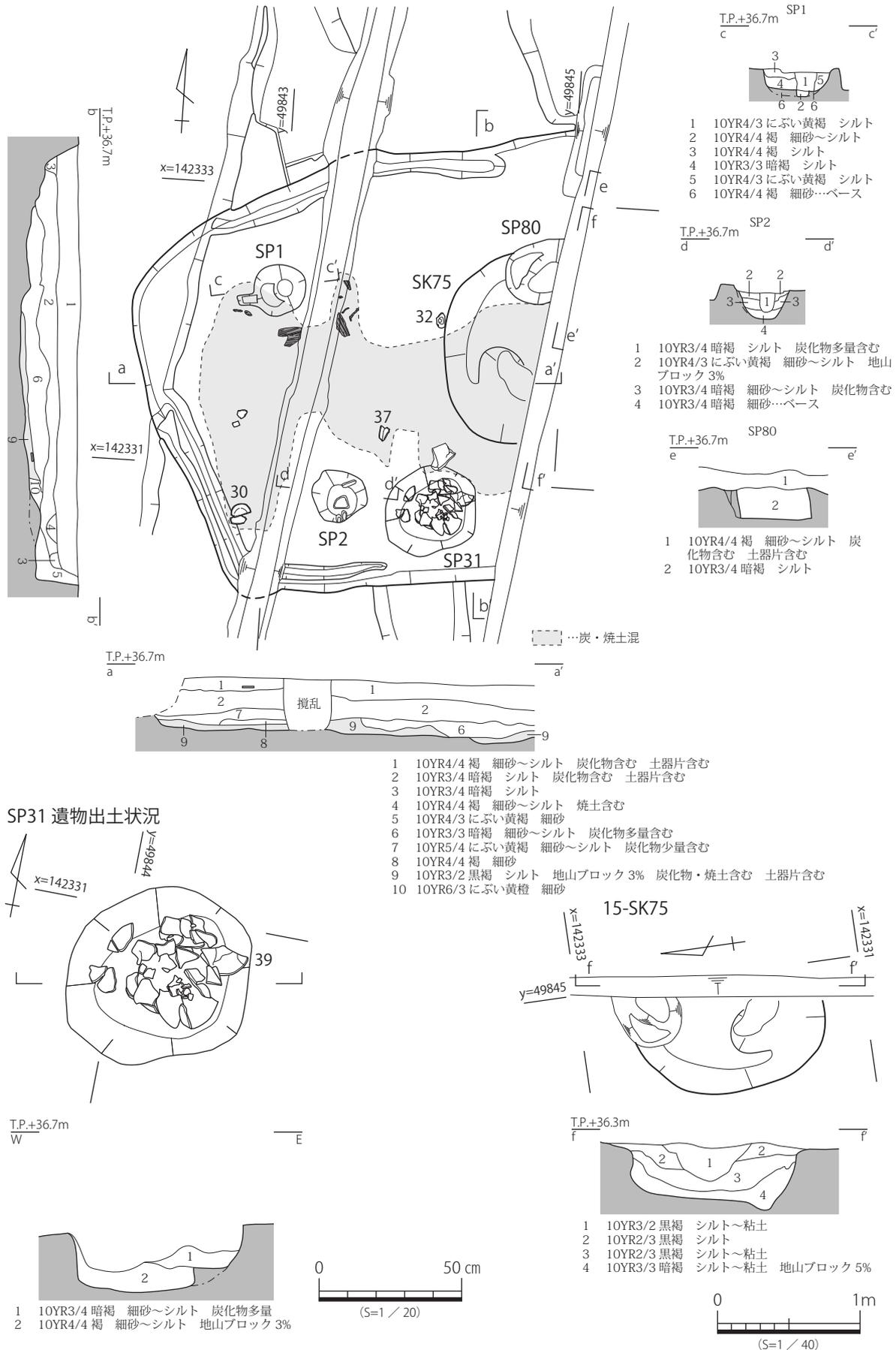


図 27 15- 竪穴 20 平・断面図

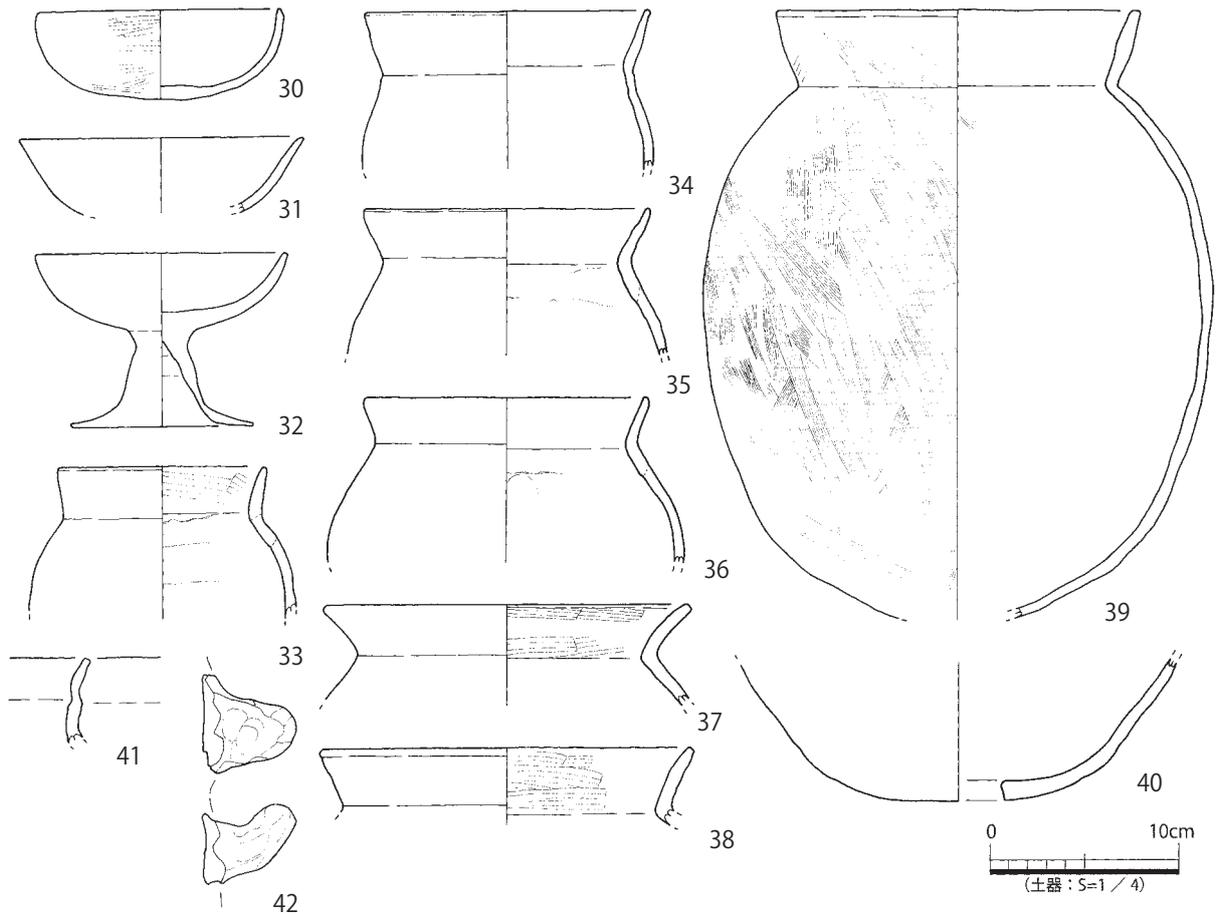


図 28 15- 竪穴 20 出土遺物実測図

約 3.2m 以上、深さ約 0.1m を測る。

埋土が浅く、調査段階で一段落として貼床面に達した。貼床面で遺構の検出を行い、周壁溝と支柱穴 2 基 (S P 1・2)、ピット (S P 81) を検出した。このうち周壁溝の深度が浅かったため、平面で検出ができず、断面でその存在を確認した。

埋土は黒褐シルトと褐細礫混じり細砂、灰黄褐礫混じりシルト、灰黄褐砂礫である。遺物は土師器甕 (45)・高杯 (44)、図示できなかったが須恵器杯身片・土師器高杯片が出土した。

貼床はにぶい黄褐細礫混じり細砂である。貼床から土師器鉢 (43)、打製石斧 (S3)、図示できなかったが土師器高杯片が出土した。

周壁溝は幅約 0.2～0.3m、深さ約 0.06m を測る。埋土は褐細砂である。

支柱穴は 2 基確認できた。S P 1 は竪穴建物南西隅で検出した円形の支柱穴である。検出面の標高は約 36.54m、直径約 0.54m、深さ約 0.17m を測る。断面形は方形に段落ちである。埋土は単層で、褐細砂である。

S P 2 は竪穴建物北西隅で検出した円形の支柱穴である。検出面の標高は約 36.54m、直径約 0.56m、深さ約 0.08m を測る。断面形は浅い皿状である。埋土は単層で、にぶい黄褐細礫混じり細砂である。

出土遺物の年代から、古墳時代中期後半と考えられる。

#### 15- 竪穴 50 (図 30・31)

第 15 調査区南東端で検出した竪穴建物と考えられる遺構である。攪乱に切られ、調査区外に延びるため全体の形状は不明であるが、不整形な形状を呈している。主軸方位 N-123°-W 検出した標高は約 36.65m である。規模は、長軸約 3.7m 以上、短軸約 3.4m 以上、深さ約 0.15m を測る。

埋土の掘削を行い、貼床面で遺構の検出を行った結果、西側攪乱際にカマドを確認した。

埋土は暗褐細礫混じりシルトである。遺物は図示できなかったが須恵器杯身片、製塩土器片が出土した。

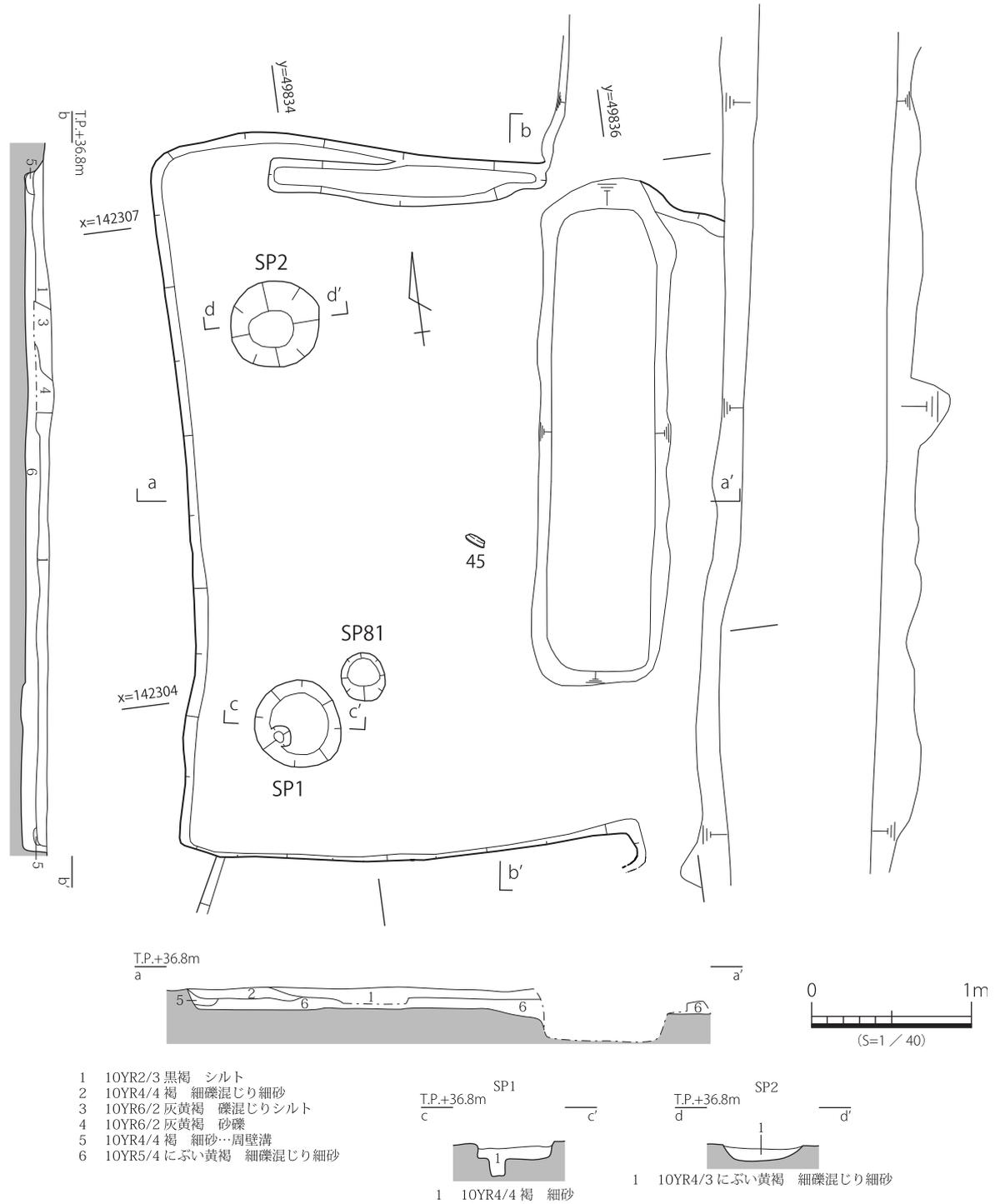


図 29 15- 竪穴 40 平・断面図

貼床は暗褐砂礫である。貼床掘削後、支柱穴と  
考えられる SP 1 と SP 2 を検出した。遺物は、床  
面直上から須恵器杯身 (47・48) ・有蓋高杯蓋 (46)  
が並んで出土した。そのうち杯身 (47) の上に  
有蓋高杯蓋 (46) が載った状態で重なって原位置をとど  
めていた。

カマドは西側に作り付けられ、北側の袖と南側

袖の一部を確認した。カマド内部中央には土師器甕  
(49) が出土した。カマド構築材が褐灰細礫混じり  
シルトである。カマド内部の堆積は炭化物を含む褐  
細礫混じり細砂である。

支柱穴は 1 基確認できた。SP 1 は竪穴建物北  
東隅で検出した円形の支柱穴である。検出面の標高  
は約 36.56m、直径約 0.20m、深さ約 0.16m を測る。

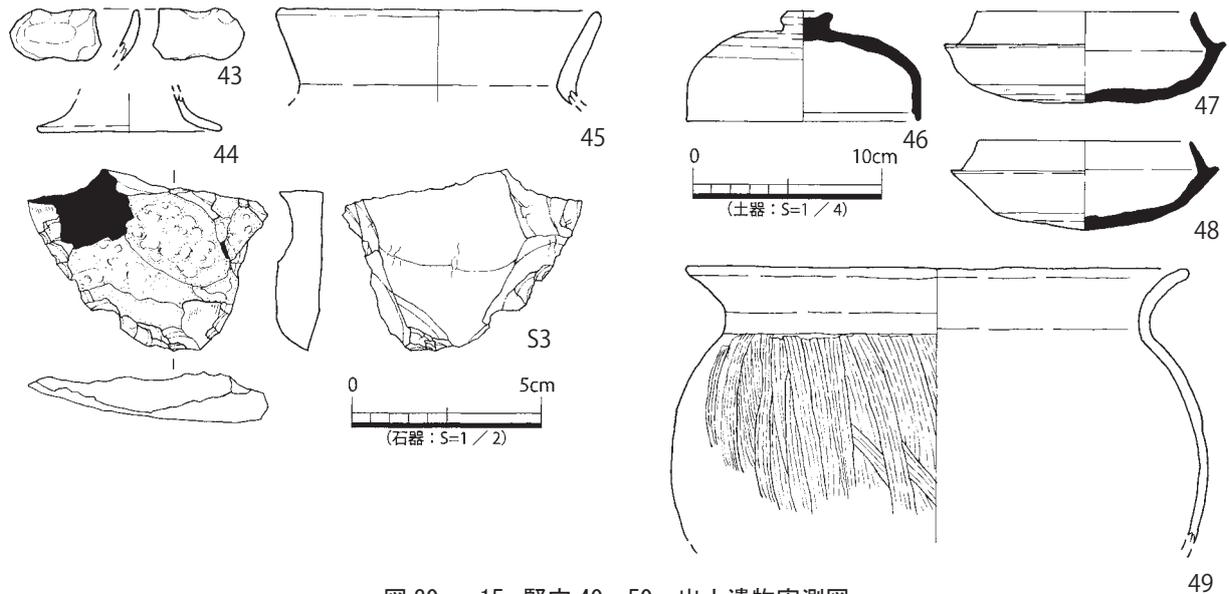


図30 15- 竪穴 40・50 出土遺物実測図

断面形はU字形を呈する。埋土は暗褐細礫混じり細砂である。

S P 2 は竪穴建物北西隅で検出した半円形のピットである。検出面の標高は約 36.56m、長軸約 0.56m、短軸約 0.16m、深さ約 0.2m を測る。断面形は椀状に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐シルト～中粒砂、掘形が褐シルト～細砂である。後述する S X 60 に伴うピットの可能性もある。

竪穴建物の平面プランが不整形であり、貼床面まで砂礫の持ち上がりが確認できることから、地震の影響が考えられる。

出土遺物の年代から、古墳時代後期前半～中頃、TK47～10 併行期と考えられる。

(2) 性格不明遺構・ピット

15 - S X 60 (図 32)

第 15 調査区南側で検出した性格不明遺構である。地震の影響を受けた竪穴建物の可能性も考えられる。

15- 竪穴 40 と 15- 掘立 1、攪乱に切られ、調査区外に延びる。平面形状は不整形である。主軸方位 N-7° -E、検出面の標高は 36.7m である。長軸約 3.2m 以上、短軸約 2.5m 以上、深さ約 0.2m を測る。

埋土は 3 層に分層でき、にぶい黄褐砂礫混じり細砂と暗褐砂礫混じり細砂、褐砂礫混じり細砂である。

遺物は図示できなかったが須恵器杯身片、土師器甑片、製塩土器片、粘土塊が出土したが、いずれも

細片のため、詳細な時期は不明である。

S P 61 は S X 60 下層で検出したピットである。攪乱に切られるため、平面形は不明である。検出面の標高は 36.56m、長軸約 0.2m、短軸約 0.06m、深さ約 0.14 を測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗褐シルトである。

15 - S P 62 (図 32)

S P 62 は S X 60 上層で検出したピットである。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、楕円形を呈すると考えられる。検出面の標高は約 36.54m、長軸約 0.46m、短軸約 0.3m、深さ約 0.1m を測る。断面形は椀状である。

埋土は 2 層に分層でき、褐細砂～シルトと暗褐シルトである。

遺物は土師質土器杯 (50) が出土した。出土遺物と遺構の埋土の状況から、古代～中世と考えられる。

(3) 掘立柱建物

15 - 掘立 2 (図 33・35)

第 15 調査区の中央北側で検出した掘立柱建物である。2 × 2 間の側柱建物で、S P 44・46・64・74・76・78・82・83 の 8 基で構成する。柱穴の一部は攪乱に切られる。主軸方位は N-10° -W、検出面の標高 36.5m である。梁行総長約 3.7m、桁行総長約 3.9m、床面積は約 14.4㎡を占める。芯芯間距離は約 1.6～2.2m である。

S P 44 は一部を攪乱に切られるが円形を呈する

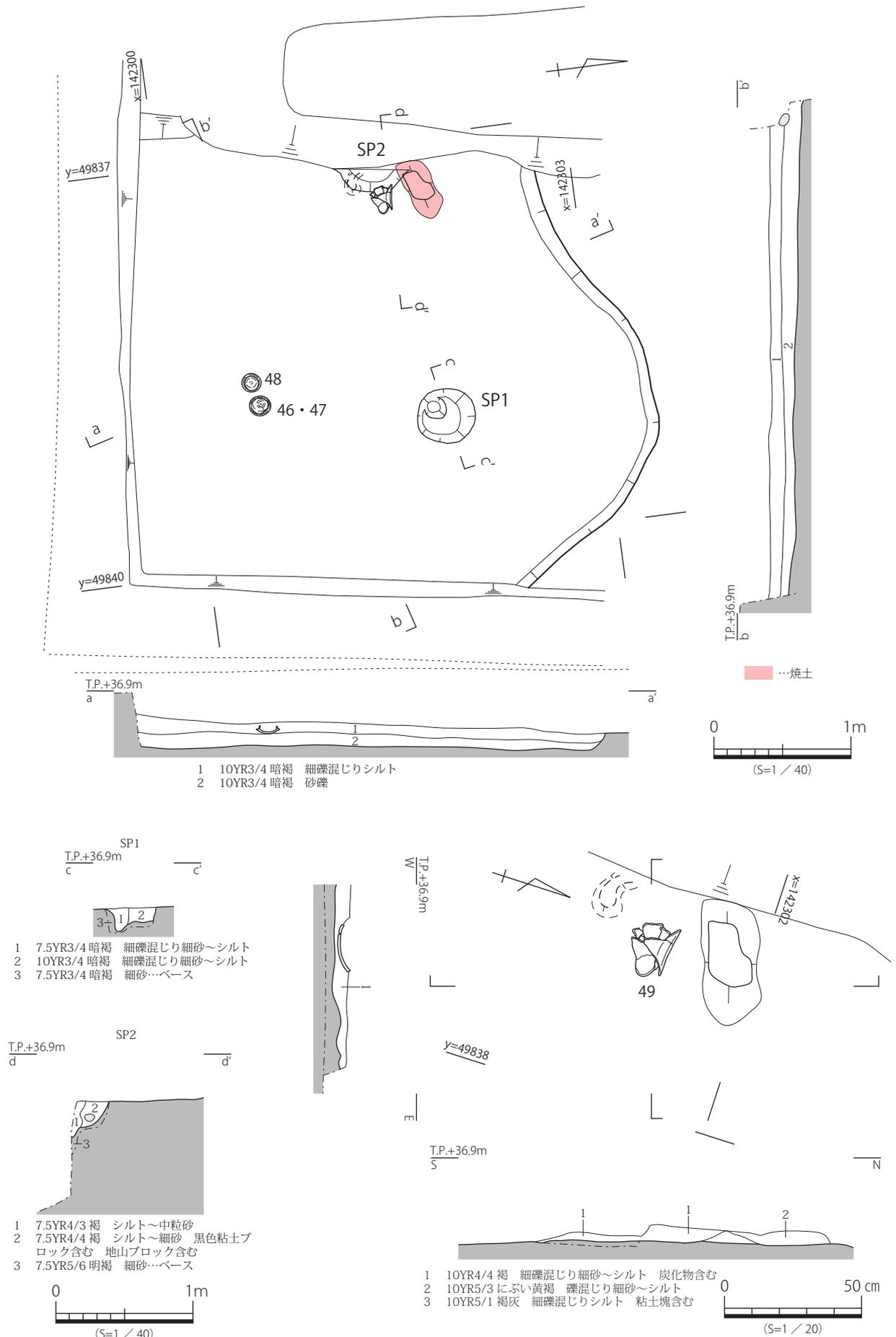


図 31 15- 竪穴 50 平・断面図

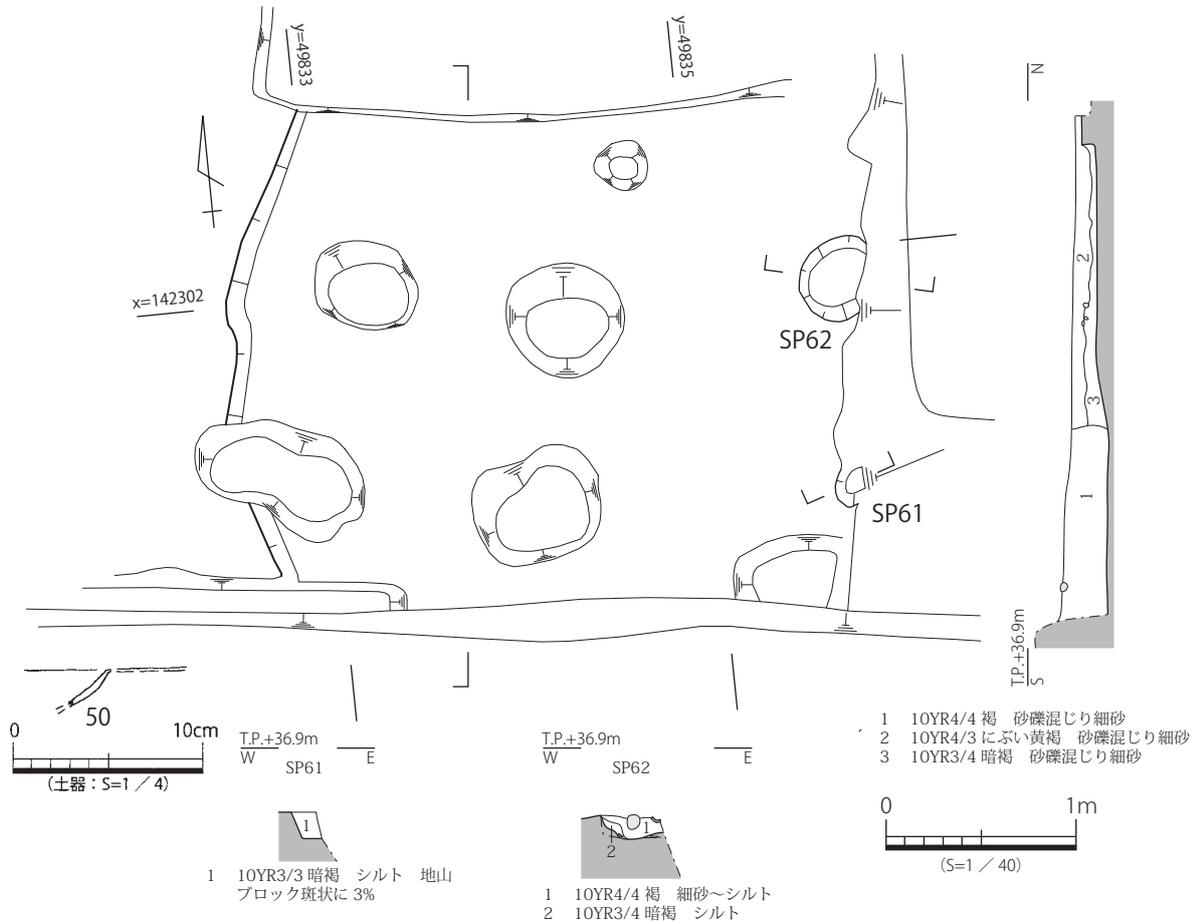


図 32 15-SX60 平・断面図及び SP62 出土遺物実測図

と考えられる。直径約 0.64 m、深さ約 0.36 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 2 層に分層でき、上層が褐シルト、下層が暗褐シルトである。

SP 46 はやや歪な円形を呈し、長径約 0.41 m、短径約 0.36 m、深さ約 0.28 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は単層で、暗褐細砂～シルトである。

SP 64 は不整形な楕円形を呈し、長径約 0.72 m、短径約 0.57 m、深さ約 0.44 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は 2 層に分層でき、上層が褐シルト、下層が暗褐シルトである。

SP 74 は不整形な円形を呈し、直径約 0.54m、深さ約 0.36 m を呈する。断面形状は方形を呈する。埋土は 5 層に分層でき、上層が褐灰シルトとにぶい黄褐シルト、中層が灰黄褐細砂～シルトとにぶい黄褐細砂、下層が灰黄褐細砂である。

SP 76 は円形を呈し、直径約 0.64 m、深さ約 0.47 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は 3 層に分層でき、黒褐細砂～シルトと地山ブロック

土を含む暗褐細砂～シルト、暗褐細砂～シルトである。

SP 78 は攪乱に切られるため不整形な形状を呈する。直軸約 0.72 m、短軸約 0.32m、深さ約 0.51 m を測る。断面形状は筒型である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形がにぶい黄褐細砂～シルトと黒褐シルト、暗褐細砂～シルトである。

SP 82 はやや歪な楕円形を呈し、長径約 0.61 m、短径約 0.44 m、深さ約 0.34 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は 3 層に分層でき、地山ブロック土を含む暗褐シルトと暗褐シルト、黒褐シルトである。

SP 83 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.52 m、深さ約 0.43 m を測る。断面形状は方形に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルトと褐シルト、掘形が暗褐シルトと黒褐シルトである。

遺物は主に SP 46 から須恵器高杯片、SP 64 から土師器高杯片、製塩土器片、SP 76 から土師器甕 (54) が出土した。

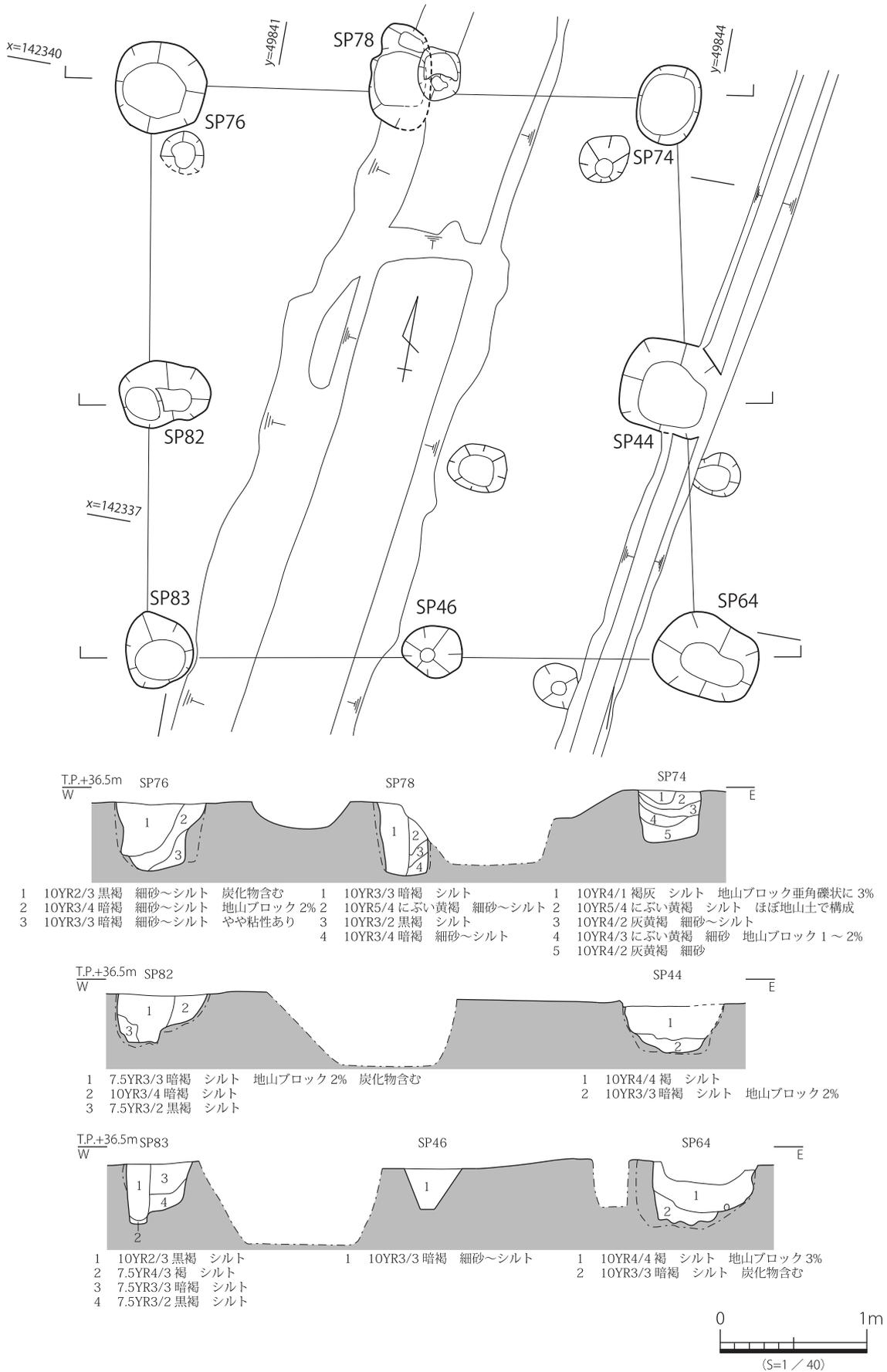


図 33 15-掘立 2 平・断面図

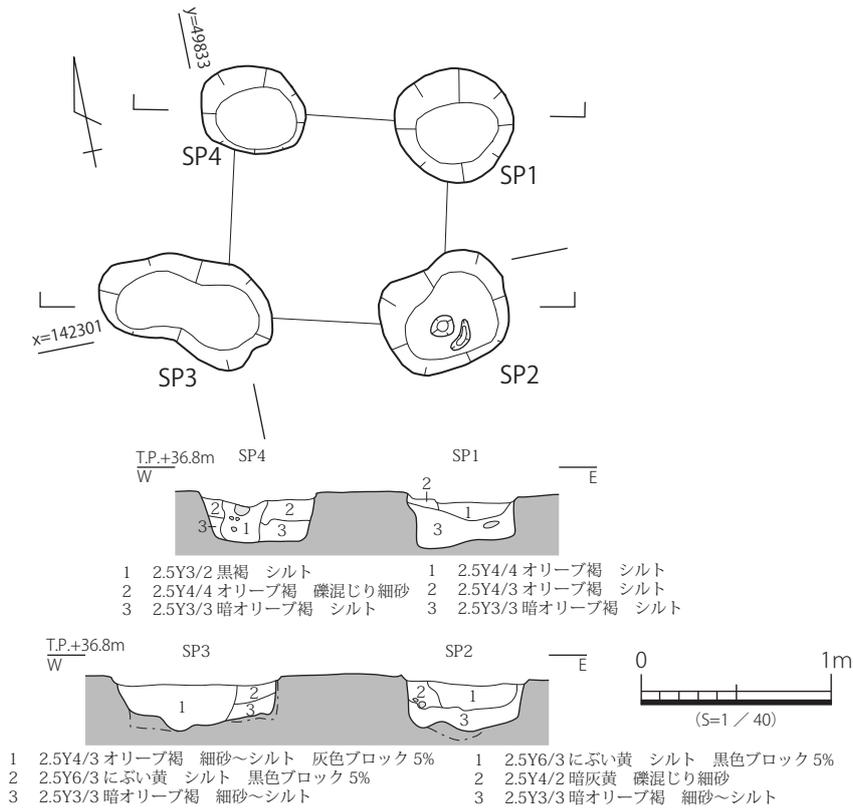


図 34 15- 掘立 1 平・断面図

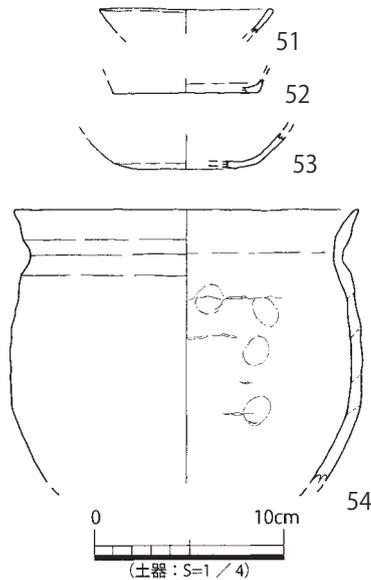


図 35 15- 掘立 1・2 出土遺物実測図

出土遺物の年代から古墳時代後期後半と考えられる。

15-掘立 1 (図 34・35)

第 15 調査区の南側で検出した掘立柱建物である。S X 60 を切る。1 × 1 間の側柱建物で、S P 1 ~ 4 で構成する。主軸方位は N-75° -W、検出面の標高は約 36.7m である。梁行総長約 1.1m、桁行総長約 1.2m、床面積は約 1.32 m<sup>2</sup> を占める。

S P 1 は円形を呈し、直径約 0.63 m、深さ約 0.29 m を測る。断面形状は方形である。埋土は上層がオリーブ褐シルト、下層が暗オリーブ褐シルトである。

S P 2 はやや歪な隅丸方形を呈し、長辺約 0.67 m、短辺約 0.58 m、深さ約 0.3 m を測る。断面形状は方形である。埋土は上層がにぶい黄シルトと暗灰黄礫混じり細砂、下層が暗オリーブ褐細砂～シルトである。

S P 3 は不整形な楕円形を呈し、長径約 0.94 m、短径約 0.53 m、深さ約 0.29 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は 3 層に分層でき、オリーブ褐細砂～シルトとにぶい黄シルト、暗オリーブ褐細砂～シルトである。

S P 4 は楕円形を呈し、長径約 0.56 m、短径約 0.46 m、深さ約 0.28 m を測る。埋土は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形がオリ

一ブ褐礫混じり細砂と暗オリーブ褐シルトである。

遺物はS P 1より土師質土器杯(51)、S P 2より杯(52)、S P 3の掘形から杯(53)出土した。

出土遺物と埋土の状況から、平安時代以降と考えられる。

#### (4) 柵列

##### 15 一柵列2 (図36)

第15査区の中央で検出した柵列と考えられる遺構である。1間×1間で、S P 17～19の3基で構成する。主軸方位はN-85°-E、検出面の標高は約36.6mである。総長約3.5m、芯芯間距離は約1.8mを測る。

S P 17は楕円形を呈し、長径約0.82m、短径約0.49m、深さ約0.27mを測る。断面形状は方形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルトと暗褐細砂、掘形が暗褐細砂～シルトである。

S P 18は隅丸方形を呈し、長辺約0.68m、短辺約0.54m、深さ約0.40mを測る。断面形状は方形に段落ちである。埋土は上層が暗褐細砂～シルト、下層が暗褐シルトである。

S P 19は隅丸方形を呈し、長辺約0.76m、短辺約0.67m、深さ約0.31mである。断面形状は方形に段落ちである。埋土は上層が褐細砂、下層が暗褐細砂である。

遺物はS P 18から須恵器杯身(55)、土師器甕(56)が出土したほか、図示できなかったが、須恵器杯蓋片・高杯片、土師器高杯片など、古墳時代後半期の遺物が出土している。

##### 15 一柵列1 (図36)

第15調査区の南側で検出した柵列と考えられる遺構である。S P 6～8の3基で構成する。主軸方位はN-76°-E、検出面の標高は約36.65mである。総長約4.6m、芯芯間距離は約2.3mを測る。

S P 6は歪な隅丸方形を呈し、長辺約0.59m、短辺約0.57m、深さ約0.28mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は単層で、暗褐礫混じり細砂である。

S P 7はやや歪な隅丸方形を呈し、長辺約0.82m、短辺約0.64m、深さ約0.11mを測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で、暗褐シルト～細砂である。

S P 8は円形を呈し、直径約0.6m、深さ約0.22mを測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形が暗褐細砂～シルトと暗褐粗砂～細砂である。

遺物はわずかながらS P 7・8から土師器片が出土しているが、細片であるため、時期は不明である。

#### (5) 土坑

##### 15-S K 25 (図38)

第15調査区の中央東側で検出した土坑である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-14°-W、検出面の標高は約36.55mである。長軸約2.0m以上、短軸約0.7m以上、深さ約0.25mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、極暗褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

##### 15-S K 26 (図38)

第15調査区の中央東側で検出した不整形な形状の土坑である。15-S D 24を切り、一部を攪乱に切られる。主軸方位N-70°-W、検出面の標高は約36.5mである。長軸約1.55m、短軸約0.9m、深さ約0.1mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、褐シルトである。

遺物は製塩土器片、土師器片が出土したが、細片のため、詳細な時期は不明である。

##### 15-S K 33 (図38)

第15調査区の中央南側で検出した不整形な形状の土坑である。攪乱に切られる。主軸方位N-5°-E、検出面の標高は約36.65mである。長軸約2.45m、短軸約1.3m以上、深さ約0.15mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、暗褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

##### 15-S K 32 (図38)

第15調査区の中央で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位N-15°-E、検出面の標高は約36.6mである。長軸2.0m、短軸1.0m、深さ0.25mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は2層に分層でき、上層が暗褐シルト、下層が黒褐シルトである。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため、詳細

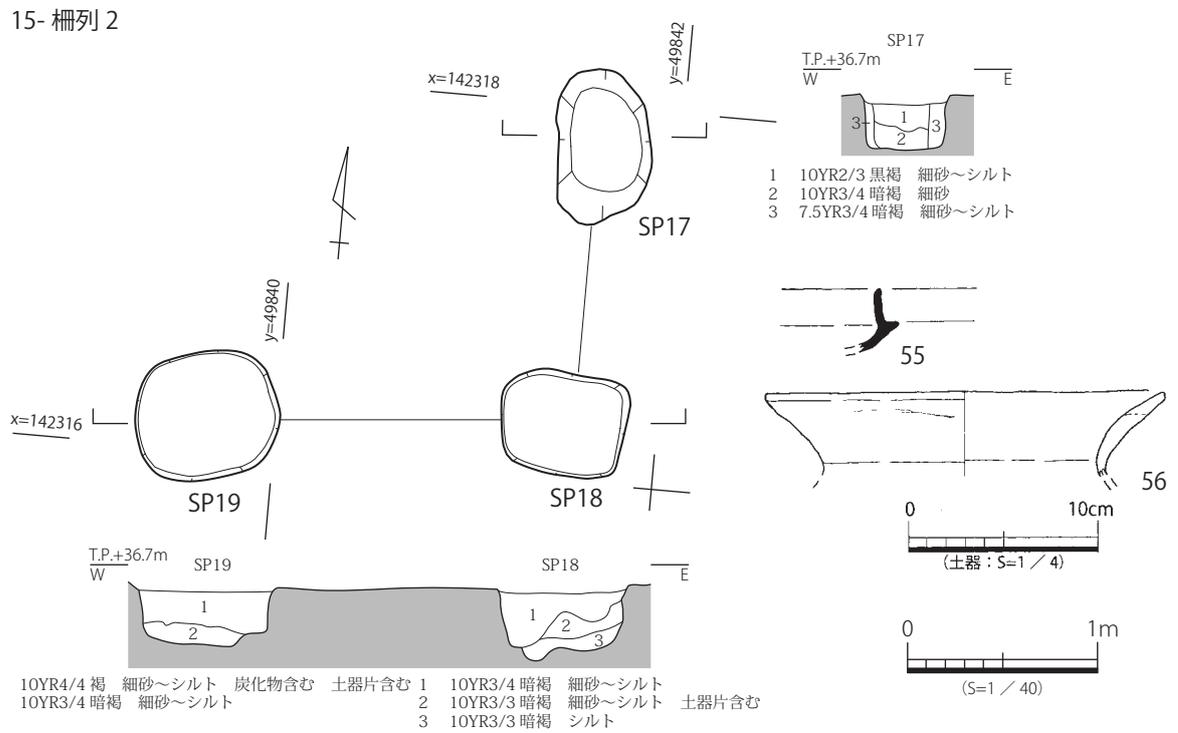
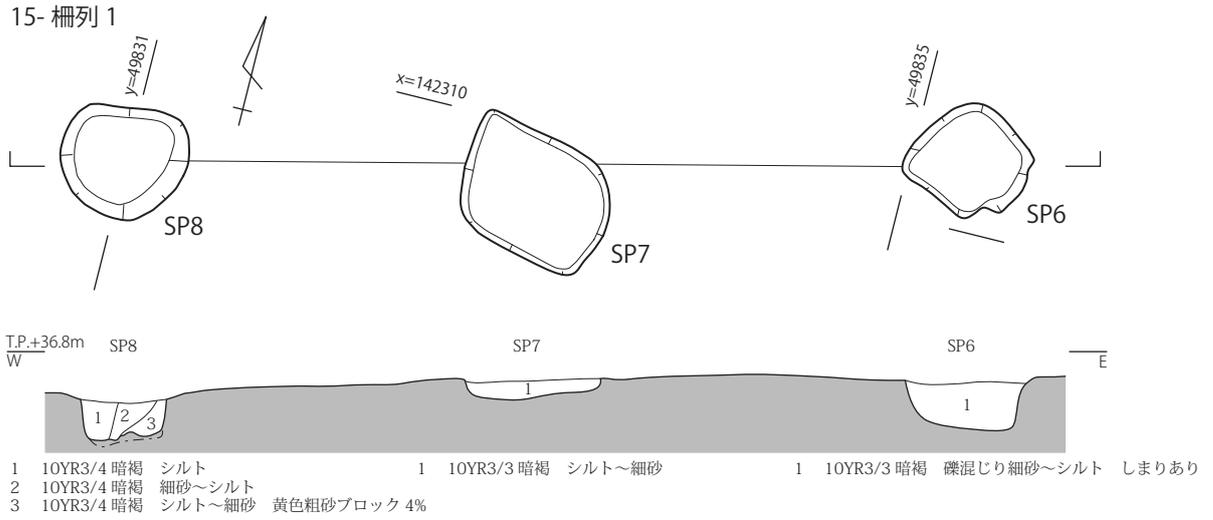


図 36 15- 柵列 1・2 平・断面図及び出土遺物実測図

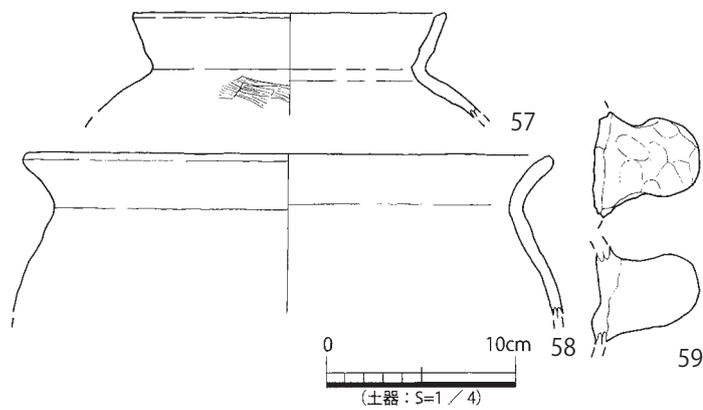


図 37 15-SK30 出土遺物実測図

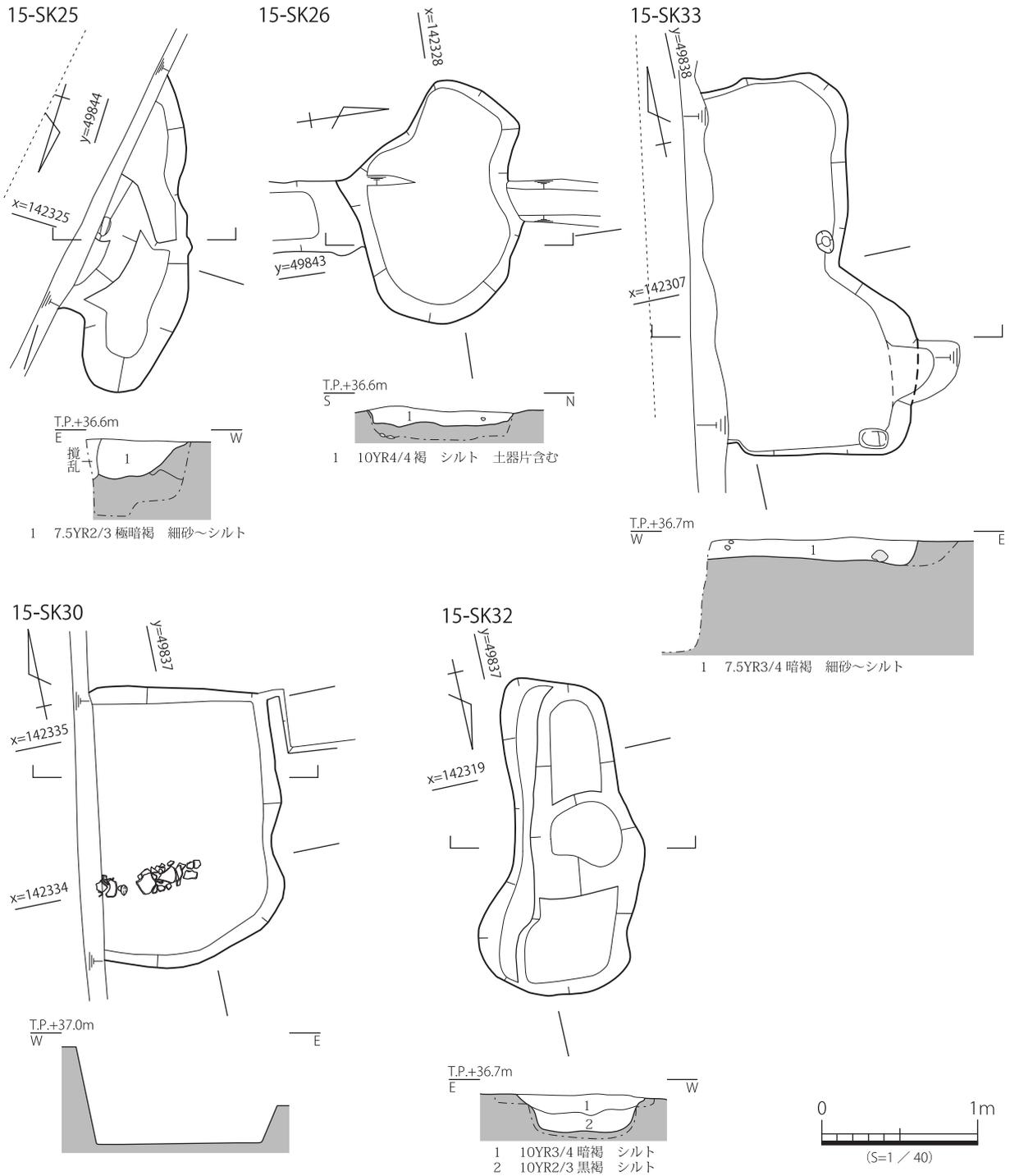


図 38 15-SK25・26・30・32・33 平・断面図

な時期は不明である。

15-SK30 (図 37・38)

第15調査区北西端で検出した方形の土坑である。28- 竪穴3の一部と考えられる。検出面の標高は約36.5mである。長辺約1.8m、短辺約1.2m以上、深さ約0.2mを測り、断面形状は逆台形である。

遺物は土師器甕(57)・鍋(58)・甑把手(59)が出土した。

(6) 溝

15-S D 22 (図 39・42)

第15調査区の北側で検出した東西方向の溝である。28- S D 22 と同一の溝である。28- S D 22 とあわせて、溝の長さは約16.8mとなる。一部を攪乱に切られる。主軸方位N-88°-E、検出面の標高は約36.4mである。第15調査区では、長さ約6.3mを検出し、幅約0.6m、深さ約0.2mを測る。断面形状は逆台形である。

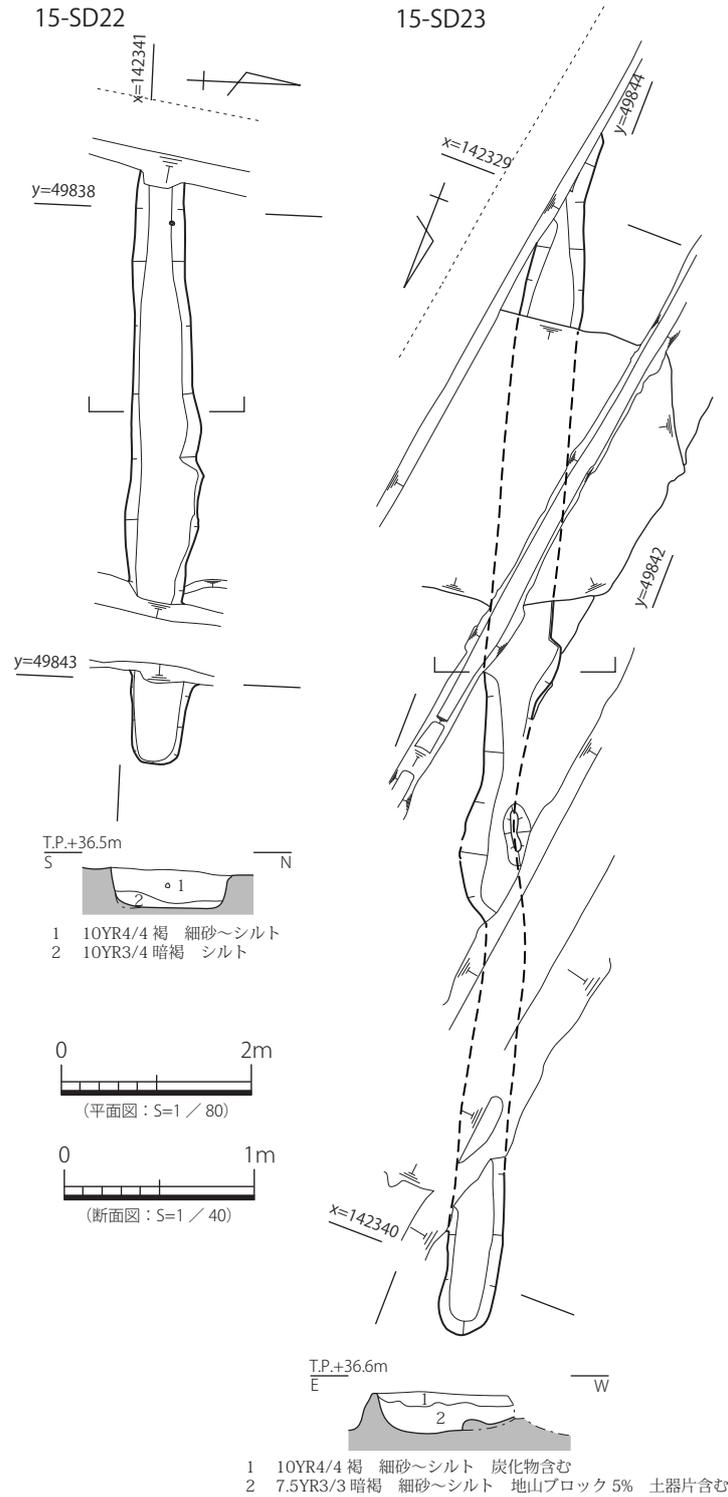


図 39 15-SD22・23 平・断面図

埋土は2層に分層でき、上層が褐細砂～シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物は土師器甕(63)が出土した。図示した遺物の他に、須恵器杯身片、土師器甕把手・高杯片が出土した。出土遺物と他の調査区の成果から、古墳時代後半期と考えられる。

15-SD23 (図 39・42)

第15調査区の北東側で検出した南北方向の溝である。溝の南側が調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-15°-W、検出面の標高は約36.5mである。長さ約12.8mを検出し、幅約0.7m、深さ約0.2mを測る。断面形状は不整形である。

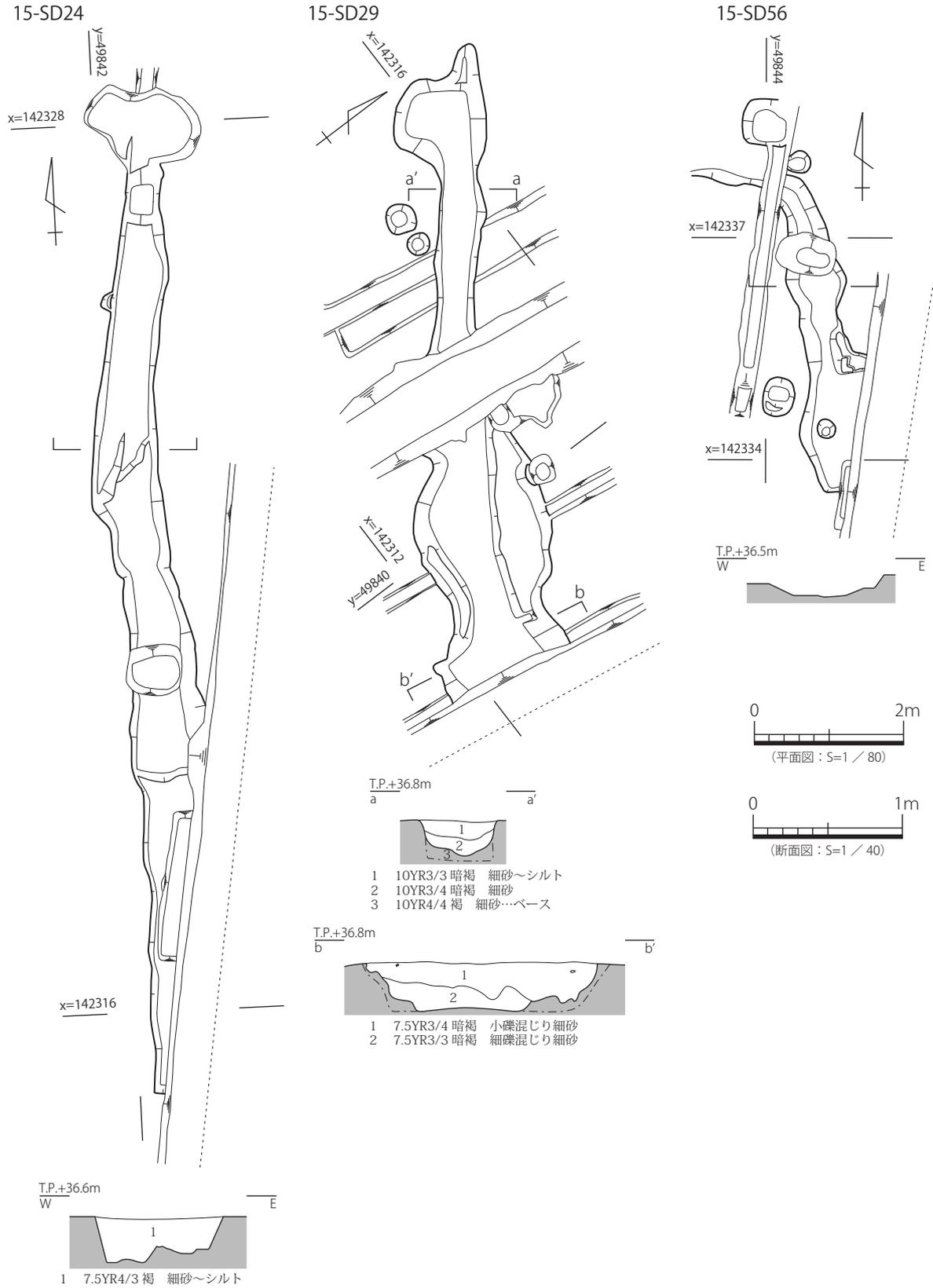


図 40 15-SD24・29・56 平・断面図

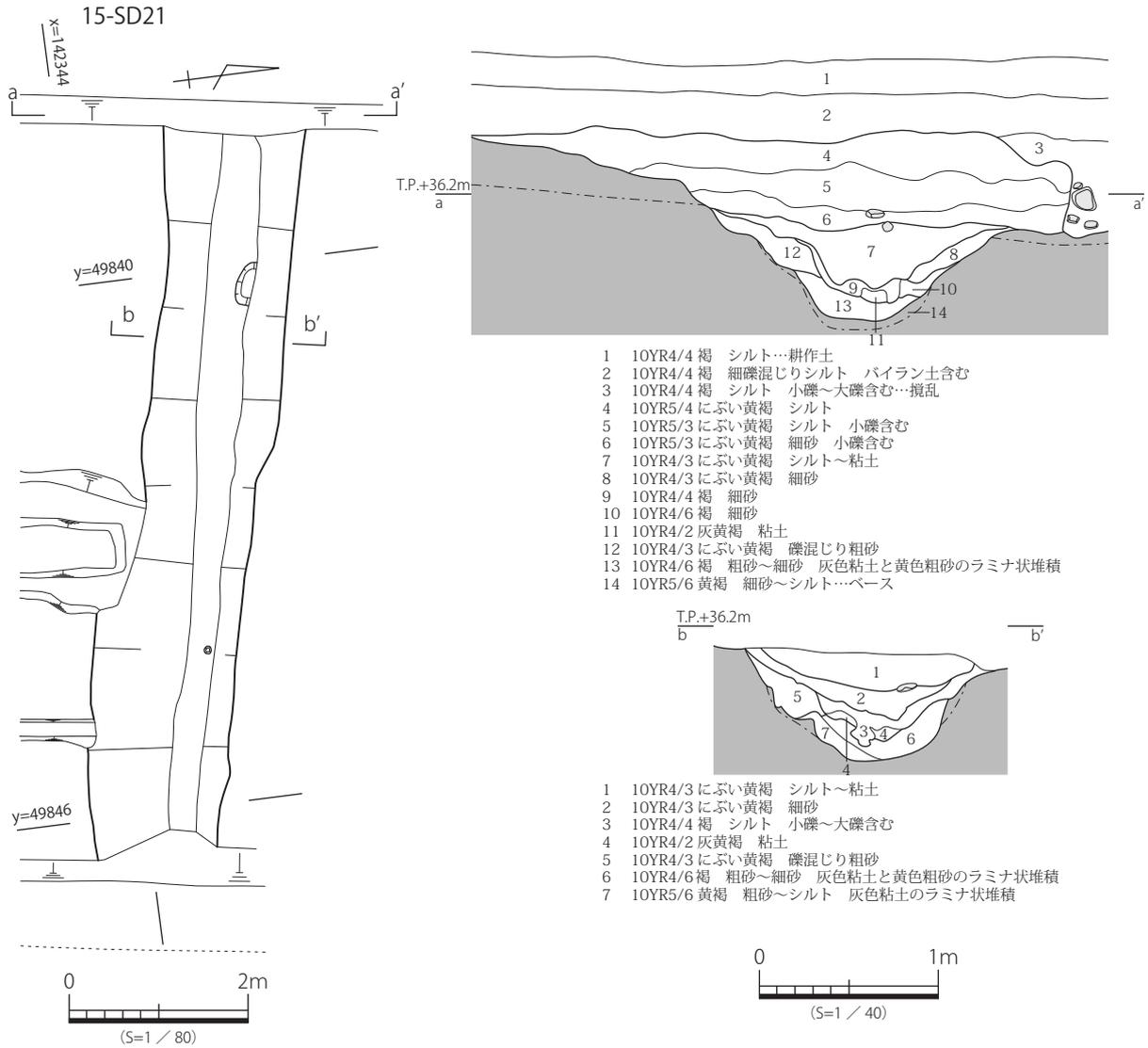


図 41 15-SD21 平・断面図

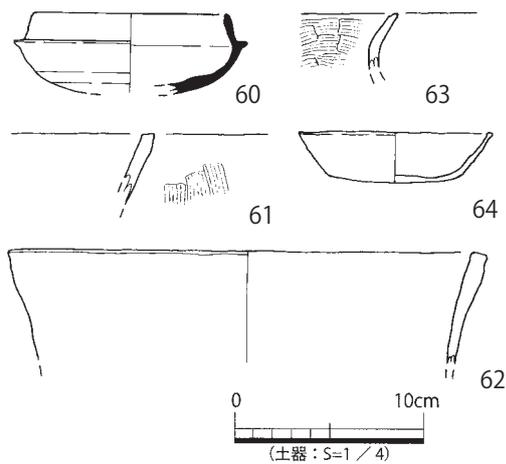


図 42 15-SD 出土遺物実測図

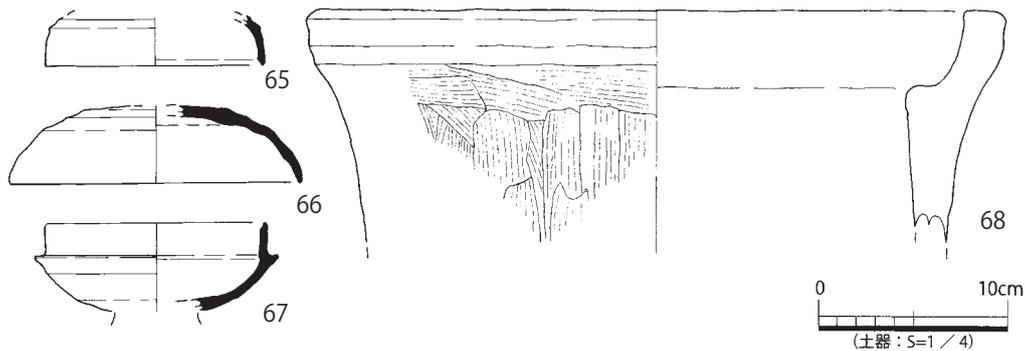


図 43 第 15 調査区 出土遺物実測図

埋土は 2 層に分層でき、上層が褐細砂～シルト、下層が暗褐細砂～シルトである。

遺物は土師器甕（61）が出土した。図示した遺物の他に製塩土器片が出土したが、遺物が細片のため、詳細な時期は不明である。

#### 15 - S D 24（図 40・42）

第 15 調査区の中央で検出した南北方向の溝である。主軸方位 N-0° -W で、南北にやや蛇行する。溝の南側が調査区外へと延びるため、全体の形状は不明である。検出面の標高は約 36.45～36.6m である。長さ約 13.0 m を検出し、幅は約 0.9m、深さ約 0.45m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で、褐細砂である。

遺物は須恵器杯身（60）が出土した。図示した遺物の他に、石器剥片（サヌカイト）が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代中期後半～後期初頭、TK23～MT15 形式併行期と考えられる。

#### 15 - S D 29（図 40）

第 15 調査区の中央で検出した東西方向の溝である。東側が調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-55° -W で東西にやや蛇行する。検出面の標高は約 36.6～36.65m である。長さ約 8.9 m を検出し、幅約 0.5～1.8m、深さ約 0.3m を測る。断面形状は U 字形から逆台形である。

埋土は 2 層に分層でき、a 断面で上層が暗褐細砂～シルト、下層が暗褐細砂、b 断面で上層が暗褐小礫混じり細砂、下層が暗褐細礫混じり細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

#### 15 - S D 56（図 40・42）

第 15 調査区の北側で検出した南北方向の溝である。溝の東側は調査区外へ延びるため、全体の形状

は不明である。15- 掘立 2 と攪乱に切られる。15- S D 23 に平行し、主軸方位 N-8° -W で南北にやや蛇行する。検出した標高は約 36.4m である。長さ約 5.5 m を検出し、幅約 0.75m、深さ約 0.15m を測る。断面形状は逆台形である。

遺物は土師器甕（62）が出土した。図示した遺物の他に、土師器高杯片、粘土塊が出土した。

#### 15 - S D 21（図 41）

第 15 調査区の北側で検出した、東西方向の溝である。14- S D 39・31- S D 1・29- S D 39 と同一の遺構である。主軸方位 N-79° -W、検出面の標高は約 36.0m である。幅約 1.4～1.6m、深さ約 0.6～1.1m を測る。断面形状は U 字形である。

埋土は a 断面の最上層が、にぶい黄褐シルトとにぶい黄褐細砂、上層がにぶい黄褐シルト～粘土、中層がにぶい黄褐細砂と褐細砂、灰黄褐粘土、にぶい黄褐礫混じり粗砂である。下層が灰色粘土と黄色粗砂のラミナ構造をもつ褐粗砂～細砂である。

b 断面では上層がにぶい黄褐シルト～粘土、中層がにぶい黄褐細砂、小礫～大礫を含む褐シルト、灰黄褐粘土、にぶい黄褐礫混じり粗砂である。下層が灰色粘土と黄色粗砂のラミナ構造をもつ黄褐粗砂～シルトである。

遺物は土師質土器杯（64）が出土した。図示した遺物の他に、土師器碗、製塩土器片、土師質土器片、粘土塊が出土した。出土遺物と周辺の調査成果から、溝の埋没時期は 13 世紀後半～14 世紀前半と判断できる。

## 第16調査区(図44・45)

## (1) 竪穴建物

## 16-竪穴1(図46～48)

第16調査区の北側で検出した竪穴建物である。主軸方位N-37°-W、検出面の標高は約36.95mである。平面形状は方形を呈する。長辺約4.0m、短辺約3.8m、深さ約0.3mを測る。

遺構の検出段階で、北側にカマドが確認できた。埋土の掘削を行い、貼床面で周壁溝と支柱穴(S P 1～4)を、貼床の掘削後にピット(S P 5・6)を検出した。

埋土は黒褐シルトと暗褐シルトである。遺物は埋土から須恵器杯身(77・78・80・81・82・83)・杯蓋(69・71・72・73・74)・高杯(86)・有蓋高杯蓋(75・76)・壺(87)・甕(89)・土師器甕(90・91)・甑(96・98・99)、土錘(95)が出土した。その他図示できなかったが須恵器杯身片・壺片・甕片などが出土した。

貼床は地山ブロックを含む暗褐シルトである。床面直上から須恵器高杯(84)・長頸壺(88)、土師器甕(93・94)、白玉(S4)、図示できなかったが土師器甑片が出土した。これら埋土や床面直上から出土した遺物は、建物中央やや東よりの土器集中箇所出土した。

周壁溝は一部で確認でき、幅約0.18m、深さ約0.06mを測る。

カマドは竪穴建物の北側中央に作り付けられ、煙道が延びる。残存規模は長さ約0.85m、幅約0.9m、煙道部の長さは約0.74mである。カマド内中央には、土師器甕(92)を用いた支脚が検出されている。カマド袖は褐砂礫混じりシルトを突き固めて構築される。カマド内部～煙道の上層はにぶい黄褐細砂～シルトで、カマド上部構造の崩落土に伴い須恵器杯蓋(70)や土師器甑把手(97)などの土器破片が出土した。支脚周辺には炭化物と焼土粒を多く含む暗褐シルト(以下、炭層)が確認でき、カマド使用時の機能面と考えられる。カマドの支脚南側では炭層を除去した段階で、被熱を受けた火床を検出した。カマドの基底面は支脚より南側は貼床を充填し、北側は5～10cm大の礫を含む基盤面を平坦に整地している。焚口付近からは、正位で須恵器杯身(79)、逆位で高杯(85)が出土した。

支柱穴は4基確認できた。S P 1は竪穴建物北東隅で検出した円形の支柱穴である。検出面の標高

は約36.74m、直径約0.47m、深さ約0.28mを測る。断面形状は方形である。埋土は2層に分層でき、上層が暗褐中礫混じりシルト、下層がにぶい黄褐細砂～シルトである。

S P 2は竪穴建物南東隅で検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.74m、長径約0.43m、短径約0.35m、深さ約0.2mを測る。断面形状はゆるいV字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形が地山ブロック斑状に含む暗褐シルトと褐シルトである。

S P 3は竪穴建物南西隅で検出した円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.72m、長径約0.48m、短径約0.45m、深さ約0.26mを測る。断面形状はやや歪なU字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形が地山ブロック土を含む暗褐シルトと黒褐シルトである。

S P 4は竪穴建物北西隅で検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.72m、長径約0.6m、短径約0.56m、深さ約0.3mを測る。断面形状は方形である。埋土は2層確認でき、上層が暗褐中礫混じりシルト、下層がにぶい黄褐細砂～シルトである。

S P 5は貼床掘削後に検出したやや歪な円形のピットである。検出面の標高は約36.64m、直径約0.38m、深さ約0.09mを測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で、黒褐細砂である。

S P 6は貼床掘削後に検出した円形のピットである。検出面の標高は約36.64m、直径約0.32m、深さ約0.12mを測る。断面形状は浅い皿状に段落ちである。埋土は上層が暗褐シルト、下層が褐シルトである。

出土遺物の年代から、古墳時代中期後半、TK23～47併行期と考えられる。

## 16-竪穴3(図49・50・55)

第16調査区北西側で検出した竪穴建物である。西側は調査区外に延び、南側は農業試験場の排水用側溝に大多数を切られた状態で検出したため、全体の形状は不明である。主軸方位N-82°-W、検出面の標高は約37.0mである。長軸約5.0m以上、短軸約4.8m以上、深さ約0.2mを測る。

攪乱のため、竪穴建物の南側は検出段階で貼床面であり、北側にのみ埋土が残っていた。埋土の掘削後、カマドと支柱穴(S P 1・4・15・16)を検

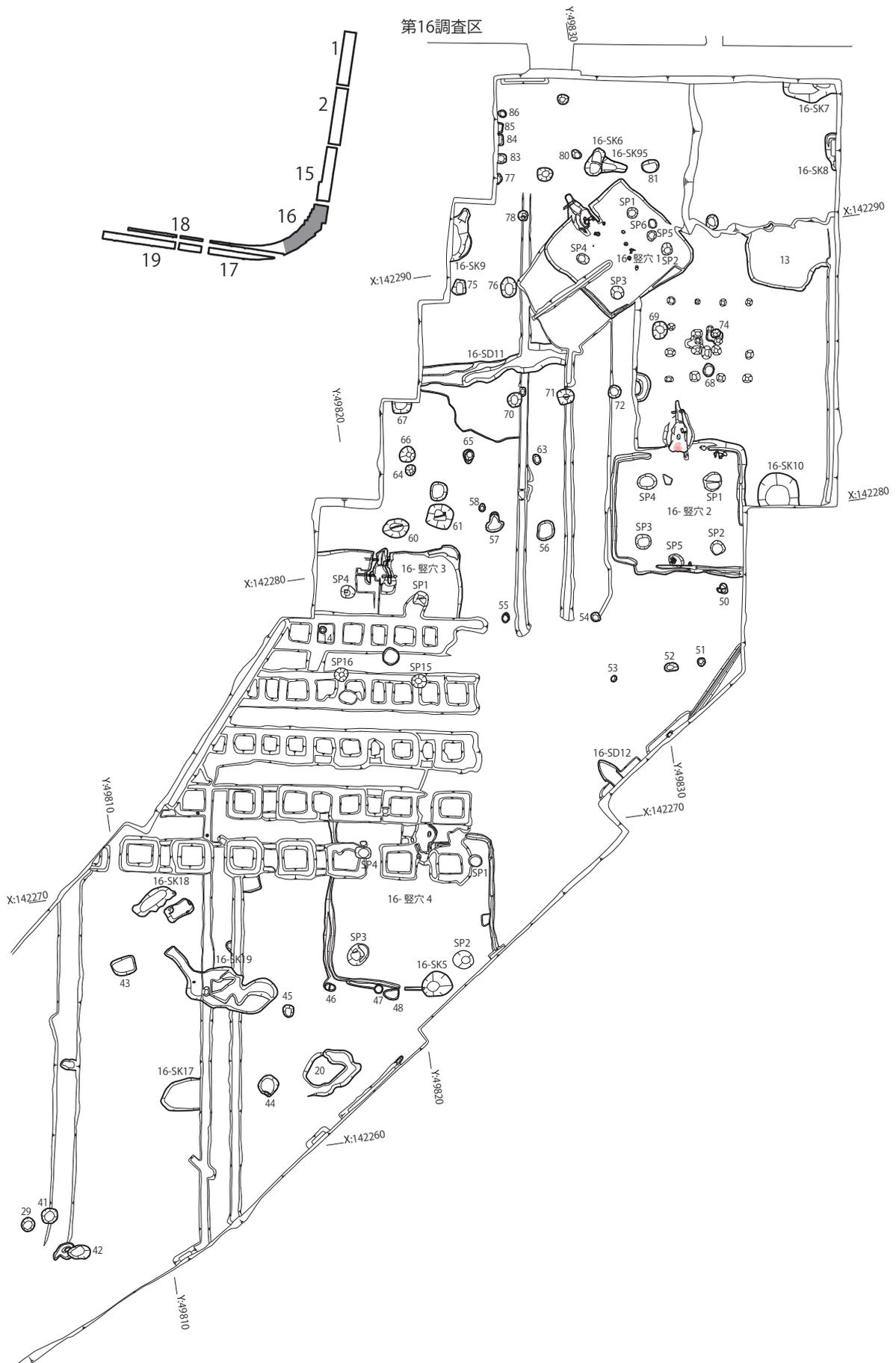


図44 第16調査区 平面図① (S=1/200)

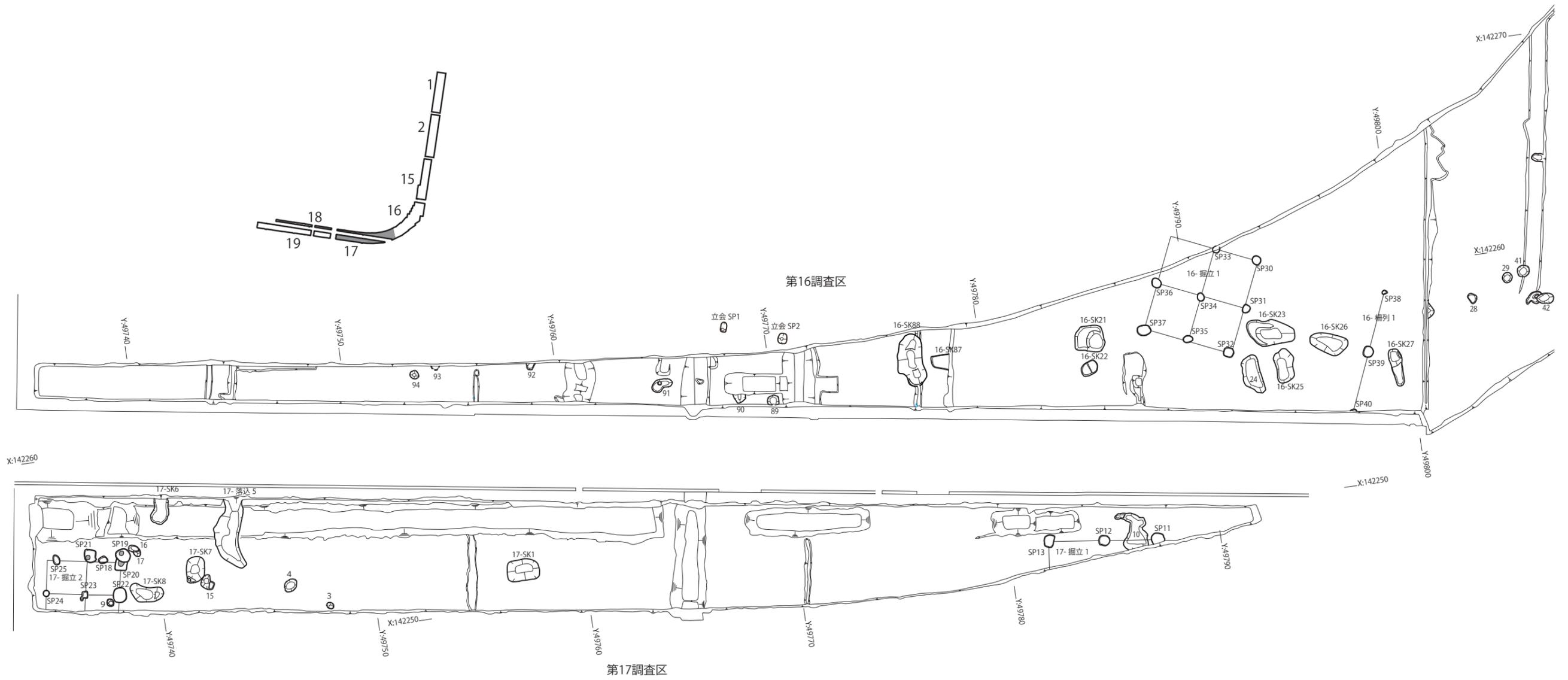


図45 第16・17調査区 平面図② (S=1/200)

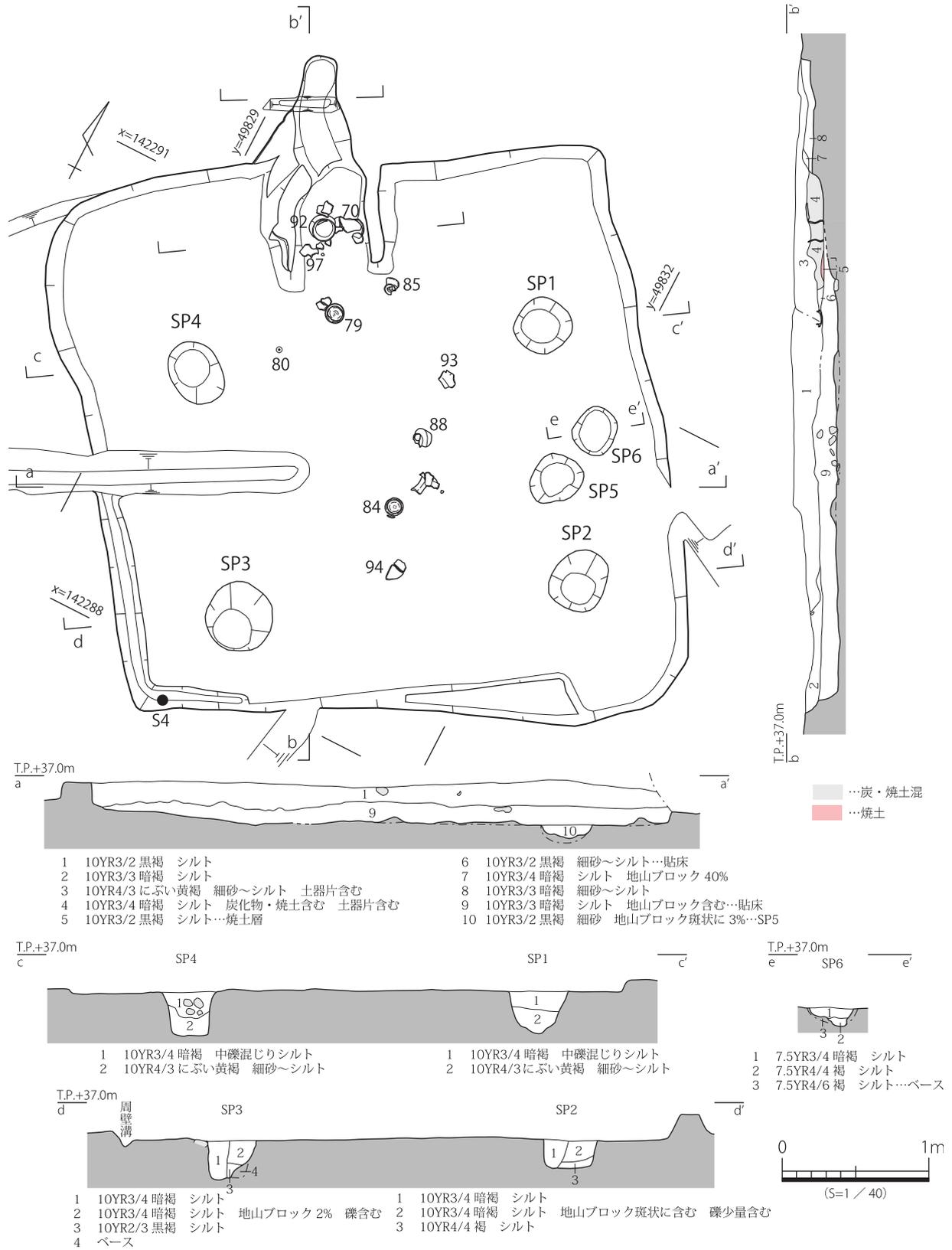


図 46 16- 竪穴 1 平・断面図

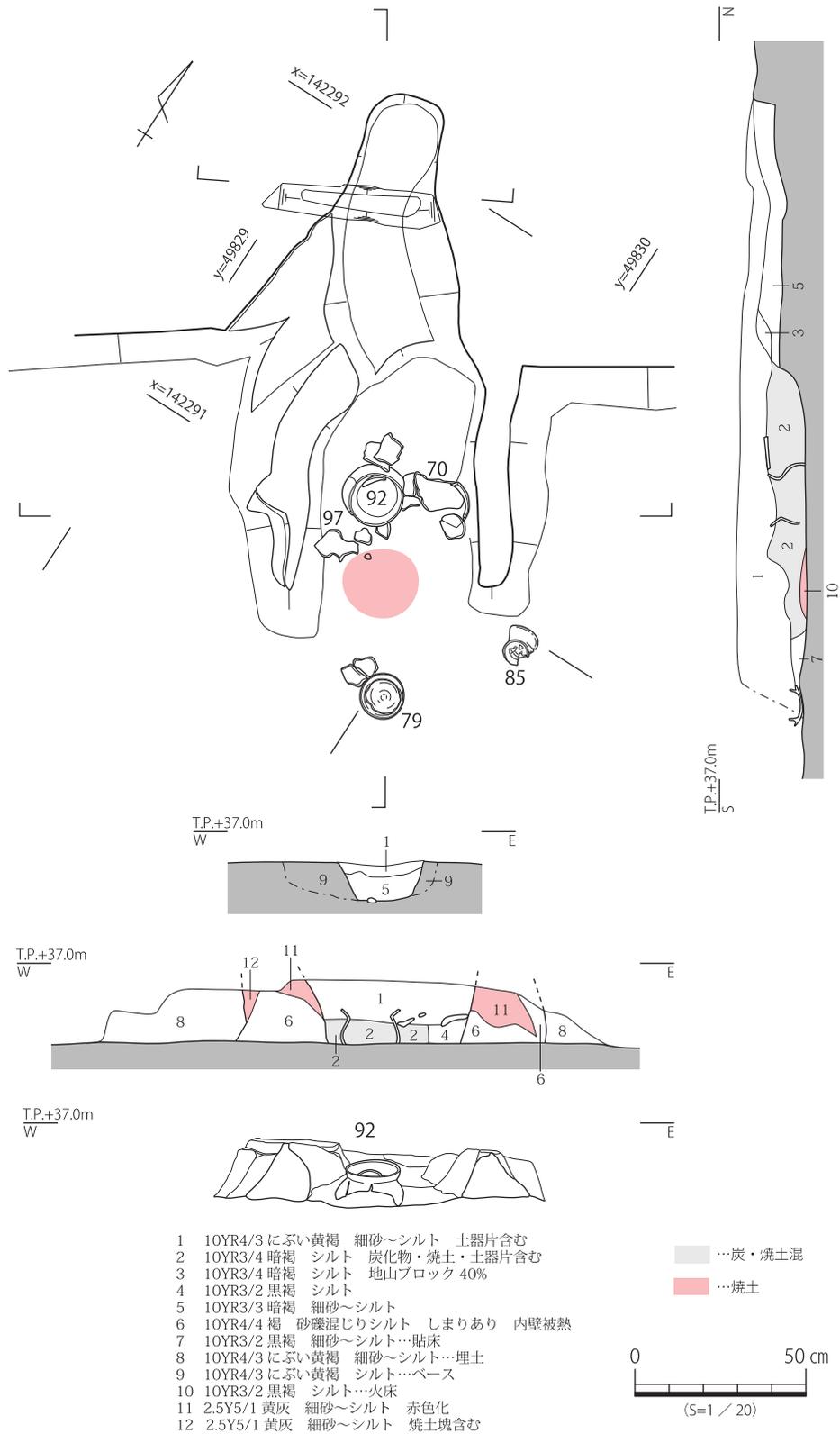


図 47 16- 竪穴1カマド 平・断面図

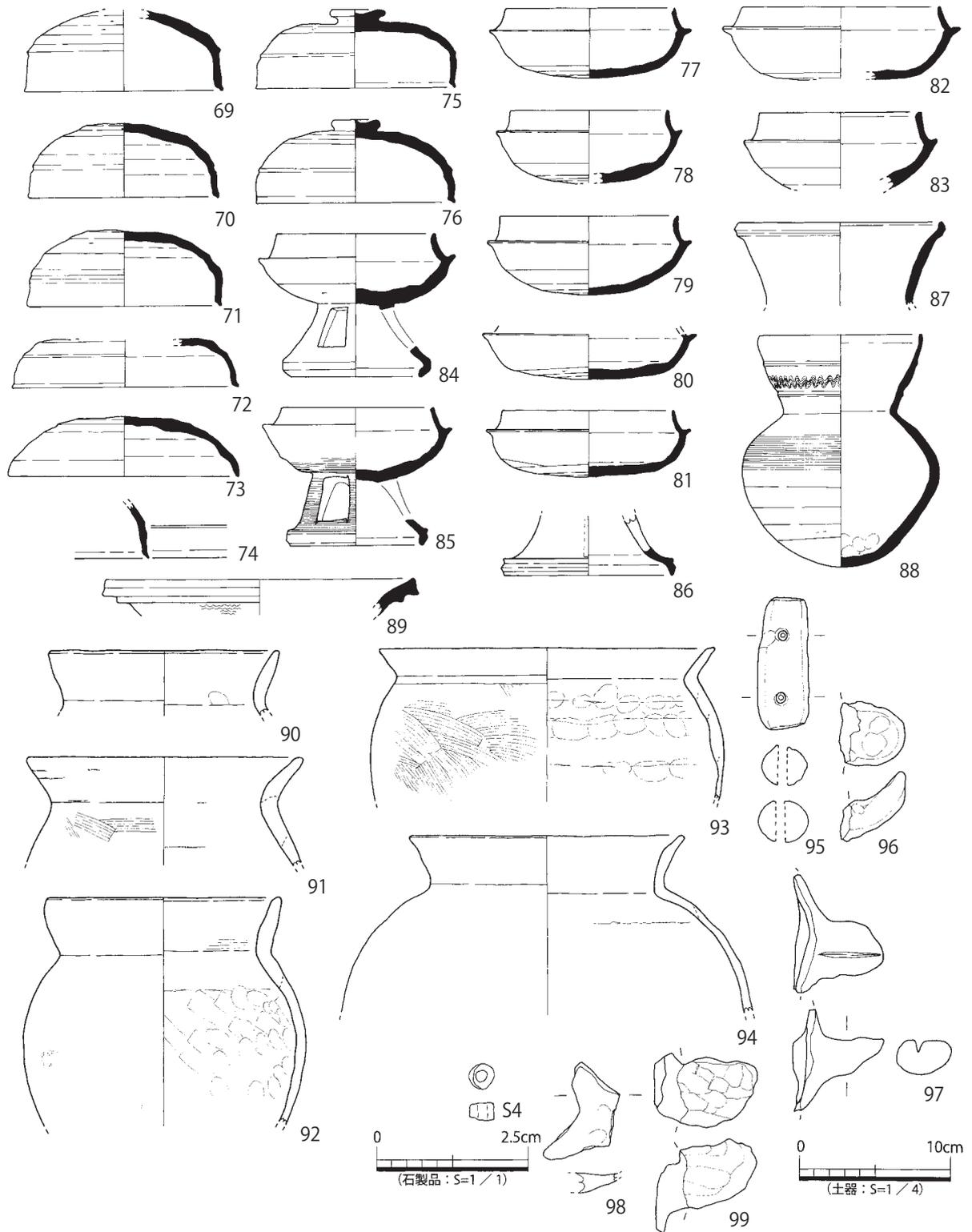


図 48 16- 竪穴 1 出土遺物実測図

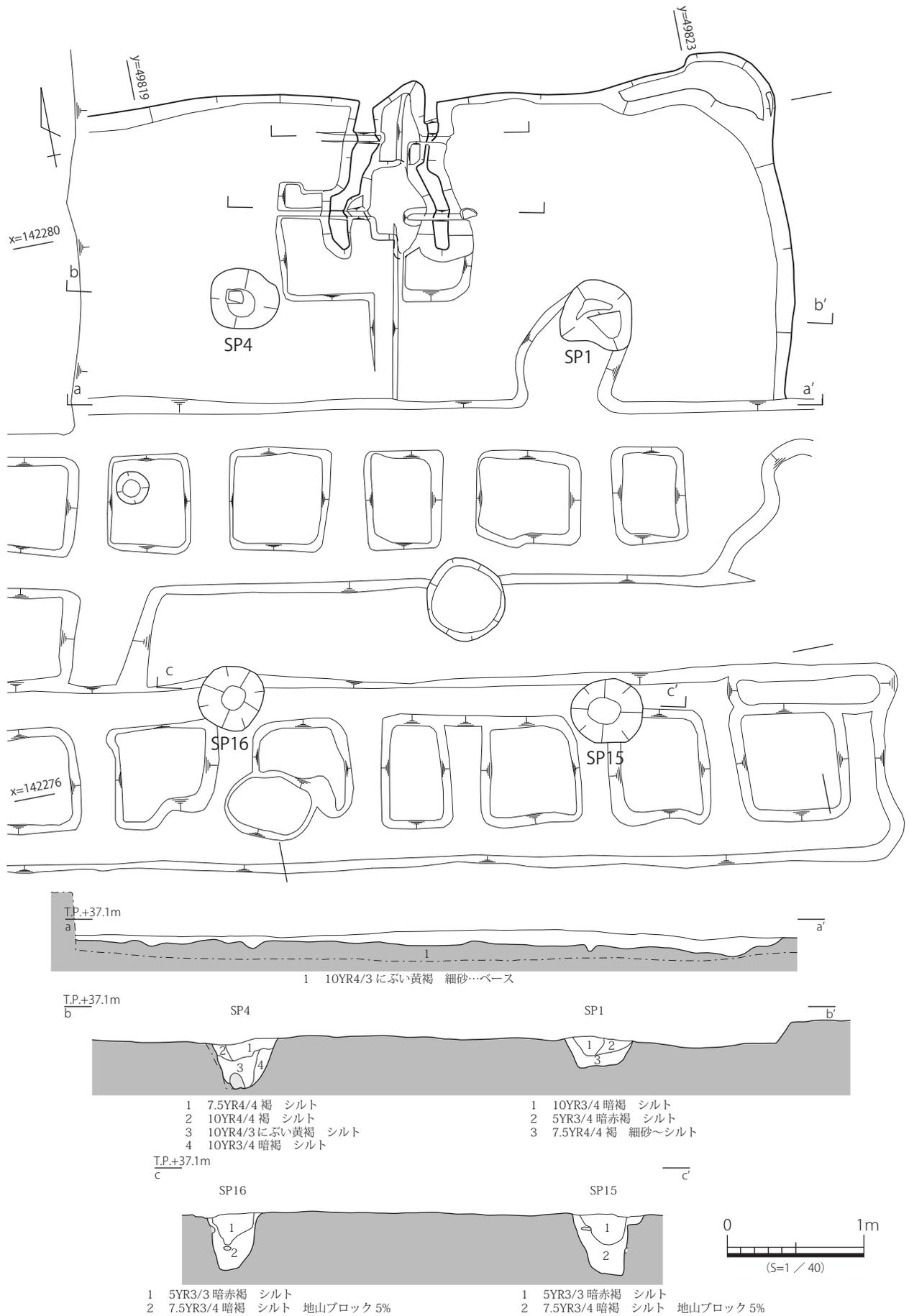


図 49 16- 竪穴 3 平・断面図

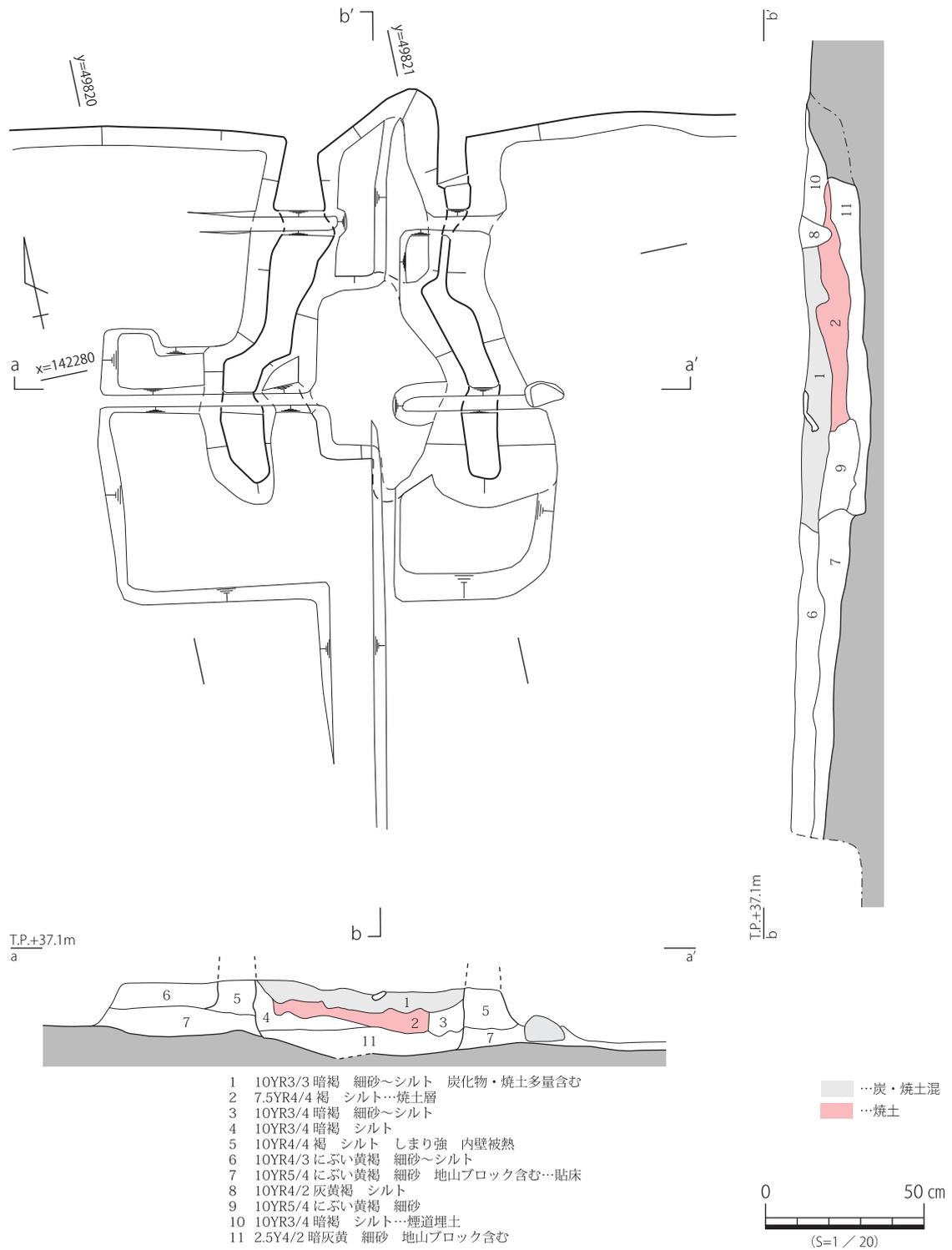


図 50 16- 竪穴3カマド 平・断面図

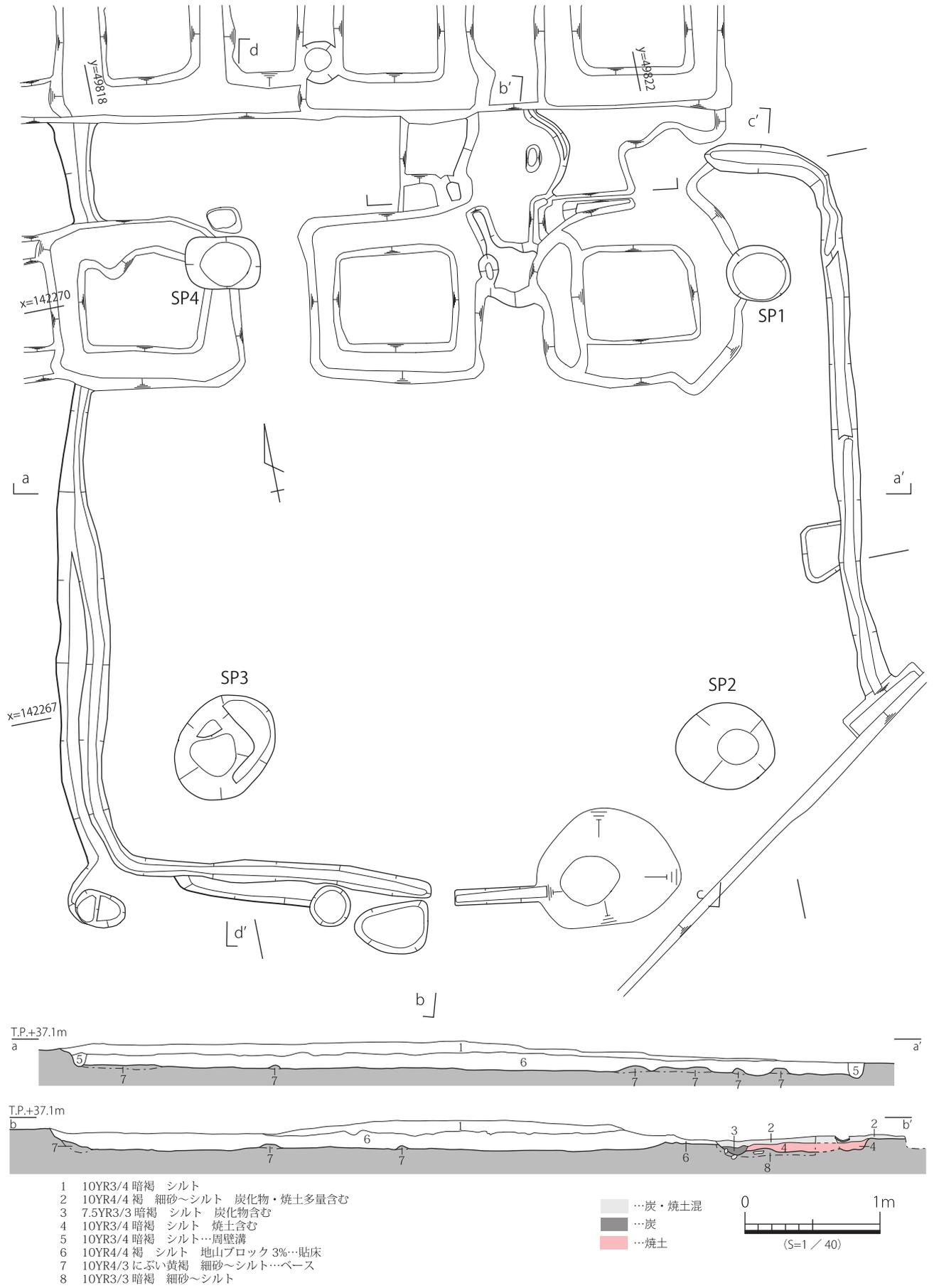


図 51 16- 竪穴 4 平・断面図

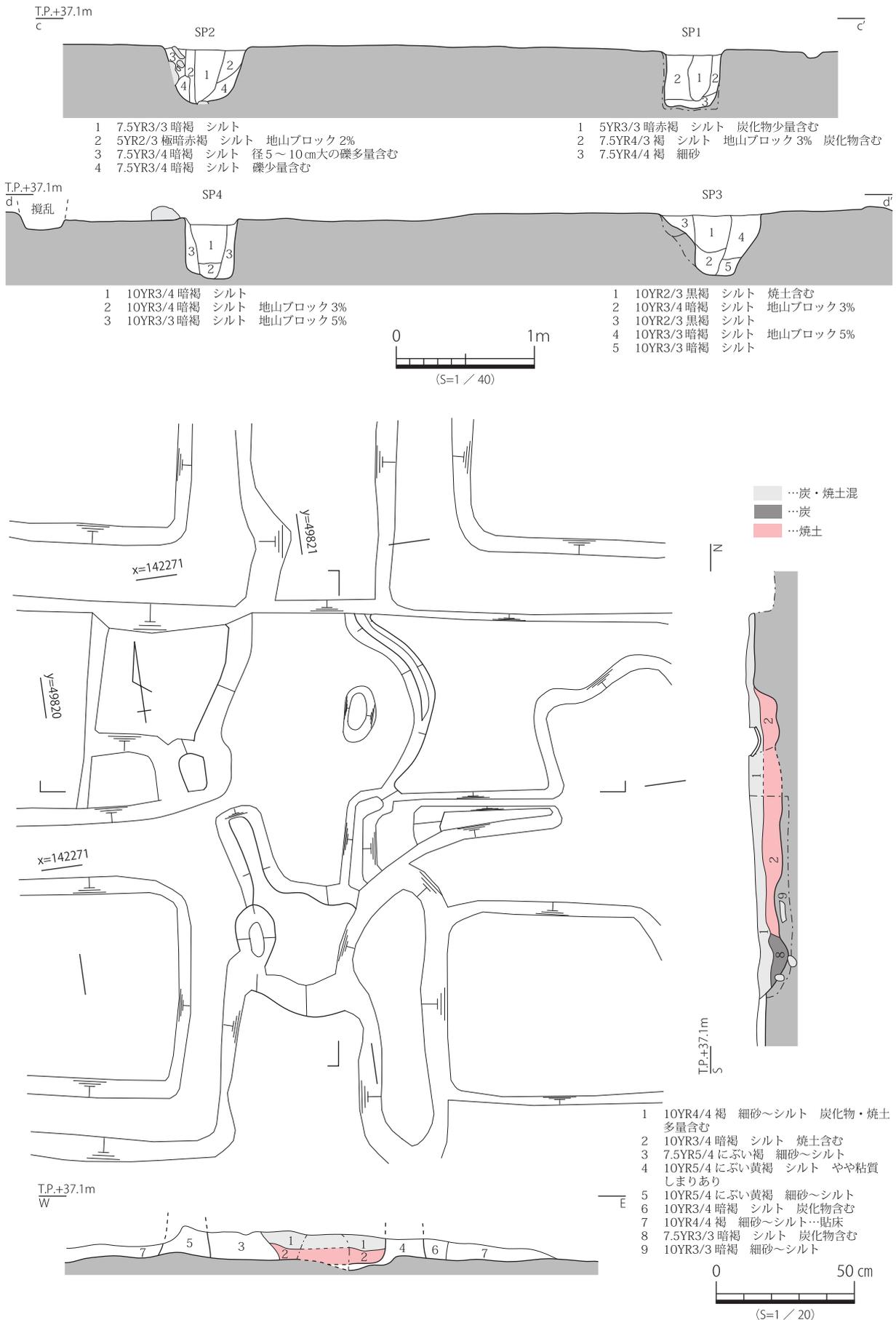


図 52 16- 竖穴4 カマド 平・断面図

出した。

埋土は暗褐細砂～シルトとにぶい黄褐細砂～シルトである。遺物は埋土から土師器甕(113・114)・鍋(115)、図示できなかったが土師器高杯片、製塩土器片が出土した。

貼床は地山ブロック土を含むにぶい黄褐細砂である。床面直上から須恵器杯蓋(108)が出土した。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられる。煙道は延びない。カマド袖は褐シルトで構築し、内壁に被熱が認められる。カマド内部には、カマドの上部構造物の崩落土と考えられる炭化物と焼土を多量に含む暗褐細砂～シルト(以下、炭層)の堆積を確認した。カマドの機能面は地山ブロック土を含む暗灰黄細砂の上面と考えられる。カマド内外から土師器高杯(110)・甕(116～118)、煙道部から土師器杯(109)・鉢(112)が出土した。

支柱穴は4基確認できた。SP1は竪穴建物北東隅で検出した不整形の支柱穴である。検出面の標高は約36.88m、長径約0.6m、短径約0.56m、深さ約0.24mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形が暗赤褐シルトと褐細砂～シルトである。

SP15は竪穴建物南東隅で検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.76m、長径約0.52m、短径約0.46m、深さ約0.42mを測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が暗赤褐シルト、暗褐シルトである。

SP16は竪穴建物南西隅で検出した円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.76m、長径約0.46m、短径約0.45m、深さ約0.41mを測る。断面形状は筒型である。埋土は上層が暗赤褐シルト、下層が暗褐シルトである。遺物はSP16から土師器高杯(111)が出土した。

SP4は竪穴建物北西隅で検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.82m、長径約0.58m、短径約0.5m、深さ約0.34mを測る。断面形状はU字形である。埋土は上層が褐シルト、下層がにぶい黄褐シルトと暗褐シルトである。

出土遺物の年代から、古墳時代中期後半、TK47併行期と考えられる。

#### 16-竪穴4(図51・55)

第16調査区中央で検出した竪穴建物である。攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状

は不明であるが、残存形状から方形を呈すると考えられる。主軸方位N-10°-E、検出面の標高は約37.1mである。長辺約5.9m、短辺約5.7m、深さ約0.2mを測る。

一部に埋土が残っており、埋土の掘削後、貼床面で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴(SP1～4)を検出した。

埋土は暗褐シルトである。遺物は埋土から鉄製品(M1・M2)、図示できなかったが土師器甕片が出土した。

貼床は地山ブロック土を含む褐シルトである。貼床から製塩土器(120)、白玉(S6)が出土した。

周壁溝は一部で確認でき、幅約0.16m、深さ約0.12mを測る。埋土は暗褐シルトである。

カマドは竪穴建物北側中央やや東寄りに作り付けられるが、攪乱の影響により、残存状態は良くない。カマド袖はにぶい黄褐シルトとにぶい黄褐細砂～シルトで構築する。カマド内部には炭化物と焼土を多量に含む褐細砂～シルトが確認でき、カマドの上部構造の崩落土と考えられる。その下層に焼土を含む暗褐シルトと炭化物を含む暗褐シルトが堆積しており、カマドの機能面と考えられる。カマドから土師器高杯(119)が出土した。

支柱穴は4基確認できた。SP1は竪穴建物北東隅で検出した円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.83m、長径約0.54m、短径約0.5m、深さ約0.38mを測る。断面形状は筒型である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗赤褐シルト、掘形が褐シルトと褐細砂である。

SP2は竪穴建物南東隅で検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.86m、長径約0.72m、短径約0.64m、深さ約0.38mを測る。断面形状はU字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形上層が極暗赤褐シルトと径5～10cm大の礫を多量含む暗褐シルト、掘形下層が暗褐シルトである。

SP3は竪穴建物南西隅で検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.94m、長径約0.84m、短径約0.66m、深さ約0.44mを測る。断面形状は不整形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が焼土を含む黒褐シルトと暗褐シルト、黒褐シルトと暗褐シルトである。

SP4は竪穴建物北西隅で検出した円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.88m、長径約

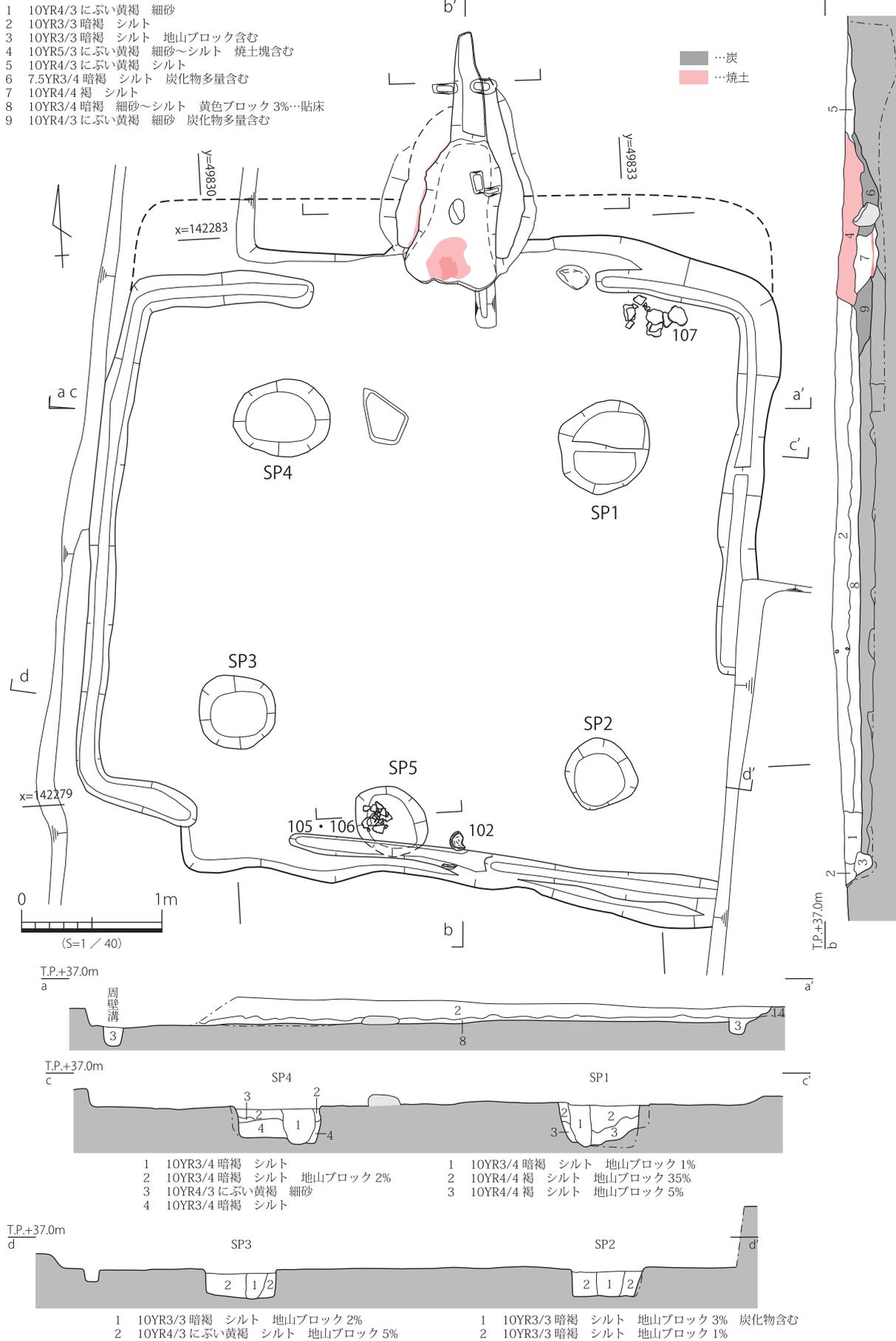


図 53 16- 竪穴 2 平・断面図

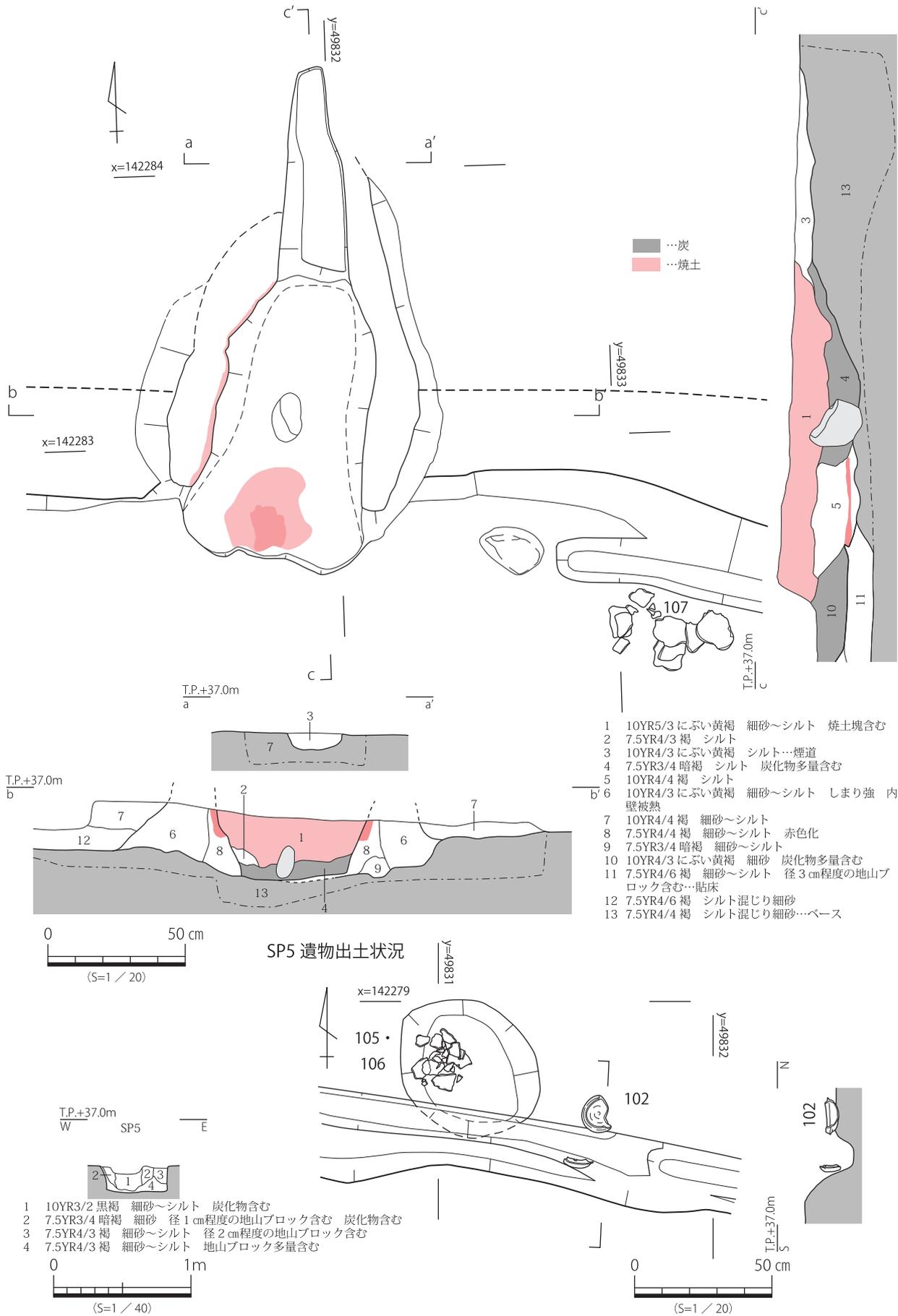


図 54 16- 竪穴2カマド 平・断面図及び SP 5 遺物出土状況

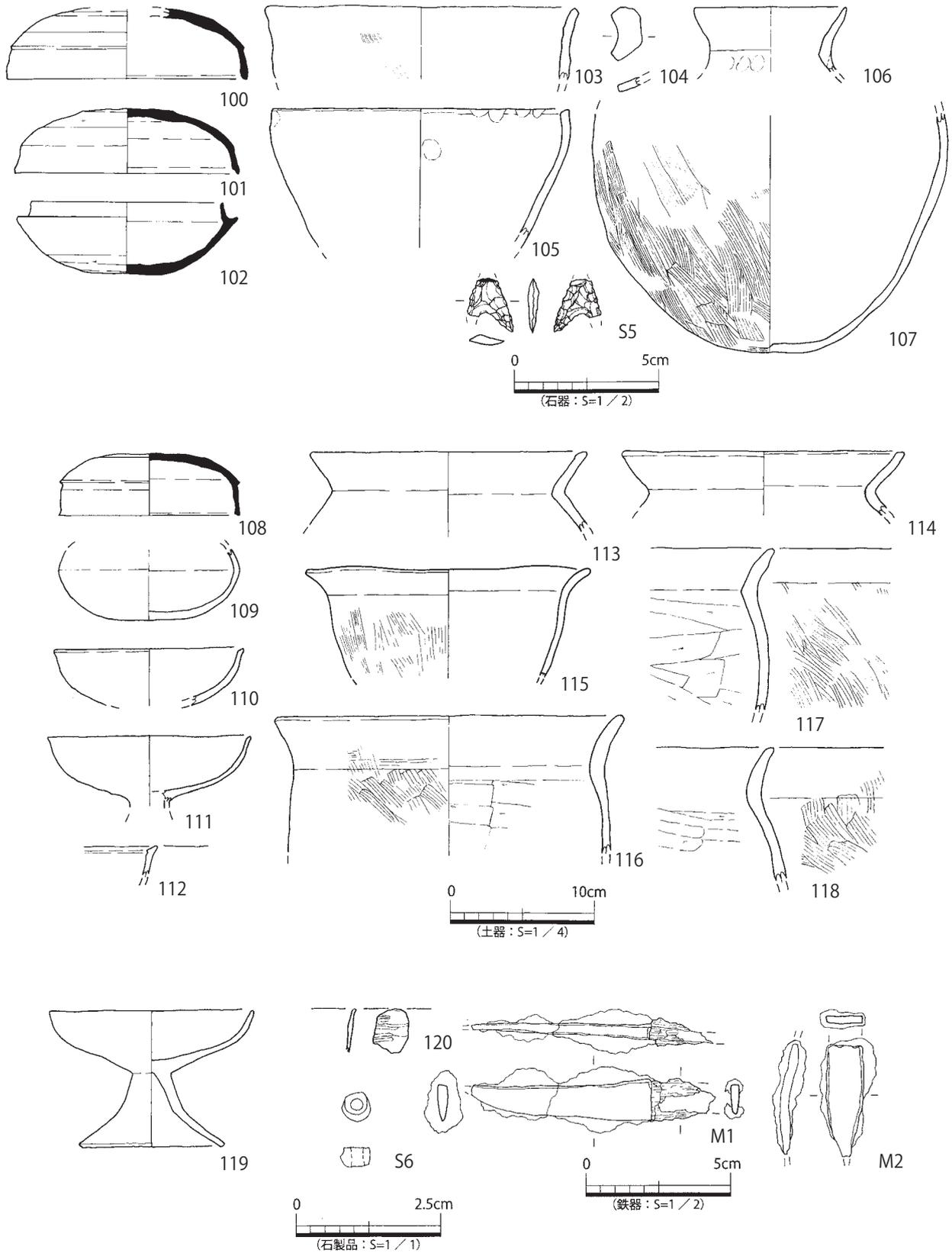


図55 16- 竖穴2・3・4 出土遺物実測図

0.8m、短径約0.78m、深さ約0.38mを測る。断面形状は筒型である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色シルト、掘形が地山ブロック土を含む暗褐色シルトである。

出土遺物の年代から、古墳時代中期中葉と考えられる。

#### 16-1 竪穴2（図53・55）

第16調査区北側で検出した竪穴建物である。南東隅が調査区外に延びるが、平面形状は正方形を呈すると考えられる。主軸方位N-7°-E、検出面の標高は約36.9mである。長辺約4.7m、短辺約4.7m、深さ約0.15mを測る。

埋土の掘削を行い、貼床面で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴（SP1～4）、貼床除去後にピット（SP5）を検出した。

埋土はにぶい黄褐色細砂と暗褐色シルトである。遺物は埋土から土師器甕（104）が出土した。

貼床は地山ブロック土を含む暗褐色細砂～シルトである。床面直上から須恵器杯身（102）、土師器甕（107）、貼床から須恵器杯蓋（100・101）、図示できなかったが須恵器杯身片、土師器把手などが出土した。

周壁溝はほぼ全体で確認でき、幅約0.23m、深さ0.13mを測る。埋土は地山ブロック土を含む暗褐色シルトである。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられる。カマド内のカマド上部構造の崩落土を除去すると、炭化物を多量に含む暗褐色シルト（以下、炭層）が堆積していた。中央には被熱を受けた支脚石が原位置を保ったまま検出した。この支脚石の南側では炭層を除去すると被熱を受けた火床を検出した。カマドから土師器甕（103）、甕片が出土した。カマド除去中から石鏃（S5）が出土した。

支柱穴は4基確認できた。SP1は竪穴建物北東隅で検出した不整形の支柱穴である。検出面の標高は約36.77m、長径約0.8m、短径約0.8m、深さ約0.3mを測る。断面形状は不整形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色シルト、掘形が褐色シルトである。

SP2は竪穴建物南東隅で検出した隅丸方形の支柱穴である。検出面の標高は約36.75m、長辺約0.52m、短辺約0.52m、深さ約0.18mを測る。断面形状は方形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕

が炭化物を含む暗褐色シルト、掘形が暗褐色シルトである。

SP3は竪穴建物南西隅で検出した隅丸方形の支柱穴である。検出面の標高は約36.74m、長辺約0.53m、短辺約0.5m、深さ約0.18mを測る。断面形状は方形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色シルト、掘形がにぶい黄褐色シルトである。

SP4は竪穴建物北西隅で検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.76m、長径約0.68m、短径約0.56m、深さ約0.25mを測る。断面形状は方形に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色シルト、掘形上層が地山ブロック土を含む暗褐色シルトとにぶい黄褐色細砂、掘形下層が暗褐色シルトである。

SP5は竪穴建物中央南側で貼床除去後に検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.66m、長径約0.56m、短径約0.46m、深さ約0.13mを測る。断面形状は椀状である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐色細砂～シルト、掘形が暗褐色細砂と褐色細砂～シルトである。SP5から土師器甕（106）・鉢（105）が出土した。

出土遺物の年代から、古墳時代後期前半、TK10～MT85併行期と判断できる。

## （2）掘立柱建物

### 16-1 掘立1（図56）

第16調査区の中央で検出した掘立柱建物である。SP30～37の8基で構成する。2×2間の総柱建物で、北西隅柱は調査区外になるため検出できなかった。主軸方位はN-24°-E、検出面の標高は約37.3mである。梁行総長約4.3m、桁行総長約4.55m、床面積は約19.6㎡を測る。芯芯間距離は約2.15～2.3mである。

SP30は円形を呈し、直径約0.45m、深さ約0.16mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色粘質シルト、掘形が地山ブロック土を含む暗褐色粘質シルトである。

SP31はやや歪な円形を呈し直径約0.42m、深さ約0.15mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色粘土混じり細砂、掘形がにぶい黄褐色粘土混じりシルトと灰黄褐色細砂である。

SP32は円形を呈し、直径約0.49m、深さ約0.23mを測る。断面形状は方形を呈する。埋土は

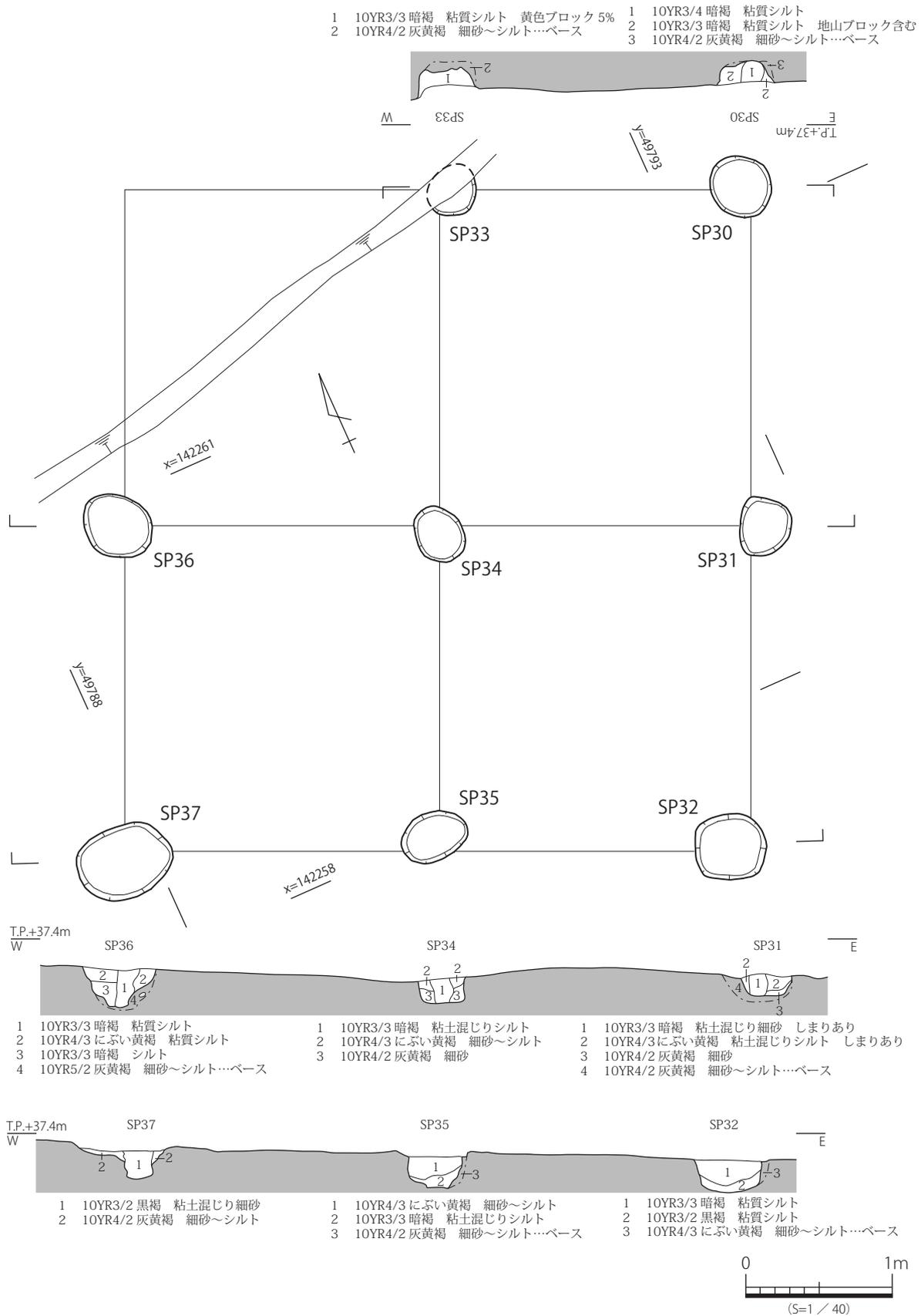


図 56 16-掘立 1 平・断面図

上層が暗褐粘質シルト、下層が黒褐粘質シルトである。

S P 33 は調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。検出径約 0.36 m、深さ約 0.22 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐粘質シルトである。

S P 34 は楕円形を呈し、長径約 0.4m、短径約 0.33 m、深さ約 0.18 m を測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐粘土混じりシルト、掘形がにぶい黄褐細砂～シルトと灰黄褐細砂である。

S P 35 は楕円形を呈し、長径約 0.47 m、短径約 0.33 m、深さ約 0.25 m を測る。断面形状は椀状に段落ちである。埋土は上層がにぶい黄褐細砂～シルト、下層が暗褐粘土混じりシルトである。

S P 36 は楕円形を呈し、長径約 0.51 m、短径約 0.43 m、深さ約 0.28 m を測る。断面形状は不整形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐粘質シルト、掘形がにぶい黄褐粘質シルトと暗褐シルトである。

S P 37 は楕円形を呈し、長径約 0.64 m、短径約 0.5m、深さ約 0.21 m を測る。断面形状は浅い皿状に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐粘土混じり細砂、掘形が灰黄褐細砂～シルトである。

いずれのピットからも遺物が出土していないため、時期は不明である。

### （3）柵列

#### 16－柵列1（図57）

第16調査区の中央で検出した南北方向の柵列である。S P 38～40の3基の柱穴を検出したが、南側が調査区外に延びるため、総延長は不明である。主軸方位はN-23°-E、検出面の標高は約37.35m、桁行総長約5.8m以上、芯芯間距離は約2.9mを測る。

S P 38 は不整楕円形を呈し、長径約 0.24 m、短径約 0.19m、深さ約 0.05 m を測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で、灰黄褐細砂～シルトである。

S P 39 は円形を呈し、直径約 0.53 m、深さ約 0.14 m を測る。断面形状は浅い皿状に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が灰黄褐細砂～シルト、掘形がほぼ地山土で構成する灰黄褐細砂～シ

ルトである。

S P 40 は調査区外へ延びるため、形状は不明である。検出径約 0.32 m、深さ約 0.17 m を測る。断面形状は椀状である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトと褐灰粘質微細砂である。

いずれのピットからも遺物が出土していないため、時期は不明である。

### （4）土坑

#### 16－S K 5（図58・62）

第16調査区の中央で検出した土坑である。16-縦穴4を切る。主軸方位N-79°-W、検出面の標高は約36.9mである。平面形状は楕円形を呈し、長径約1.1m、短径約0.8m、深さ約0.35mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は炭化物と焼土を含む極暗赤褐シルトと黒褐シルト、暗褐シルトである。

遺物は須恵器高杯(124)、土師器高杯(125・126)・甕(127・128・129)が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代中期中葉～後半、T K 208～23 併行期と考えられる。

#### 16－S K 6（図58）

第16調査区の北側で検出した土坑である。主軸方位N-33°-E、検出面の標高は約36.85mである。平面形状は楕円形で、長径約1.0m、短径約0.6m、深さ0.24mを測る。断面形状は「へ」の字形である。

埋土は単層で、黒褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

#### 16－S K 7（図58）

第16調査区の北端で検出した土坑である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-40°-W、検出面の標高は約36.7mである。長軸約1.9m以上、短軸約0.7m以上、深さ0.58mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が暗褐細砂と黒褐細砂～シルト、中層が暗褐細砂～シルト、下層が黒褐細砂～シルトである。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため、詳細な時期は不明である。

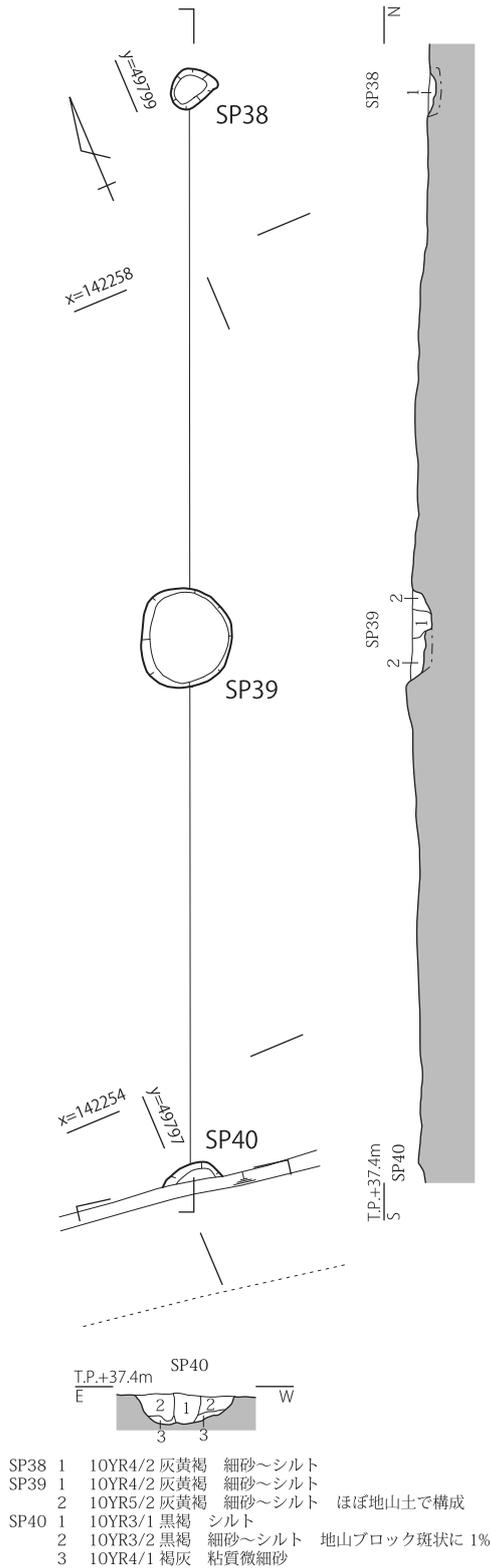


図 57 16- 柵列 1 平・断面図

16 - S K 8 (図 58)

第 16 調査区の北東端で検出した土坑である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-8° -E、検出面の標高は約 36.7m である。平面形状は不整形で、長軸 1.3m、短軸 0.35m 以上、深さ 0.20m を測る。断面形状は「へ」の字形である。埋土は単層で、黒褐細砂～シルトである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 - S K 9 (図 58)

第 16 調査区の北西側で検出した土坑である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、不整形な形状を呈している。主軸方位 N-28° -E、検出面の標高は約 37.0m である。長軸約 2.0m、短軸約 0.8m 以上、深さ 0.43m を測る。断面形状は不整形である。埋土は 2 層に分層でき、上層が黒褐シルト、下層が暗褐である。遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 - S K 19 (図 58)

第 16 調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位 N-66.5° -W、検出面の標高は約 37.05m である。平面形状は不整形で、長軸約 4.1m、短軸約 1.5m、深さ約 0.3m を測る。断面形状は浅い皿状で段落ちを有する部分がある。埋土は 4 層に分層でき、灰黄褐細砂と灰黄褐シルト、黒褐シルト、黒褐細砂である。平面形状や堆積状況から、風倒木痕の可能性が高い。遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 - S K 21 (図 59)

第 16 調査区の南側で検出した不整形な土坑である。主軸方位 N-83° -W、検出面の標高は約 37.4m である。長軸約 1.35m、短軸約 1.2m、深さ約 0.1m を測る。断面形状は不整形である。埋土は単層で、黒褐シルトである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 - S K 27 (図 59)

第 16 調査区の南側で検出した長楕円形の土坑である。主軸方位 N-5° -W、検出面の標高は約 37.15m である。長径約 1.8m、短径約 0.6m、深さ

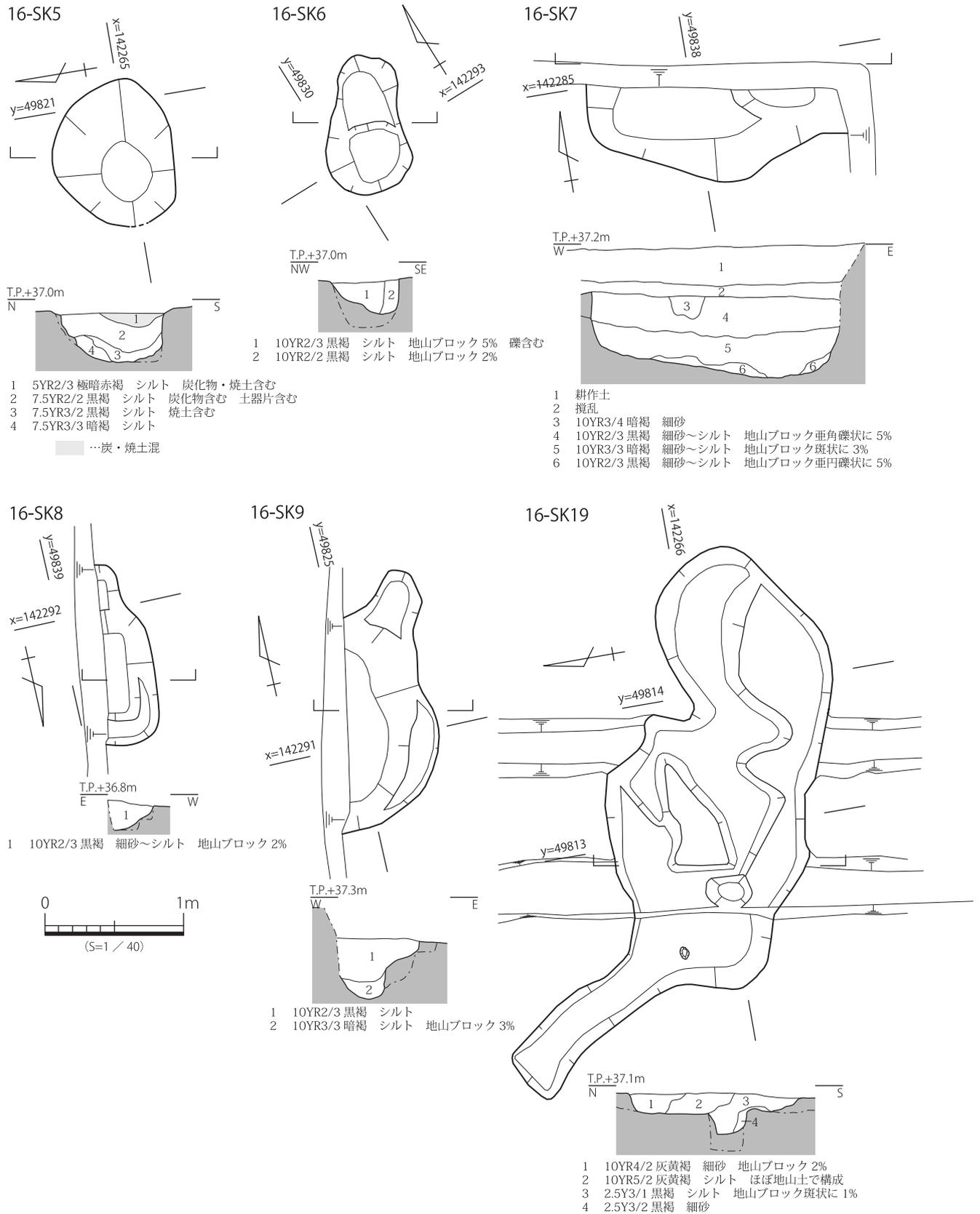


図 58 16-SK 5・6・7・8・9・19 平・断面図

約 0.15m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は 2 層に分層でき、上層が黒褐シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 - S K 95 (図 59)

第 16 調査区の北側で検出した不整形な土坑である。16- S K 6 に切られる。主軸方位 N-72° -W、検出面の標高は約 36.9m である。長軸約 0.9m 以上、短軸約 0.6m、深さ約 0.28m を測る。断面形状は逆台形で段落ちを有する。

埋土は 3 層に分層でき、上層が暗褐シルト、下層が黒褐シルトと礫を多量に含む暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 - S K 10 (図 59・62)

第 16 調査区の北側で検出した土坑である。遺構の南側が調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-83° -W、検出面の標高は約 36.9m である。長軸約 1.4m、短軸約 1.2m 以上、深さ約 0.33m を検出した。断面形状は椀状である。

埋土は 3 層に分層でき、上層が黒褐シルト、中層が暗褐シルト、下層が暗褐細砂である。

遺物は須恵器無蓋高杯 (121)、土師器高杯 (122)・甕 (123)、図示できなかったが製塩土器片・粘土塊が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代中期後半と考えられる。

16 - S K 88 (図 59)

第 16 調査区の南側で検出した不整形な土坑である。主軸方位 N-2° -E、検出面の標高は約 37.35m である。長軸約 2.5m、短軸約 1.1m、深さ約 0.35m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は暗褐細砂～シルトと褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 - S K 17 (図 60)

第 16 調査区の中央で検出した土坑である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-86° -W、検出面の標高は約 37.05m である。長軸約 1.4m 以上、短軸約 1.1m、深さ約 0.13m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、黒褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 - S K 18 (図 60)

第 18 調査区の中央で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位 N-61° -E、検出面の標高は約 37.0m である。長軸約 1.5m、短軸約 0.7m、深さ約 0.35m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、黒褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 - S K 22 (図 60)

第 16 調査区の南側で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位 N-71° -E、検出面の標高は約 37.4m である。長径約 0.8m、短径約 0.6m、深さ約 0.25m を測る。断面形状は逆台形に段落ちを有する。

埋土は単層で、褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 - S K 25 (図 60)

第 16 調査区の南側で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位 N-1° -E、検出面の標高は約 37.3m である。長軸約 1.6m、短軸約 0.9m、深さ約 0.32m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 - S K 23 (図 60)

第 16 調査区の南側で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位は N-66° -W、検出面の標高は約 37.3m である。長軸約 2.3m、短軸約 1.3m、深さ約 0.35m を測る。断面形状は浅い皿状で段落ちを有する。

埋土は単層で、にぶい黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 - S K 26 (図 60)

第 16 調査区の南側で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位 N-61° -W、検出面の標高は約 37.3m である。長径約 1.7m、短径約 0.95m、深さ約 0.4m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、にぶい黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

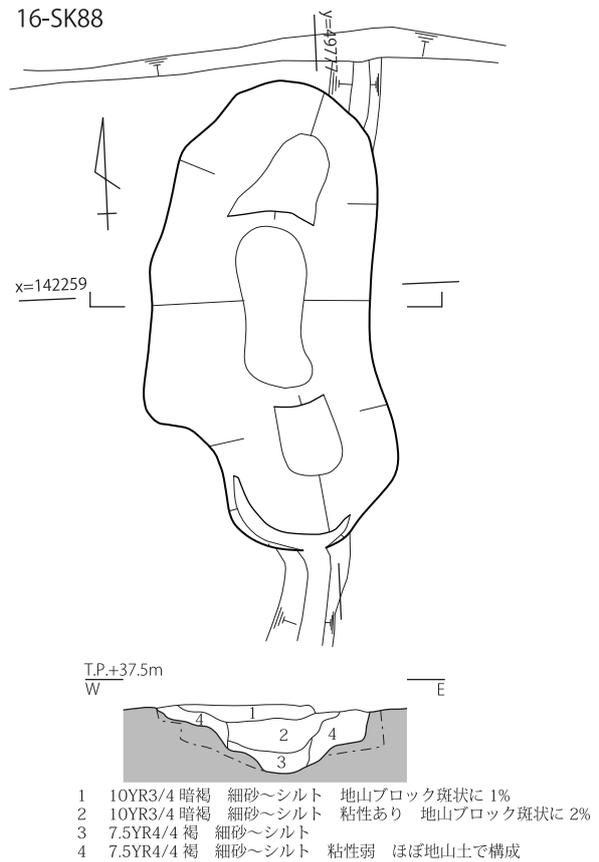
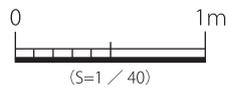
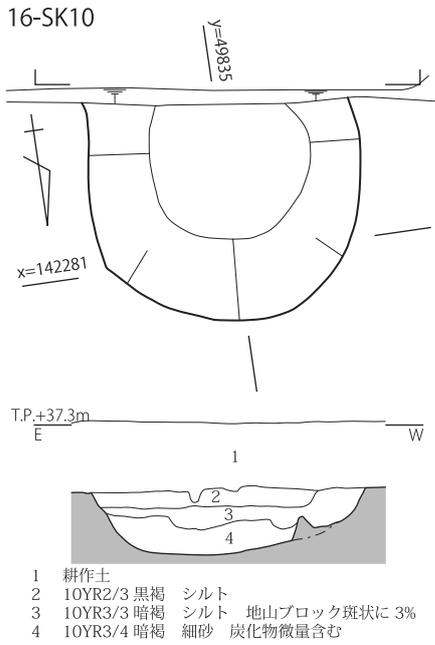
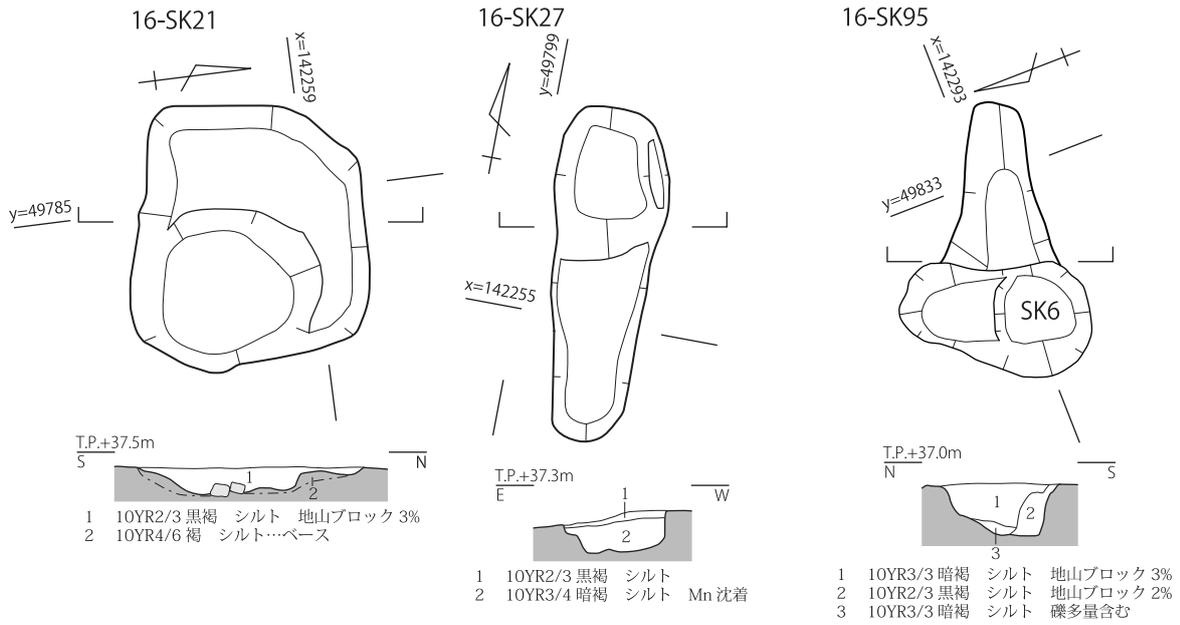


図 59 16-SK10・21・27・95・88 平・断面図

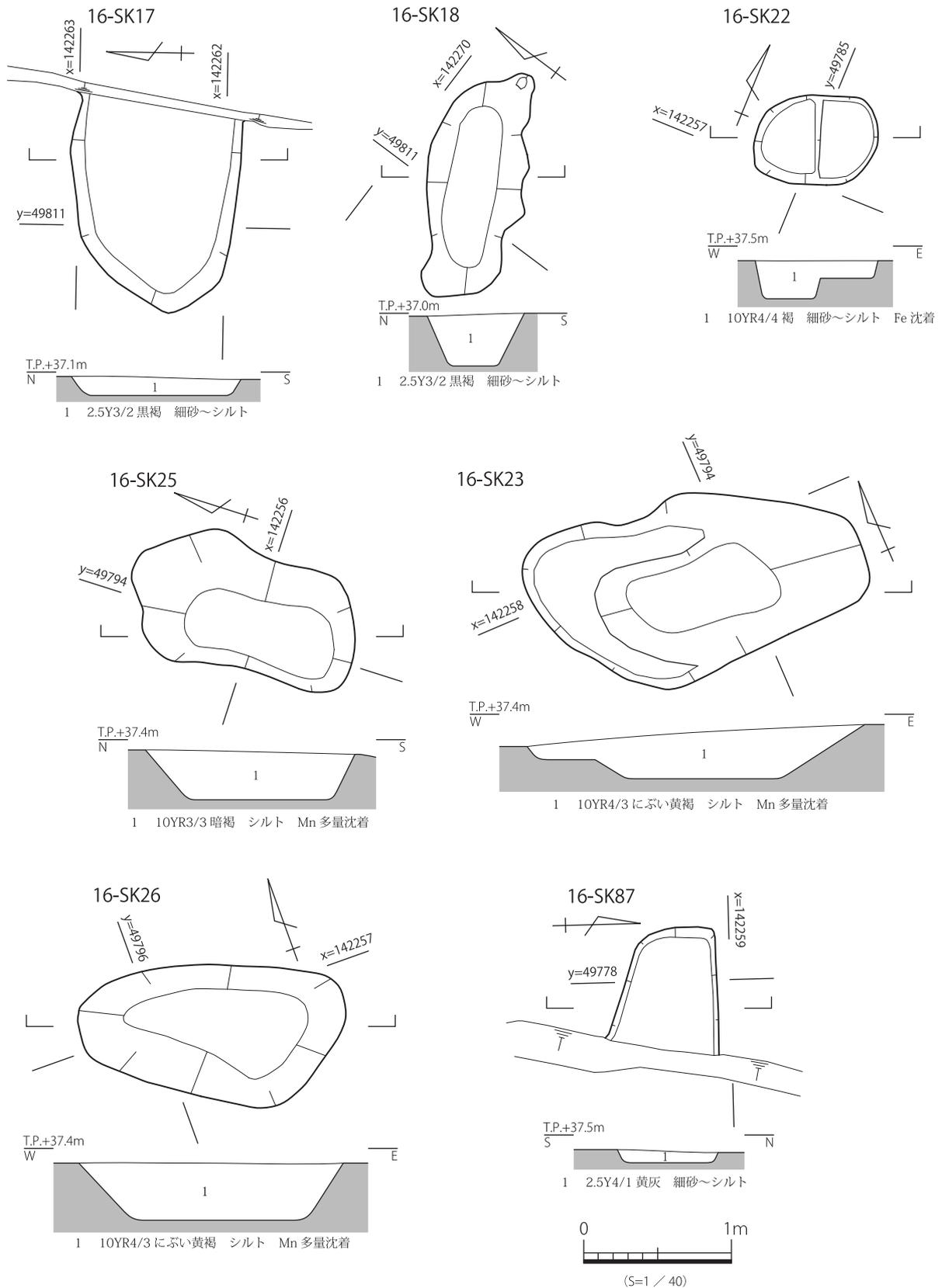


図 60 16-SK17・18・22・23・25・26・87 平・断面図

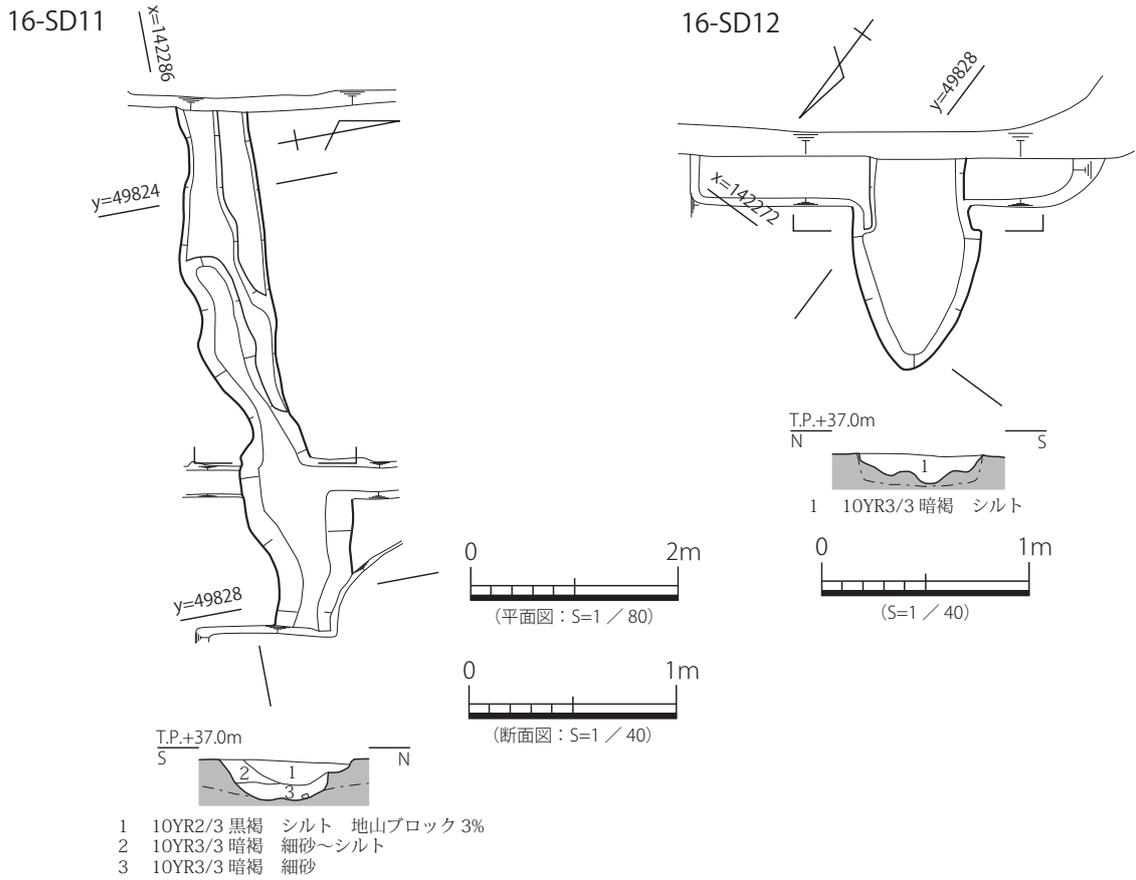


図 61 16-SD11・12 平・断面図

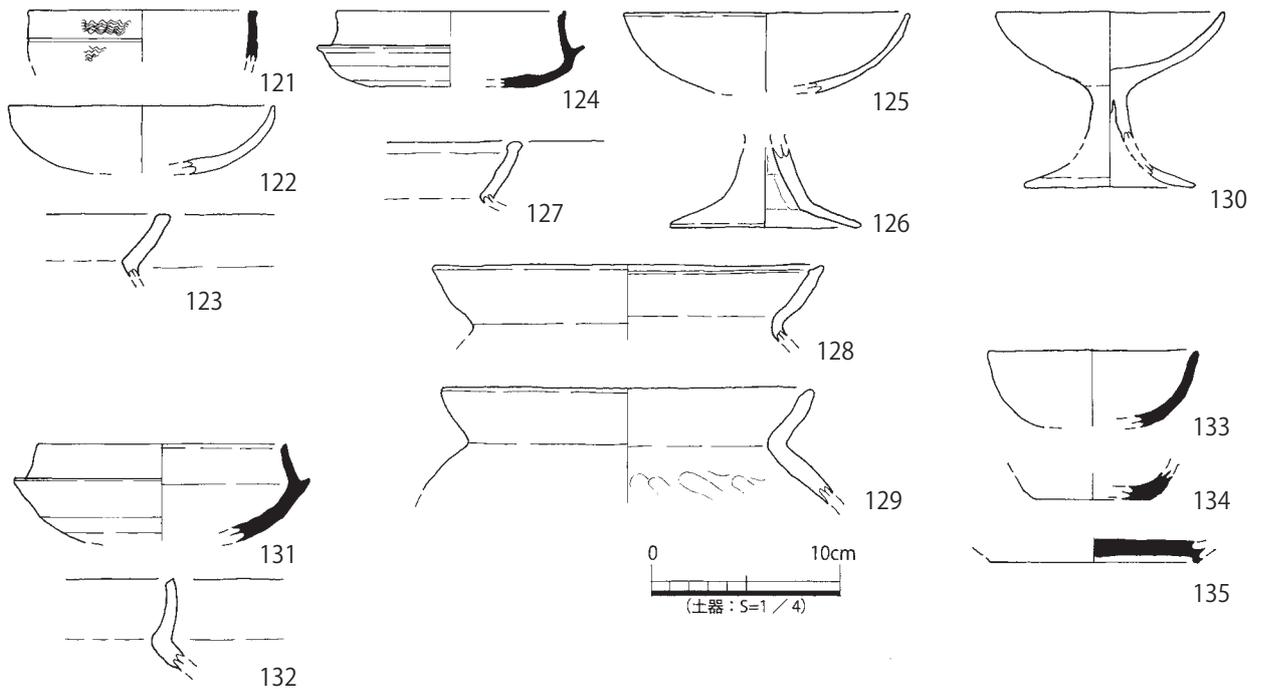


図 62 16・17-SK・SD・その他 出土遺物実測図

16 - S K 87 (図 60)

第 16 調査区の南側で検出した土坑である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-79° -W、検出面の標高は約 37.4m である。長軸約 0.8m 以上、短軸約 0.7m、深さ約 0.1m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、黄灰細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

(5) 溝

16 - S D 11 (図 61・62)

第 16 調査区の北側で検出した東西方向の溝である。西側は調査区外に延び、東側は攪乱に切られる。主軸方位 N-90° -W、検出面の標高は約 36.95m である。長さ約 5.1m を検出し、幅約 0.84 m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は上層が黒褐シルトと暗褐細砂～シルト、下層が暗褐細砂である。

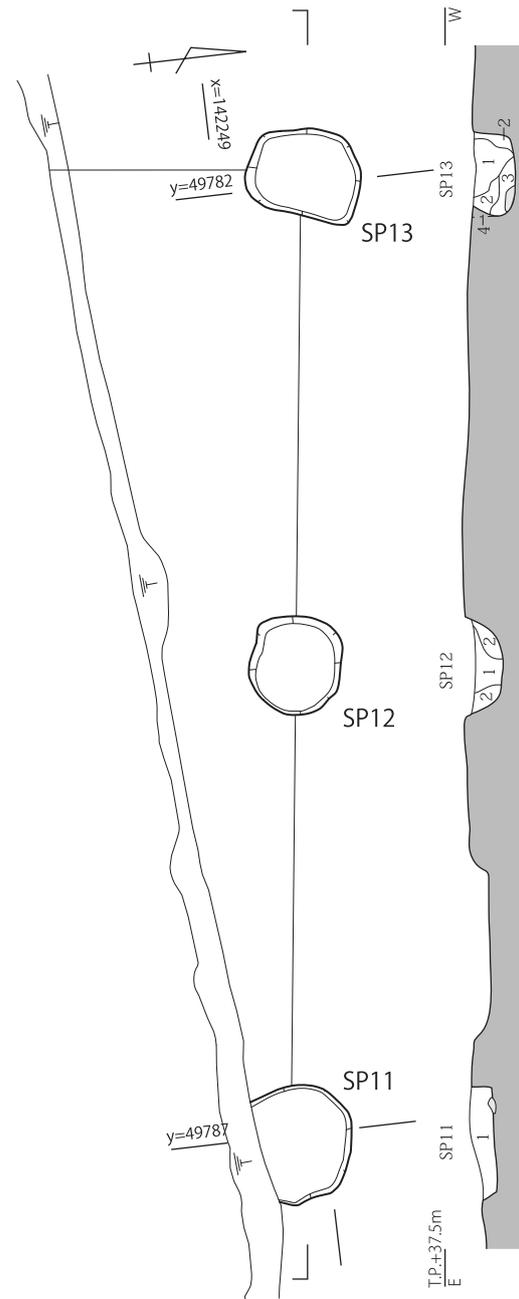
遺物は土師器高杯 (130) が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代中期中葉と考えらえる。

16 - S D 12 (図 61)

第 16 調査区の中央南端で検出した南北方向の溝である。南側は調査区外に延びる。主軸方位 N-35° -W、検出面の標高は約 36.9m である。長さ約 1.2 m を検出し、幅約 0.6m、深さ約 0.13 m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で、暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。



- SP11 1 10YR3/3 暗褐 シルト 地山ブロック 5%
- SP12 1 10YR4/2 灰黄褐 シルト 地山ブロック 5%
- 2 10YR4/4 褐 細砂～シルト
- SP13 1 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト 地山ブロック 5%
- 2 10YR4/4 褐 細砂～シルト
- 3 10YR4/2 灰黄褐 シルト 地山ブロック 2%
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂…ベース

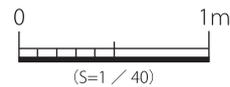
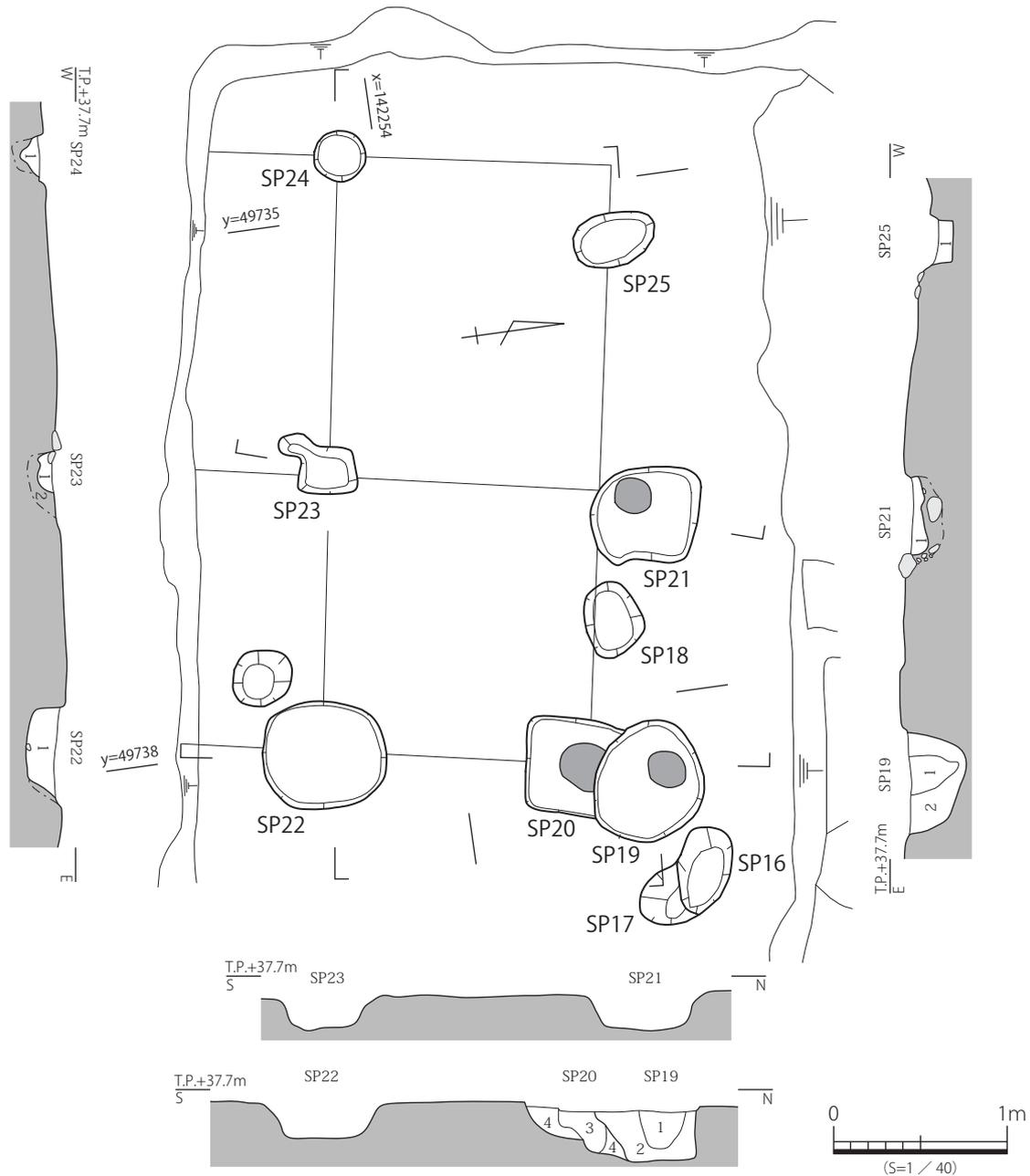


図 63 17- 掘立 1 平・断面図



- |   |  |                                   |
|---|--|-----------------------------------|
| <p>SP19</p> <p>1 10YR3/4 暗褐 シルト</p> <p>2 10YR4/4 褐 細砂～シルト</p>   | <p>SP22</p> <p>1 10YR4/4 褐 シルト 地山ブロック 5%</p>                   | <p>SP25</p> <p>1 10YR4/6 褐 細砂</p> |
| <p>SP20</p> <p>3 7.5YR3/4 暗褐 シルト</p> <p>4 10YR3/4 暗褐 細砂～シルト</p> | <p>SP23</p> <p>1 10YR4/4 褐 粘質シルト</p> <p>2 10YR4/6 褐 細砂…ベース</p> |                                   |
| <p>SP21</p> <p>1 10YR4/4 褐 粘質シルト</p>                            | <p>SP24</p> <p>1 10YR3/4 暗褐 粘質シルト</p>                          |                                   |

図 64 17-掘立 2 平・断面図

第 17 調査区 (図 45)

(1) 掘立柱建物

17-掘立 1 (図 63)

第 17 調査区の東側で検出した掘立柱建物と考えられる柱列である。SP 11～13 の 3 基で構成し、南北いずれかの方向に延びると考えられる。主軸方位は N-83°-W、検出面の標高は約 37.4m である。

桁行総長約 5.2m、芯芯間距離は約 2.6m である。

SP 11 は一部が調査区外に延びるが、円形を呈すると考えられる。直径約 0.64 m、深さ約 0.14 m を測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で、暗褐シルトである。

SP 12 は円形を呈し、直径約 0.53 m、深さ約 0.21 m を測る。断面形状は椀状を呈する。柱痕が

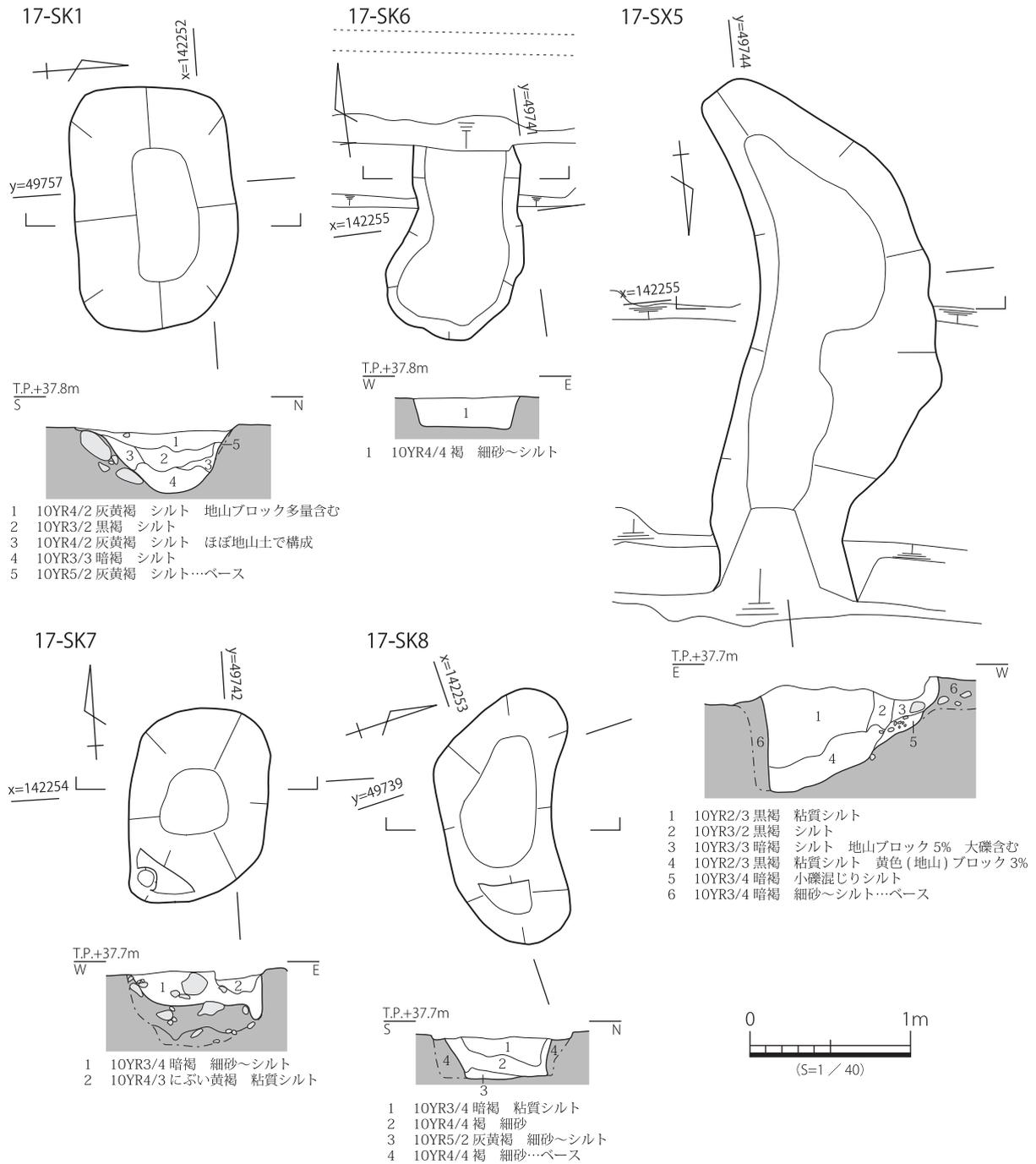


図 65 17-SK 1・6・7・8・SX 5 平・断面図

確認でき、埋土は柱痕が灰黄褐シルト、掘形が褐細砂～シルトである。

S P 13は隅丸方形を呈し、長辺約0.6m、短辺約0.46m、深さ約0.23mを測る。断面形状は袋状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐シルト、掘形が褐細砂～シルトと灰黄褐シルトである。

いずれのピットからも遺物が出土していないため、時期は不明である。

17-掘立2 (図64)

第17調査区の西側で検出した掘立柱建物である。1×2間以上の総柱建物跡で南側は調査区外に延びると考えられる。S P 19～25の6基で構成する。主軸方位はN-81°-W、検出面の標高は約37.6mである。梁行総長約1.6m、桁行総長約3.1～3.5m、床面積は約6.1㎡以上を占める。芯芯間距離は約1.5～2.0mである。

S P 19は円形を呈し、直径約0.74m、深さ約

0.34 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形が褐細砂～シルトである。

S P 20は隅丸方形を呈し、S P 19に切られる。長辺約0.58 m、短辺約0.5m以上、深さ約0.3 mを測る。断面形状は不整形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形が暗褐細砂～シルトである。

S P 21はやや歪な隅丸方形を呈し、長辺約0.62 m、短辺約0.55 m、深さ約0.13 mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は褐粘質シルトである。

S P 22は円形を呈し、直径約0.71m、深さ約0.2mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は単層で、褐シルトである。

S P 23は不整形な形状で、長軸約0.74 m、短軸約0.41 m、深さ約0.1 mを測る。断面形状は椀状を呈する。埋土は単層で、褐粘質シルトである。

S P 24は円形を呈し、直径約0.3 m、深さ約0.15 mを測る。断面形状はV字形を呈する。埋土は単層で、暗褐粘質シルトである。

S P 25は楕円形を呈し、長径約0.48 m、短径約0.32 m、深さ約0.19 mを測る。断面形状は方形を呈する。埋土は単層で、褐細砂である。

いずれのピットからも遺物が出土していないため、時期は不明である。

## (2) 土坑

### 17-S K 1 (図65)

第17調査区の中央で検出した隅丸方形の土坑である。主軸方位N-87°-W、検出面の標高は約37.6mである。長辺約1.5m、短辺約1.0m、深さ約0.4mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は4層に分層でき、上層が灰黄褐シルトと黒褐シルト、中層が灰黄褐シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

### 17-S K 6 (図65)

第17調査区の北西側で検出した不整形な形状の土坑である。北側は調査区外へ延びる。主軸方位N-13°-E、検出面の標高は約37.65mである。長軸約1.2m以上、短軸約0.8m、深さ約0.15mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

### 17-S K 7 (図65)

第17調査区の西側で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位N-5°-E、検出面の標高は約37.6mである。長径約1.2m、短径約0.9m、深さ約0.25mを測る。断面形状は逆台形で段落ちを有する。

埋土は2層に分層でき、上層が暗褐細砂～シルト、下層がにぶい黄褐粘質シルトである。

図示できなかったが鉄片が出土したが、時期が判明する遺物は出土しなかった。

### 17-S K 8 (図62・65)

第17調査区の西側で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位N-71°-W、検出面の標高は約37.6mである。長軸約1.6m、短軸約1.0m、深さ約0.25mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は3層に分層でき、上層が暗褐粘質シルト、中層が褐細砂、下層が灰黄褐細砂～シルトである。

遺物は須恵器底部(134)が出土したが、詳細な時期は不明である。

## (3) 性格不明遺構

### 17-S X 5 (図65)

第17調査区の北西側で検出した不整形な形状の土坑である。北側は調査区外に延びる。主軸方位N-10°-E、検出面の標高は約37.65mである。長軸約3.0m以上、短軸約1.1m、深さ約0.75mを測る。断面形状は「へ」の字形である。

埋土は6層に分かれ、上層が黒褐粘質シルトと黒褐シルト、暗褐シルト、下層が黒褐粘質シルトと暗褐小礫混じりシルトである。

平面形状と堆積状況から風倒木痕の可能性が考えられる。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

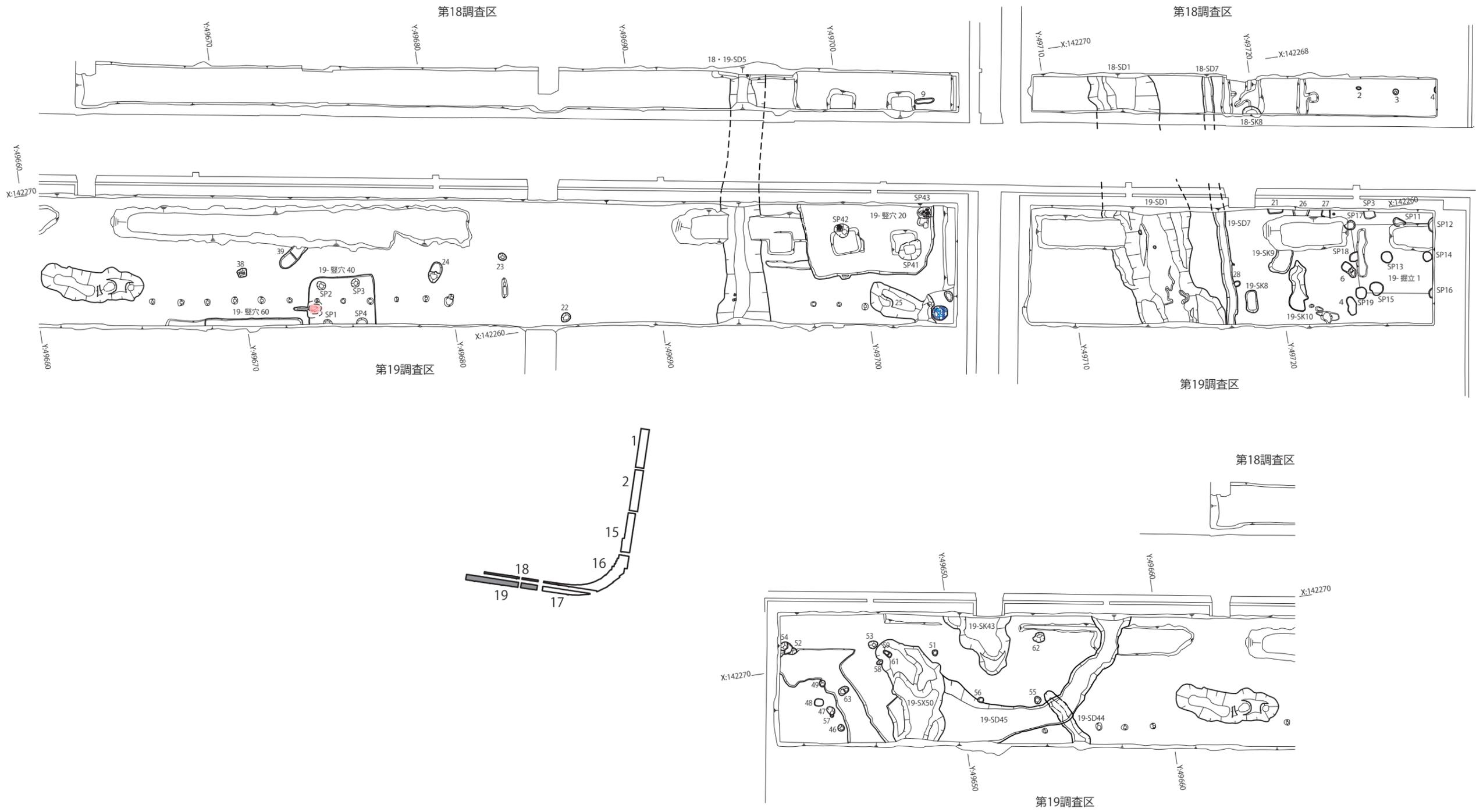


図66 第18・19調査区 平面図 (S=1/200)

## 第18・19調査区(図66)

## (1) 竪穴建物

## 19-竪穴20(図67~69)

第19調査区東端で検出した竪穴建物である。北側は調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。一部攪乱に切られる。主軸方位N-84°-W、検出面の標高は約38.0mである。長辺約6.2m、短辺約3.7m以上、深さ約0.4mを測る。

埋土の掘削後、ピット(S P 41~43)を検出した。また、断面観察ではあるが、周壁溝を確認した。

埋土は暗褐シルトとにぶい黄褐シルトである。遺物は土師器高杯(141)・甕(144)・杯(143)・甑(138)、図示できなかったが須恵器杯蓋片・壺片、製塩土器片、剥片などが出土した。

周壁溝の埋土は褐シルトとにぶい黄褐粘質シルト、暗褐粘質シルトである。

貼床はにぶい黄褐細砂~シルトである。貼床から須恵器壺(137)が出土した。

S P 41は竪穴建物南東隅で検出した不整形のピットである。検出面の標高は37.76m、長辺約1.22m、短辺約0.92m、深さ約0.55mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は4層に分層でき、1・3層が褐砂礫混じり細砂~シルト、2・4層が灰褐砂礫混じり粘質土である。遺物は須恵器杯蓋(136)他図示できなかったが、杯蓋片、土師器高杯片が出土した。

S P 42は竪穴建物南西隅で検出した楕円形の支柱穴と考えられるピットである。検出面の標高は約37.7m、長径約0.72m、短径約0.66m、深さ約0.44mを測る。断面形状はレ字形。埋土は上層がにぶい黄褐粗砂混じり細砂~シルト、中層が炭化物と焼土を含む褐細砂~シルトである。土器は主に中層から出土しており、土師器高杯(139)が出土した。下層は暗褐粗砂混じり粘質土と灰褐粗砂混じり粘質土である。

S P 43は竪穴建物中央東側で、貼床除去後に検出した楕円形のピットである。検出面の標高は37.5m、長径約1.0m、短径約0.6m、深さ約0.12mを測る。断面形状は逆台形である。遺物は土師器高杯(140)・甕(142)が出土した。

出土遺物の年代から、古墳時代中期後半と考えられる。

## 19-竪穴60(図70)

第19調査区中央南側で検出した竪穴建物である。遺構の大半は南側の調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-82°-W、検出面の標高は約38.2mである。長軸約4.8m、短軸約0.3m以上、深さ約0.38mを測る。

調査当初、竪穴建物と認識せずに掘削を行ったため、断面観察でカマドと周壁溝を確認し、竪穴建物との認識に至った。

埋土は暗褐粘質シルトである。

貼床は地山ブロック土を含む暗褐粘質シルトである。

周壁溝は幅約0.14m、深さ約0.2mを測る。埋土は2層に分層でき、上層が褐細砂~シルト、下層が暗褐細砂~シルトである。

カマドは北側中央やや西寄りに作り付けられる。カマド袖の構築材はにぶい黄褐粘質シルトである。カマド内部には炭化物と焼土を含む暗褐シルトと暗褐細砂~シルトが堆積していた。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

## 19-竪穴40(図71・72)

第19調査区中央南側で検出した竪穴建物である。南側は調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、方形を呈すると考えられる。主軸方位N-85°-W、検出面の標高は約38.2mである。長辺約3.2m、短辺約2.3m以上、深さ約0.28mを測る。

遺構検出段階で、貼床面であり、南壁で埋土と周壁溝を確認し、カマドと支柱穴(S P 1~4)を検出した。

埋土は暗褐シルト混じり細砂と褐シルトである。

貼床は褐シルト混じり細砂である。

周壁溝は、幅約0.2m、深さ約0.12mを測る。埋土は暗褐シルトである。

カマドは西側中央に作り付けられる。カマド袖は確認できず、焼土塊と煙道を検出した。煙道の長さは約0.75m、幅約0.14m、深さ約0.05mを測る。埋土は炭化物を少量含む褐シルトである。

支柱穴は4基確認できた。S P 1は竪穴建物南西隅で検出した支柱穴である。南側は調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。検出面の標高は約38.1m、長軸約0.42m、短軸約0.2m以上、深さ約0.12mを測る。断面形状はV字形である。埋土は単層で、灰黄褐シルト混じり細砂である。

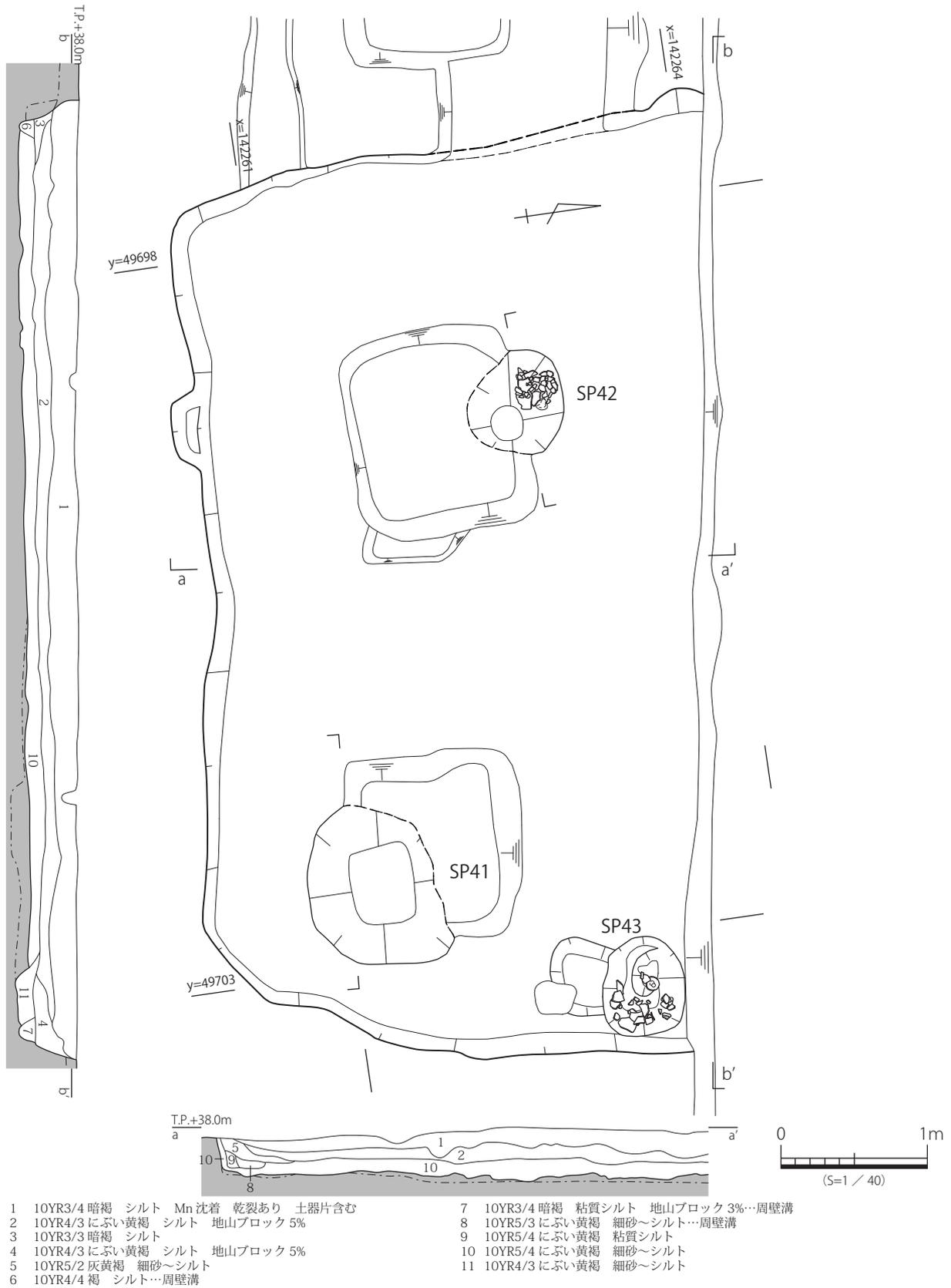


図 67 19- 竪穴 20 平・断面図

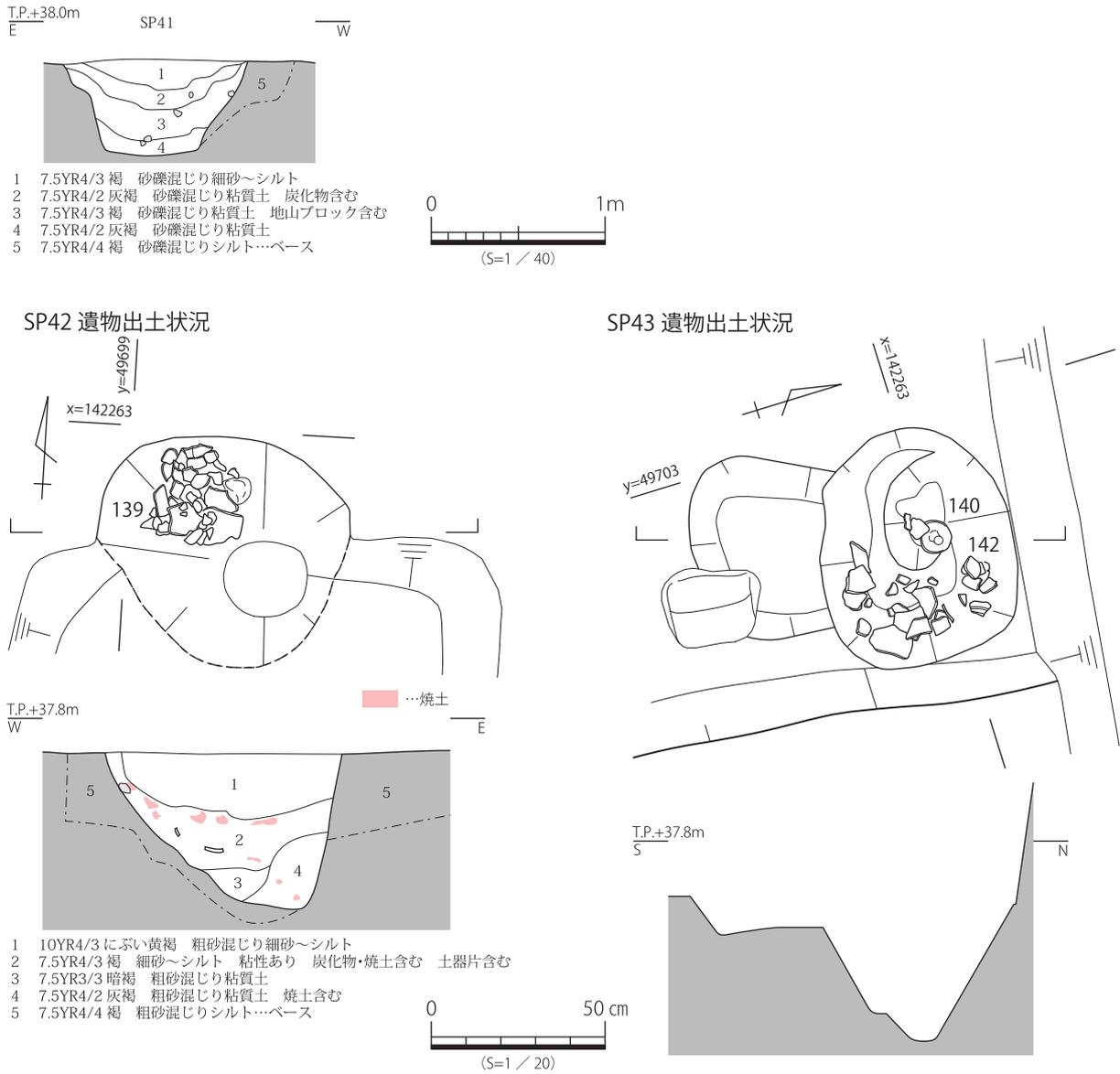


図 68 19- 竪穴 20 平・断面図

SP2 は竪穴建物北西隅で検出した楕円形の主柱穴である。検出面の標高は約 38.06m、長径約 0.44m、短径約 0.38m、深さ約 0.05m を測る。断面形状は不整形である。埋土は単層で、暗褐礫混じり細砂である。

SP3 は竪穴建物北東隅で検出した円形の主柱穴である。検出面の標高は約 38.02m、長径約 0.42m、短径約 0.4m、深さ約 0.04m を測る。断面形状は不整形である。埋土は単層で、褐礫混じり細砂である。

SP4 は竪穴建物南東隅で検出した主柱穴である。南側は調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。検出面の標高は約 38.08m、長径約 0.54m、短径約 0.26m 以上、深さ約 0.25m を測る。

断面形状は方形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形が褐シルトとにぶい黄褐シルト混じり細砂、暗褐シルト混じり細砂である。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

(2) 柱穴群

19-柱穴群 (図 73)

第 19 調査区東端で検出した柱穴群である。掘立柱建物の可能性を考えたが、主軸は安定しない。検出面の標高は約 37.7 m である。

SP11 は滴型を呈し、一部を攪乱に切られる。長軸約 0.62 m、短軸約 0.4 m、深さ約 0.17 m である。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は褐細砂～シル

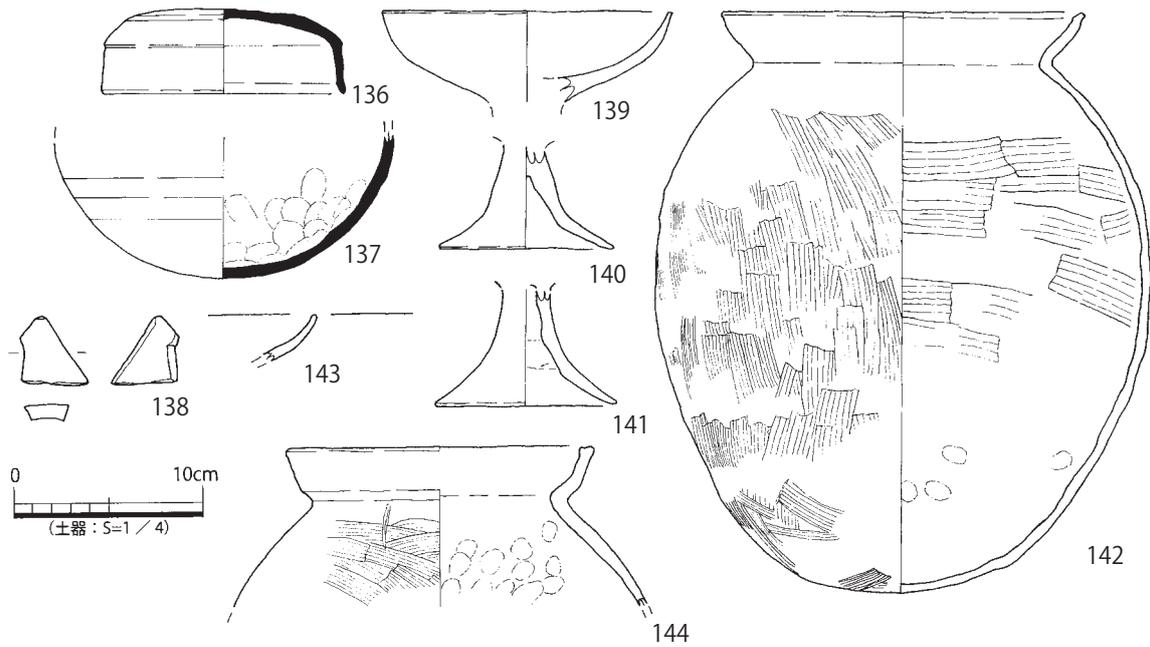


図 69 19- 竪穴 20 出土遺物実測図

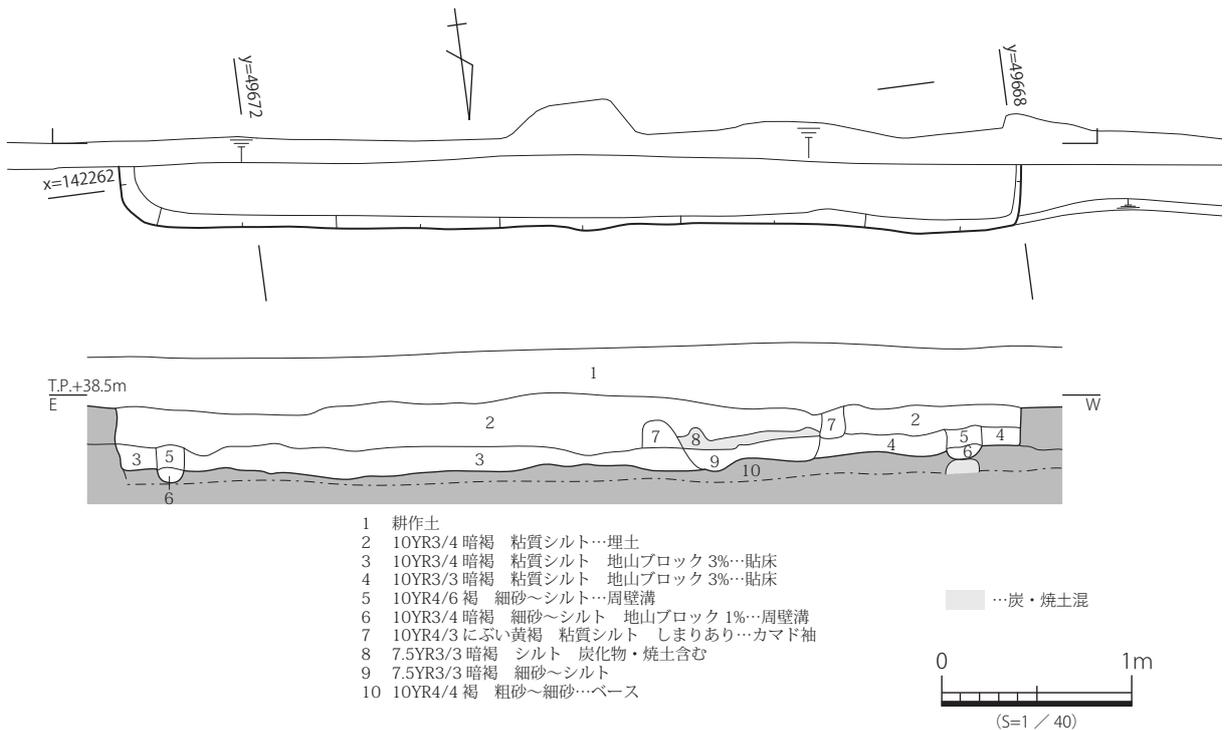


図 70 19- 竪穴 60 平・断面図

トとにぶい黄褐砂礫混じりシルトである。

S P 12 は東側が調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。長軸約 0.73 m 以上、短軸約 0.22m 以上、深さ約 0.33 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は上層が褐細砂～シルト、下層が褐細砂と褐細砂～シルトである。

S P 13 は円形を呈し、直径約 0.56m、深さ約

0.19m を測る。断面形状は不整形で、礫が確認できる。埋土は上層が褐粗砂混じりシルト、下層が褐粗砂混じり粘質土である。

S P 14 は円形を呈し、直径約 0.48m、深さ約 0.21 m を測る。断面形状は椀状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐粘質土、掘形が暗褐粗砂混じり粘質土と灰褐細砂～シルトである。

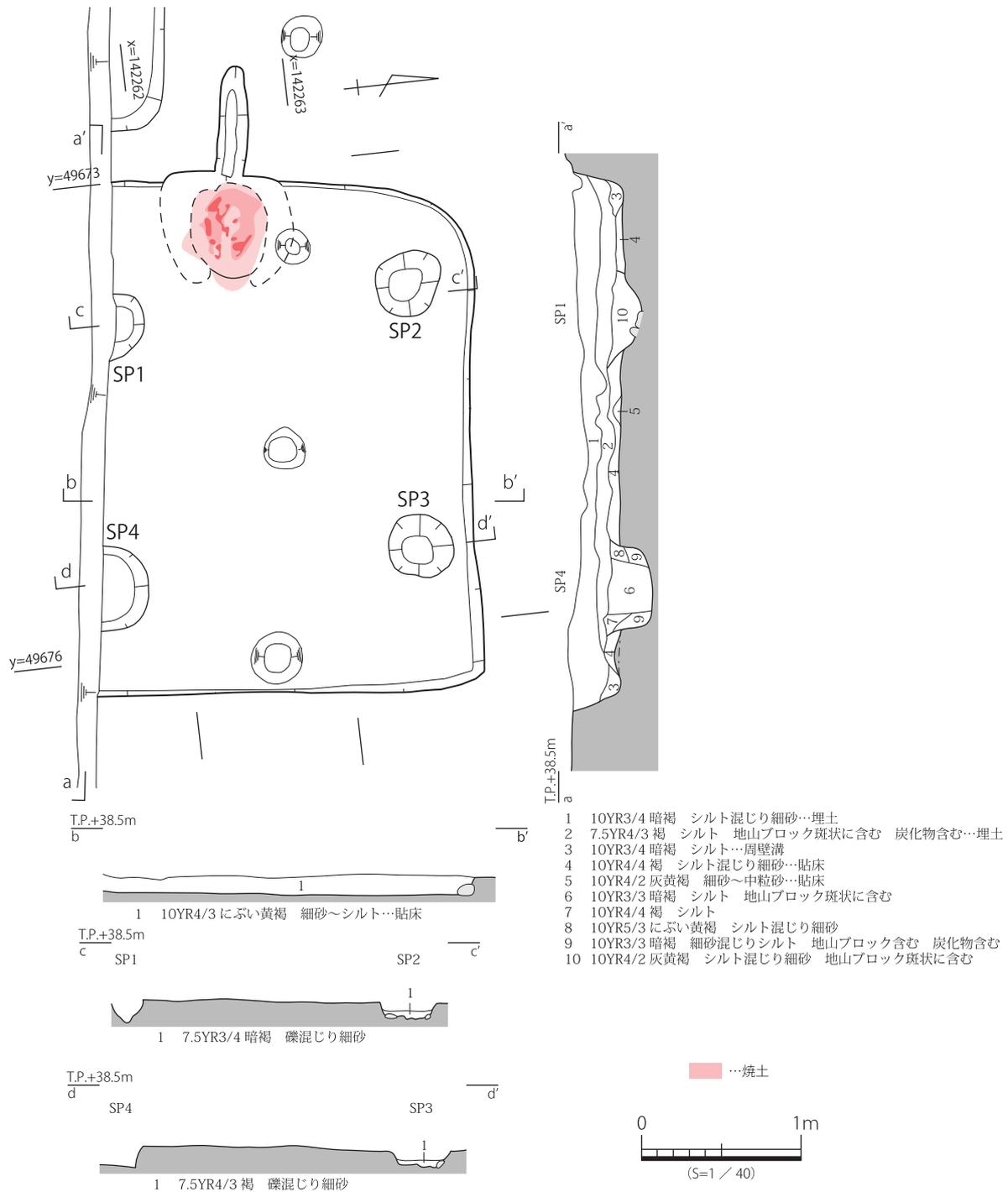


図 71 19- 竪穴 40 平・断面図

SP 15 は不整形を呈し、直径約 0.67 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は椀状を呈する。埋土は単層で、暗褐砂礫混じりシルトである。

SP 16 は東側が調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。長軸約 0.47 m、短軸約 0.17 m、深さ 0.32 m である。断面形状は逆台形である。埋土は上層が褐細砂～シルト、下層が暗褐シルトと褐細砂～シルトである。

SP 17 は楕円形を呈し、一部を攪乱に切られる。長径約 0.52 m、短径約 0.45 m、深さ約 0.15 m を測る。断面形状は逆台形を呈する。

SP 18 は楕円形を呈し、一部を攪乱に切られる。長径約 0.43 m、短径約 0.41 m、深さ約 0.13 m を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。

SP 19 は円形を呈し、直径約 0.57 m、短径約 0.52 m、深さ約 0.26 m を測る。断面形状は不整形

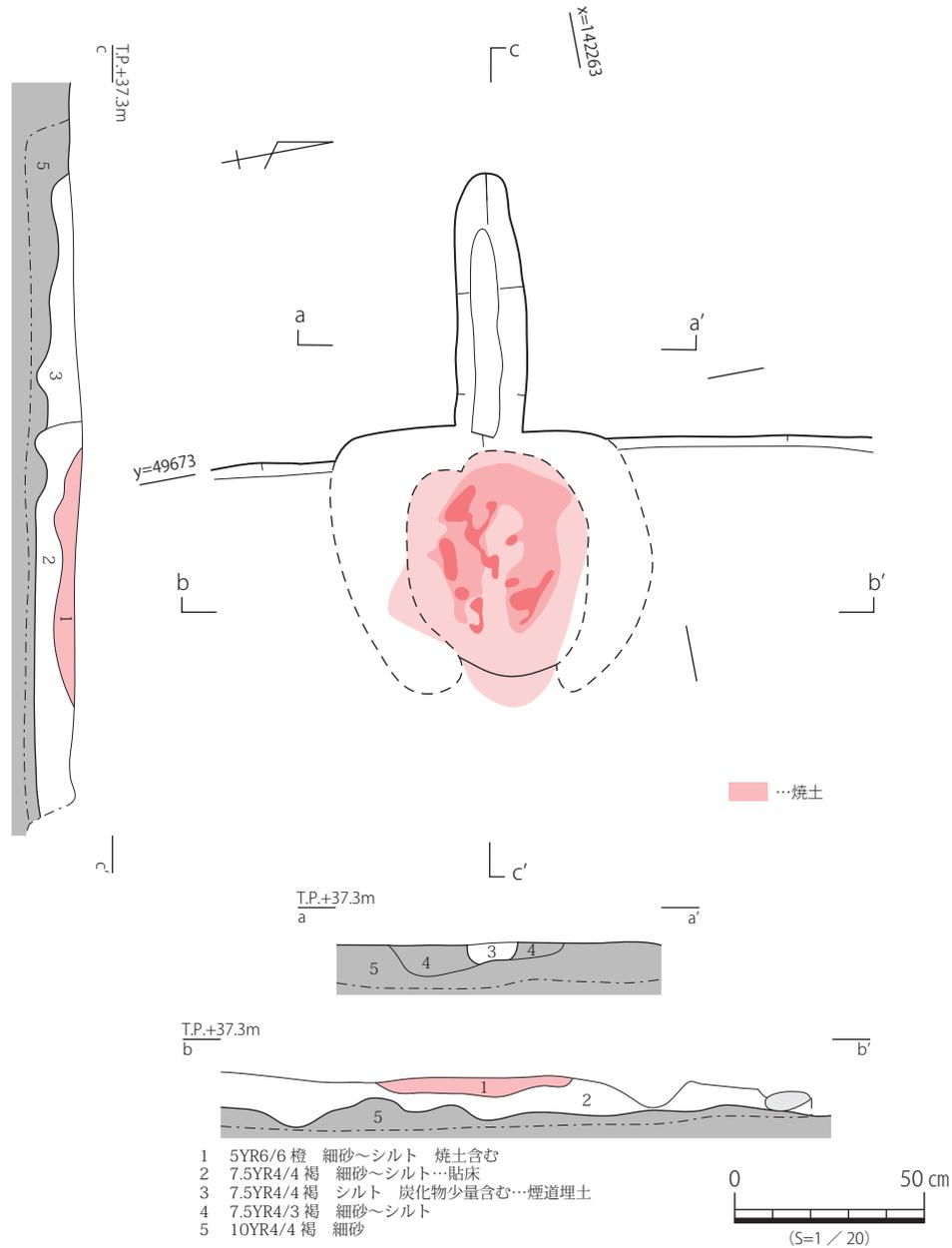


図 72 19- 竖穴 40 カマド 平・断面図

である。

いずれのピットからも遺物が出土していないため、時期は不明である。

(3) 土坑

18 - S K 8 (図 74)

第 18 調査区東側で検出した土坑である。一部を攪乱に切られ、南側は調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。検出面の標高は約 37.6m、主軸方位 N-82° -E である。長軸約 0.9m、短軸約 0.4m 以上、深さ約 0.2m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は、上層が暗褐粘質土とにぶい黄褐シルト混じり礫、下層が暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

19 - S K 8 (図 74)

第 19 調査区東側で検出した隅丸方形を呈する土坑である。主軸方位 N-7° -E、検出面の標高は約 37.7m である。長辺約 1.1m、短辺約 0.5m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は方形である。

埋土は単層で、灰黄褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

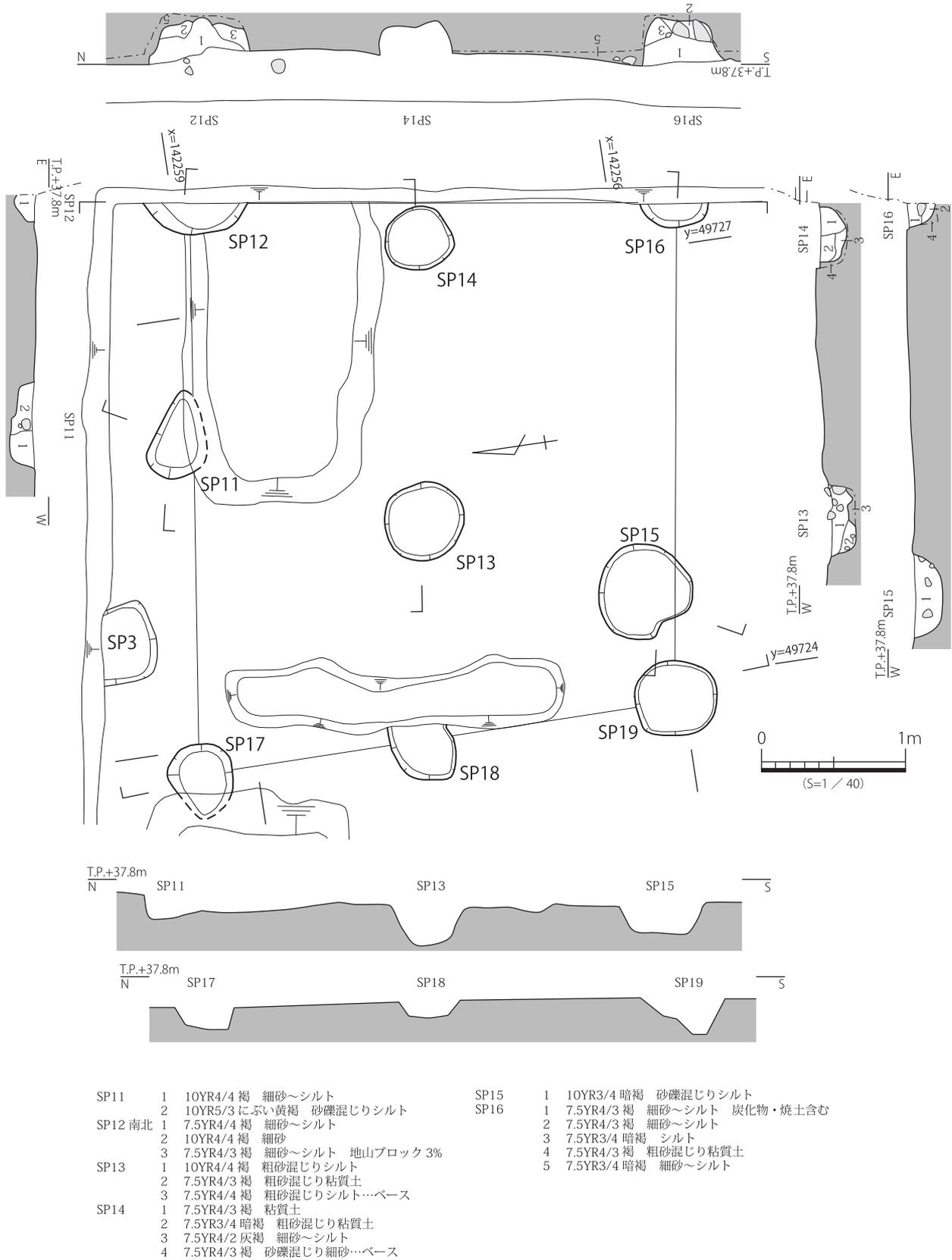


図 73 19-ピット群 平・断面図

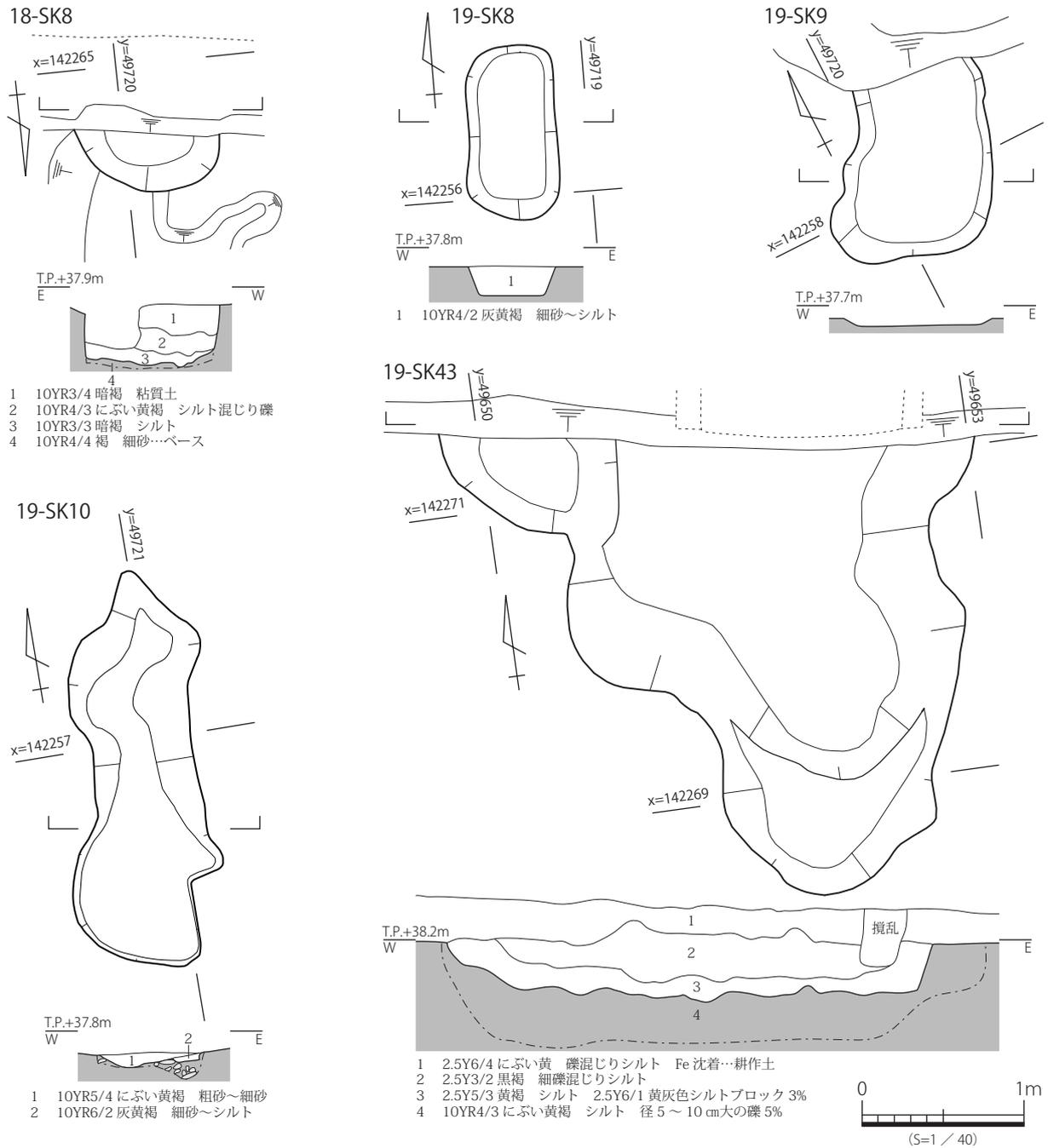


図 74 18-SK 8・19-SK 8・9・10・43 平・断面図

19-SK 9 (図 74)

第 19 調査区東側検出した土坑である。一部を攪乱に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-27° -E、検出面の標高は約 37.6m である。長軸約 1.2m 以上、短軸約 1.0m、深さ約 0.05m を測る。断面形状は浅い皿状である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

19-SK 10 (図 74)

第 19 調査区東側で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位 N-8° -E、検出面の標高は約 37.65m である。長軸約 2.4m、短軸約 0.7m、深さ約 0.05m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は上層がにぶい黄褐粗砂～細砂、下層が灰黄褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

19-SK43 (図74)

第19調査区西端で検出した不整形な形状の土坑である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-8°-W、検出面の標高は約38.2mである。長軸約3.0m、短軸約2.8m以上、深さ約0.3mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は上層が黒褐細礫混じりシルト、下層が黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

(4) 性格不明遺構

19-SX50 (図75・76)

第19調査区西端で検出した不整形な落込み状の遺構である。南側は調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。19-SD45を切る。主軸方位N-9°-W、検出面の標高は約38.2mである。長軸約5.0m以上、短軸約4.2m、深さ約0.6mを測る。断面形状は浅い皿状に段落ちである。

埋土は段落ち部分が黒褐シルトと暗褐シルト混じり細砂、灰黄褐シルト混じり細砂、浅い皿状の部分が灰黄褐細砂混じりシルトである。

遺物は須恵器杯蓋(145)、杯身(146)、甕(147～149)、土師器甕(150・151)、鉄器(M3)が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代後期中葉と考えられる。

(5) 溝

19-SD45 (図77)

第19調査区西側で検出した不整形な溝である。南側は調査区外に延び、西側はSX50に切られる。主軸方位は東N-40°-Eから北西N-88°-Wへ幅を広げながら湾曲する。検出面の標高は約37.2mである。長さ約10.6mを検出し、幅約1.0～2.0m以上で、断面形状は浅い皿状で段落ちを有する部分がある。検出面からの深さは約0.1mを測る。

埋土は上層が褐細砂～シルト、下層が褐シルトである。

遺物は須恵器杯蓋(152～155)が出土した。出土遺物と遺構の切合い関係から、TK10～MT85併行期、古墳時代後期前半と判断できる。

19-SD44 (図77)

第19調査区西側で検出した溝である。19-SD45に切られ、調査区外に延びるため、全体の規模

は不明である。主軸方位N-27°-W、検出面の標高は約37.2mである。長さ約3.3mを検出し、幅約0.6m、深さ約0.25mを測る。断面形状は逆台形で段落ちを有する部分がある。

埋土は上層がにぶい黄褐細砂～シルト、下層が褐粘質シルトである。

遺物は須恵器杯蓋(156)が出土した。出土遺物と遺構の切合い関係から、古墳時代後期前半と想定できる。

18・19-SD5 (図78)

第18・19調査区中央で検出した南北方向の溝である。9-SD205・11-SD2・32-SD20・36-SD10と同一の溝である。確認できている溝の総延長は約276mである。

主軸方位N-9°-E、検出面の標高は約37.9～38.0mである。第18・19調査区合わせて、長さ約7.6mを検出し、幅約1.7～2.5m、深さ約0.9mを測る。断面形状はV字形である。

埋土はa断面で、上層が暗褐シルト混じり細砂と暗褐シルト混じり細砂、中層が暗褐細砂～中粒砂で流水堆積と考えられる。下層がにぶい黄褐シルト混じり細砂～中粒砂で、流水堆積が確認できる。

b断面では、上層がにぶい黄褐細礫混じりシルトと暗褐粘質シルト、中層が褐粗砂と褐粘質シルト、流水堆積が確認できる。下層がにぶい黄褐粗砂混じり粘質シルトとにぶい黄褐細礫、褐粘質シルトで流水堆積と考えられる。

遺物は、上層の下部溝の西肩から須恵器高杯(158)、土師器杯(161)が出土した。

最下層からは須恵器高杯(159)、土師器甕(162)・甕(163)が出土した。このうち土師器甕(163)は完形で伏せ置き状態で出土している。

その他層位不明で須恵器杯身(157)、土師器脚部(160)が出土した。図示した遺物の他に、須恵器壺片・高杯片、土師器高杯片・高杯片・甕片・移動式カマド片、石器剥片(サヌカイト)が出土した。

出土遺物の年代と、周辺の調査成果から、飛鳥時代と判断できる。

18・19-SD1 (図79～81)

第18・19調査区東側で検出した南北方向の溝である。33-SD2と同一の溝である。調査区外に延びるが、北側の第9・36調査区では確認できな

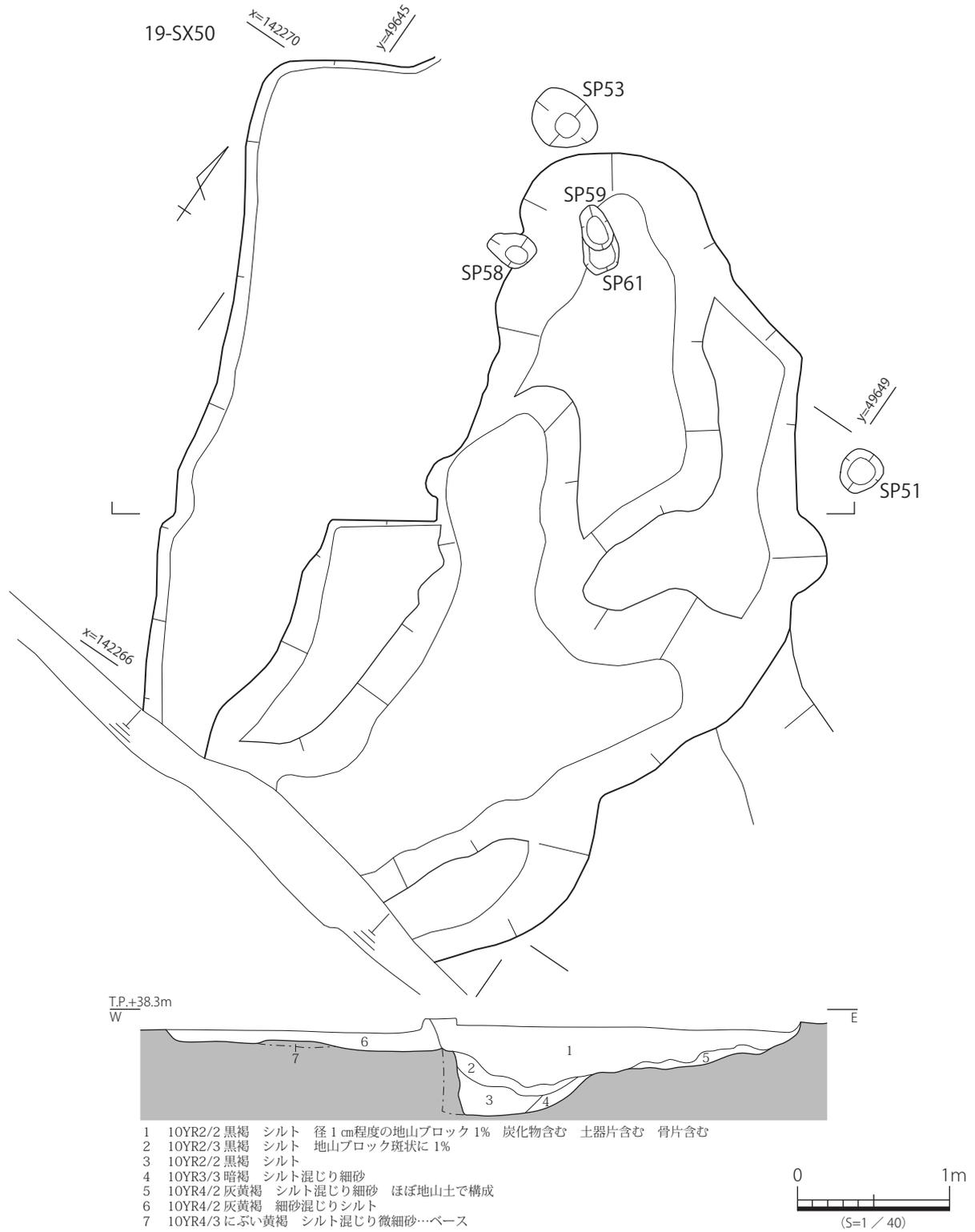


図 75 19-SX50 平・断面図

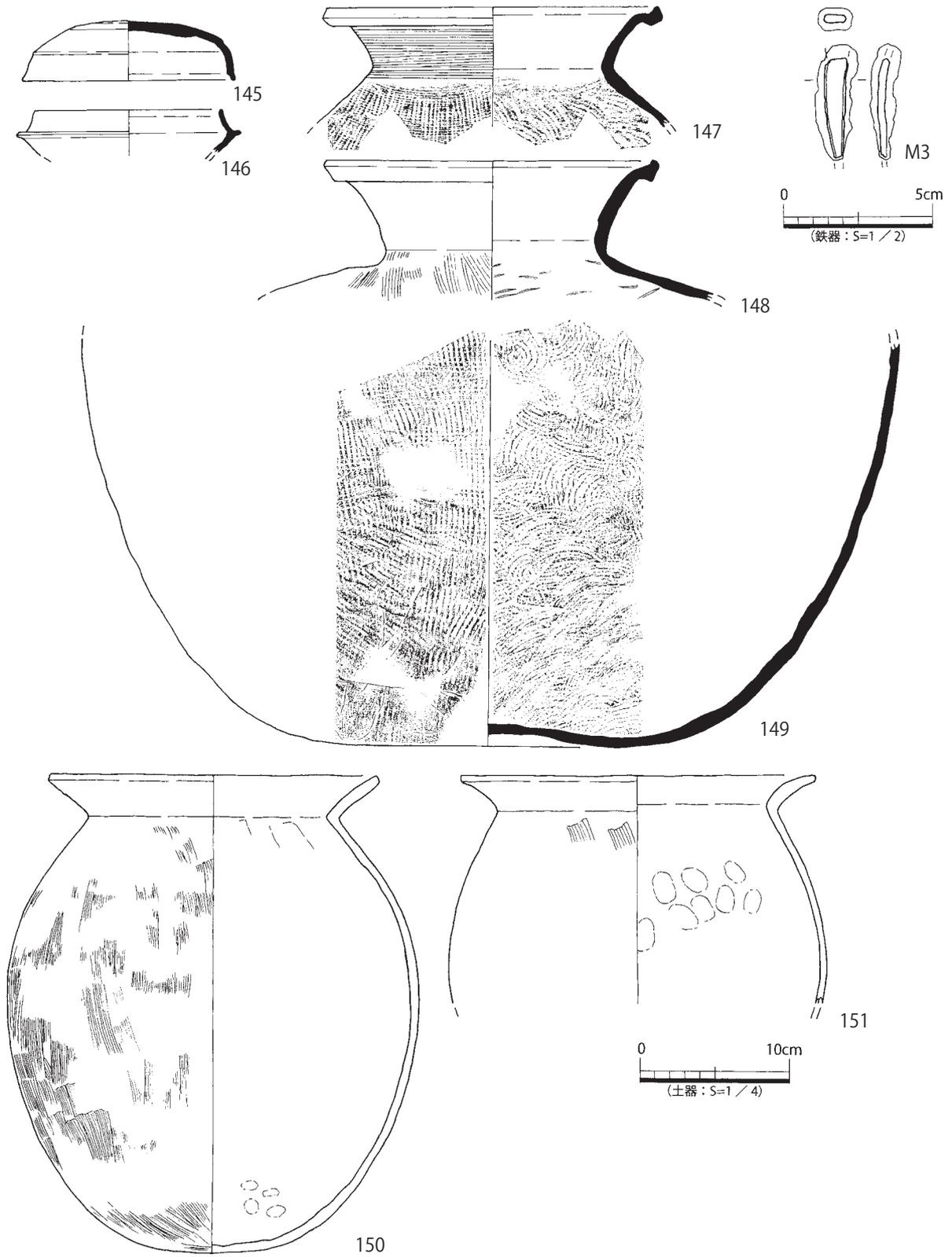


図 76 19-SX50 出土遺物実測図

った。確認できている溝の総延長は、約66mである。

主軸方位N-4°-W、検出面の標高は約37.55～37.7mである。第18・19調査区合わせて、長さ約7.5mを検出し、幅約2.9～4.0m、深さ約0.75mを測る。断面形状は逆台形で段落ちを有する部分がある。

埋土はa断面で上層がにぶい黄褐シルト混じり細砂、中層が灰黄褐細砂～中粒砂と灰黄褐シルト混じり細砂～中粒砂で流水堆積と考えられる。下層がにぶい黄褐微細砂とにぶい黄褐シルトブロック混じり微細砂～細砂、最下層がにぶい黄褐細砂～細礫と暗灰黄シルト混じり微細砂、暗灰黄シルト～粘土で、ラミナが確認でき、流水堆積と考えられる。

d断面では、上層が灰黄褐細砂～シルトと灰黄褐細砂～粗砂、にぶい黄褐シルトである。中層が灰黄褐粗砂～細礫で、ラミナが確認でき流水堆積と考えられる。下層が灰黄褐粘質シルトで流水堆積が確認できる。最下層が灰黄褐小礫～大礫混じり粗砂と灰黄褐粘質シルトで、ラミナが確認でき流水堆積と考えられる。

遺物は、堆積の単位ごとに上層から最下層に分けて取り上げを行った。上層から須恵器皿(164)・杯B(165)・甕(167)、土師器杯(166)、移動式カマド(168)出土した。

中層から須恵器蓋(169～175)、杯A(176～179)、杯B(180～182・184～189)、壺(191・192・195・197～199)、長頸壺(194・196)、平瓶(193)、鉢(190)、土師器杯(183・200・202)、皿(201・203)、甕(204)、器種不明体部片(205)が出土した。

下層から須恵器杯底部(206)が出土した。

最下層から須恵器蓋(207)・杯B(208・209)・壺(211)、土師器小型甕(210)・長胴甕(212)が出土した。

その他図示した遺物の他に、須恵器高杯片・杯A片・杯蓋片・杯身片・蓋片・壺片、土師器甕片・高杯片・甕片・鍋(把手)片・移動式カマド片、石器剥片(サヌカイト)、鹿骨が出土した。

出土遺物の年代から、奈良時代(平城Ⅱ)と判断できる。

#### 18・19-S D 7 (図79・81)

第18・19調査区東側で検出した南北方向の溝である。確認できている溝の総延長は約16.5mであ

る。直線的に主軸方位N-2°-Eで南北方向に調査区外まで延びる。検出面の標高は約37.6～37.7mである。長さ約7.2mを検出し、幅は約0.4m、深さ約0.25mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土はb断面で上層が黒褐粘質シルト、下層が灰黄褐細砂である。c断面で上層がにぶい黄褐細砂～シルト、下層が灰黄褐粗砂である。

遺物は須恵器杯(214)・杯B(215)・蓋(213)・壺(218)、土師器皿(216)・椀(217)が出土した。

図示した遺物の他に、須恵器壺片、土師器甕片が出土した。

出土遺物の年代から、奈良時代(平城Ⅱ)と判断できる。

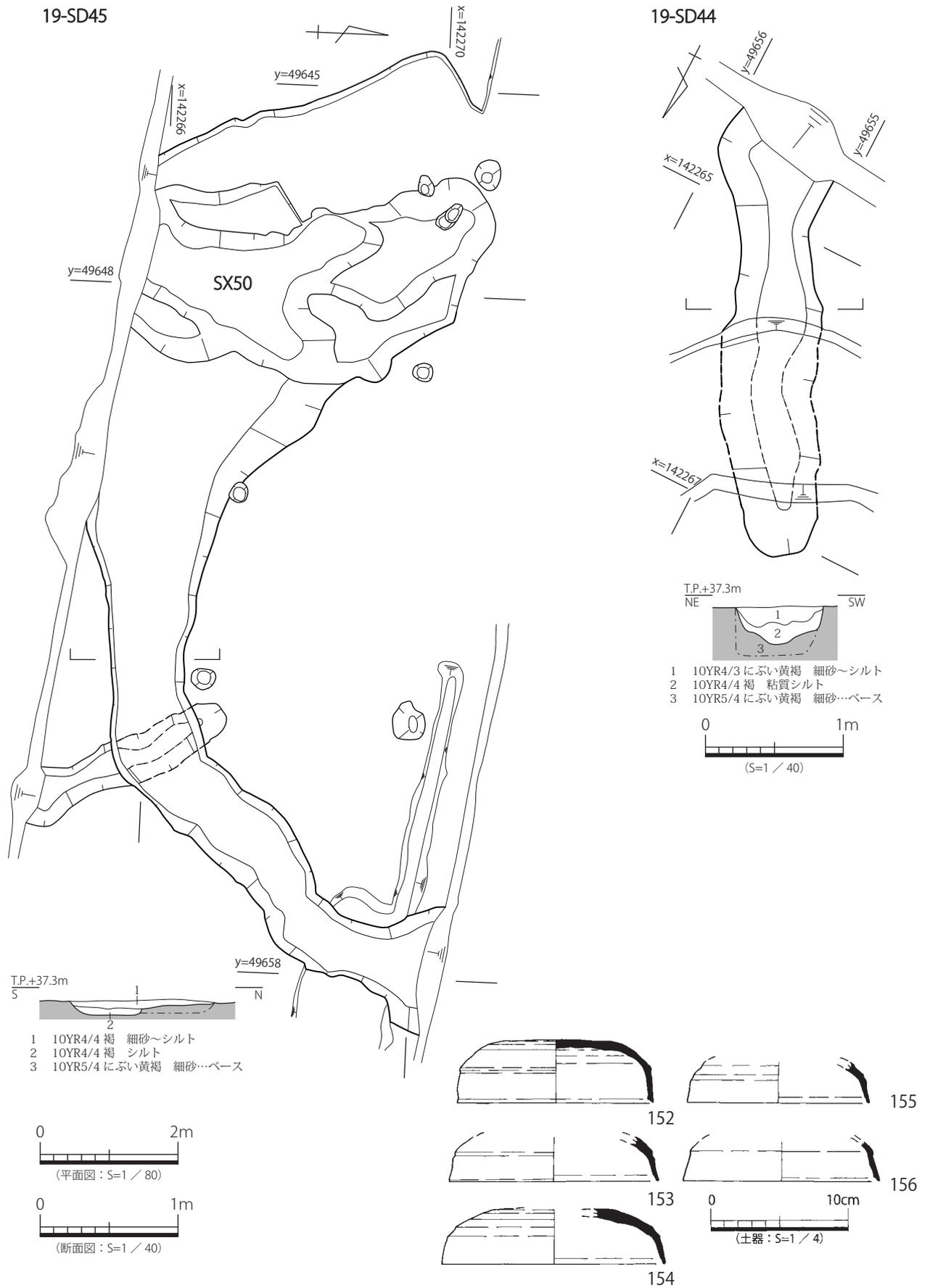


図 77 18・19-SD44・45 平・断面図及び出土遺物実測図

18・19-SD5

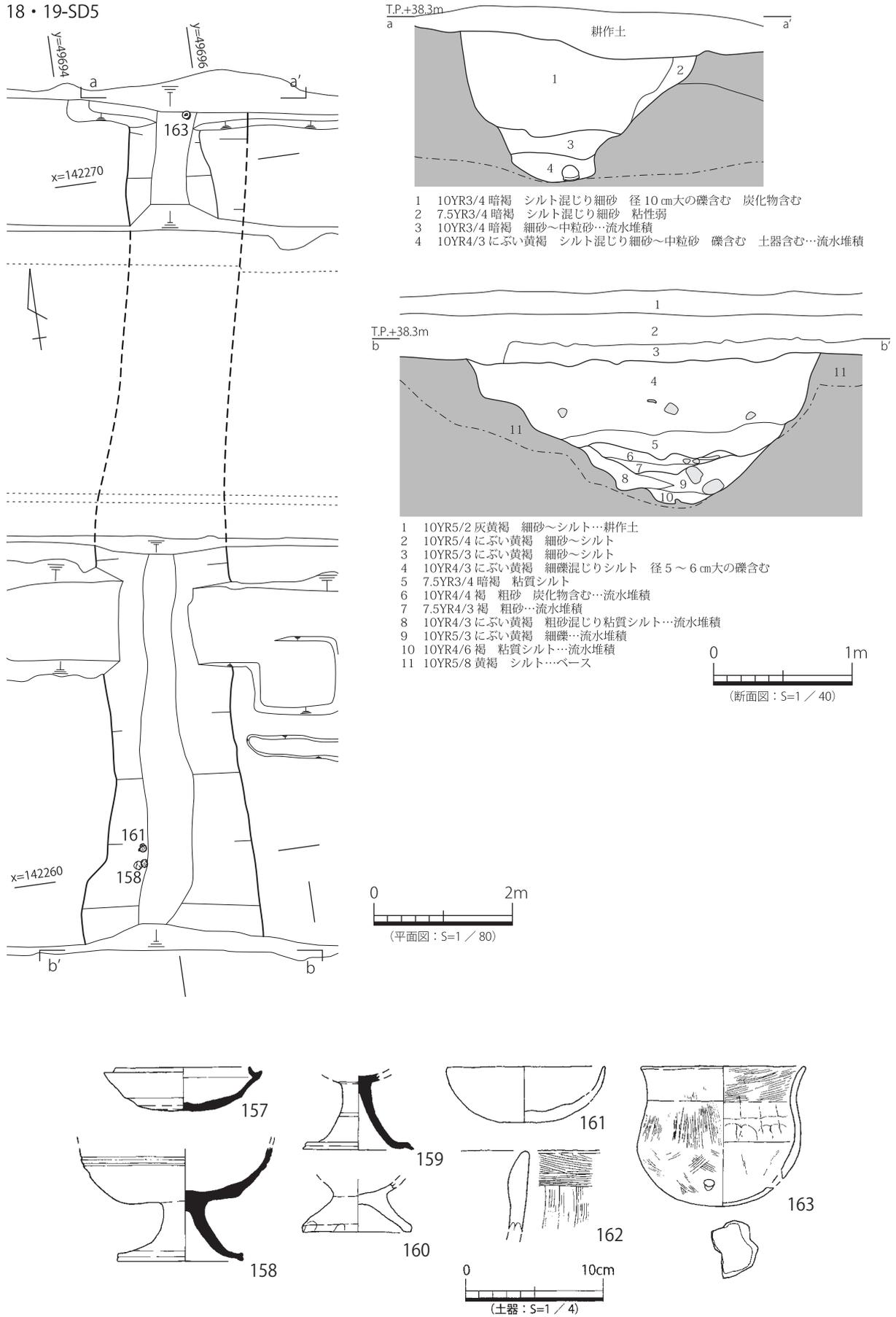


図 78 18・19-SD 5 平・断面図及び出土遺物実測図

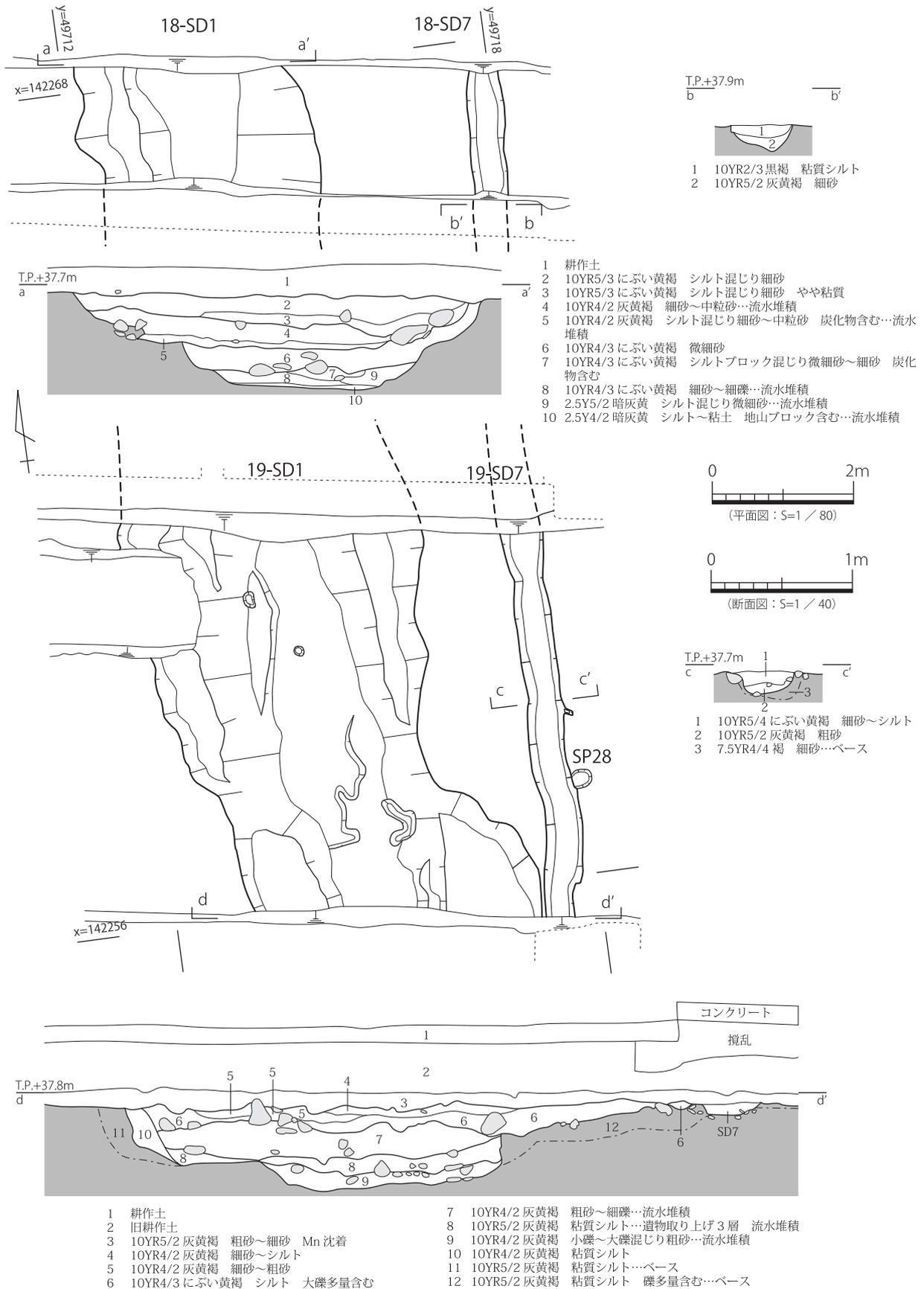


図 79 18・19-SD 1・7 平・断面図

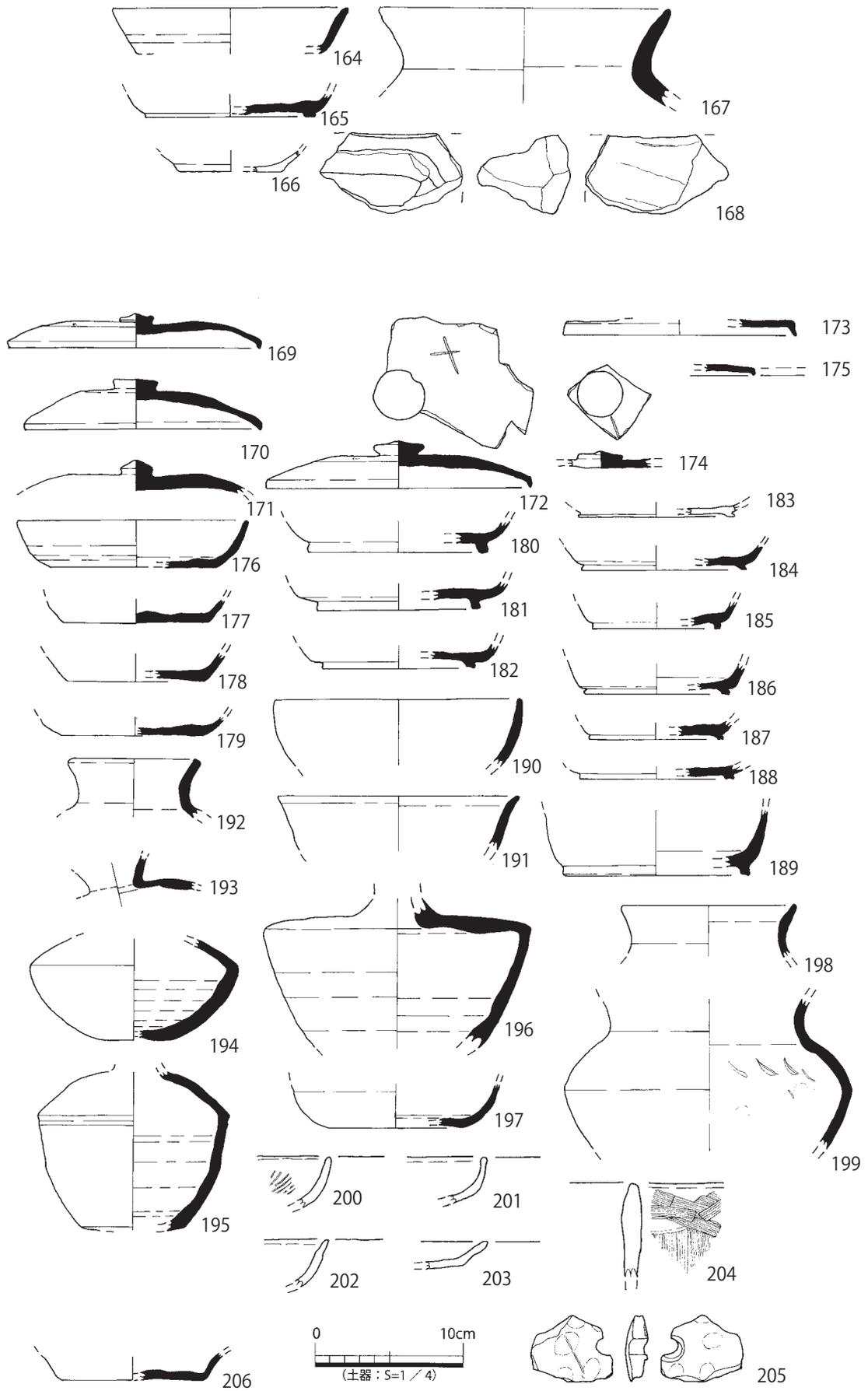


图 80 19-SD 1 出土遺物実測図

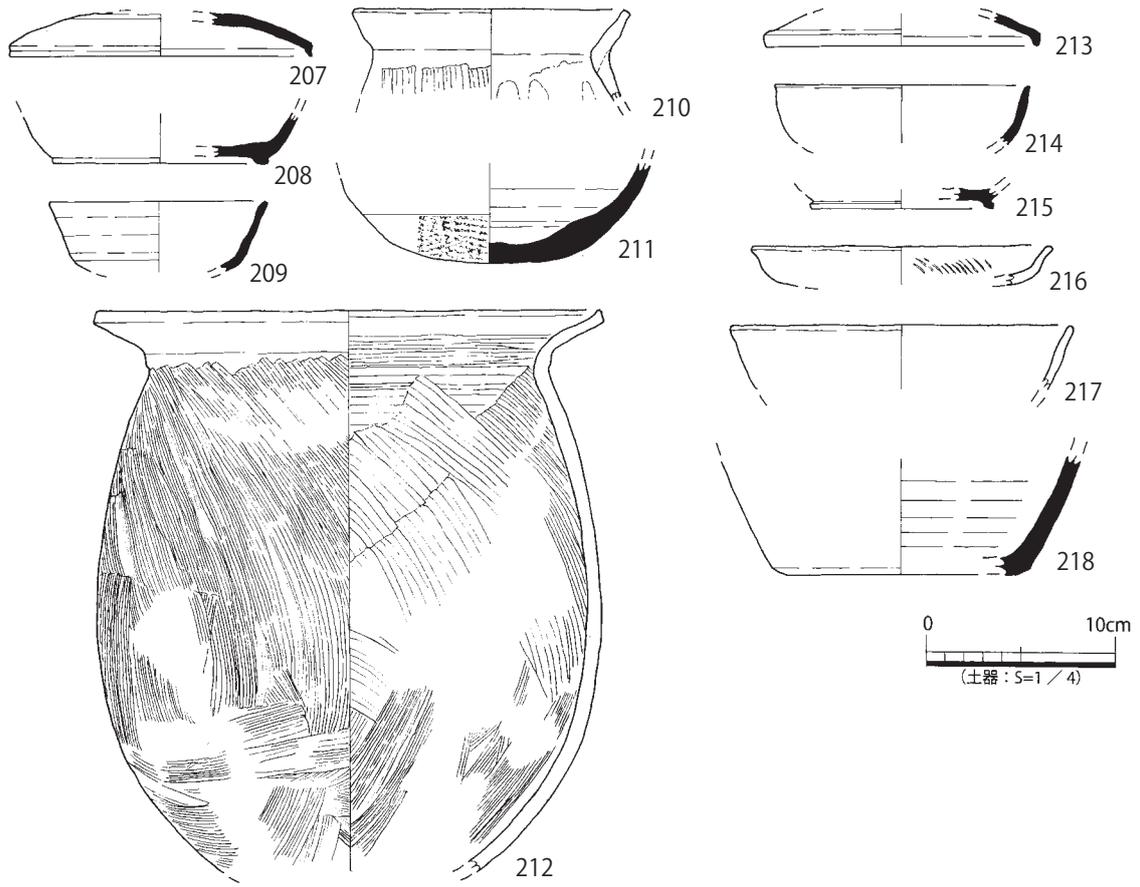


図 81 18・19-SD 1・7 出土遺物実測図

### 第Ⅲ章 まとめ

#### 第1節 萩前・一本木遺跡の集落の変遷

##### 1 はじめに

今回の萩前・一本木遺跡の調査では、竪穴建物14棟、掘立柱建物11棟を検出した。このほか集落に付属する柵列や溝、土坑、柱穴などを確認した。これまでの調査で明らかになった竪穴建物の数は108棟、掘立柱建物は45棟におよぶ。

調査成果により古墳時代中期～飛鳥時代までの約200年間は連続して、飛鳥時代以降14世紀前半までは断続的に、人間の営みが行われてきたことが判明している。

##### 2 時期区分と集落の変遷

発掘調査成果をもとに、萩前・一本木遺跡の集落変遷を7時期に区分する。Ⅰ期：古墳時代中期中葉～後半（須恵器出現以前～TK208）、Ⅱ期：古墳時代中期後半～末（TK23～TK47）、Ⅲ期：古墳時代後期初頭～後期前半（MT15～MT85）、Ⅳ期：古墳時代後期中葉～後期末（TK43～TK209）、Ⅴ期：飛鳥時代（TK217～TK46）、Ⅵ期：古代、Ⅶ期：中世である。

##### 【Ⅰ期：古墳時代中期中葉～後半】（図82）

Ⅰ期は、萩前・一本木遺跡の集落の開始期に相当する。

今回の調査では、竪穴建物3棟、溝1条を確認した。調査成果を合わせると、竪穴建物10棟、掘立柱建物2棟、溝2条、土坑1基となる。

またこの時期の竪穴建物は、前回の調査成果と同様に、散発的に確認できる傾向にある。

##### 【Ⅱ期：古墳時代中期後半～末】（図82）

Ⅱ期は、萩前・一本木遺跡の拡大期に相当する。

今回の調査では、竪穴建物5棟、土坑2基、溝1条を確認した。調査成果を合わせると、竪穴建物24棟、掘立柱建物1棟、土坑6基、溝2条となる。

この時期の竪穴建物は、Ⅰ期に比べ建物間の距離が近く、集住する傾向を示し始める。また南側に居住域の範囲が広がることが判明した。

##### 【Ⅲ期：古墳時代後期初頭～後期前半】（図83）

Ⅲ期は、萩前・一本木遺跡の最盛期に相当する。

今回の調査では、竪穴建物2棟、溝2条を確認した。調査成果を合わせると、竪穴建物30棟、掘立柱建物7棟、溝4条となる。

今回の調査で確認できた建物は2棟と減少する。逆に遺跡の北西側では増加し、密集する傾向を示すことから、集落の集住がさらに進んだ可能性が考えられる。

##### 【Ⅳ期：古墳時代後期中葉～末】（図83）

Ⅳ期は、萩前・一本木遺跡の衰退期に相当する。

今回の調査では、竪穴建物2棟、掘立柱建物1棟、柵列1列、土坑2基、溝1条、性格不明遺構1基を確認した。調査成果を合わせると、竪穴建物23棟、掘立柱建物7棟、土坑14基、溝8条、性格不明遺構1基となる。

この時期の遺構は、ほとんどが遺跡の北側・北西側で確認できた。集落の区画を意図としたような溝も掘削されており、土地利用が限定されていく傾向がうかがえる。

##### 【Ⅴ期：飛鳥時代】（図84）

今回の調査では、前回の調査で確認した溝の一部を検出したのみである。

##### 【Ⅵ期：古代】（図84）

今回の調査では、前回の調査で確認した溝の北側の延長を検出したのみである。

##### 【Ⅶ期：中世】（図85）

今回の調査では、前回の調査で確認した溝の一部を検出したほか、掘立柱建物1棟を確認した。掘立柱建物は1間×1間の建物であり、居住のための建物とは想定し難い。

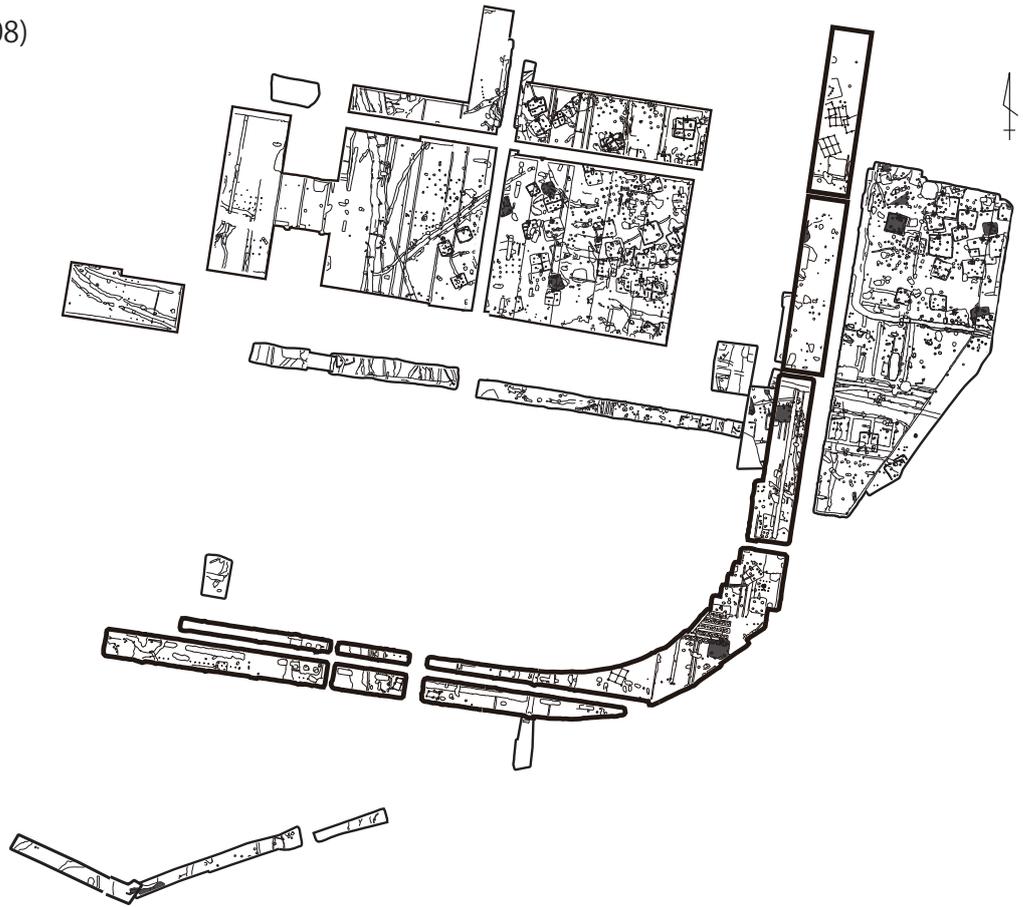
##### 3 まとめ

以上、萩前・一本木遺跡の調査成果をみてきた。

古墳時代中期から飛鳥時代までの約200年間の変遷を見ていくと、Ⅰ期は散発的に居住を開始。Ⅱ期は集落域全体が拡大。Ⅲ期は集住化。Ⅳ期は集落の境界の明確化と集住、いう変遷が見えてくる。

首長居館を造営するだけの勢力をもった萩前・一本木遺跡の集落の広がりや変遷が、今後周辺の調査成果が蓄積されることによって判明すると考えられる。今後の調査成果に期待したい。

古墳中期中葉 (～TK208)



古墳中期後半～末 (TK23～TK47)

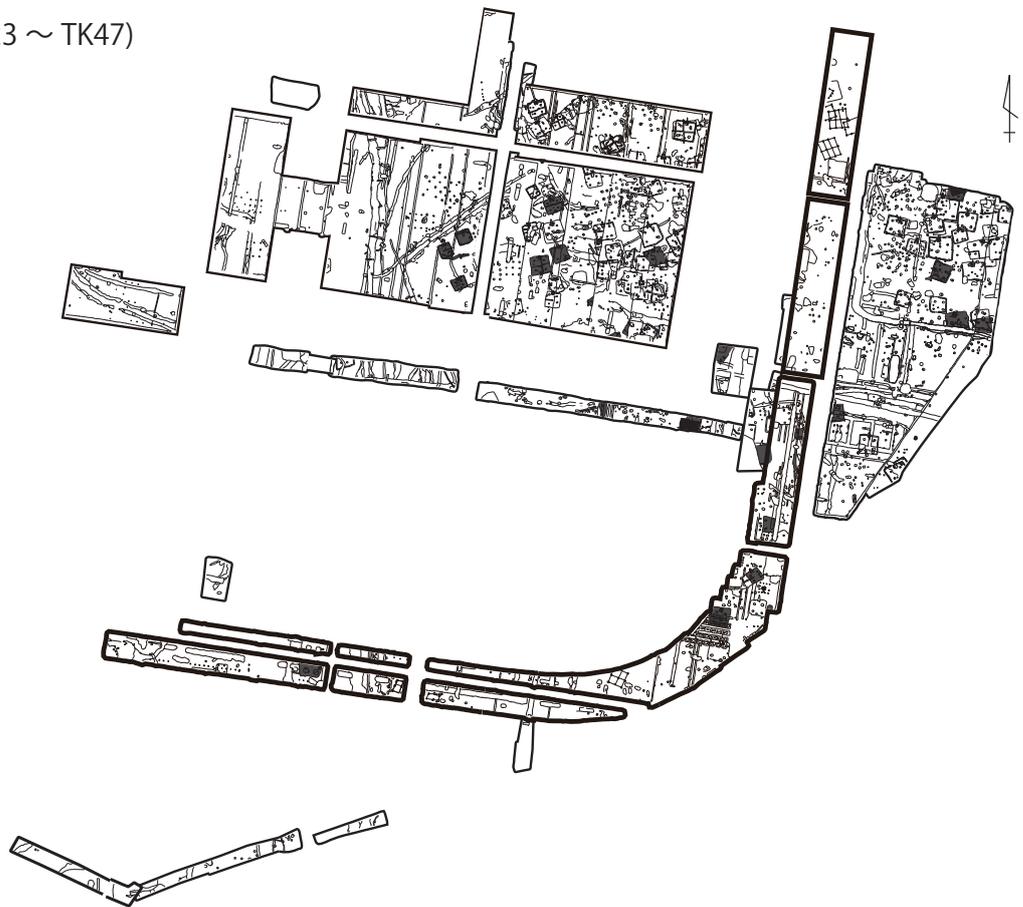
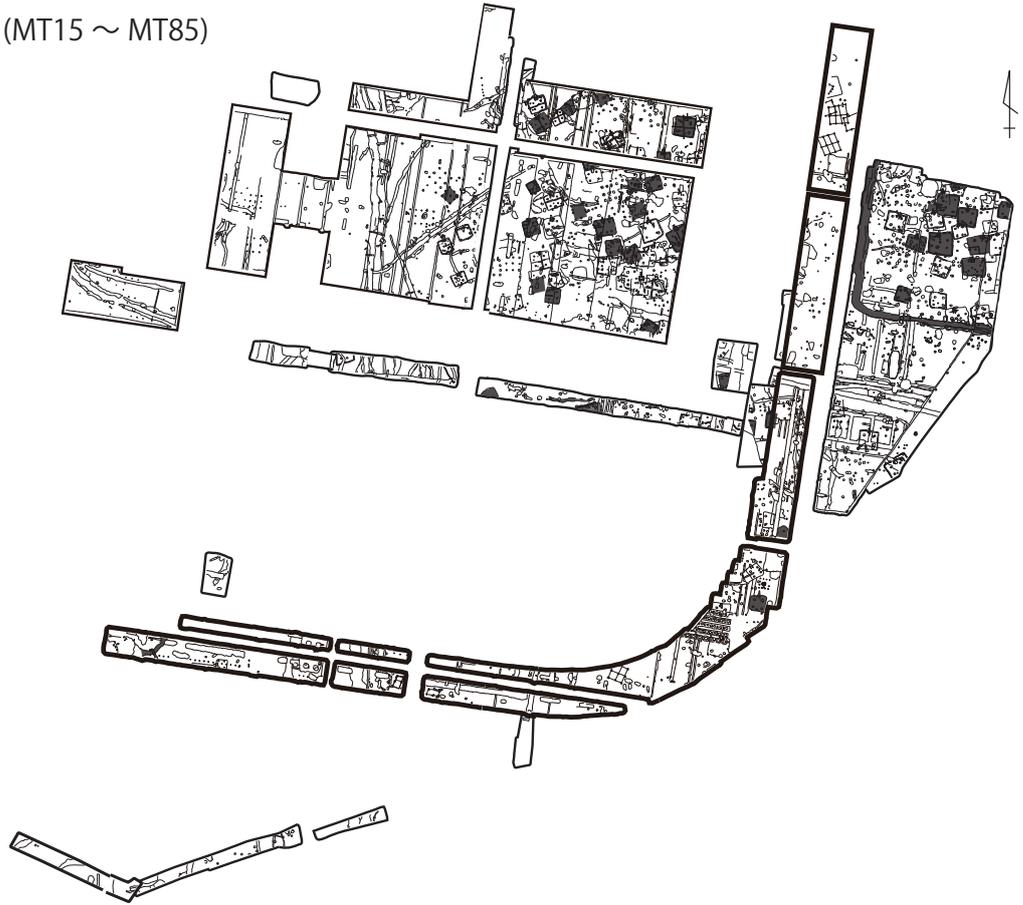


図 82 時代変遷図 (古墳時代中期)

古墳後期初～後期前半 (MT15 ~ MT85)



古墳後期中葉～後期末 (TK43 ~ TK209)

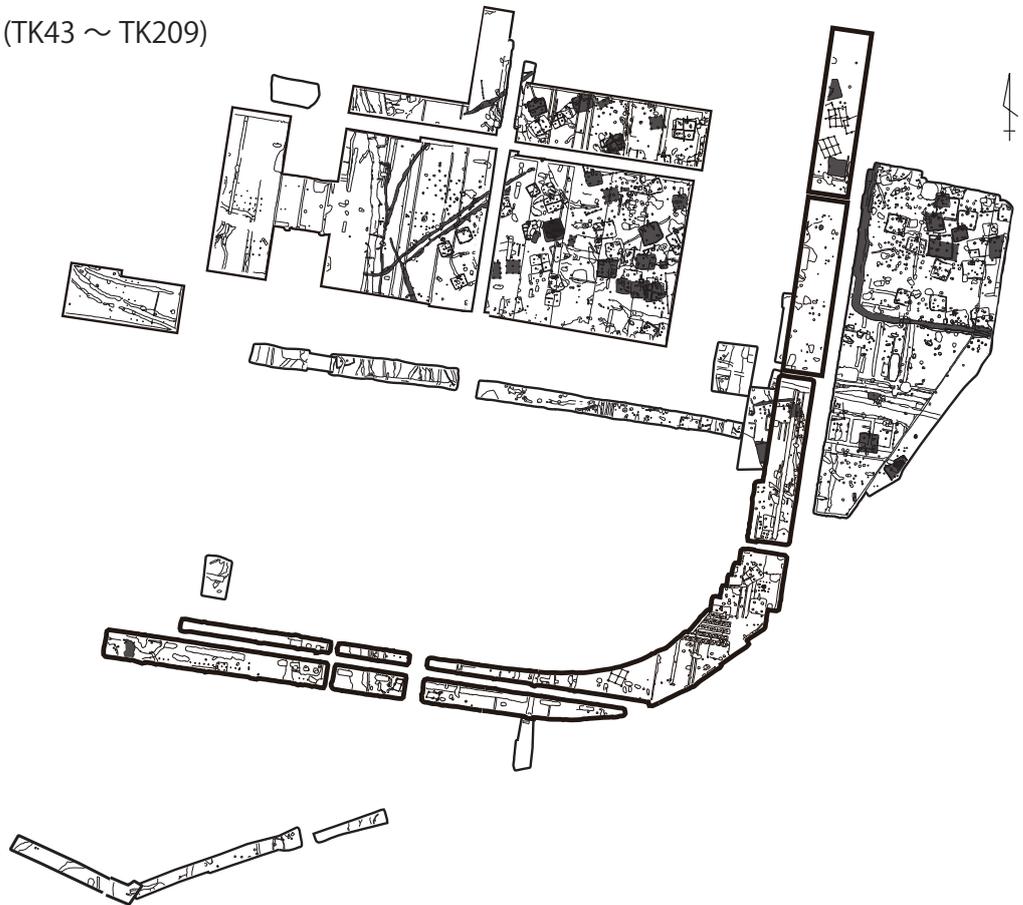
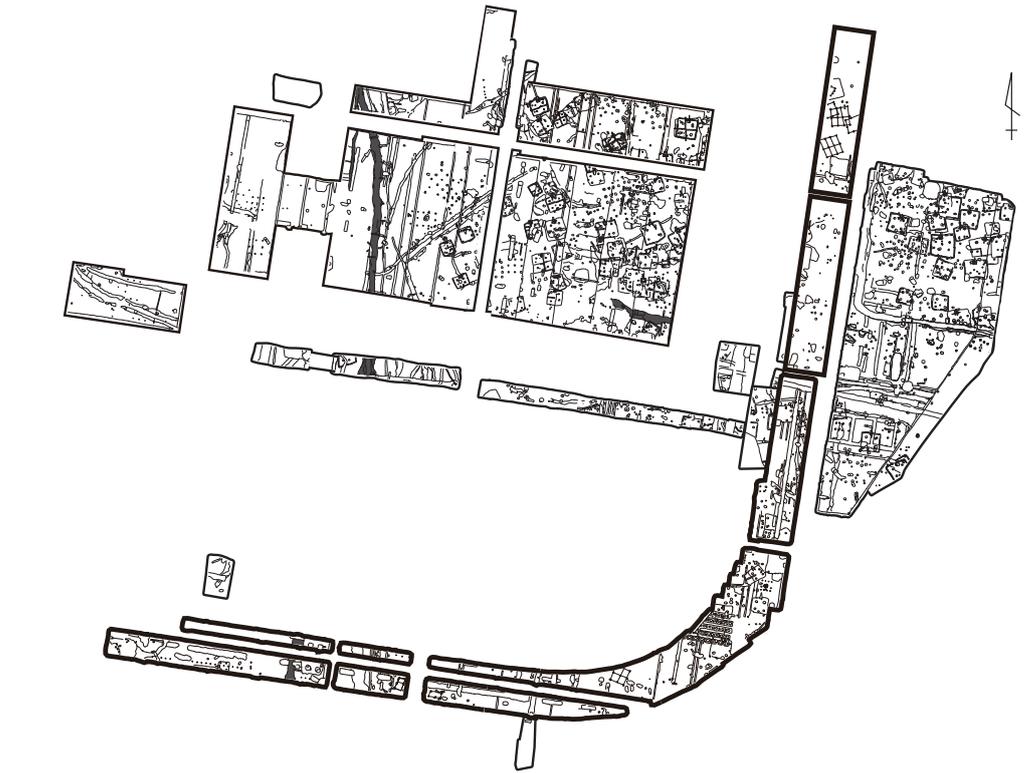


図 83 時代変遷図（古墳時代後期）

飛鳥時代 (TK217 ~)



古代

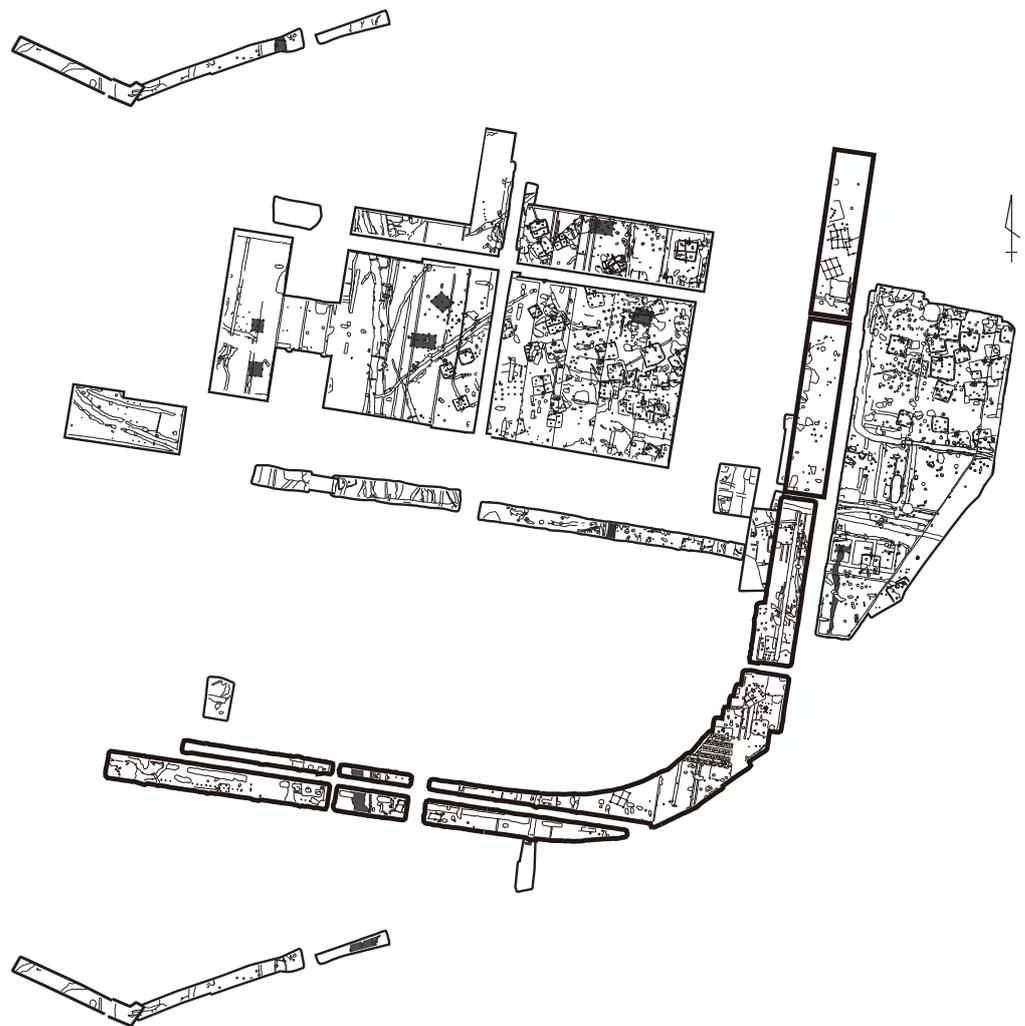


図 84 時代変遷図 (飛鳥~古代)

中世

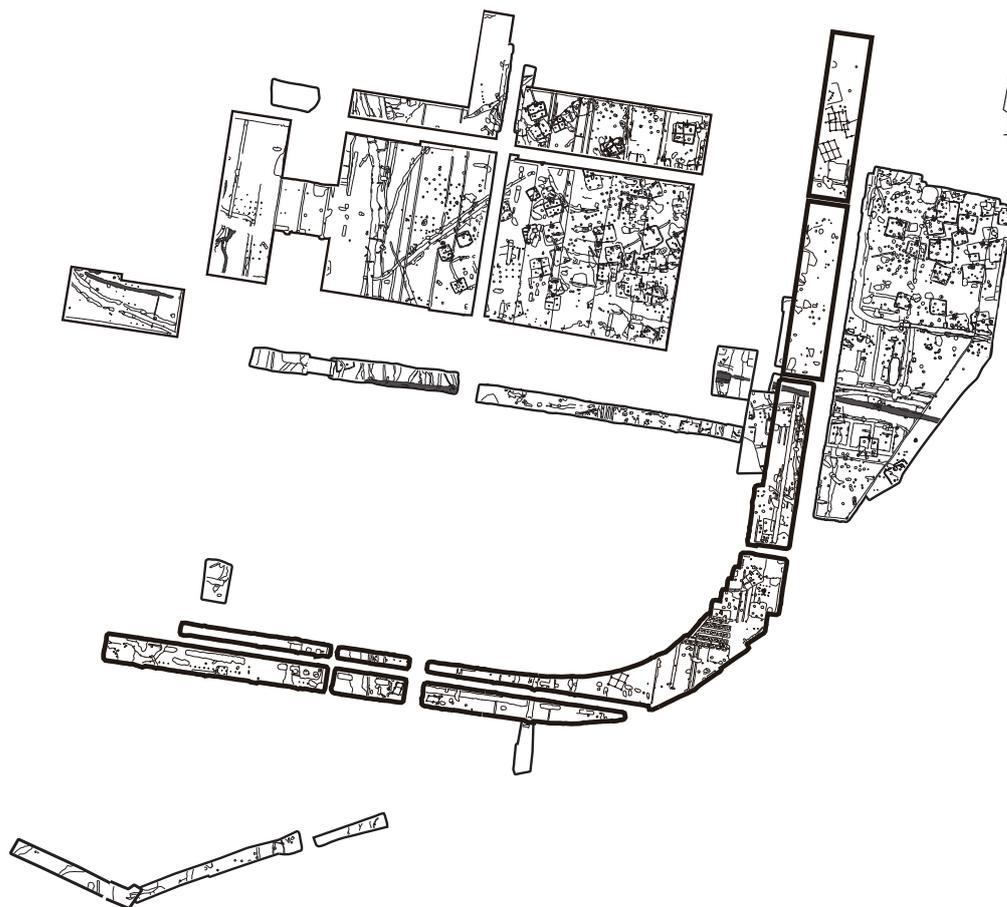


図 85 時代変遷図（中世）

表 3 遺構一覧表

竪穴建物	時期
2-竪穴51	古墳時代中期中葉
16-竪穴 4	古墳時代中期中葉
15-竪穴10	古墳時代中期中葉～後半
15-竪穴20	古墳時代中期後半
15-竪穴40	古墳時代中期後半
19-竪穴20	古墳時代中期後半
16-竪穴 1	TK23～47
16-竪穴 3	TK47
15-竪穴50	TK47～10
16-竪穴 2	TK10～MT85
1-竪穴 1	TK209
1-竪穴40	TK209～217

掘立柱建物・柵列	時期
15-柵列 2	古墳時代後期
15-掘立 2	古墳時代後期後半
15-掘立 1	平安

土坑	時期
16-SK 5	TK208～23
16-SK10	古墳時代中期後半
1-SK10	古墳時代後期後半
2-SK54	TK43～209

溝	時期
16-SD11	古墳時代中期中葉
15-SD24	TK23～MT15
19-SD44	古墳時代後期前半
19-SD45	TK10～MT85
15-SD22	古墳時代後期
18・19-SD 5	飛鳥
18・19-SD 1	奈良時代
18・19-SD 7	奈良時代
15-SD21	中世

その他	時期
19-SX50	古墳時代後期中葉

表 4 土器観察表①

図版番号	挿図番号	報文番号	遺構層位	種類器種(部位)	口径底径器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
15	4	1	1-竪穴1 SP26	須恵器 杯蓋	(13.2) - [2.9]	口縁部と天井部の境は丸くなだらかで、内端部は丸く収める。 [外]回転け [内]回転け	[外]灰5Y6/1 [内]灰5Y5/1 普:3mm以下の細粒 良	
15	4	2	1-竪穴1 SP26	須恵器 杯蓋	(12.0) - [2.4]	口縁部と天井部の境は丸くなだらかで、内端部は凹線が巡る。 [外]回転け [内]回転け	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:3mm以下の細粒 良	
15	4	3	1-竪穴1 埋土	須恵器 杯蓋	(12.0) - [2.4]	口縁部と天井部の境は弱く屈曲し、端部は凹面をなす。 [外]回転け [内]回転け	[外]黄灰2.5Y6/1 [内]灰N5/ 普:3mm以下の細粒 良	
15	4	4	1-竪穴1 埋土	須恵器 杯蓋	(12.8) - [2.9]	口縁部と天井部の境は稜が巡り、内端部は段を有する。 [外]回転け [内]回転け	[外]灰N6/ [内]灰白N7/ 普:3mm以下の細粒 良	
15	4	5	1-竪穴1 埋土	須恵器 甕 (口縁)	- - [4.05]	口縁部は外反し、端部は有稜凹端面を持つ。外面に突帯2条が巡り、その下に櫛描波状文を配する。 [外]回転け・波状文 [内]回転け	[外]灰N6/ [内]灰7.5Y5/1 普:3mm以下の石英・長石・黒色粒 良	
15	4	6	1-竪穴1 埋土	土師器 瓶 (把手)	長さ[5.75] 幅[3.7] 厚み[3.8]	把手は反りが強く、上面はナデを施す。把手接合技法は差込か。 [外]指け・指頭圧痕 [内]け	[外]橙5YR6/6 [内]明赤褐5YR5/8 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
15	4	7	1-竪穴40	須恵器 杯蓋	(12.8) - [3.0]	口縁部は屈曲し、端部は丸く収める。 [外]回転け・回転け削り [内]回転け	[外]灰N5/ [内]灰N5/ 普:2mm以下の細粒 良	
15	4	8	1-竪穴40	須恵器 杯蓋	- - [3.0]	口縁部と天井部の境は丸くなだらかで、端部は丸く収める。 [外]回転け [内]回転け	[外]灰N6/ [内]灰N7/ 普:1mm以下の細粒 良	
15	4	9	1-竪穴40	須恵器 杯身	(13.6) - [2.2]	口縁部の立ち上がりは短く内傾し、端部は丸く収める。 [外]回転け [内]回転け	[外]灰N6/ [内]灰N6/ 普:1mm以下の細粒 良	
15	4	10	1-竪穴40	須恵器 杯身	(13.6) - [2.1]	口縁部の立ち上がりは短く内傾し、端部は丸く収める。立ち上がりの貼付痕有り。 [外]回転け [内]回転け	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:1mm以下の細粒 良	
15	4	11	1-竪穴40	土師器 甕	(13.8) 1.1 口縁[8.4] 底部[5.4]	粗製の小型甕である。 [外]け [内]け	[外]にぶい赤褐5YR5/4 [内]褐灰5YR4/1 普:3mm以下の石英・長石 不良	
15	4	12	1-SK10	土師器 甕	- - [14.5]	口頸部は湾曲・外反する。 [外]け [内]マツ・ハ	[外]橙7.5YR6/6 [内]橙5YR6/6 普:2mm以下の石英・長石 良	
4	13	1-清掃中	須恵器 杯身	(11.8) - [2.45]	口縁部の立ち上がりは短く内傾し、端部は丸く収める。 [外]回転け [内]回転け	[外]灰N6/ [内]灰N6/ 精良:1mm以下の細粒 良		
4	14	1-東壁清掃中	須恵器 杯身	- - [3.0]	口縁部の立ち上がりは短く内傾し、端部は丸く収める。 [外]回転け [内]回転け	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2 精良:1mm以下の細粒 不良		
4	15	1-東壁断面	須恵器 甕 (口縁部)	21.6 - [5.5]	口縁部は外反し、端部は端面をもつ。端部外面に突帯が1条巡る。 [外]回転け [内]回転け	[外]灰N5/ [内]灰N6/ 精良:2mm以下の細粒 良		
15	23	16	2-竪穴51	土師器 甕 (口縁部)	(19.4) - [4.4]	口縁部はくの字状に屈曲し、端部は内傾する面をもち内側に肥厚する。 [外]ヨナけ [内]ヨナけ	[外]明褐7.5YR5/6 [内]黄褐10YR5/6 普:3mm以下の長石・石英・金雲母 良	布留系
15	23	17	2-SK54	須恵器 高杯 (脚部)	- (10.9) [2.0]	裾端部は下方に曲げて丸く収める。 [外]回転け [内]回転け	[外]灰白7.5Y7/1 [内]灰白7.5Y7/1 普:1mm以下の細粒 良	
15	23	18	2-重機掘削	土師器 杯	(12.4) - [3.9]	碗形を呈す。口縁は内湾し、端部は丸く収める。 [外]ヨナけ・底部:一方向の平行け [内]け	[外]橙5YR7/6 [内]橙5YR7/6 普:3mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
18	26	19	15-竪穴10 埋土	須恵器 杯蓋	(11.6) - [4.0]	口縁部と天井部の境は強い突線状の強い稜が巡る。端部は外方に突出し、ほぼ接地する面を持つ。天井部は低く平坦。 [外]回転け・回転け削り(天井部全面に及ぶ) [内]回転け	[外]灰N5/ [内]灰N6/1 精良:1mm以下の細粒・2mmの黒色粒 堅緻	

表5 土器観察表②

図版番号	挿図番号	報文番号	遺構層位	種類器種(部位)	口径底径器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
	26	20	15-竪穴10埋土	須恵器蓋(つまみ)	3.5 0.9 [1.5]	つまみは扁平で少し窪み中央がわずかに盛り上がる。 [外]回転テ [内]回転テ	[外]灰N6/ [内]灰白N7/ 普:2mm以下の細粒良	
	26	21	15-竪穴10埋土	土師器高杯	(14.4) - [2.9]	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部はわずかに外反する。 [外]マツ [内]マツ	[外]にぶい橙7.5YR7/6 [内]浅黄橙7.5YR8/4 普:1mm以下の石英・長石良	
18	26	22	15-竪穴10埋土	土師器高杯(脚部)	- (13.5) [8.7]	脚柱部はやや太く、裾部にかけてラップ状に大きく開く。 [外]テ・化粧土 [内]粘土紐巻上げ痕・絞り痕	[外]橙2.5YR6/8 [内]橙2.5YR6/8 普:1.5mm以下の石英・長石・赤色粒良	
18	26	23	15-竪穴10埋土	土師器甕(口縁)	(17.6) - [6.0]	口頸部は湾曲・外反し、端部は上方に端面を持つ。 [外]マツ [内]マツ	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/3 普:3mm以下の石英・長石・赤色粒良	
18	26	24	15-竪穴10埋土	土師器甕(口縁)	(19.4) - [5.5]	口頸部はくの字状に屈曲・内湾気味に立ち上がる。端部は内側に肥厚し、上方に端面を持つ。 [外]テ [内]テ	[外]にぶい黄橙10YR6/4 [内]にぶい黄橙10YR6/4 普:2mm以下の石英・長石・金雲母・赤色粒・黒色粒良	
18	26	25	15-竪穴10埋土	土師器甕(口縁)	(23.0) - [6.6]	口頸部は屈曲・外反し、端部は外方に面を持つ。 [外]ウ [内]板テ	[外]灰白10YR8/2 [内]にぶい黄橙10YR7/2・にぶい黄橙10YR7/3 普:3mm以下の石英・長石・赤色粒良	
18	26	26	15-竪穴10埋土	土師器甕(口縁)	10.0 - [6.3]	口縁部はほぼ直立し、端部は先細りしている。 [外]マツ [内]マツ	[外]灰白2.5YR8/2 [内]黒7.5Y2/1 粗:5mm以下の石英・赤色粒良	
	26	27	15-竪穴10埋土	土師器甕(口縁)	- - [3.0]	口縁部は直口し、端部は上方に端面をもつ。 [外]ウ・テ [内]ウ	[外]明赤褐5YR5/6 [内]にぶい橙7.5YR6/4 普:3mm以下の石英・長石良	
	26	28	15-竪穴10埋土	弥生土器甕(口縁)	- - [5.1]	頸部は屈曲し、端部はわずかに上下に肥厚する。 [外]テ [内]テ	[外]にぶい橙7.5YR6/4 [内]にぶい橙7.5YR6/4 普:1mm以下の石英・長石・角閃石良	
	26	29	15-竪穴10埋土	弥生土器(底部)	- 6.0 [1.5]	平底の底部である。 [外]指頭圧痕 [内]-	[外]にぶい黄橙10YR5/3 [内]にぶい黄橙10YR6/4 粗:5mm以下の石英・長石良	
18	28	30	15-竪穴20貼床	土師器杯	12.5 - -	碗形を呈す。口縁部は内湾し、端部は先細りしている。 [外]カズリ・ヘリカキ・化粧土・底部:一方向の平行テ [内]マツ	[外]橙5YR6/6 [内]灰白10YR8/2 普:3mm以下の長石・石英・赤色粒良	
	28	31	15-竪穴20埋土	土師器高杯(杯部)	(14.8) - [4.0]	外反高杯。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや開く。端部は丸く収める。 [外]テ [内]テ	[外]黒褐10YR3/1 [内]浅黄橙10YR8/3・褐灰10YR4/1 粗:3mm以下の長石・石英良	
18	28	32	15-竪穴20貼床	土師器高杯	(13.2) [9.0] [9.2]	碗形高杯。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、端部は丸く収める。脚部は低脚で、脚柱部と裾部との境は屈曲する。 [外]テ [内]マツ	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4 粗:2mm以下の長石・石英・赤色粒良	
16	28	33	15-竪穴20 SP31	土師器甕	(10.6) - [8.1]	小型甕。口縁部はやや外傾し端部は丸く収める。被熱により磨耗著しい。 [外]マツ [内]テ・ウ・コゲ付着	[外]にぶい橙7.5YR5/4 [内]黒褐7.5YR3/1・褐7.5YR4/6 粗:3mm以下の長石・石英良	
	28	34	15-竪穴20貼床	土師器甕	(14.6) - [8.3]	口頸部はゆるやかに屈曲・外傾し、端部は丸く収める。 [外]テ [内]ウ・指頭圧痕	[外]明赤褐2.5YR5/6 [内]橙5YR6/8・明赤褐5YR5/8 粗:3mm以下の石英・長石良	
16	28	35	15-SK75	土師器甕	(15.0) - [7.85]	口頸部は弱く屈曲・外傾し、端部は丸く収める。 [外]テ [内]ウ	[外]橙5YR6/6 [内]橙5YR6/6 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒良	
	28	36	15-竪穴20貼床	土師器甕	(14.6) - [9.0]	口頸部はゆるやかに屈曲・外傾し、端部は丸く収める。 [外]テ [内]ウ・指頭圧痕	[外]明褐7.5YR5/6・にぶい黄橙10YR7/2 [内]橙5YR6/8 粗:3mm以下の石英・長石良	
	28	37	15-竪穴20貼床	土師器甕	(19.2) - [5.5]	口頸部は屈曲・外反し、端部は丸く収める。 [外]マツ [内]ウテ	[外]橙5YR7/6 [内]橙5YR6/6 粗:2mm以下の長石・石英・赤色粒良	

表 6 土器観察表③

図版番号	挿図番号	報文番号	遺構層位	種類器種(部位)	口径底器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
	28	38	15-堅穴20 貼床	土師器 甕 (口縁)	(19.2) - [4.1]	口縁部は外傾し、端部は丸く収める。 [外]ナデ・ハク [内]ナデ・ハク	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]橙7.5YR6/6 普:1mm以下の石英・長石 良	
18	28	39	15-堅穴20 SP31	土師器 甕	(19.0) - [32.3]	口頸部は屈曲・外傾し、端部は丸く収める。底部穿孔有り。 [外]指頭圧痕・ハク・ナデ・マツ [内]ナデ・ハク	[外]にぶい黄橙10YR7/4 [内]灰黄褐10YR6/2・橙7.5YR7/6 普:3mm以下の石英・長石・赤色粒 良	甕転用甕
	28	40	15-堅穴20 貼床	土師器 甕 (底部)	- - [7.3]	底部は丸底で個数・形状は不明だが穿孔あり。体部外面に被熱痕と煤付着。 [外]工具による調整のちナデ [内]-	[外]明赤褐5YR5/8・にぶい黄橙10YR6/3 [内]橙5YR6/6 粗:5mm以下の長石・石英 良	
	28	41	15-堅穴20 埋土	土師器 壺 (口縁)	- - [4.2]	二重口縁部。口縁部中位が屈曲し、端部は丸く収める。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]橙5YR6/6 [内]橙5YR6/6 普:3mm以下の石英・長石 良	中部瀬戸 内系
	28	42	15-堅穴20 貼床	土師器 甕 (把手)	- - -	把手は短い棒状を呈す。 [外]指頭圧痕 [内]-	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]橙5YR7/6 普:1mm以下の石英・長石 良	
16	30	43	15-堅穴40 貼床	土師器 鉢 (口縁)	- - [2.7]	口縁部は内湾し、端部を押圧している。 [外]ナデ [内]ナデ	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい黄橙10YR7/3 粗:0.5mm以下の細粒 良	
16	30	44	15-堅穴40 埋土	土師器 高杯 (脚部)	- (9.6) [2.1]	高杯の脚部部である。 [外]ナデ [内]ナデ	[外]にぶい橙5YR7/4 [内]橙5YR7/6 普:1mm以下の長石・石英 良	
16	30	45	15-堅穴40 埋土	土師器 甕 (口縁)	(8.5) - [4.9]	口縁部は直線的に外傾し、端部は丸く収める。 [外]ナデ [内]ナデ	[外]にぶい黄橙10YR7/4 [内]橙5YR6/6 普:4mm以下の長石・石英 良	
16	30	46	15-堅穴50 床面直上	須恵器 有蓋高杯蓋	12.3 - 5.8	口縁部と天井部の境はなだらかで、内端部は沈線状の段を有する。天井部中央にボタン状のつまみを貼り付ける。 [外]回転ナデ・回転ヘラ削り [内]回転ナデ・静止ナデ	[外]黄灰2.5Y6/1 [内]灰N6/ 普:5mm以下の細粒 良	
16	30	47	15-堅穴50 床面直上	須恵器 杯身	11.7 - 5.25	口縁部の立ち上がりは内傾し、端部は内傾する面を持つ。底部は浅く平坦である。受部に蓋重ね焼き痕あり。 [外]回転ナデ・回転ヘラ削り [内]回転ナデ	[外]灰白10YR7/1 [内]灰白N7/ 普:3mm以下の細粒 良	
16	30	48	15-堅穴50 床面直上	須恵器 杯身	11.1 6.1 4.6	立ち上がりは薄く内傾し、端部は丸く収める。受部に蓋重ね焼き痕あり。 [外]回転ナデ・回転ヘラ削り (一部未調整) [内]回転ナデ	[外]青灰5PB6/1 [内]青灰5PB6/1 普:3mm以下の細粒 良	
16	30	49	15-堅穴50 床面直上	土師器 甕	26 - [14.6]	口頸部は外反し端部は面を持つ。頸部をなでる。 [外]ハク [内]マツ	[外]にぶい橙7.5YR6/4・赤橙10R6/8 [内]にぶい黄橙10YR7/3・赤橙10R6/8 粗:4mm以下の石英・長石 良	
17	32	50	15-SX60 SP62	土師質土器 杯 (口縁)	- - [2.2]	口縁部は内湾気味に立ち上がり、外端部がわずかに突出する。 [外]マツ [内]-	[外]橙5YR7/6 [内]橙7.5Y7/6 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
17	35	51	15-掘立1 SP2	土師質土器 杯 (口縁)	(8.9) - [1.4]	端部を丸く収める。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]明褐灰7.5YR7/2 [内]灰白2.5Y7/1 普:2mm以下の長石・石英 良	
17	35	52	15-掘立1 SP1	土師質土器 杯 (底部)	- 7.6 [1.2]	[外]- [内]指頭圧痕	[外]橙7.5YR7/6 [内]橙7.5YR7/6 普:2mm以下の赤色粒 良	
17	35	53	15-掘立1 SP3 掘方	土師質土器 杯 (底部)	- (5.0) [1.83]	[外]ナデ [内]ナデ	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3 普:1.5mm以下の石英・長石 良	
17	35	54	15-掘立2 SP76	土師器 甕	(18.0) - [14.6]	口縁部は直立気味に立ち上がり、体部は球形を呈す。粗雑な作りである。 [外]ハク・コナデ [内]指頭圧痕・ハク	[外]にぶい黄橙10YR5/4 [内]にぶい黄褐10YR5/3 粗:5mm以下の石英・長石 良	
17	36	55	15-冊列2 SP18	須恵器 杯身	- - [3.35]	立ち上がりはほぼ直立し、端部は丸く収める。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]灰N6/ [内]灰N6/ 普:1mm以下の石英・長石 良	
17	36	56	15-冊列2 SP18	土師器 甕 (口縁)	(20.8) - [4.5]	口縁部は外反し、端部は丸く収める。 [外]ナデ・粘土紐接合痕 [内]ナデ	[外]橙5YR7/6 [内]明赤褐5YR5/6 普:2mm以下の石英・長石 良	

表7 土器観察表④

図版 番号	挿図 番号	報文 番号	遺構 層位	種類 器種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
17	37	57	15-SK30	土師器 甕	(16.4) - [5.5]	口頸部は屈曲し内湾気味に立ち上がる。端部は内傾した面をもつ。 [外]ハ・ナテ [内]マツ	[外]にぶい橙7.5YR6/4 [内]にぶい黄橙10YR7/4 普:3mm以下の石英・長石・赤色粒 良	布留系
17	37	58	15-SK30	土師器 甕	(27.8) - [8.5]	口縁部片と体部片がある。口縁部は外反する。 [外]ナテ [内]ナテ	[外]橙5YR6/6 [内]にぶい黄橙10YR7/4 粗:3mm以下の石英・長石 良	
17	37	59	15-SK30	土師器 甕 (把手)	長さ5.0 幅4.1 厚み3.6	把手部は基部が太く短い棒状である。 [外]指頭圧痕 [内]-	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]- 普:1mm以下の石英・長石・金雲母・赤色粒・黒色粒 良	
16	42	60	15-SD24	須恵器 杯身	(10.1) - [4.3]	口縁部の立ち上がりは内傾し、端部は丸く内側に沈線が巡る。 [外]回転ナテ・回転ヘラ削り [内]回転ナテ	[外]灰白N7/ [内]灰白N8/ 普:2mm以下の細粒・黒色粒 良	
16	42	61	15-SD23	土師器 甕 (口縁)	- - [3.8]	口縁部は直口し、端部は上方に面を持つ。 [外]ナテ・ハク [内]ナテ	[外]明赤褐5YR5/6 [内]にぶい黄橙10YR6/4 普:1mm以下の石英・長石・角閃石・赤色粒・黒色粒 良	
16	42	62	15-SD56	土師器 甕 (口縁)	(25.0) - [5.9]	口縁部は直口し、ややに肥厚する。端部は上方に面を持つ。 [外]ナテ [内]ナテ	[外]橙5YR6/6 [内]橙5YR7/6 普:2mm以下の石英・長石 良	
16	42	63	15-SD22	土師器 甕 (口縁)	- - [3.0]	口頸部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。 [外]ナテ・ハク [内]ハク	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4 普:2mm以下の石英・長石 良	
16	42	64	15-SD21	土師質土器 杯	(10.0) 7.1 2.7	底体部は丸みをおび、口縁部は外傾する。 [外]ナテ・底部ヘラ切りのちナテ [内]ナテ	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2 普:2mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
43	65	15-攪乱	須恵器 杯蓋	(11.5) - [2.6]	口縁部と天井部の境は弱い稜が巡り、内端部は凹斜面を有す。 [外]回転ナテ・回転ヘラ削り [内]回転ナテ	[外]灰白N7/ [内]黄灰2.5Y6/1 普:3mm以下の細粒 良		
43	66	15-攪乱	須恵器 杯蓋	(15.0) - [4.1]	口縁部と天井部の境は丸くなだらかで、内端部は丸く収める。 [外]回転ナテ・回転ヘラ削り [内]回転ナテ	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白5Y7/1 普:3mm以下の細粒 良		
43	67	15-攪乱	須恵器 高杯 (杯部)	(11.4) - [4.6]	立ち上がりはほぼ直立し、内端部に段を有す。 [外]回転ナテ・回転ヘラ削り [内]回転ナテ	[外]灰N6/ [内]灰N6/ 普:3mm以下の細粒 良		
43	68	15-重機掘削	土師器 土管?	(36.0) - [12.85]	[外]ナテ・ハク [内]ナテ	[外]にぶい橙7.5YR6/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4 普:2mm以下の石英・長石 良		
19	48	69	16-竪穴1 埋土	須恵器 杯蓋	13.0 - [5.3]	口縁部と天井部の境は強い稜が巡り、内端部は斜面を有す。 [外]回転ナテ・回転ヘラ削り [内]回転ナテ	[外]灰白N7/ [内]灰白5Y7/1 普:3mm以下の細粒 不良	
19	48	70	16-竪穴1 カマド	須恵器 杯蓋	12.6 - 4.9	口縁部と天井部の境は凹線が巡り、内端部は段を有す。 [外]回転ナテ・回転ヘラ削り [内]回転ナテ	[外]灰N6/ [内]灰N8/ 普:3mm以下の細粒 良	
19	48	71	16-竪穴1 埋土	須恵器 杯蓋	12.6 - 5.1	口縁部と天井部の境は凹線が巡り、内端部は斜面を有す。 [外]回転ナテ・回転ヘラ削り [内]回転ナテ	[外]灰N5/ [内]灰N6/ 普:3mm以下の細粒 良	
48	72	16-竪穴1 埋土	須恵器 杯蓋	(14.9) - [3.2]	口縁部と天井部の境は弱い稜が巡り、内端部は斜面を有する。 [外]回転ナテ [内]回転ナテ	[外]灰N6/ [内]灰N6/ 普:3mm以下の細粒 良		
19	48	73	16-竪穴1 埋土	須恵器 杯蓋	15.0 - 4.0	口縁部と天井部の境は丸くなだらかで、内端部は先細りしている。 [外]回転ナテ・回転ヘラ削り [内]回転ナテ	[外]灰N8/ [内]灰N8/ 普:3mm以下の細粒 良	
48	74	16-竪穴1 埋土	須恵器 杯蓋	- - [2.5]	口縁部と天井部の境は弱い凹線が巡り、内端部は広い凹斜面を有する。 [外]回転ナテ [内]回転ナテ	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:3mm以下の細粒 良		

表 8 土器観察表⑤

図版 番号	挿図 番号	報文 番号	遺構 層位	種類 器種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
19	48	75	16-竪穴1 埋土	須恵器 有蓋高杯蓋	13.1 - 5.2	口縁部と天井部の境は凹線が巡り、端部は斜面を有す。天井部中央にボタン状の扁平なつまみを貼り付ける。 [外]回転け <sup>°</sup> ・回転へ <sup>°</sup> 削り [内]回転け <sup>°</sup>	[外]灰N5/ [内]灰N5/ 普:3mm以下の細粒 良	
19	48	76	16-竪穴1 埋土	須恵器 有蓋高杯蓋	13.0 - 5.5	口縁部と天井部の境は凹線が巡り、端部は斜面を有す。天井部中央にボタン状の扁平なつまみを貼り付ける。 [外]回転け <sup>°</sup> ・回転へ <sup>°</sup> 削り [内]回転け <sup>°</sup>	[外]灰N6/ [内]灰N6/ 普:3mm以下の細粒 良	
19	48	77	16-竪穴1 埋土	須恵器 杯身	11.2 - 4.65	立ち上がりはやや内傾し、内端部は斜面を有する。受部に重ね焼き痕あり。 [外]回転け <sup>°</sup> ・回転へ <sup>°</sup> 削り [内]回転け <sup>°</sup> ・静止 <sup>°</sup>	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:1mm以下の細粒・黒色粒 良	
19	48	78	16-竪穴1 土器溜り	須恵器 杯身	10.3 - [4.8]	口縁部の立ち上がりは屈曲気味に内傾し、端部は丸く収める。 [外]回転け <sup>°</sup> ・回転へ <sup>°</sup> 削り [内]回転け <sup>°</sup>	[外]青灰5PB5/1 [内]青灰5PB6/1 普:1mm以下の黒色粒 良	
19	48	79	16-竪穴1 カマド 焚口付近 床面直上	須恵器 杯身	11.6 - 5.25	口縁部の立ち上がりは内傾し、端部は先細りしている。 [外]回転け <sup>°</sup> ・回転へ <sup>°</sup> 削り [内]回転け <sup>°</sup>	[外]灰N6/ [内]灰白N7/ 普:2mm以下の細粒 良	
48	80		16-竪穴1 カマド	須恵器 杯身	14.0 - 3.0	立ち上がりは欠損。底部は広く平坦である。 [外]回転け <sup>°</sup> ・回転へ <sup>°</sup> 削り [内]回転け <sup>°</sup>	[外]灰N6/ [内]灰白N7/ 普:2mm以下の細粒 良	
48	81		16-竪穴1 埋土	須恵器 杯身	11.1 7.4 4.4	立ち上がりはやや短く屈曲気味に内傾し、端部は丸く収める。底部は広く平坦。 [外]回転け <sup>°</sup> ・回転へ <sup>°</sup> 削り [内]回転け <sup>°</sup>	[外]灰N6/ [内]灰N5/ 普:2mm以下の細粒・黒色粒 良	
19	48	82	16-竪穴1 土器溜り	須恵器 杯身	(12.9) (8.4) [4.8]	口縁部の立ち上がりは屈曲気味に内傾し、端部は先細りしている。 [外]回転け <sup>°</sup> ・回転へ <sup>°</sup> 削り [内]回転け <sup>°</sup>	[外]灰白N7/ [内]灰N6/ 普:3mm以下の細粒 良	
48	83		16-竪穴1 埋土	須恵器 杯身	(10.7) - [5.1]	口縁部の立ち上がりは内傾し、端部は丸く収める。 [外]回転け <sup>°</sup> ・回転へ <sup>°</sup> 削り [内]回転け <sup>°</sup>	[外]灰白N7/ [内]黄灰2.5Y6/1 普:2mm以下の細粒 良	
20	48	84	16-竪穴1 床面直上	須恵器 高杯	10.2 8.4 9.5	立ち上がりは内傾し、端部は丸く収める。脚部は八の字状に開き、裾端部は下方に曲げて丸く収める。 [外]回転け <sup>°</sup> ・回転へ <sup>°</sup> 削り <sup>°</sup> ・3方向台形スカシ [内]回転け <sup>°</sup>	[外]灰白N7/1 [内]灰白N7/1 普:5mm以下の細粒 良	
20	48	85	16-竪穴1 カマド 焚口付近 床面直上	須恵器 高杯	9.8 8.6 9.2	立ち上がりは内傾し、端部は丸く収める。脚部は八の字状に開き、裾端部は下方に屈曲し、外端面をもつ。 [外]回転け <sup>°</sup> ・回転へ <sup>°</sup> 削り <sup>°</sup> ・3方向台形スカシ [内]回転け <sup>°</sup>	[外]灰N6/ [内]灰N6/ 普:3mm以下の細粒 良	
48	86		16-竪穴1 埋土	須恵器 高杯 (脚部)	(11.0) - (4.0)	脚部に台形スカシを穿ち、脚端部を下方に曲げて端面を持つ。 [外]回転け <sup>°</sup> ・台形スカシ (方向不明) [内]回転け <sup>°</sup>	[外]灰色2.5Y8/1 [内]灰色2.5Y8/2 普:3mm以下の細粒 不良	
48	87		16-竪穴1 埋土	須恵器 壺 (口縁)	(13.5) - [5.5]	口頸部は外反し、端部は上方に摘み上げ丸端面をもつ。 [外]回転け <sup>°</sup> [内]回転け <sup>°</sup>	[外]灰白5Y7/1 [内]灰白5Y7/1 普: 良	
19	48	88	16-竪穴1 床面直上	須恵器 長頸壺	(10.6) - 15.4	口頸部はゆるやかに開き、端部付近で、内湾気味に角度を変える。口頸部に突線で区切られた櫛波状文(16条1束)を配する。体部はほぼ球形を呈し、丸底である。 [外]回転け <sup>°</sup> ・回転へ <sup>°</sup> 削り <sup>°</sup> ・粗い <sup>°</sup> [内]回転け <sup>°</sup> ・指頭圧痕	[外]灰白N7/ [内]灰白 <sup>°</sup> 灰5GY5/1 普:2.5mm以下の長石・石英・黒色粒 良	
48	89		16-竪穴1 埋土	須恵器 甕 (口縁)	(20.2) - [2.4]	口縁部は外反し、端部外面に突帯が2条巡る。頸部に櫛波状文(5条)を配する。 [外]ナ <sup>°</sup> ・波状文 [内]ナ <sup>°</sup>	[外]黄色2.5Y6/1 [内]灰色2.5Y7/1 普:3mm以下の細粒 良	
48	90		16-竪穴1 埋土	土師器 甕 (口縁)	15.0 - [4.3]	頸部は緩やかに屈曲し、端部は丸く収める。 [外]ナ <sup>°</sup> [内]指頭圧痕・マツ	[外]明赤褐2.5YR5/6 [内]にぶい橙7.5YR6/4 粗:3mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
48	91		16-竪穴1 埋土	土師器 甕	18.2 - 9.2	口頸部は屈曲・外傾し、端部は丸く収める。 [外]ナ <sup>°</sup> ・工具痕 [内]工具痕	[外]橙7.5YR6/6 [内]にぶい橙7.5YR6/4 粗:5mm以下の長石・石英 良	
20	48	92	16-竪穴1 カマド	土師器 甕	(15.3) - [15.1]	中型甕。口縁部はやや受け口状に内湾し、端部は内傾する面を持つ。体部下半及び火前側が打ち欠き等により欠損する。火前側外面は被熱。 [外]ナ <sup>°</sup> ・指頭圧痕・粗い <sup>°</sup> [内]ナ <sup>°</sup> ・指頭圧痕・ナ <sup>°</sup> (横方向)	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4 普:5mm以下の長石・石英 良	

表9 土器観察表⑥

図版 番号	挿図 番号	報文 番号	遺構 層位	種類 器種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
20	48	93	16-竪穴1 床面直上	土師器 甕	22.0 [10.1]	頸部は屈曲し、口縁部は短く、端部は上方に面を持つ。 [外]ハ・黒斑 [内]指頭圧痕	[外]にぶい黄橙10YR7/4 [内]にぶい黄橙10YR6/3 普:3mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
20	48	94	16-竪穴1 床面直上	土師器 甕	(18.0) - [11.7]	口頸部は屈曲・外反し、端部は丸く収める。体部に煤 付着。 [外]マツ [内]マツ	[外]にぶい橙7.5YR7/3 [内]にぶい橙7.5YR7/4 粗:5mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
20	48	95	16-竪穴1 埋土	土製品 土錘	長さ8.4 幅3.2 厚み3.0	長い棒状を呈し、2ヶ所孔を穿つ。 [外]ナゲ・指頭圧痕 [内]-	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]- 普:3mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
	48	96	16-竪穴1 土器溜り	土師器 瓶 (把手)	- - [4.7]	把手の上面をナゲにより面をもち、断面半円形を呈す る。 [外]指頭圧痕 [内]-	[外]にぶい橙7.5YR6/4 [内]- 粗:3mm以下の石英・長石 良	
20	48	97	16-竪穴1 カマド	土師器 瓶 (把手)	- - -	把手は尖端で断面楕円形。上面に切り込みを刻む。貫 通しない。 [外]指頭圧痕 [内]-	[外]黄橙7.5YR8/8 [内]橙2.5YR6/6 粗:5mm以下の長石・石英 良	
20	48	98	16-竪穴1 土器溜り	土師器 瓶 (底部)	- - [1.3]	底部片である。円形の透孔有り。 [外]ナゲ [内]ナゲ	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]灰黄褐10YR6/2 普:1mm以下の石英・長石・黒色粒 良	
	48	99	16-竪穴1 埋土	土師器 瓶 (把手)	- - [1.6]	把手は手捻りにより作出し、断面は大円形を呈する。 [外]指頭圧痕 [内]-	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]- 普:3mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
21	55	100	16-竪穴2 貼床	須恵器 杯蓋	(16.4) - [4.9]	口縁部と天井部の境は弱い稜が巡り、端部は丸く収め る。 [外]回転ナゲ・天井部回転ヘリ切り痕 [内]回転ナゲ	[外]灰白N7/ [内]灰N6/ 普:4mm以下の細粒 良	
21	55	101	16-竪穴2 貼床	須恵器 杯蓋	(15.4) - [4.5]	口縁部と天井部の境は弱く屈曲し、内端部は広い回斜 面を有する。 [外]回転ナゲ・回転ヘリ削り [内]回転ナゲ・当て具痕	[外]灰N6/ [内]灰N6/ 普:2mm以下の細粒 良	
21	55	102	16-竪穴2 床面直上	須恵器 杯身	13.2 - 5	立ち上がりはやや短く内傾し、端部は丸く収める。立 ち上がりと受部の境には溝が巡る。 [外]回転ナゲ・回転ヘリ削り [内]回転ナゲ・当て具痕	[外]灰N6/ [内]灰N6/ 普:3mm以下の細粒 良	
	55	103	16-竪穴2 カマド	土師器 瓶 (口縁)	(21) - [4]	口縁部はわずかに外に開く。 [外]指頭圧痕・ハ [内]指頭圧痕	[外]明赤褐5YR5/6 [内]橙5YR6/6 粗:6mm以下の石英・長石 良	
	55	104	16-竪穴2 埋土	土師器 瓶 (底部)	- - [0.95]	底部片である。透孔有り。 [外]ナゲ [内]ナゲ	[外]橙7.5YR7/6 [内]浅黄橙10YR8/4 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
21	55	105	16-竪穴2 P5	土師器 鉢	(20.3) - [9.65]	[外]指頭圧痕・ナゲ [内]指頭圧痕・ナゲ	[外]明赤褐5YR5/6 [内]にぶい褐7.5YR5/4 普:3mm以下の石英・長石 良	
	55	106	16-竪穴2 P5	土師器 甕 (口縁)	(10.4) - [4.5]	小型甕。被熱によるマツ [外]回転ナゲ・指頭圧痕 [内]回転ナゲ	[外]にぶい橙5YR6/4 [内]にぶい橙5YR6/4 粗:3mm以下の長石・石英 良	
21	55	107	16-竪穴2 床面直上	土師器 甕 (底部)	- - [16.6]	大型甕の体部である。底部は丸底。 [外]ハ [内]ナゲ	[外]にぶい褐7.5YR5/3 [内]灰黄褐10YR6/2 粗:3mm以下の石英・長石 良	
21	55	108	16-竪穴3 床面直上	須恵器 杯蓋	12.4 - 4.3	口縁部と天井部の境は強い稜が巡り、端部はほぼ接地 する。 [外]回転ナゲ・回転ヘリ削り・天井部に自然軸付着 [内]回転ナゲ	[外]灰N6/ [内]灰白N7/ 精良:2mm以下の細粒 堅緻	
21	55	109	16-竪穴3 カマド煙道	土師器 杯	(11.3) - [4.9]	底部は平底で、口縁部は内湾する。端部は欠損。 [外]ナゲ [内]マツしているがキ・化粧土	[外]明赤褐5YR5/6 [内]にぶい黄橙10YR7/2 普:2mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
	55	110	16-竪穴3 カマド	土師器 高杯 (杯部)	13.0 - [3.9]	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は上方に端面を 持つ。 [外]ナゲ [内]ナゲ	[外]橙5YR6/6 [内]橙5YR7/6 精良:1mm以下の石英・赤色粒 良	
21	55	111	16-竪穴3 SP16	土師器 高杯 (杯部)	(13.8) - [4.9]	椀形高杯。杯部はやや浅く内湾して立ち上がり、端部 はわずかに外反する。 [外]ナゲ・マツ [内]マツ・放射状暗文?	[外]浅黄橙10YR8/4一部橙2.5YR6/6 [内]浅黄橙10YR8/3一部橙2.5YR6/6 普:3mm以下の石英・長石・赤色粒 良	

表 10 土器観察表⑦

図版 番号	挿図 番号	報文 番号	遺構 層位	種類 器種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
	55	112	16-竪穴3 カマド煙道	土師器 鉢 (口縁)	- - [2.2]	粗製 [外]ナテ [内]ナテ	[外]にぶい褐7.5YR5/4 [内]にぶい橙7.5YR6/4 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
22	55	113	16-竪穴3 埋土	土師器 甕 (口縁)	(18.8) - [5.6]	口頸部はくの字状に屈曲し、端部は内傾させた面を持つ。 [外]ナテ [内]ナテ	[外]にぶい褐7.5YR5/4 [内]にぶい褐7.5YR5/4 普:3mm以下の石英・長石 良	
22	55	114	16-竪穴3 埋土	土師器 甕 (口縁)	19.4 - [4.4]	口頸部は屈曲し端部は内傾した面を持つ。 [外]ナテ [内]ナテ	[外]にぶい橙7.5YR6/4 [内]にぶい黄橙10YR7/4 普:3mm以下の石英・赤色粒 良	
21	55	115	16-竪穴3 埋土	土師器 鍋	(16.9) - [8.6]	口頸部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。口縁部の の歪み著しい。体部外面に煤付着 [外]ナテ・ハク [内]ナテ	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]灰白2.5YR8/2 普:1mm以下の石英・長石・黒色粒・赤 色粒 良	
22	55	116	16-竪穴3 カマド	土師器 甕	(23.6) - 9.6	口頸部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。 [外]ナテ・ハク [内]ナテ・ガスリ	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]灰白10YR8/2 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒 良	118と同一 個体か
22	55	117	16-竪穴3 カマド	土師器 甕	- - [11.4]	口頸部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。 [外]ハク・煤付着 [内]指頭圧痕・削り	[外]灰白2.5YR8/2 [内]灰白2.5YR8/2 普:2mm以下の石英・長石・黒色粒 良	
55	118	16-竪穴3 カマド周辺	土師器 甕	- - [9.2]	口頸部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。 [外]ナテ・ハク [内]ナテ・削り	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]灰白10YR8/2 普:3mm以下の石英・長石 良	116と同一 個体か	
22	55	119	16-竪穴4 カマド	土師器 高杯	(14.0) (10.0) 9.45	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸く収める。 脚部は屈曲せず緩やかに開く。 [外]ナテ・指頭圧痕 [内]マツ	[外]明赤褐2.5YR5/6 [内]橙2.5YR6/6 普:3mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
55	120	16-竪穴4 貼床	土師器 製塩土器	- - [3.1]	口縁部は直口し、端部は先細りしている。 [外]クサ [内]-	[外]にぶい褐7.5YR5/4 [内]橙7.5YR6/6 普:2mm以下の石英・赤色粒 良	備讃V式	
62	121	16-SK10	須恵器 器種不明	(12.0) - [2.7]	端部は上方に面を持つ。1条の凹線により区切られ、 櫛描波状文が1条ずつ配される。 [外]波状文 [内]回転ナテ	[外]灰白N5/ [内]灰白N7/ 普:2mm以下の細粒 良		
17	62	122	16-SK10	土師器 高杯 (杯部)	(14.0) - [3.6]	体部は浅い碗形を呈す。口縁部はやや内湾し、端部は わずかに外折する。 [外]丁寧なナテ・化粧土 [内]横ナテ	[外]明赤褐5YR5/6 [内]灰白10YR8/2 普:1mm以下の石英・長石 良	
62	123	16-SK10	土師器 甕 (口縁)	- - [3.5]	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は上方に面を持つ。 [外]ナテ [内]ナテ	[外]にぶい黄橙10YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4 普:2mm以下の石英・長石・赤色粒 良		
22	62	124	16-SK5	須恵器 高杯 (杯部)	12.0 - [4.0]	口縁部の立ち上がりはやや内傾したのち直立し、端部 は内傾する面を持つ。杯底部は浅く、1/2の範囲に回 転カキ目を施す。受部に蓋重ね焼き痕あり。 [外]回転ナテ・ナメ目・ハク削り [内]回転ナテ	[外]灰N5/ [内]灰N5/ 普:2mm以下の石英・黒色粒 良	
22	62	125	16-SK5	土師器 高杯 (杯部)	15.0 - [4.2]	杯部は浅く、端部は丸く収める。 [外]ナテ [内]ナテ	[外]にぶい黄橙10YR7/4 [内]浅黄橙10YR8/3 普:3mm以下の石英・赤色粒 良	
22	62	126	16-SK5	土師器 高杯 (脚部)	- 10.0 [4.3]	低脚。脚注部と裾部の境が明瞭に屈曲する。 [外]ナテ [内]板ナテ・粘土紐巻上げ痕	[外]橙5YR6/6 [内]橙5YR7/6 普:3mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
62	127	16-SK5	土師器 甕 (口縁)	- - [3.3]	口縁内端部が内側に丸く肥厚する。 [外]ナテ [内]ナテ	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい橙7.5YR6/4 普:2.5mm以下の石英・長石・赤色粒 良		
62	128	16-SK5	土師器 甕 (口縁)	20.4 - [4.0]	口縁部は内湾し、内端部は肥厚し内傾する面をもつ。 [外]マツ [内]指頭圧痕	[外]にぶい黄橙10YR7/4 [内]にぶい黄橙10YR7/4 普:微細粒 良	布留系	
22	62	129	16-SK5	土師器 甕	(19.4) - [6.1]	口頸部は強く屈曲・やや内湾し、内傾する面をもつ。 [外]ナテ [内]ナテ	[外]橙2.5YR6/6 [内]にぶい黄橙10YR6/4 普:3mm以下の石英・長石・赤色粒 良	

表 11 土器観察表⑧

図版 番号	挿図 番号	報文 番号	遺構 層位	種類 器種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
17	62	130	16-SD11	土師器 高杯	12.0 8.8 (9.3) [6.9]	碗形高杯。杯部は浅く、端部は先細りしている。空洞の脚柱部に中央に突起を持った杯部を差込み、その後脚部側から押圧した痕跡がある。 [外]マツ [内]マツ	[外]橙7.5YR6/6 [内]橙7.5YR7/6 粗:3mm以下の石英・赤色粒 良	
	62	131	16-重機掘削	須恵器 杯身	(13.0) - [5.15]	口縁部の立ち上がりはやや内傾し、端部は内傾する面を持つ。 [外]回転テ・回転ヘラ削り [内]回転テ	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 精良:1.5mm以下の細粒 良	
	62	132	16-精査中	土師器 壺	(21.2) - [4.85]	口縁部は内湾し、端部は内傾する面をもつ。 [外]マツ [内]マツ	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/4 普:1mm以下の石英・長石・金雲母・赤 色粒・黒色粒 良	布留系
22	62	133	17-SP16	須恵器 杯	(10.8) - [2.0]	口縁は直線的に外傾し、端部は先細りしている。 [外]マツ [内]マツ	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:2mm以下の石英・長石 不良	
22	62	134	17-SK 8	須恵器 (底部)	- (6.0) [1.4]	底部は平底。 [外]回転テ [内]回転テ・回転ヘラ削り	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/~N8/ 精良:3mm以下の細粒 良	
	62	135	17-重機掘削	須恵器 盤	- (11.0) [1.2]	底部に高台を貼り付ける。 [外]回転テ・回転ヘラ削り [内]回転テ・静止テ	[外]灰白N8/ [内]灰白N6/ 普:1mm以下の石英・長石 良	
23	69	136	19-竪穴20 SP41	須恵器 杯蓋	- 12.8 4.5	口縁部と天井部の境は弱い稜が巡り、内端部は広い凹 斜面を有する。還元焼成なし。 [外]テ [内]テ	[外]橙5YR6/6 [内]橙7.5YR6/6 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒 不良	
23	69	137	19-竪穴20 貼床	須恵器 壺 (底部)	- - -	球形丸底。 [外]回転テ・ハ状工具でのテグムなテ [内]指頭圧痕	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:2mm以下の細粒 堅緻	
23	69	138	19-竪穴20 埋土	土師器 甌 (底部)	- - -	穿孔2ヶあり。 [外]テ [内]テ	[外]橙7.5YR7/6 [内]橙7.5YR7/6 普:5mm以下の長石・赤色粒 良	
23	69	139	19-竪穴20 SP42	土師器 高杯 (杯部)	(15.2) - [4.8]	碗形高杯。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、端部 はわずかに反る。 [外]テ [内]テ	[外]橙5YR6/8 [内]にぶい橙7.5YR7/4 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒・黒 色粒 良	
25	69	140	19-竪穴20 SP43	土師器 高杯 (脚部)	- 9.2 [5.5]	低脚。脚注部と裾部の境が明瞭に屈曲する。脚部外面 に煤化 [外]テ [内]板テ・粘土紐巻上げ痕	[外]橙5YR7/6 [内]橙5YR6/8 普:3mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
23	69	141	19-竪穴20 埋土	土師器 高杯 (脚部)	- (9.5) [6.2]	脚部は屈曲せず緩やかに開く。 [外]テ [内]テ	[外]橙5YR6/6 [内]橙5YR6/6 普:2mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
23	69	142	19-竪穴20 SP43	土師器 甕	(18.8) - 30.8	体部、口縁部外面に煤化。口頸部は屈曲・内湾し、端 部は内傾する面を持つ。体部は卵型を呈す。 [外]テ・ハ [内]テ・ハ	[外]橙5YR7/6 [内]にぶい橙5YR7/4 普:2mm以下の石英・長石・赤色粒・黒 色粒 良	
23	69	143	19-竪穴20 付近包含層	土師器 杯 (口縁)	- - [2.4]	端部は丸く収める。 [外]テ [内]テ	[外]橙5YR7/6 [内]にぶい橙7.5YR7/4 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
23	69	144	19-竪穴20 付近包含層	土師器 甕	(16.1) - [8.5]	口縁部は受け口状を呈し、端部が内側に肥厚し上方に 端面を持つ。体部外面に一部欠けているが、ヘラ記号 「J」あり [外]テ・ハ [内]テ	[外]にぶい黄褐10YR5/3 [内]にぶい黄褐10YR5/4 普:1mm以下の石英・長石・金雲母 良	
24	76	145	19-SX50 下層	須恵器 杯蓋	(14.2) - 4.0	口縁部と天井部の境は弱い稜が巡り、内端部は広い凹 斜面を有する。 [外]回転テ・回転ヘラ削り [内]回転テ	[外]灰N6/ [内]灰白N7/ 普:2mm以下の砂粒 良	
	76	146	19-SX50 上層	須恵器 杯身	(12.2) - [3.0]	口縁部の立ち上がりは内傾し、端部は丸く収める。 [外]回転テ [内]回転テ	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:1.5mm以下の長石・石英 良	
24	76	147	19-SX50 下層	須恵器 甕	(22.0) - [8.4]	口頸部は外反し、端部は上下に肥厚し、有稜角端面を もつ。 [外]回転テ目・平行テ [内]回転テ・当て具痕・半刈テ	[外]灰N6/ [内]灰N6/ 普:3mm以下の石英・長石 良	

表 12 土器観察表⑨

図版 番号	挿図 番号	報文 番号	遺構 層位	種類 器種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
24	76	148	19-SX50 下層	須恵器 甕 (口縁)	(22.0) - [9.4]	口頸部は外反し、口縁部付近で水平に開く。端部は上端を積み上げ面を持つ。 [外]平行ナシ・自然袖付着・粘土塊2ヶ [内]当て具痕・半刈ナシ	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:2mm以下の砂粒 良	
24	76	149	19-SX50 下層	須恵器 甕 (底部)	- (15.0) [27.4]	大型甕の底部。 [外]平行ナシ・ナシ目 [内]当て具痕・半刈ナシ	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:2mm以下の砂粒 良	
24	76	150	19-SX50 下層	土師器 甕	21.8 - 32.4	口頸部は屈曲・外傾し、端部は丸く収める。体部は卵形を呈す。 [外]ハク [内]ハク	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]灰白10YR8/2 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
24	76	151	19-SX50 下層	土師器 甕	23.6 - [15.4]	口頸部は屈曲・外反し、端部は丸く収める。 [外]ナシ・ハク [内]指頭圧痕・ナシ	[外]浅黄橙10YR8/4 [内]浅黄橙10YR8/3 粗:5mm以下の砂粒 良	
	77	152	19-SD45	須恵器 杯蓋	(14.2) - (4.6)	口縁部と天井部の境は回線が巡り、端部は内傾する凹面を有す。 [外]回転ナシ・回転ハク削り(L) [内]回転ナシ	[外]灰N4/ [内]灰N6/ 普:3mm以下の石英・長石 良	
25	77	153	19-SD45	須恵器 杯蓋	(15.0) - [3.2]	口縁部と天井部の境は弱く稜が巡り、内端部は広い凹斜面を有する。 [外]回転ナシ [内]回転ナシ	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白N7/ 普:2mm以下の石英・長石・黒色粒 良	
25	77	154	19-SD45	須恵器 杯蓋	(16.0) - [4.0]	口縁部と天井部の境は弱く稜が巡り、内端部は広い凹斜面を有する。 [外]回転ナシ・回転ハク削り [内]回転ナシ	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:4mm以下の石英・長石・黒色粒 良	
25	77	155	19-SD45	須恵器 杯蓋	(13.2) - [3.0]	口縁部と天井部の境は弱く稜が巡り、内端部は広い凹斜面を有する。 [外]回転ナシ [内]回転ナシ	[外]灰N6/ [内]灰白N7/ 普:1mm以下の石英・長石 良	
	77	156	19-SD44	須恵器 杯蓋	(14.1) - [2.85]	口縁部と天井部の境は弱い稜が巡り、内端部は広い凹斜面を有する。 [外]回転ナシ [内]回転ナシ	[外]褐灰5YR6/1 [内]灰N6/ 精良:0.5mm以下の細粒 良	
25	78	157	19-SD 5	須恵器 杯身	(9.6) - 3.15	口縁部の立ち上がりは折り曲げにより短く内湾し、端部は丸く収める。底部外面に工具の擦痕有り。 [外]回転ナシ・底部ハク切り未調整 [内]回転ナシ	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:1mm以下の細粒・黒色粒 良	
25	78	158	19-SD 5 上層	須恵器 高杯	- (9.5) [8.15]	杯部は椀形を呈し、体部に2条の沈線が巡る。脚部は短脚でハの字状に開き、裾端部がわずかに下方に突出し、外端面を持つ。 [外]回転ナシ・沈線 [内]回転ナシ	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:3mm以下の細粒 良	
25	78	159	18-SD 5 最下層	須恵器 高杯 (脚部)	- 8.0 [5.5]	脚柱部は細くハの字状に開き、裾端部は斜め下方に突出し外端面を持つ。脚柱部外面に沈線が1条巡る。 [外]回転ナシ [内]回転ナシ	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:3mm以下の細粒 良	
25	78	160	18-SD 5	土師器 (脚部)	- 7.6 [3.6]	脚部はハの字状に開き、短脚である。 [外]板ナシ・指頭圧痕 [内]板ナシ	[外]橙2.5YR6/8 [内]橙2.5YR6/8 普:5mm以下の細粒・赤色粒 良	
25	78	161	19-SD 5 上層	土師器 杯	11.6 - [3.7]	椀形を呈し、平底。底部はやや厚い。 [外]マツ [内]回転ナシ	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4 普:5mm以下の細粒・赤色粒 良	
	78	162	18-SD 5 最下層	土師器 瓶 (口縁)	- - 5.9	口縁部は直口し、やや厚みを増す。 [外]ハク(縦ハク→口縁のみ横ハク) [内]ハク	[外]橙5YR6/8 [内]橙5YR7/6 普:5mm以下の小石・赤色粒 良	
25	78	163	18-SD 5 最下層	土師器 甕	11.7 - 10.2	小型丸底の甕。口縁部は軽く折り曲げる。底部に1cm程の小円孔と4cm大の不整形な孔を穿つ。いずれも焼成後穿孔。 [外]ハク・焼成後穿孔2ヶ [内]ハク・ナシ	[外]浅黄橙10YR8/4 [内]浅黄橙10YR8/4 普:2mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
26	80	164	19-SD 1 灰黄色粘質土 1層	須恵器 皿	15.8 - [3.1]	口縁部は外傾し、端部は丸く収める。 [外]回転ナシ [内]回転ナシ	[外]灰白5Y8/1 [内]灰白5Y7/1 普:2mm以下の細粒 良	
26	80	165	18-SD 1 最上層	須恵器 杯B	- (11.4) [1.6]	底部に低い高台を貼り付ける。 [外]回転ナシ [内]回転ナシ	[外]灰N6/ [内]灰白N7/ 普:2mm以下の細粒 良	

表 13 土器観察表⑩

図版 番号	挿図 番号	報文 番号	遺構 層位	種類 器種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
26	80	166	18-SD 1 最上層	土師器 杯	- (6.8) [1.5]	平高台状を呈する。 [外]回転テ° [内]回転テ°	[外]橙7.5YR6/6 [内]にぶい橙7.5YR7/4 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
26	80	167	19-SD 1 灰黄色粘質土 1層	須恵器 甕 (口縁)	19.4 - [5.6]	口縁部は外反し、端部は丸く収める。 [外]回転テ° [内]回転テ°	[外]灰N6/ [内]灰N6/ 精良:1mm以下の砂粒 良	
26	80	168	19-SD 1 1層	土師器 移動式カマド	- - -	移動式カマドの掛け口と底部分の破片である。付け 底。 [外]テ° [内]テ°	[外]にぶい橙7.5YR6/3 [内]にぶい橙7.5YR6/4 普:5mm以下の長石・石英・赤色粒 良	
26	80	169	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 蓋	(16.4) - 2.35	天井部・体部にやや丸みがあり、扁平なやや小さめな 擬宝珠つまみを貼り付ける。口縁端部は強く下方に屈 曲する。 [外]回転テ° [内]回転テ°・静止テ°	[外]灰白N7/ [内]灰N6/ 普:2mm以下の細粒 良	
26	80	170	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 蓋	16.0 - 3.45	天井部・体部にやや丸みがあり、ボタン状のつまみを 貼り付ける。 [外]回転テ°・回転テ°削り [内]回転テ°	[外]灰白2.5Y8/ [内]灰白5Y8/ 普:2mm以下の細粒 不良	
26	80	171	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 蓋	- - [2.0]	天井部・体部にやや丸みがあり、やや小さめな擬宝珠 つまみを貼り付ける。 [外]回転テ° [内]回転テ°	[外]灰白N7/ [内]灰N6/ 普:2mm以下の細粒 良	
26	80	172	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 蓋	17.8 - 3.2	天井部・体部にやや丸みがあり、扁平な擬宝珠つまみ を貼り付ける。口縁端部は強く下方に屈曲する。へ記 号「×」あり。 [外]回転テ° [内]回転テ°	[外]灰N5/ [内]灰N6/ 普:2mm以下の細粒 良	
	80	173	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 蓋	15.6 - [1.2]	天井部は平坦で、口縁端部が強く下方に屈曲する。 [外]回転テ° [内]回転テ°	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 精良:1mm以下の細粒 良	
	80	174	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 蓋	- - [1.15]	天井部は平坦で、扁平な擬宝珠つまみを貼り付ける。 へ記号あり。 [外]回転テ° [内]回転テ°	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白2.5Y7/1 普:2mm以下の細粒 良	
	80	175	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 蓋	23.2 - 0.6	天井部は平坦で、口縁端部が強く下方に屈曲する。外 面煤付着。 [外]回転テ° [内]回転テ°	[外]灰白5Y7/ [内]灰白5Y7/ 精良:1mm以下の細粒 良	
27	80	176	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯A	- (10.4) [3.2]	底部は平底で丸みを帯びて口縁につながる。 [外]回転テ°・回転テ°切り [内]回転テ°	[外]灰白7.5Y8/1 [内]灰白7.5Y7/1 普:3mm以下の細粒・黒色粒 良	
	80	177	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯A	- (9.8) 1.6	白色を呈する。平底。 [外]回転テ°・回転テ°切り [内]回転テ°	[外]灰白5Y7/1 [内]灰白5Y8/1 普:2mm以下の細粒 不良	
	80	178	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯A	- (9.2) [1.9]	底部は平底。 [外]回転テ° [内]回転テ°	[外]灰白N7/ [内]灰白N8/ 普:3mm以下の細粒・黒色粒 良	
	80	179	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯A	- (9.0) 1.2	白色を呈する。平底。 [外]回転テ° [内]回転テ°	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y7/1 普:3mm以下の細粒 不良	
27	80	180	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯B	- (12.0) [2.1]	底部に断面四角形の高台を貼り付ける。 [外]回転テ° [内]回転テ°	[外]灰白7.5Y8/1 [内]灰白7.5Y8/1 普:3mm以下の細粒 不良	
27	80	181	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯B	- 11 [1.8]	底部に断面四角形の高台を貼り付ける。 [外]回転テ° [内]回転テ°	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1 普:3mm以下の細粒 不良	
27	80	182	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯B	- (10.2) [2.1]	底部は広く断面四角形の低い高台を貼り付ける。 [外]回転テ° [内]回転テ°	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:3mm以下の細粒 良	
27	80	183	19-SD 1 2層	土師器 杯	- 10.5 [1.0]	底部に低い高台を貼り付ける。 [外]回転テ° [内]回転テ°	[外]橙5YR7/6 [内]橙5YR6/6 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
27	80	184	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯B	- 12.2 [1.8]	底部に低い高台を貼り付ける。 [外]回転テ° [内]回転テ°	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1 精良:3mm以下の細粒 不良	

表 14 土器観察表①

図版 番号	挿図 番号	報文 番号	遺構 層位	種類 器種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
27	80	185	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯B	- (8.6) [1.8]	底部に断面四角形の低い高台を貼り付ける。 [外]回転ケテ° [内]回転ケテ°	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:3mm以下の細粒 良	
27	80	186	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯B	- (4.9) [2.1]	底部に低い高台を貼り付ける。 [外]回転ケテ° [内]回転ケテ°	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:3mm以下の細粒・黒色粒 精良	
27	80	187	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯B	- 9.0 [1.2]	底部に低い高台を貼り付ける。内面降灰。 [外]回転ケテ°・回転ヘラ切り [内]回転ケテ°	[外]灰N4/ [内]灰N4/ 普:3mm以下の細粒・黒色粒 良	
27	80	188	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯B	- (10.4) [0.9]	底部に断面逆M字の低い高台を貼り付ける。 [外]回転ケテ° [内]回転ケテ°・静止ケテ°	[外]灰N6/ [内]灰白N7/ 普:3mm以下の細粒・黒色粒 良	
27	80	189	18-SD 1 2層	須恵器 (底部)	- (13.2) [4.45]	底部に断面四角形の高台を貼り付ける。 [外]回転ケテ° [内]回転ケテ°	[外]灰N6/ [内]灰N6/ 普:2mm以下の細粒 良	
	80	190	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 鉢	(16.8) - [4.6]	体部は深い碗形を呈す。端部は丸く収める。 [外]回転ケテ° [内]回転ケテ°	[外]灰N6/ [内]灰N5/ 普:2mm以下の細粒・黒色粒 良	
	80	191	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 壺 (口縁)	16.2 - [3.75]	口縁端部付近でわずかに開く。 [外]回転ケテ° [内]回転ケテ°	[外]灰N6/ [内]灰白N7/ 精良:1mm以下の細粒 良	
	80	192	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 壺 (口縁)	(8.0) - [3.7]	口縁部は短く外反し、端部は面を持つ。 [外]回転ケテ° [内]回転ケテ°	[外]灰N6/ [内]青灰5B6/1 普:2mm以下の細粒 良	
27	80	193	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 平瓶 (頸体部)	口径2.6 - [4.1]	体部に円盤閉塞痕あり。 [外]回転ケテ° [内]回転ケテ°	[外]灰N5/ [内]灰N5/ 普:2mm以下の細粒 堅緻	
28	80	194	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 長頸壺 (体部)	- 4.2 [6.9]	体部は算盤球形を呈す。底部は平底。 [外]回転ケテ° [内]回転ケテ°	[外]灰白5Y7/1 [内]灰白5Y7/1 普:2mm以下の細粒 良	
28	80	195	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 壺 (体部)	- - [10.8]	肩部は強く屈曲し、平底。頸部に口縁の貼り付け痕あり。 [外]回転ケテ° [内]回転ケテ°	[外]灰白5Y7/1 [内]灰白N7/ 普:2mm以下の細粒 良	
27	80	196	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 長頸壺 (体部)	- - [12.5]	肩部は強く屈曲し、底部に高台の貼り付け痕あり。 [外]回転ケテ°・回転ヘラ削り [内]回転ケテ°	[外]灰N6/ [内]灰N6/ 普:3mm以下の細粒 堅緻	
	80	197	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 壺 (底部)	- 8.8 [3.0]	底部は平底。 [外]回転ケテ° [内]回転ケテ°・櫛状工具痕	[外]灰N6/ [内]灰N6/ 普:2mm以下の細粒 良	
	80	198	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 壺 (口縁)	(11.8) - [3.6]	口縁部は外反し、端部は丸く収める。 [外]回転ケテ° [内]回転ケテ°	[外]灰N6/ [内]灰白N7/ 精良:2mm以下の細粒 良	
27	80	199	19-SD 1 灰色粗砂 2層	須恵器 壺 (体部)	- - [10.1]	肩部に窯壁の付着痕あり。 [外]回転ケテ° [内]工具・指頭圧痕	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普:1mm以下の細粒・黒色粒 良	
28	80	200	19-SD 1 2層	土師器 杯	- - [3.5]	口縁部は内湾気味に立ち上がる。 [外]ケテ° [内]化粧土・暗文(ヘラミキ)	[外]浅黄橙10YR8/4 [内]橙5YR7/6 普: 良	
28	80	201	19-SD 1 2層	土師器 皿	- - [3.15]	口径10cm程で、底体部は丸くならかで、口縁端部は丸い。 [外]回転ケテ° [内]回転ケテ°	[外]にぶい橙5YR7/4 [内]橙5YR6/6 普: 良	
28	80	202	19-SD 1 2層	土師器 杯	- - [3.3]	口縁端部は先細りしている。 [外]回転ケテ° [内]回転ケテ°	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2 普:3mm以下の長石・赤色粒 良	
28	80	203	19-SD 1 2層	土師器 皿	- - [1.9]	平底で、口縁部が大きく開く。 [外]回転ケテ° [内]回転ケテ°	[外]にぶい黄橙10YR7/4 [内]にぶい黄橙10YR7/4 普:5mm以下の小石・赤色粒 良	

表 15 土器観察表⑫

図版 番号	挿図 番号	報文 番号	遺構 層位	種類 器種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴【外】【内】	色調【外】【内】 胎土 焼成	備考
	80	204	18-SD 1 2層	土師器 甌 (口縁)	- - [6.5]	口縁部は直口し、やや厚みを増す。 【外】ハケ(縦ウ→口縁のみ斜めウ) 【内】ナゲ	【外】橙5YR6/6 【内】橙5YR7/6 粗:1mm以下の細粒 良	
28	80	205	19-SD 1 2層	土師器 不明 (体部)	- - -	部位は不明だが、外から内にかけて円孔を穿つ。 【外】マツ 【内】マツ	【外】明赤褐2.5YR5/8 【内】褐灰10YR6/1 粗:5mm以下の長石・石英 良	
28	80	206	19-SD 1 3層	須恵器 杯 (底部)	- 9.4 [1.9]	平底。白色を呈する。 【外】- 【内】回転ナゲ	【外】灰白5Y8/1 【内】灰白5Y8/1 普:2mm以下の細粒 良	
29	81	207	19-SD 1 4層	須恵器 蓋	- (15.8) [2.3]	天井部・体部にやや丸みがあり、口縁端部は下方に屈曲する。 【外】回転ナゲ・回転ハケ削り 【内】回転ナゲ	【外】灰N6/ 【内】灰白N7/ 普:2mm以下の細粒 良	
29	81	208	19-SD 1 最下層	須恵器 杯B (底部)	- (11.3) [2.7]	底部に断面四角形の低い高台を貼り付ける。 【外】回転ナゲ 【内】回転ナゲ	【外】灰白N7/ 【内】灰白N7/ 普:2.5mm以下の細粒 良	
29	81	209	19-SD 1 4層	須恵器 杯	11.4 - [3.8]	口縁部は外傾し、端部は丸く収める。 【外】回転ナゲ 【内】回転ナゲ	【外】灰N6/ 【内】灰N6/ 普:3mm以下の細粒 良	
29	81	210	18-SD 1 4層	土師器 甕 (口縁)	(14.6) - [4.8]	口頸部は屈曲し、端部は面を持つ。 【外】ナゲ・板ナゲ 【内】ナゲ・指頭圧痕	【外】にぶい黄橙10YR7/4 【内】にぶい黄橙10YR7/4 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
29	81	211	19-SD 1 最下層	須恵器 壺 (底部)	- - [5.4]	底部は丸底であるが、接地部は平坦である。底部にのみ格子タタキを施す。 【外】回転ナゲ・格子タタキ 【内】回転ナゲ	【外】灰N6/ 【内】灰N6/ 普:2mm以下の細粒 良	
28	81	212	19-SD 1 4層	土師器 甕	(26.2) - [29.8]	体部は下膨れ状の長胴で形を呈し、口縁部は大きく開く。端部は面を持つ。 【外】ヨコナゲ・斜方向のハケ 【内】ヨコナゲ・粗いハケ	【外】明褐7.5YR5/6 【内】にぶい橙7.5YR5/4 普:3mm以下の石英・長石 良	
29	81	213	18-SD 7	須恵器 蓋	(14.2) - [1.8]	口縁部は強く屈曲し垂下する。 【外】回転ナゲ 【内】回転ナゲ	【外】灰N6/ 【内】灰N6/ 普:1mm以下の石英・長石 良	
29	81	214	19-SD 7	須恵器 杯 (口縁)	(10.6) - [2.9]	椀形を呈する。 【外】回転ナゲ 【内】回転ナゲ	【外】灰N5/ 【内】灰白5Y6/1 普:1mm以下の石英・長石 良	
29	81	215	19-SD 7	須恵器 杯B (底部)	- (9.4) [1.1]	底部に高台を貼り付ける。 【外】回転ナゲ 【内】回転ナゲ	【外】灰N6/ 【内】灰白N7/ 普:1mm以下の細粒 不良	
29	81	216	18-SD 7	土師器 皿 (杯部)	(15.5) - [2.1]	口縁部は斜め上に開き端部は内側に丸く肥厚する。 【外】ナゲ 【内】放射状暗文(ハシガキ)	【外】橙5YR7/6 【内】にぶい橙7.5YR7/4 普:1mm以下の石英・長石 良	
29	81	217	18-SD 7	土師器 椀 (口縁)	(17.6) - [3.4]	やや大型。 【外】回転ナゲ 【内】回転ナゲ	【外】橙5YR7/6 【内】橙5YR7/6 普:1mm以下の小石・赤色粒 良	
29	81	218	18-SD 7	須恵器 壺	- (12.0) [6.2]	壺の底～体部である。 【外】回転ナゲ 【内】回転ナゲ	【外】灰白N7/ 【内】灰N6/ 普:1.5mm以下の石英・長石 良	
24	-	219	19-SD 1 2層	土師器 移動式マト	-	-	-	写真のみ
24	-	220	18-SD 1 最上層	須恵器 甕	-	-	-	写真のみ

表 16 石器観察表

図版 番号	挿図 番号	報文 番号	遺構 層位	種類	法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考
				器種	最大長	最大幅	最大厚			
30	4	S1	第1調査区 清掃	石鏃	3.1	1.9	0.45	1.6	サヌカイト	
30	26	S2	15-竪穴10 貼床	白玉	0.45	(0.35)	(0.3)	0.05	滑石	
30	30	S3	15-竪穴40 貼床	打製石斧	4.3	6.3	1.3	34.6	サヌカイト	
30	48	S4	16-竪穴1 床面直上	白玉	0.3	0.4	0.4	0.05	滑石	
30	55	S5	16-竪穴2 カマド除去中	石鏃	1.9	1.6	0.35	0.7	サヌカイト	
30	55	S6	16-竪穴4 貼床	白玉	0.6	0.6	(0.4)	0.05	滑石	

表 17 鉄器観察表

図版 番号	挿図 番号	報文 番号	遺構 層位	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考
					最大長	最大幅	最大厚		
30	55	M1	16-竪穴4 埋土	刀子	[8.5]	(1.5)	(0.4)	23.6	両関。柄に有機質の痕跡。
30	55	M2	16-竪穴4 埋土	不明鉄器	[3.9]	1.3	0.3	10.1	
30	76	M3	19-SK50 上層	不明鉄器	[3.8]	0.7	0.25	—	





調査区 全景（北西から）



第1調査区 全景（西から）



第2調査区 全景（西から）



第15調査区 全景（南西から）



第16調査区 全景（北西から）



第16調査区 全景（南西から）



第17～19調査区 全景（東から）



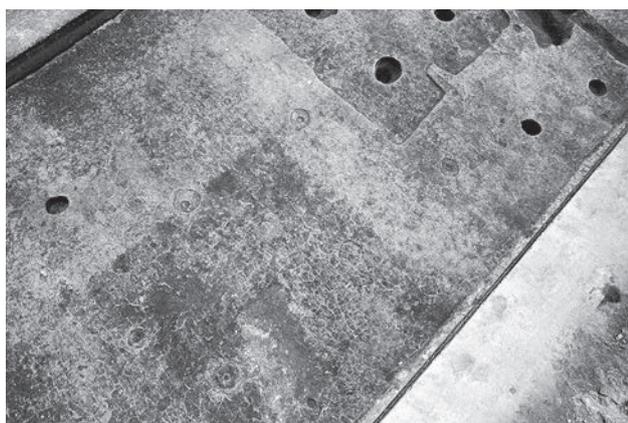
第17～19調査区 全景（西から）



1- 竪穴 1 (東から)



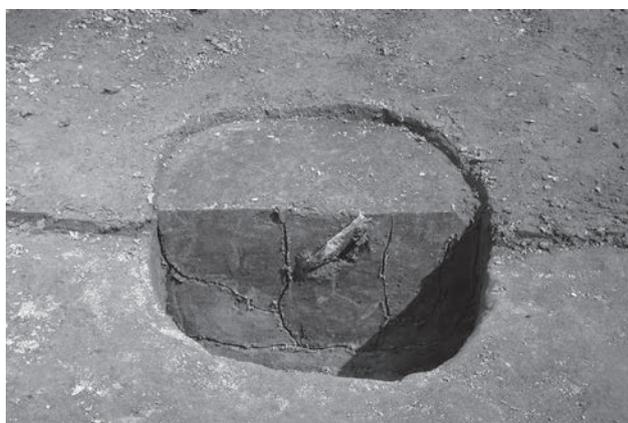
1- 竪穴 40 (南から)



1- 掘立 1 (北西から)



1- 掘立 1 完掘状況 (西から)



1- 掘立 1 SP14 (南東から)



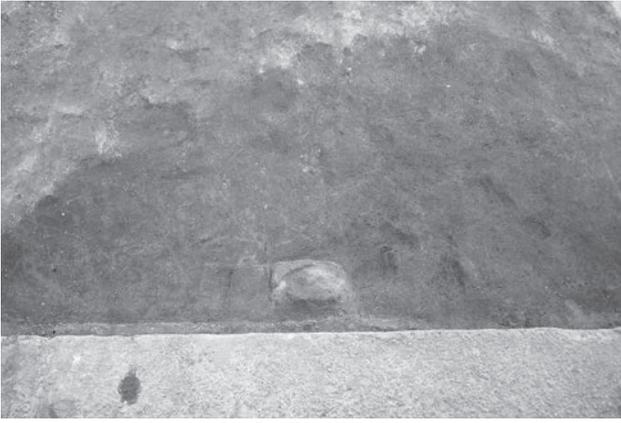
1- 掘立 1 SP13 (南東から)



1- 掘立 1 SP16 (南東から)



1-SX115 断面 (西から)



2- 竪穴 51 (西から)



2- 掘立 1 完掘状況 (東から)



15- 竪穴 20 (南から)



15- 竪穴 20 SP31 遺物出土状況



15- 竪穴 50 (南東から)



15- 竪穴 50 遺物出土状況 (南東から)



15- 竪穴 50 カマド (東から)



15- 竪穴 10 (西から)



15-掘立 1 検出状況 (南西から)



15-SD21 完掘状況 (東から)



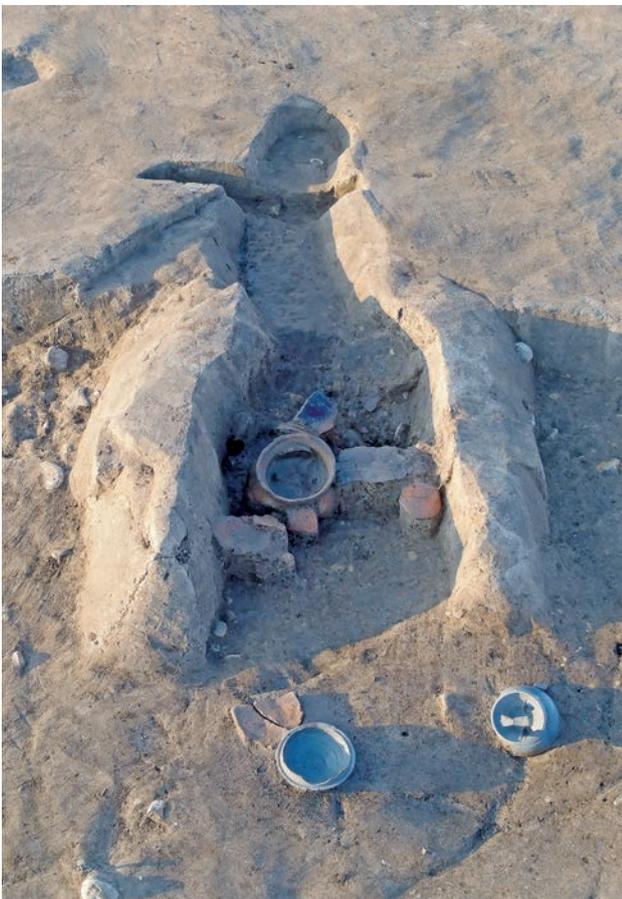
15-SK75 断面 (西から)



15-SD21 西壁断面 (東から)



16- 竪穴 1 (南から)



16- 竪穴 1 カマド遺物出土状況 (南から)



16- 竪穴 1 カマド完掘状況 (南から)



16- 竪穴 1 カマド東西断面 (南から)

写真図版 9



16- 竪穴 2 (南から)



16- 竪穴 3 (北西から)



16- 竪穴 4 (南西から)



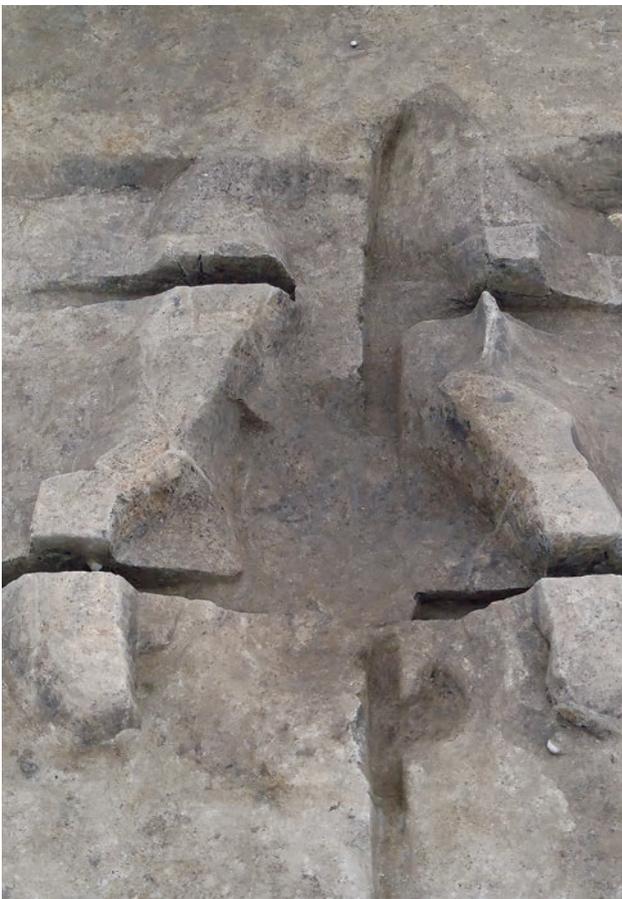
16- 竪穴2 カマド完掘状況 (南から)



16- 竪穴2 遺物出土状況 (西から)



16- 竪穴2 遺物出土状況 (東から)



16- 竪穴3 カマド完掘状況 (南から)



16- 竪穴4 カマド完掘状況 (南から)



16- 掘立 1 完掘状況 (南から)



16- 掘立 1 SP32 断面



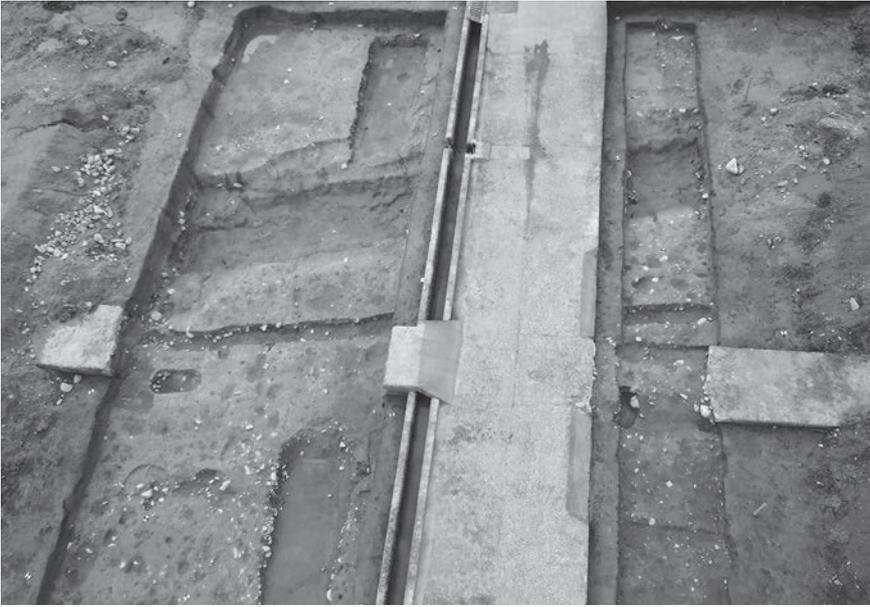
16- 掘立 1 SP36 断面



16- 掘立 1 SP31 断面



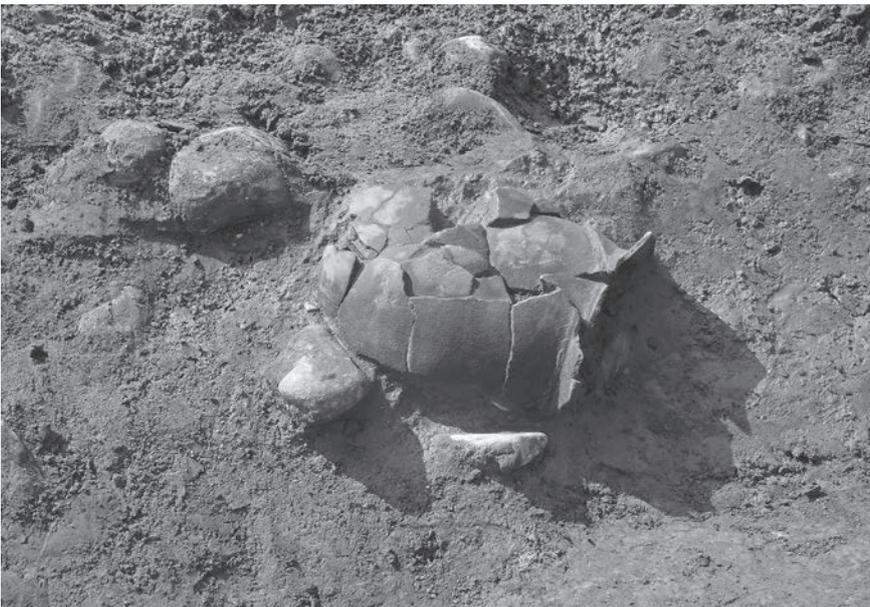
16- 掘立 1 SP30 断面



18・19-SD 1 (東から)



18・19-SD 1 南壁断面 (北から)



19-SD 1 遺物出土状況 (東から)



18・19-SD 5 (北東から)



19-SD 5 北壁断面 (南から)



18-SD 5 遺物出土状況 (北から)



19- 竪穴 40 (東から)



19- 竪穴 40 カマド (南から)



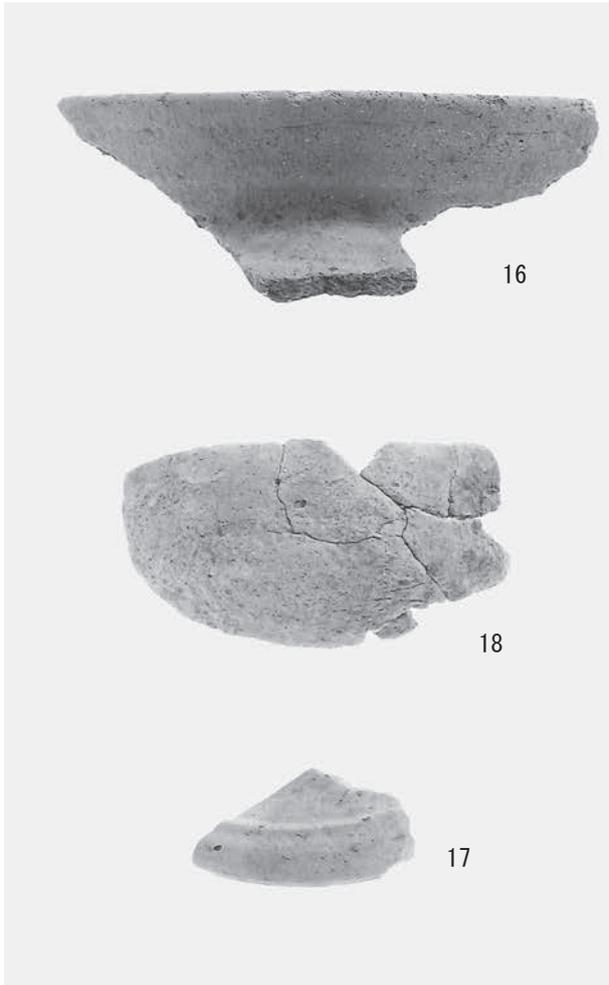
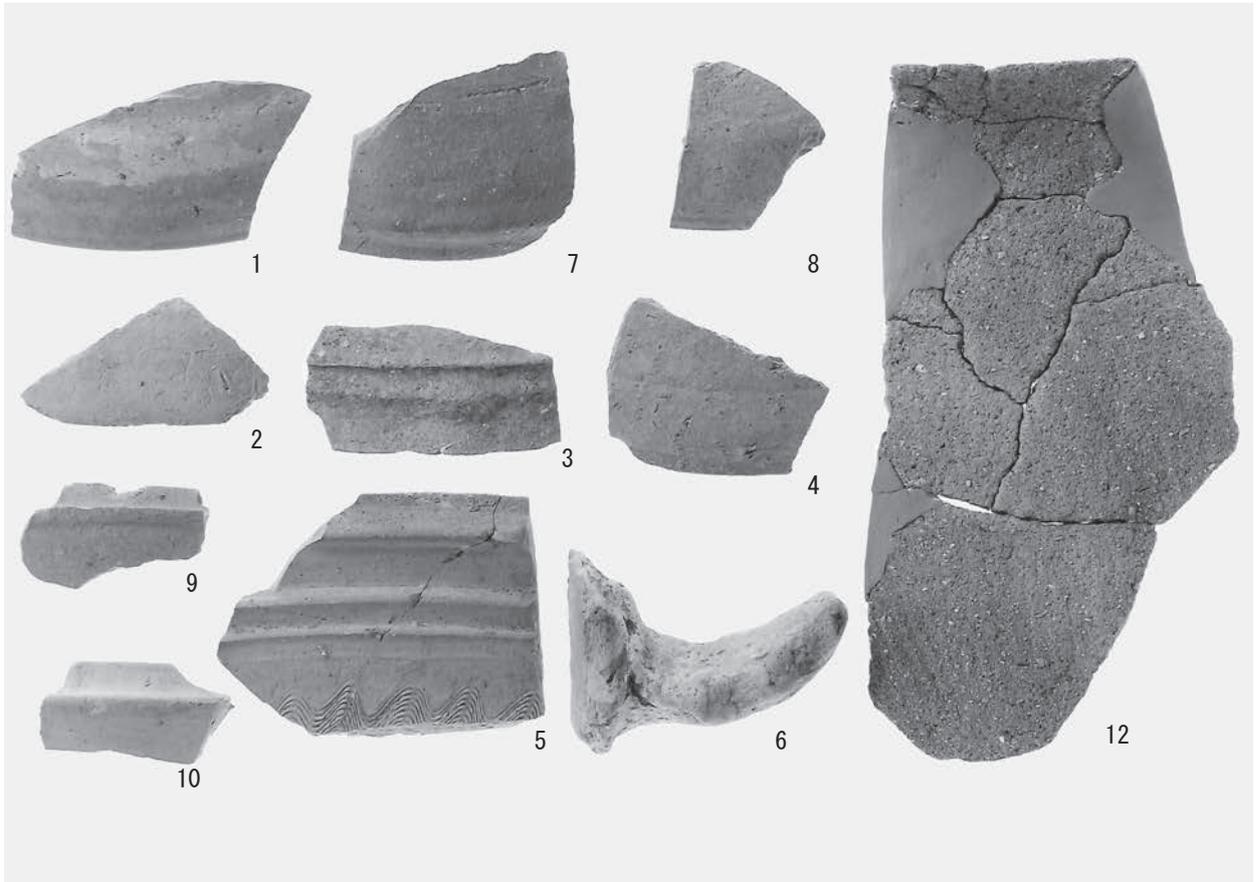
19- 竪穴 20 (南から)

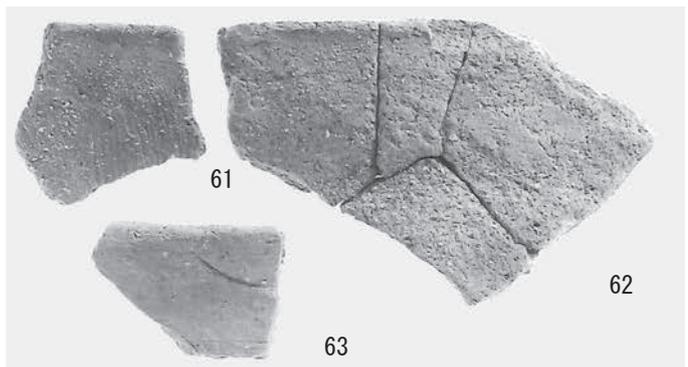
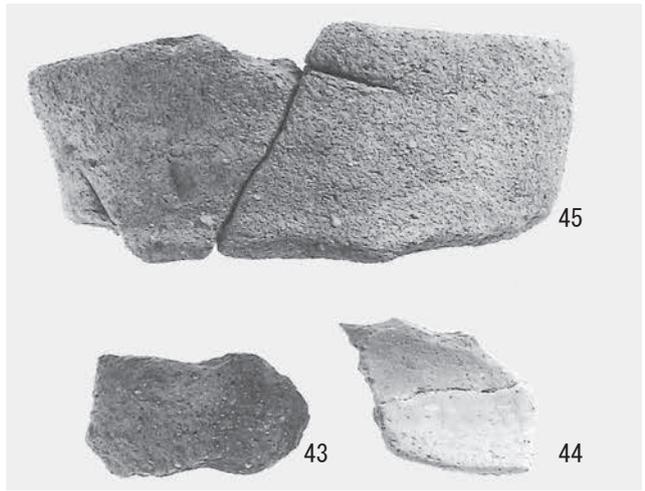


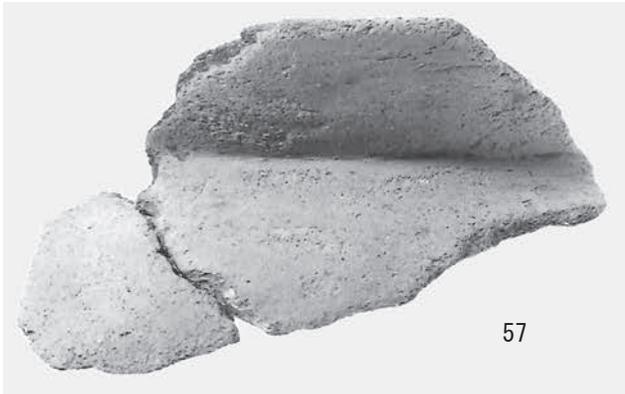
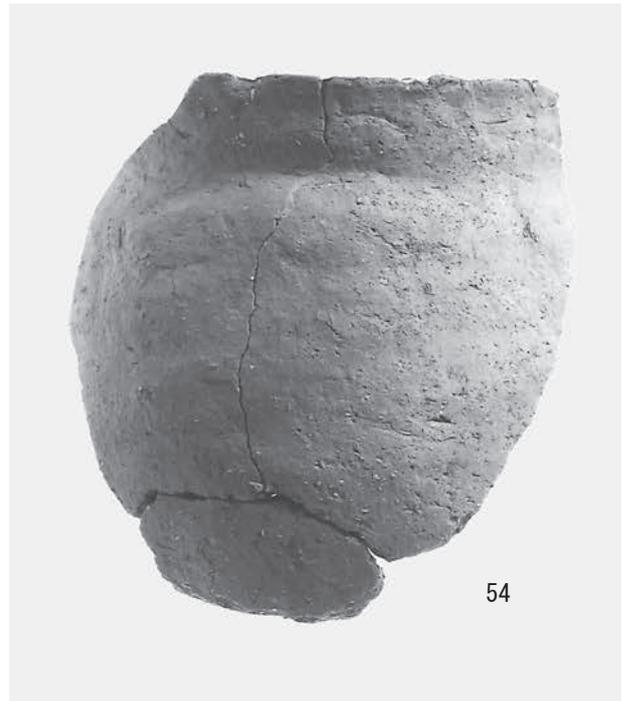
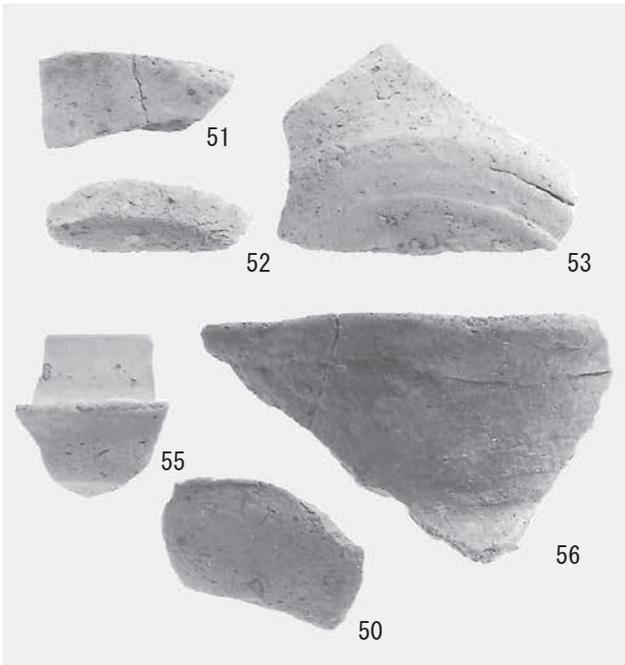
19-SK42 遺物出土状況 (南から)



19-SK50 (北から)

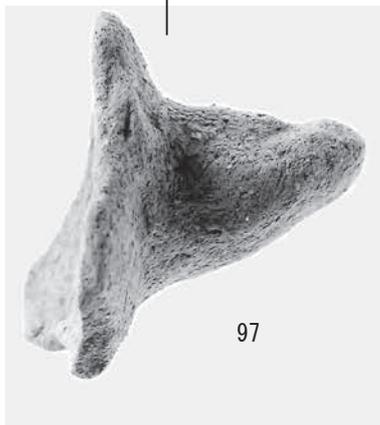




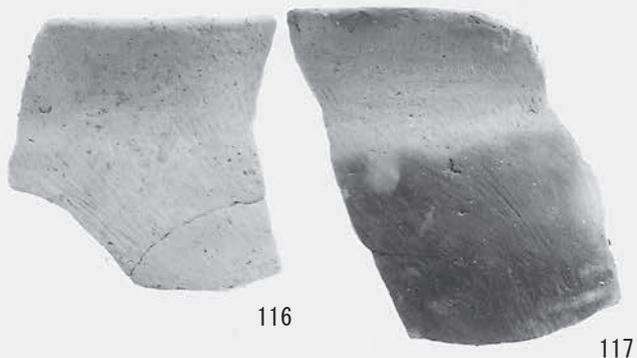




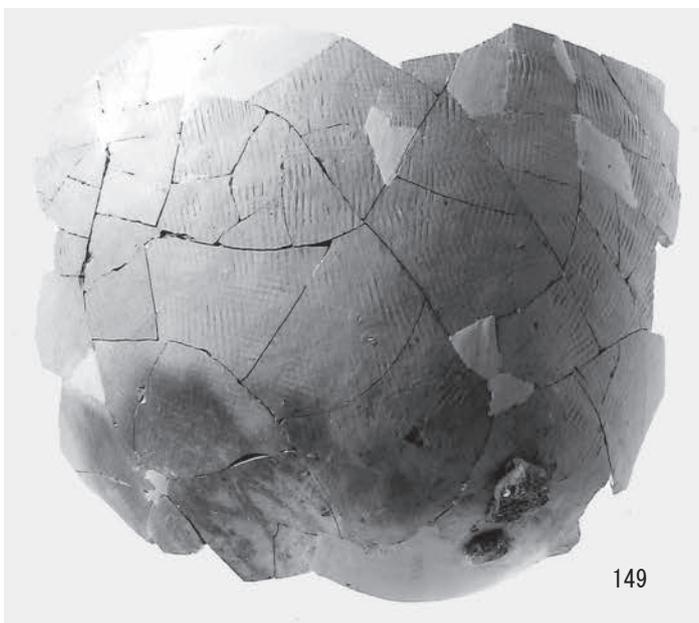


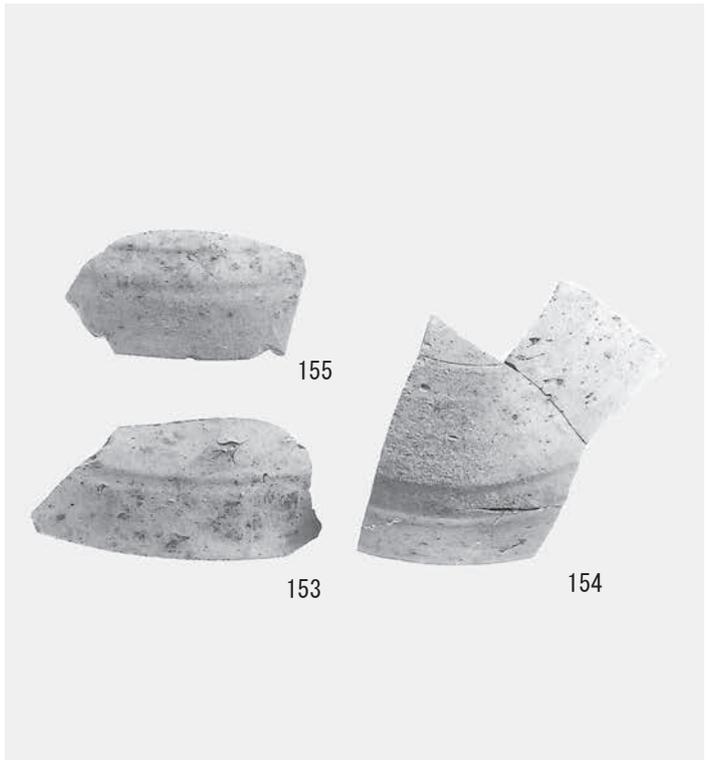


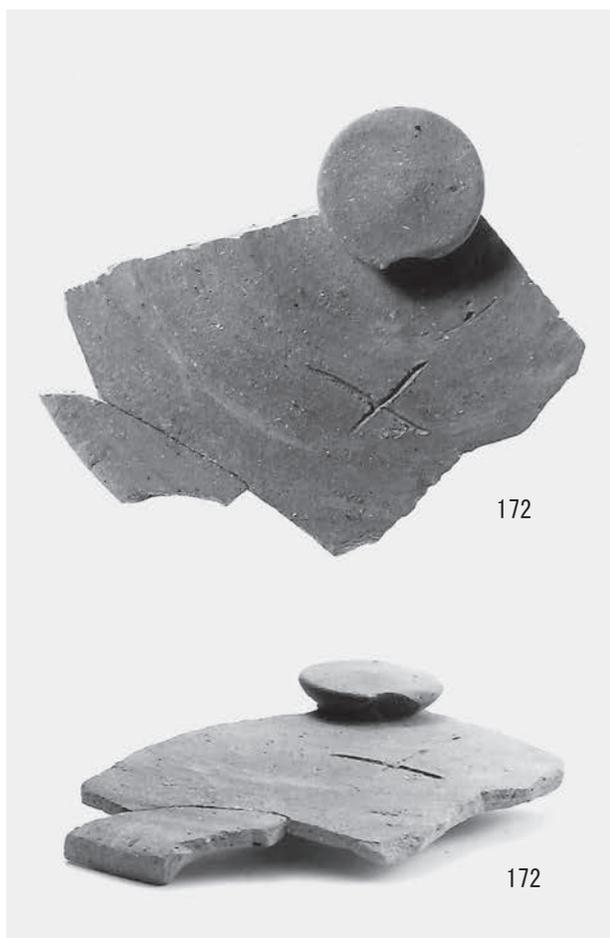
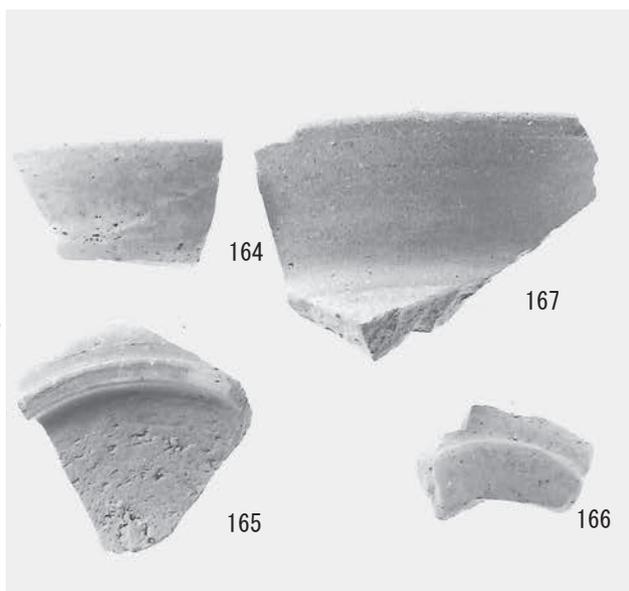


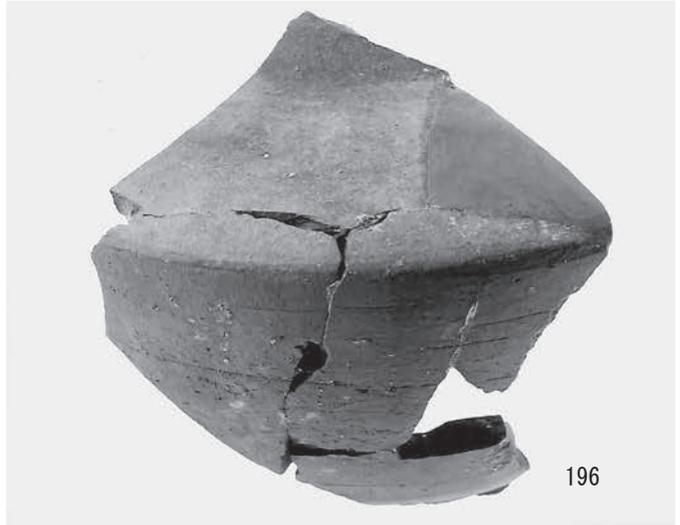




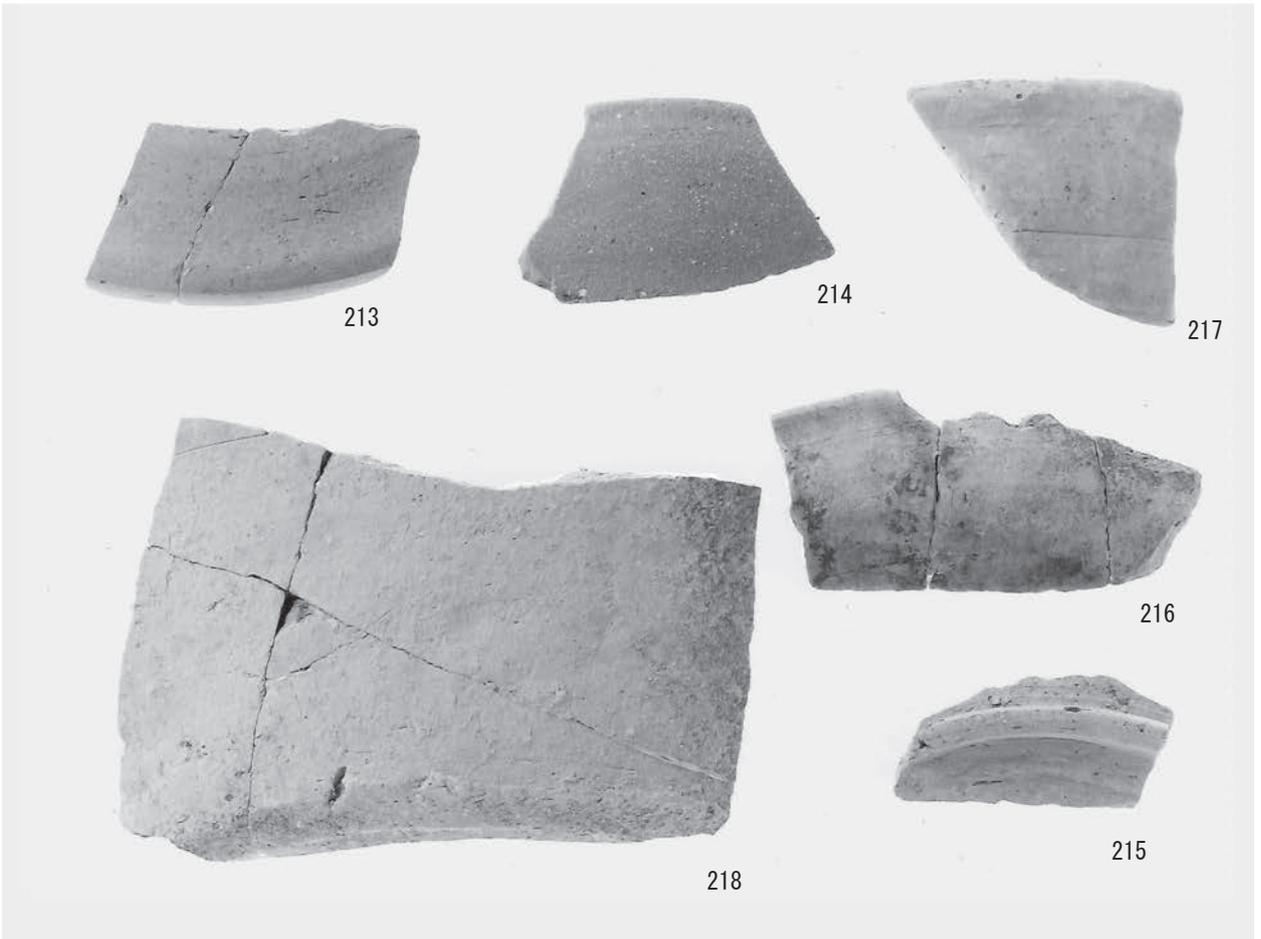
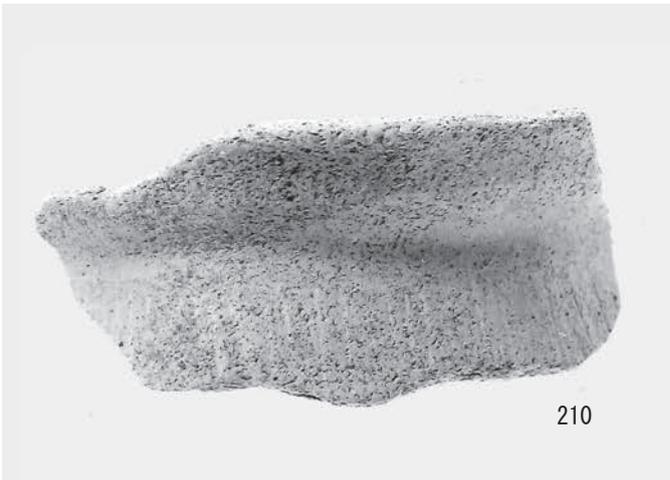


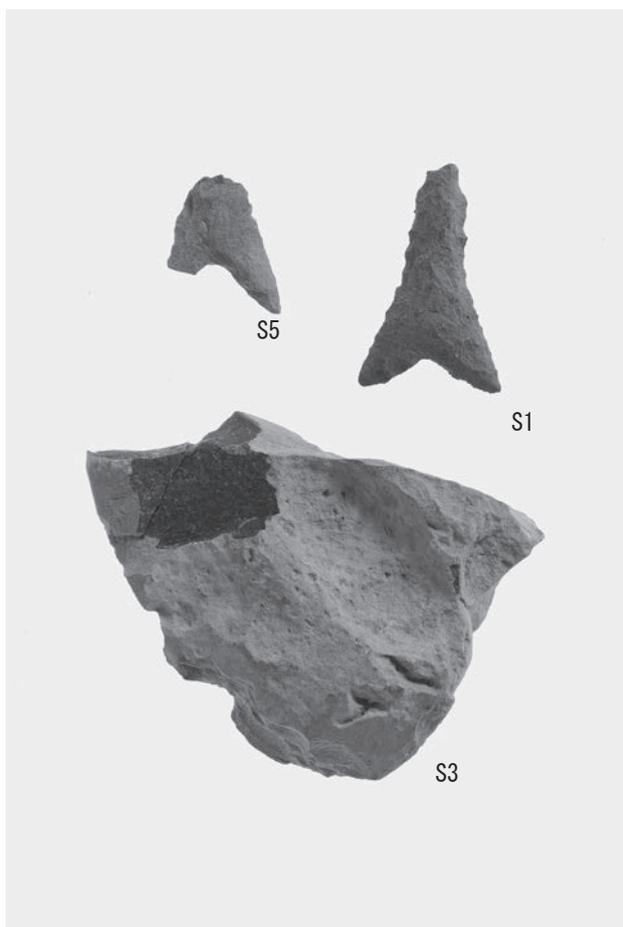
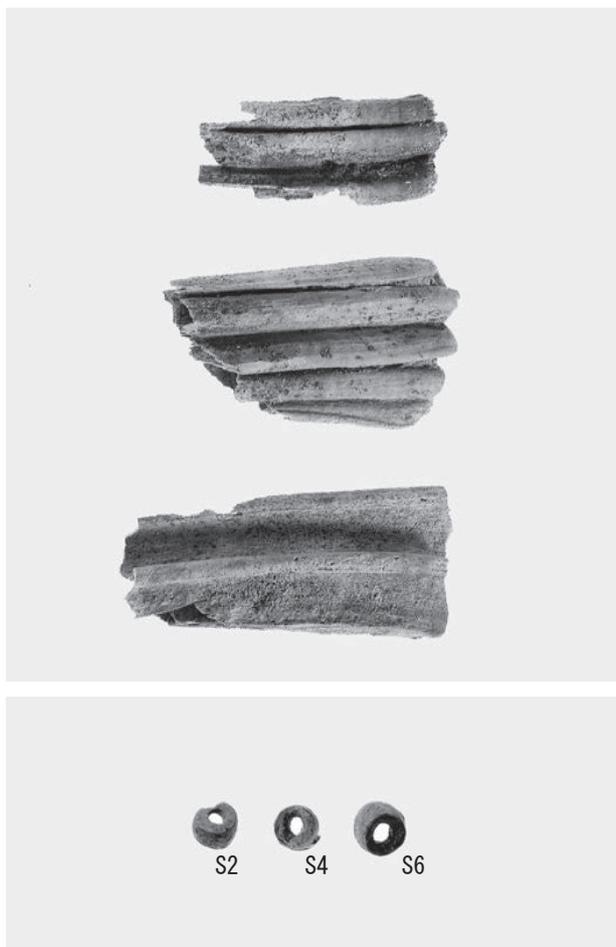
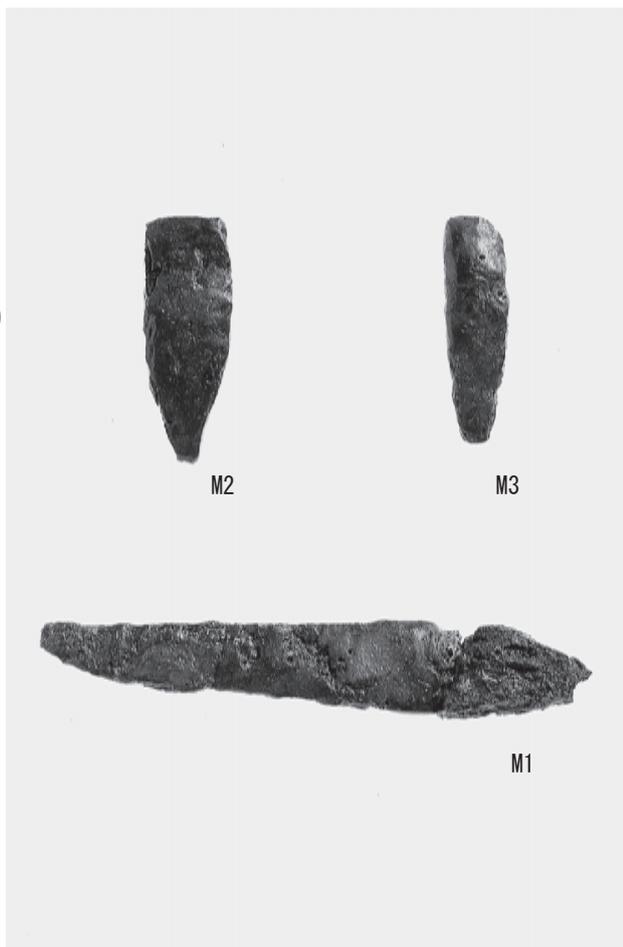












# 報 告 書 抄 録

ふりがな	はぎのまえ・いっぽんぎいせきⅡ							
書名	萩前・一本木遺跡Ⅱ							
副書名	市道仏生山町8号線新設改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第2冊							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第187集							
編著者名	船築 紀子・森原 奈々							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	平成30年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査 面積	発掘 原因
		市町村	遺跡番号					
はぎのまえ・いっぽんぎいせき 萩前・一本木遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 ぶっしょうざんちやう 仏生山町 こう 甲	37201		34° 16' 55"	134° 2' 29"	2011. 4. 11～ 2012. 3. 30	2,865㎡	市道 仏生山町 8号線 新設改良事業
所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
萩前・一本木遺跡	集落遺跡	古墳時代中期 古墳時代後期 飛鳥時代 古代 中世	竪穴建物 土坑 溝 掘立柱建物 柵 方形区画溝 水路	土師器（古墳時代） 須恵器（古墳時代・ 飛鳥時代） 鉄器 石器など		古墳時代中期中葉から古墳時代後期の竪穴建物や掘立柱建物を検出した。 その他、飛鳥時代の基幹水路及び中世の溝を検出した。		
要 約	高松市仏生山町甲に所在する、古墳時代中期から飛鳥時代を中心とする集落遺跡である。今回の調査では、古墳時代中期中葉から古墳時代後期の竪穴建物を検出しており、特に古墳時代中期から後期のカマドに関する良好な資料が得られた。また、飛鳥時代の基幹水路を検出した。							

2018年3月16日 印刷

2018年3月31日 発行

高松市埋蔵文化財調査報告第187集  
市道仏生山町8号線新設改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書  
萩前・一本木遺跡Ⅱ

著作権所有 高松市番町一丁目8番15号  
発行者 高松市教育委員会  
印刷者 有限会社 中央ファイリング